

第119図 弥生時代中期前葉の遺構 (1) (S=1/40)

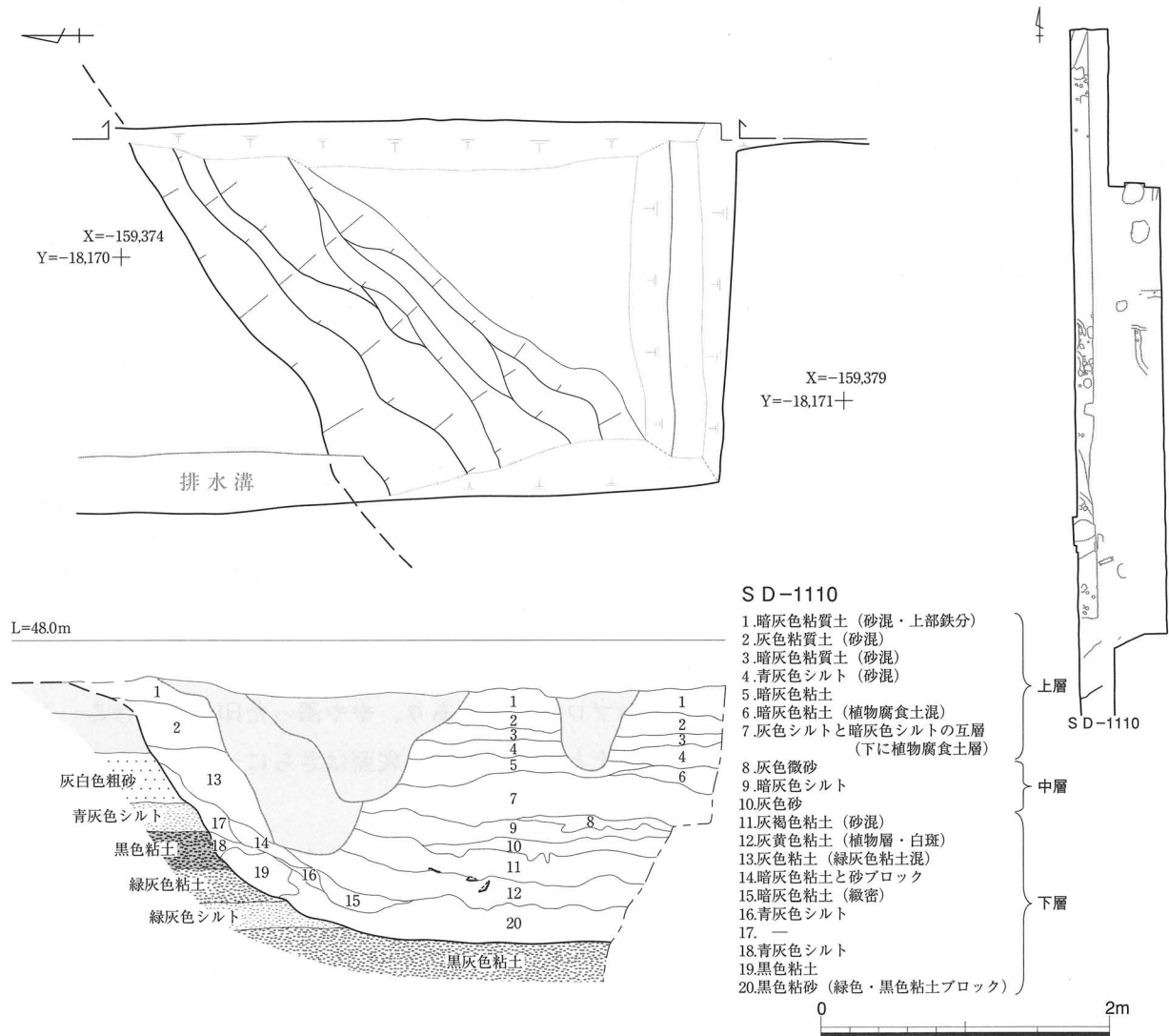
土坑

SK-1118 (第119図、写真図版111)

本坑は調査区南側で検出した。位置的にはSD-1109の北側にあつて、SD-1101BとSK-1125・1127に切られる。本坑の検出は、当初SD-1101Bの堆積として掘り下げていたこともあり、SD-1101Bの底面レベルに至って初めて認識した。このため、SK-1118として認識し掘り下げたのは、底面のわずかな部分である。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.80m以上、短軸1.00m以上である。断面は逆台形で、深さは最も高い西方の検出面から0.47mを測る。堆積土は、上層をSD-1101Bの掘削によりほとんどを失うが、下層は砂と粘土の複雑な互層堆積である。本坑の出土土器については、上層はSD-1101Bの遺物が混じってしまい大和第Ⅳ様式のものを含み、下層については大和第Ⅱ-3様式に遡るものを含むが全体数が少ない。特筆すべき遺物として、人形土製品(D5010)がある。機能は不明である。

SK-1131 (第119図、写真図版111)

本坑は調査区南側で検出した。位置的にはSK-1130の東端に隣接し、南半部をSK-1112に切られる。平面は長楕円形を呈し、長軸1.80m以上、短軸0.72mである。断面は逆台形で、深さは最も深い西側で0.33mを測る。堆積土は、黒色粘質土の単層である。大和第Ⅱ-3様式の土器が、土坑長軸に沿って帯状に出土した。



第120図 弥生時代中期前葉の遺構 (2) (S = 1/50)

溝

SD-1110 (第120図、写真図版112)

本溝は調査区南端で検出した。東壁断面の観察によれば、3基の土坑が本溝の堆積土上面から掘り込まれているが、平面的にこれを検出することはできなかった。本溝は北肩のみの検出であり、南肩は調査区外にある。溝幅については不明であるが、調査区内における検出幅の最大長は2.80mであり、それ以上といえる。断面についても北肩のみの形状であるが逆台形と考えられ、深さは1.50~1.80mを測る。

堆積土は、中層に灰色系の砂とシルトの互層をはさんで、上層の暗灰色系粘質土と下層の灰色系粘土の大きく3層に分けることも可能であるが、基本的には粘土やシルト、砂の互層堆積であり、河跡堆積のような状況を示している。これは、埋没した弥生時代前期河跡SR-1201を切り込んだことにより、その砂層が流れ込んだことによるものと考えられる。出土土器は、櫛描き文とともにヘラ描き沈線多条の土器を含んでいる。また、堆積土上面から掘削さ

れた土坑からは、大和第Ⅱ－3様式の土器が出土した。このことから、大和第Ⅱ－1様式に掘削され、大和第Ⅱ－3様式までには埋没していたと考えられる。本溝は、西に隣接する第33次調査区の南端で検出したS D－110に繋がる。第33次調査区においても南肩は検出できていないが、その幅を約6.0mと想定している。集落の南縁辺を画する大溝であり、弥生時代中期初頭～中期前葉の環濠と考えられる。

河跡

S R－1201（第121図、写真図版113）

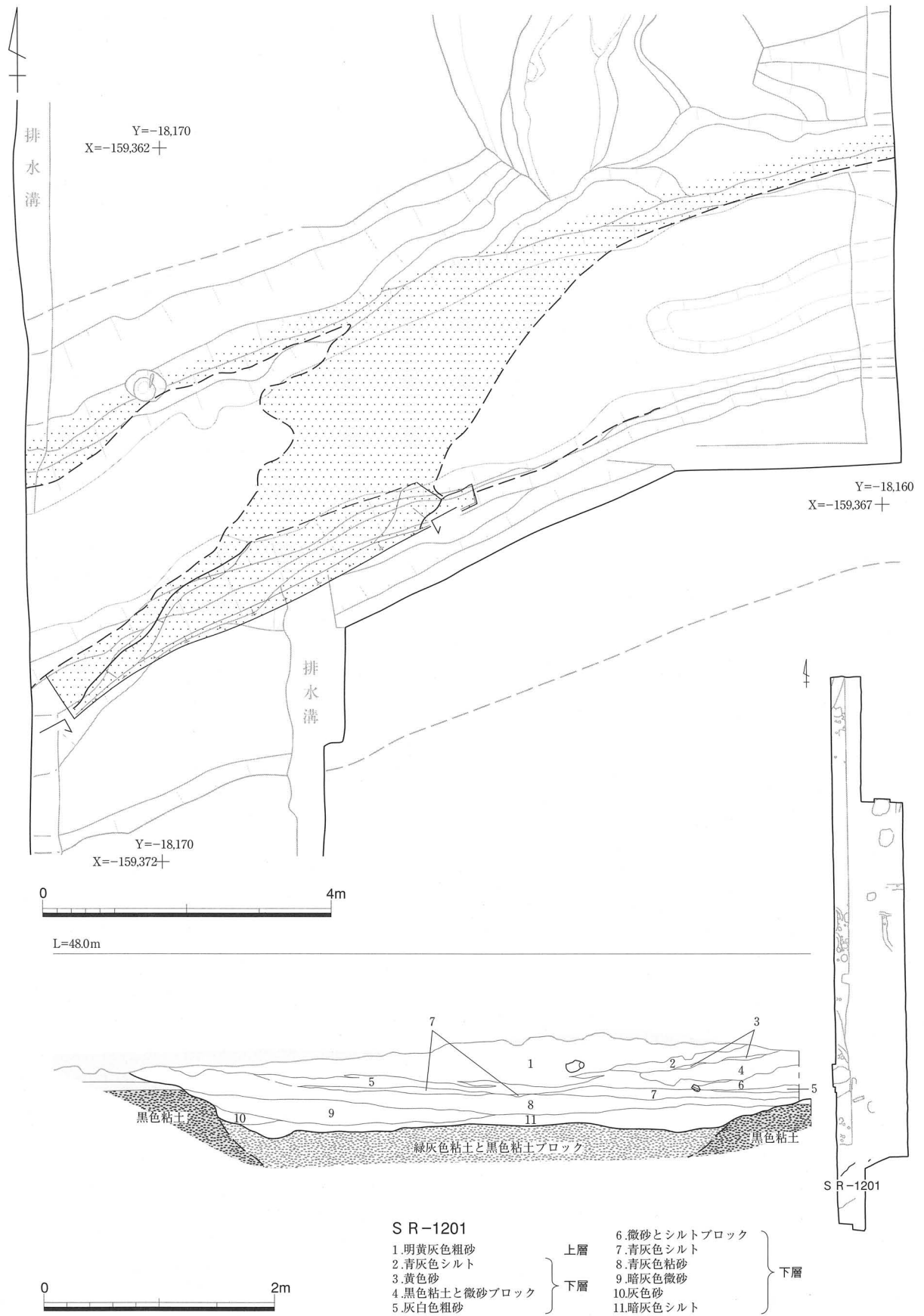
S R－1201は、調査区の南西から北東に流水していたと考えられる河跡で、第33次調査区の南端において検出されていた第Ⅱ層：黄灰色細砂の本流部分となる。本河跡は、ベースを切り込んで落ちくぼんだ本流部分と、周囲のベース上に砂層堆積を形成した肩部分からなる。本流部分は、弥生時代中期後葉の掘削と考えられる環濠S D－1109に直交して切られ、その両肩断面において本河跡の層堆積及び流路方向を確認した。また、調査区外の東側水田でおこなった電気探査によって、調査区外の北東方向へ延びていることが確認されている。本流部分は、検出面において幅が3.00m以上である。断面は逆台形で、深さ0.80m以上を測る。本河跡の底面については、緑灰色粘土と黒色粘土のブロック層であり、やや濁った印象を受ける。この緑灰色粘土と黒色粘土のブロック層が堆積土としてはずれ、底面はさらに一段深くなる可能性もある。

堆積土は大きく上・下の2層に分かれ、上層は明黄灰色粗砂、下層はシルトと粗砂の互層となっている。下層は無遺物層であるが、上層からは半完形の直口の甕を含む弥生時代前期前葉の土器が出土した。なお、本河跡堆積土の上面を覆う黒色粘質土からは、弥生時代前期後葉の土器が出土している。このことから、本河跡は弥生時代前期以前より流水し、弥生時代前期後葉までには埋没していたと考えられる。

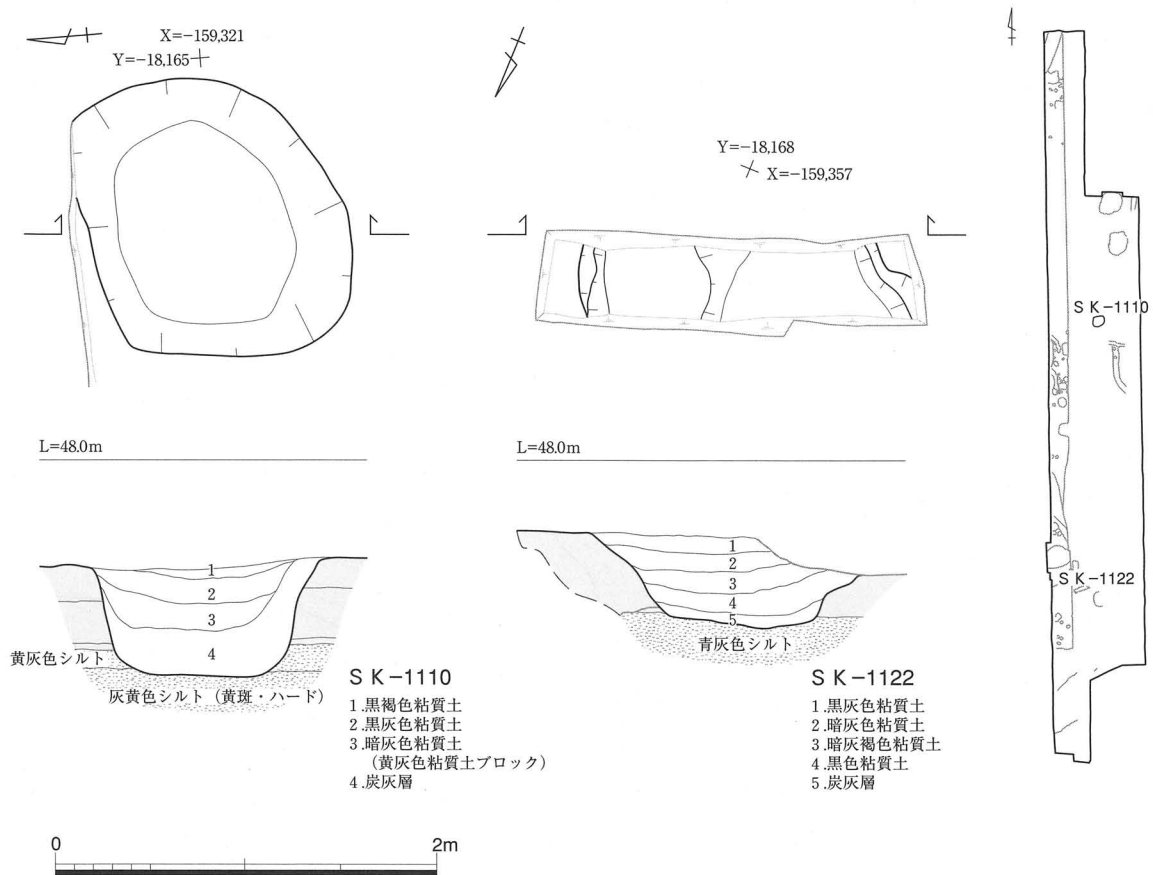
このS R－1201の両肩に形成された堆積砂層による自然堤防が微高地として、おそらく後の段階の遺構分布にも影響を与えていたと考えられる。なお、今回の調査区においてS R－1201以外にも、無遺物ではあるが南北方向の自然河道の痕跡と考えられる砂層を検出している。唐古・鍵遺跡南地区には、弥生時代以前に南北方向の自然河道が多数流れ込んでおり、このS R－1201が最終の流路であった可能性が考えられる。そして、S R－1201の埋没後に南地区を囲むS D－1110が掘削されたことは、注目すべきである。

(2) 弥生時代中期中葉の遺構（第117図）

本調査区では、弥生時代中期後葉遺構検出面から以下の掘削は控えたことにより、弥生時代中期中葉の遺構については不明な点が多い。しかし、道路改良工事における水路部分は掘削が弥生時代中期中葉遺構検出面に及ぶことから、また範囲（内容）確認部分についても後世遺構によって弥生時代中期中葉遺構の一部が露出してしまった場所については、これを調査している。検出した弥生時代中期中葉の遺構は、土坑10基、溝4条、柱穴群である。



第121図 弥生時代中期前葉の遺構 (3) (平面図: S = 1/80、断面図: S = 1/50)



第122図 弥生時代中期中葉の遺構（1）（S = 1/40）

土坑

SK-1110（第122図、写真図版113）

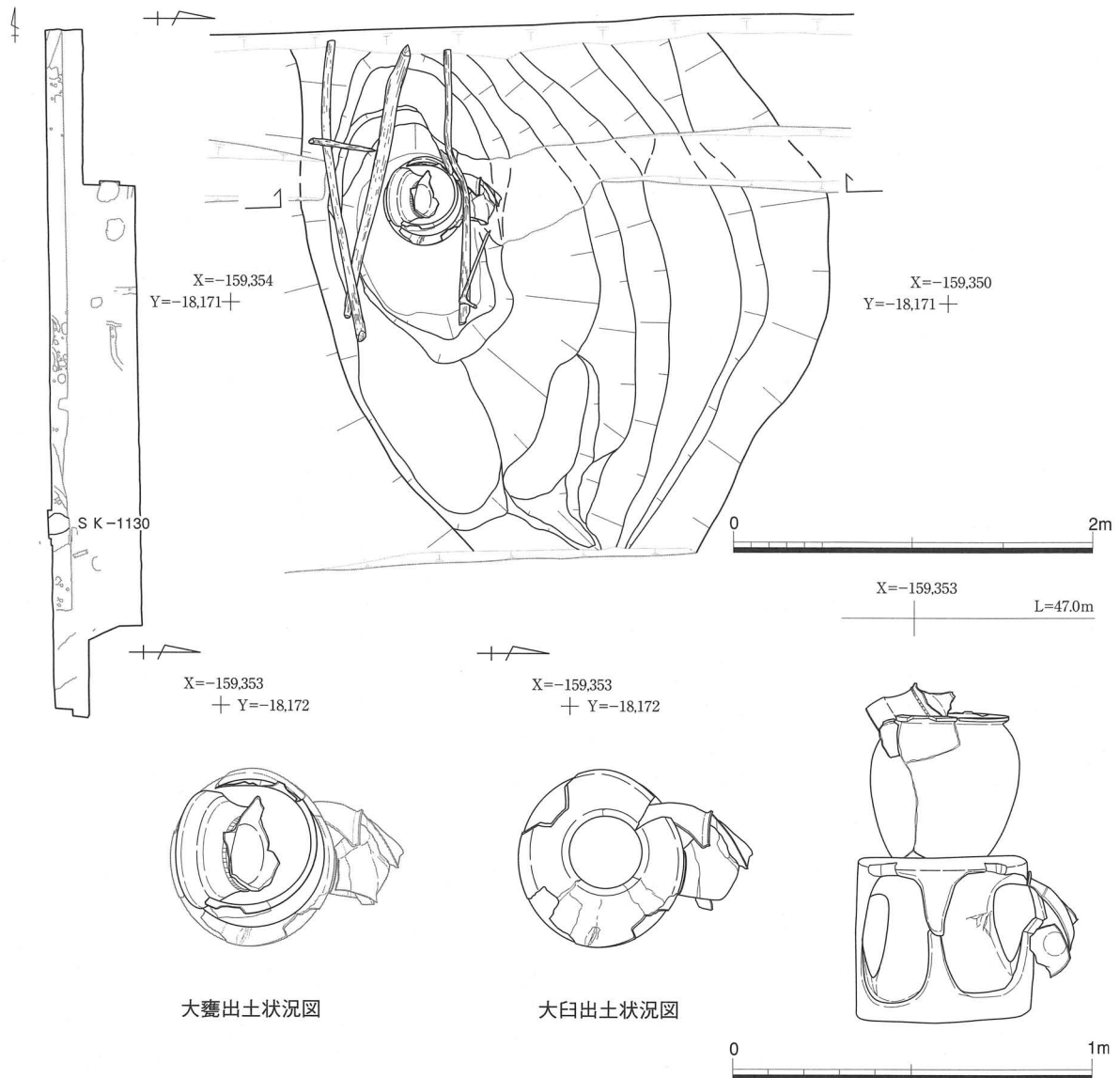
本坑は調査区中央、SD-1101BとSD-1104Bの間で検出した。平面は不整円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.44mである。断面は方形で、深さは0.62mを測る。堆積土は4層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：黒灰色粘質土、第3層：暗灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック）、第4層：炭灰層である。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。機能は不明である。

SK-1122（第122図）

本坑は、調査区南側、その西端で検出した。弥生時代後期のSK-1112に切られる。部分的な確認のため、平面は不明である。断面は逆台形で、深さは0.50mを測る。堆積土は5層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：暗灰色粘質土、第3層：暗灰褐色粘質土、第4層：黒色粘質土、第5層：炭灰層である。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。機能は不明である。

SK-1130（第123・124図、写真図版114～119）

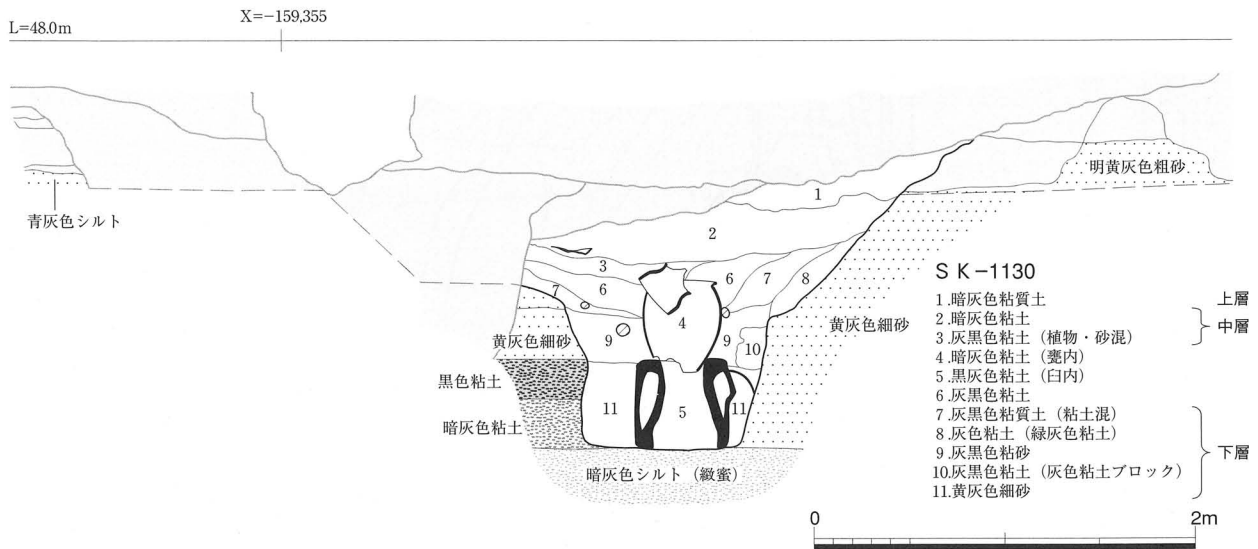
本坑は調査区南側の西端で検出した。当初、第33次調査区で検出したSD-108の延長を予想しこれを掘り下げたところ、集水施設を検出し初めて別遺構であることを認識した。その後



第123図 弥生時代中期中葉の遺構（2）（平面図：S=1/40、出土状況図：S=1/20）

の精査で、SD-108は本坑の南肩を切って、その南側に掘削されていることが判明した。

本坑は、西調査区外にも拡がるためその平面は不明であるが、規模は南北4.30m、東西3.00m以上である。断面は上段が逆台形、下段が円筒状の二段掘りで、深さは1.75mを測る。底面はベースの暗灰色シルトに達する。本坑の特色は、その中心に集水施設をもつことである。集水施設は、下から順に木製臼（W1025）、大型「芝形甕」（P1167）、大型受口短頸壺（P1166）を組み合わせていた。木製臼は高さ50cm、径50cmを測り、胴部の四方に柱状の把手を削り残した優品である。これを逆さにし、使用によって薄くなった底部に穴をあけ、そこに底を打ち欠いた大型「芝形甕」を載せていた。この大型「芝形甕」の口縁部とややずれて落ち込んだ状態で、大型有段口縁壺の口縁部を検出した。なお、据えられた木製臼の北側把手は、木材自体のねじれによって折れ曲がっていた。この北側把手は弥生時代当時から脆弱な状態にあったよ



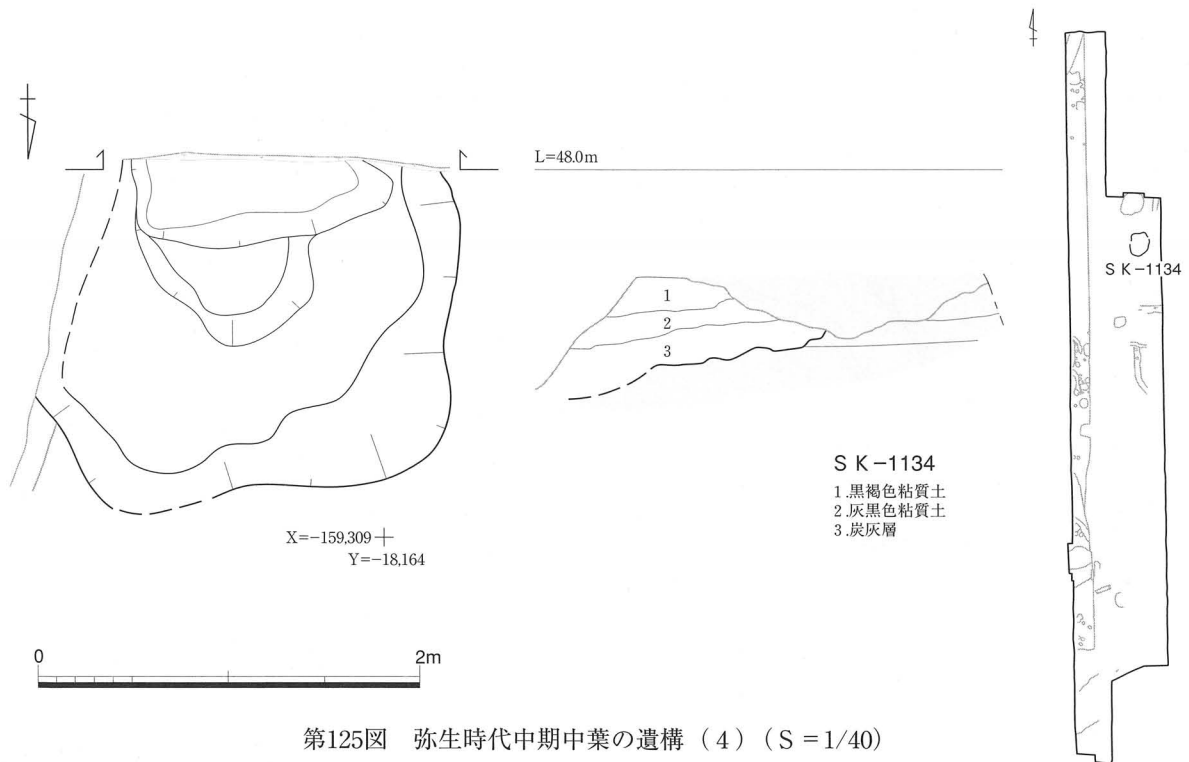
第124図 弥生時代中期中葉の遺構 (3) (S = 1/40)

うで、木製臼と掘り込みの間には割った甕と粘土塊が支えに詰め込まれていた。この他、大型「芝形甕」を安定させるためか、直径5cm前後で長さ約2mの棒材が胴部最大径付近を挟み込むように、南側に2本、北側に1本、東西方向に横置きされていた。

堆積土は、上・中・下の大きく3層に分かれ、上層は暗灰色粘質土、中層は暗灰色系粘土、下層は上位が灰黒色系粘砂で下位が黄灰色細砂である。下層と中層の境は、大型「芝形甕」の口縁部付近にあり、桜の皮など有機物を含み明瞭である。下層を集水施設据え付けのための埋土、中層を上部施設解体時の抜き取り坑に伴う堆積土と考えている。中層の暗灰色粘土からは、大和第三-3様式土器が多数出土した。なお、集水施設の大型「芝形甕」及び大型有段口縁壺も、大和第三-3様式の特徴を示す。使用と廃棄は短期間だったと考えられる。

大型「芝形甕」に乗った大型有段口縁壺の口縁部の解釈は、2通りの考え方ができる。一つは、打ち欠いた大型有段口縁壺の口縁部を逆さにして大型「芝形甕」と組み合わせていたという考え方である。もう一つは、底部を打ち欠いた大型有段口縁壺を大型「芝形甕」に載せていたが、本集水施設を廃棄する際にこれらを抜き取ろうとして失敗し、割れた大型有段口縁壺の口縁部をその場に捨てたという考え方である。この点に関しては、大型有段口縁壺の大きさが問題となる。大型有段口縁壺の口縁部径は31.5cmあり、器高は60cm以上と考えられる。これを大型「芝形甕」に載せるならば、大型有段口縁壺の口縁部は土坑の掘形上面にまで達する。これに対し、大型有段口縁壺の口縁部のみならば、掘形から50cmも下がった位置に逆さの口縁部があることになり、水を汲むにはやや不便であろう。とすれば、大型有段口縁壺の抜き取りに失敗して、口縁部のみを廃棄したと考えるのが妥当であろうか。ただし、大型「芝形甕」内より割れた大型有段口縁壺の破片が出土していないという点に問題がある。

また、これに関連してSD-1108との関係も問題であろう。第33次調査区のSD-108は、本坑と同じく大和第三様式後半の溝である。今回、その延長であるSD-1108については、



第125図 弥生時代中期中葉の遺構(4) (S=1/40)

SK-1130の堆積土を切るという解釈を下したが、この両者が同時開口していた可能性は十分にある。つまり、SK-1130はSD-1108の北肩に取り付いた施設で、掘形上面までの埋め戻しを考えるのではなく、大型「芝形甕」の口縁部より上はオープンであったことを想定する。これならば、掘形上面から下がった位置にある大型「芝形甕」と打ち欠いた大型有段口縁壺の口縁部との組み合わせであっても、問題はない。

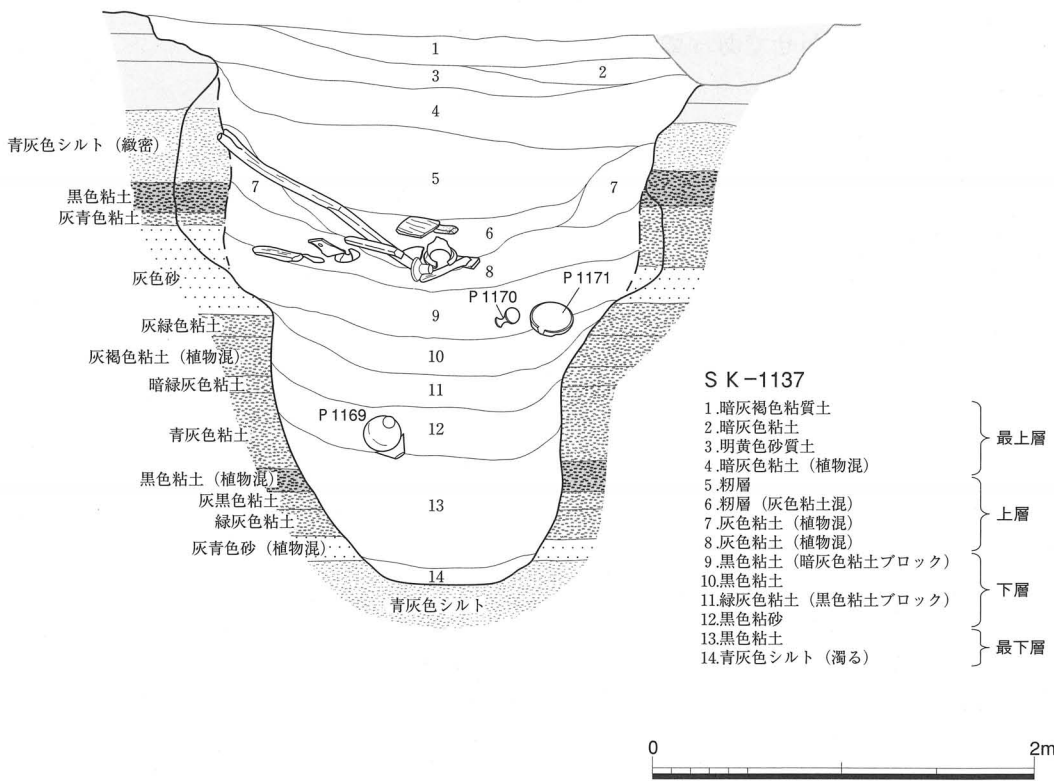
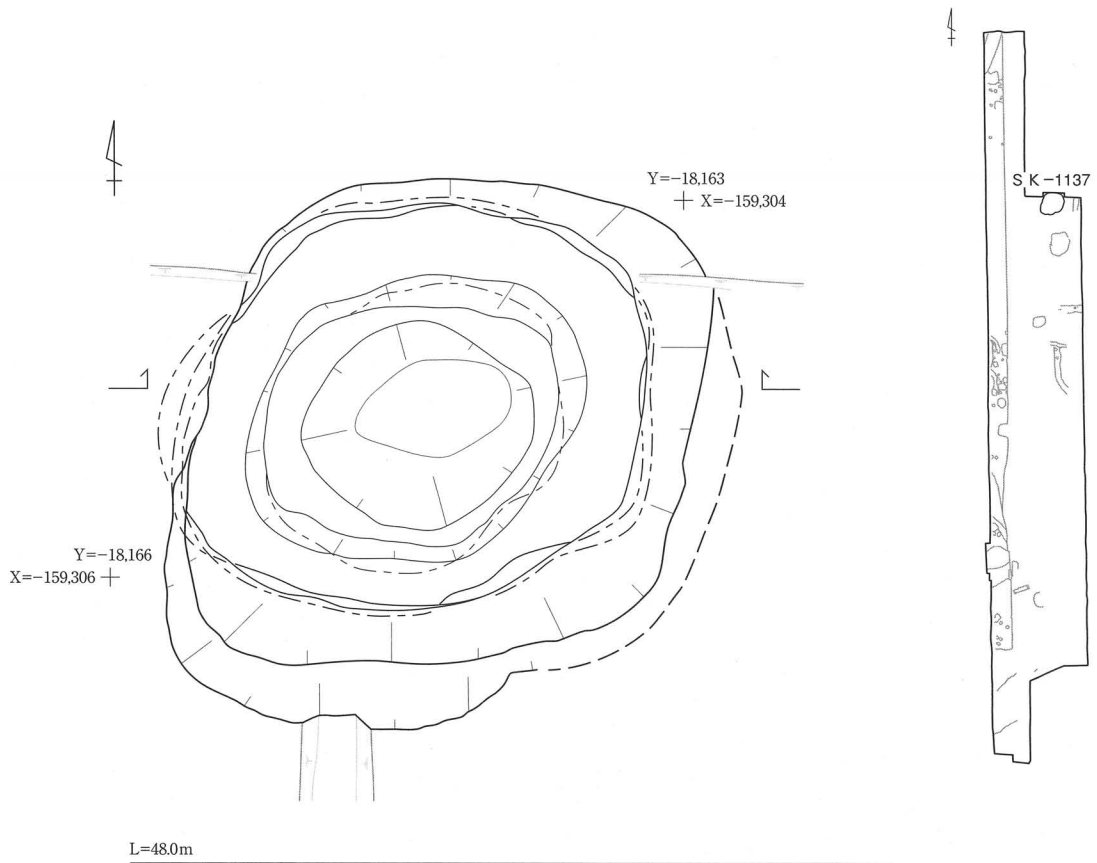
SK-1134 (第125図)

本坑は拡張区中央において、布留期の土坑であるSK-1123の下部から検出した。あるいは、SK-1123が本坑の上面堆積の可能性もある。東肩をSD-1114Bに切られる。また、本坑はSK-1123の堆積を誤認したことによって検出しており、アゼから南半側はSK-1123を保存するため掘り下げておらず、その南半については不明である。平面は不整形を呈すると考えられ、2.40m以上の規模をもつ。断面は逆台形で、深さは0.50mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：灰黒色粘質土、第3層：炭灰層である。第3層からは、半完形の大和形甕が出土した。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。

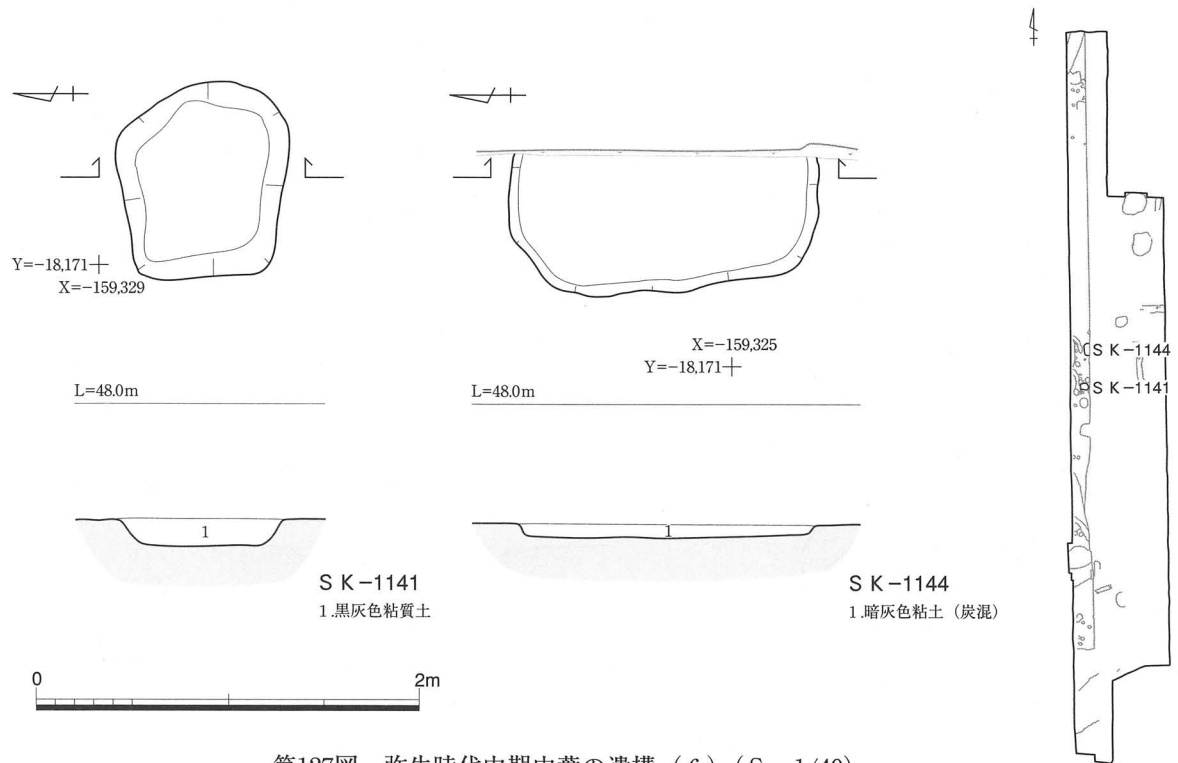
SK-1137 (第126図、写真図版120・121)

本坑は拡張区北端で検出した。平面は不整円形を呈し、長軸3.46m、短軸2.90mである。断面は中位にテラスをもった円筒状二段掘りであるが、上段周囲の壁が崩れ落ちオーバーハングしている。深さは3.00mを測る。底面は標高44.38mで、湧水点である標高46.00mの灰色砂を抜いて、青灰色シルトに達する。

堆積土は大きく、最上・上・中・下・最下の5層に分けることができる。最上層は暗灰色系粘質土及び粘土で、本坑が埋没し痕跡となったそのくぼみへの堆積土である。上層は粘層であ



第126図 弥生時代中期中葉の遺構 (5) (S = 1/40)



第127図 弥生時代中期中葉の遺構（6）（S = 1/40）

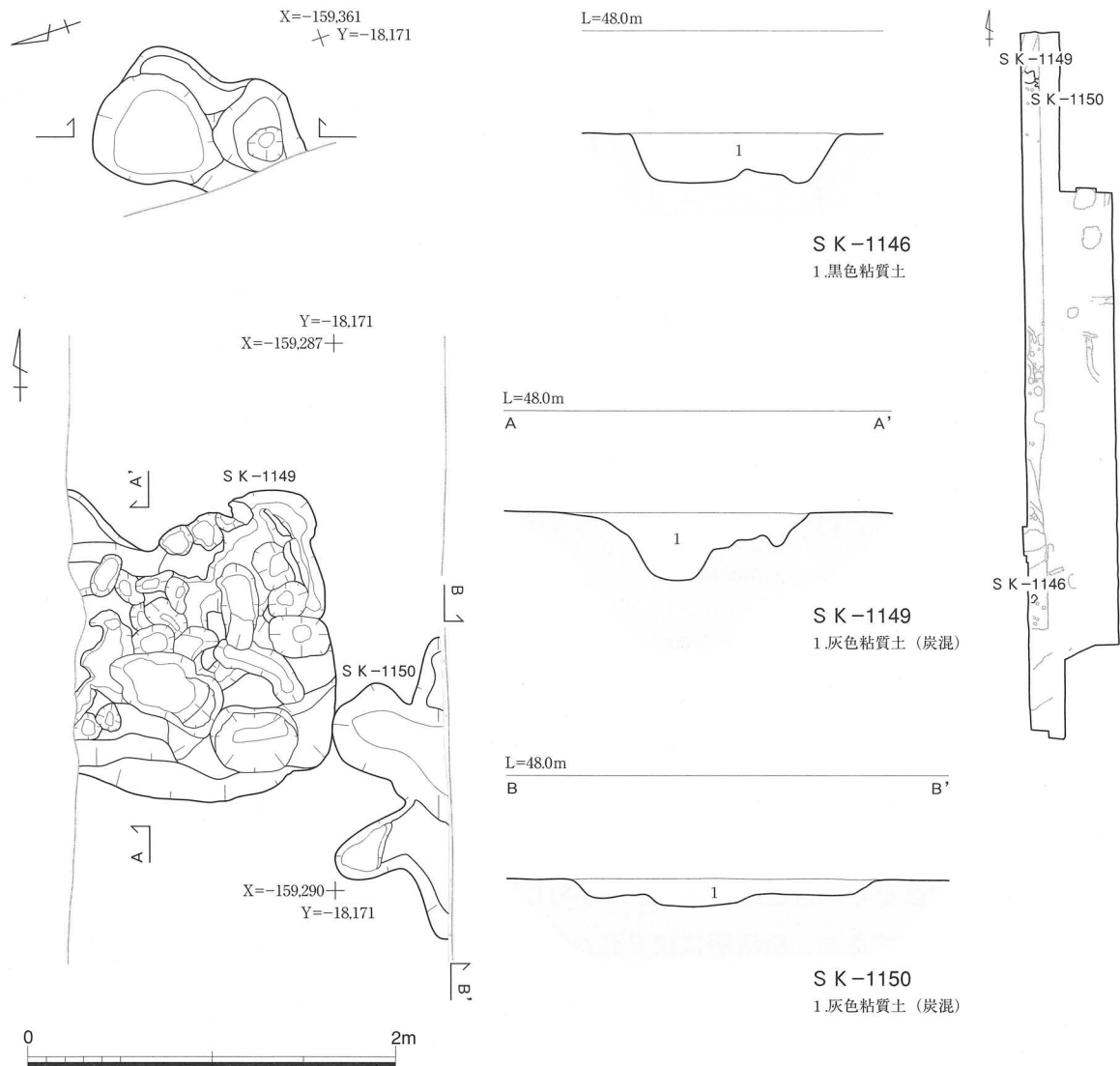
り、最も厚いところで0.80mを測る。初層は水平に堆積しているのではなく、土坑の北西肩にせり上がっている。これは、本坑北西側からの廃棄を示すのであろう。また、初層は詳細に観察すれば単層ではなく、初と炭灰が交互に堆積し縞状を呈する。炭灰は脱穀時に残った藁などを焼き捨てたものであり、炭灰層に挟まれた初層が一回の脱穀量を示していると考えられる。中層は黒色系粘土である。この中層上位から上層下位にかけては、廃棄坑として用いられたらしく、木材や土器片がまとまって出土した。土坑中位のテラス面に対応した中層下位からは、脚部を切り取った直口の大型高坏（P1171）1点と完形の小型高坏（P1170）1点が出土した。この他、碧玉製管玉（A5028）も1点出土している。下層は、上位が緑灰色粘土（黒色粘土ブロック）、下位が黒色粘砂である。上位の緑灰色粘土（黒色粘土ブロック）は、周囲壁面の崩壊によるものと考えられる。下位からは、完形の無文短頸壺（P1169）が壺底部片の上に載った状態で出土した。最下層は黒色粘土で、底面直上に濁った青灰色シルトをわずかに挟んでいる。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。機能は、井戸である。

SK-1141（第127図、写真図版122）

本坑は調査区中央の西側で、SD-1133に接して検出した。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.04m、短軸0.90mである。断面は逆台形で、深さは0.18mを測る。堆積土は黒灰色粘質土の単層である。時期は、大和第Ⅲ-2様式である。

SK-1144（第127図）

本坑は調査区中央の西側で、SD-1135に接して検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.60m、短軸0.72m以上である。断面は皿状で、深さは0.09mを測る。堆積土は暗灰色粘土（炭混）の単層である。時期は不明である。



第128図 弥生時代中期中葉の遺構（7）（S = 1/40）

SK-1146（第128図、写真図版124）

本坑は調査区南の西側で検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.16m、短軸0.76mである。断面は逆台形の切り合いで、深さは0.28mを測る。堆積土は黒色粘質土の単層である。底面は2つのくぼみとなり、複数柱穴の切り合いによる可能性もある。時期は不明である。

SK-1149（第128図、写真図版122）

本坑は調査区の北端で検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.40m以上、短軸1.60mである。断面は皿状で、深さは0.41mを測る。堆積土は灰色粘質土（炭混）の単層である。底面の凹凸が激しく、人為的というよりは自然営為的な印象を受ける。

SK-1150（第128図）

本坑は調査区の北端で検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.64m、短軸0.60m以上である。断面は皿状で、深さは0.15mを測る。堆積土は灰色粘質土（炭混）の単層である。前述したSK-1149の東に隣接し、一連のものとなる可能性がある。

溝

SD-1116 (第129図)

本溝は調査区中央の東側で検出した。位置的には、弥生時代中期後葉のSK-1102の北側に接する。本溝は東-西に走行し、東側は調査区外へと延び、西側はSD-1104に切られる。規模は幅0.90~1.00mである。断面は逆台形で南側にテラスをもち、深さは0.28~0.40mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：黒灰色粘質土である。大和第三-4様式の土器が出土した。

SD-1124 (第129図)

本溝は調査区の北端で検出した。本溝は北北東-南南西に走行すると考えられるが、西肩が調査区外にあるため全形は不明である。現状においてその長さは4.00m以上で、幅1.70m以上である。断面は皿状で、深さは0.10mを測る。堆積土は黒色粘質土で炭灰を含む。弥生時代中期中葉と弥生時代後期後葉の土器が出土した。弥生時代後期後葉の土器については、SD-1111からの混入と考えられる。

SD-1130 (第129図、写真図版123)

本溝は調査区中央の東側で検出した。位置的には、SD-1104と並行しその東肩に接する。本溝は北-南に走行し、その北端はSD-1131との接点において取東、南端は東側へと緩やかに湾曲するがその端部を確認していない。現状においてその長さは6.00m以上で、幅0.70mである。断面は上位が逆台形に開くが、下位は垂直にちかい肩を有する方形であり、深さは0.72mを測る。ただし、底面は平坦でなく、一段高い部分や柱穴状にくぼむ部分がある。堆積土は4層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：灰褐色粘質土、第3層：暗灰色粘質土、第4層：炭灰層である。特に、第4層は0.40mと厚い。時期は、大和第三-3様式である。

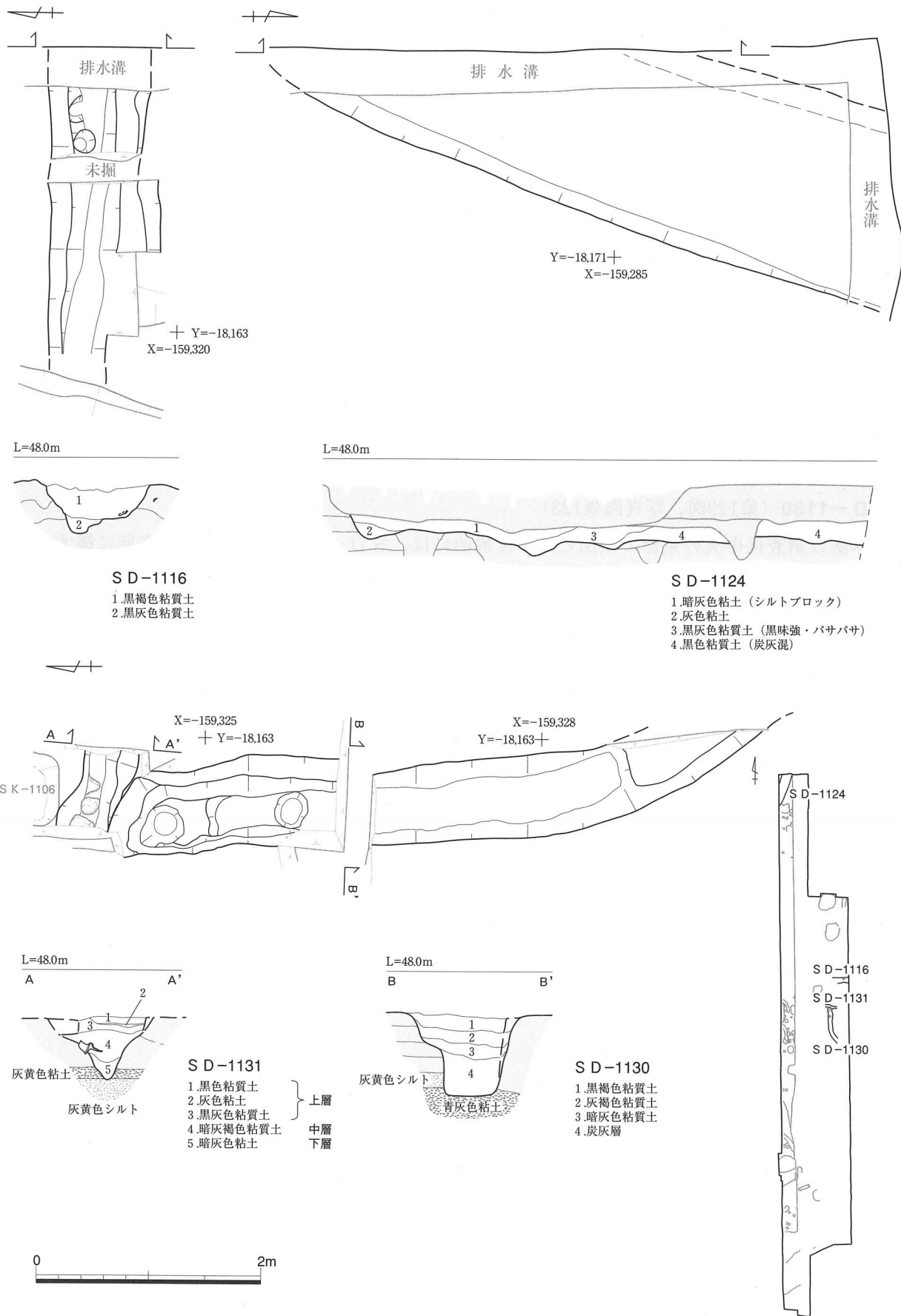
SD-1131 (第129図)

本溝は調査区中央の東側で検出した。位置的には、SD-1104と直交し、SD-1130の北端取東部と接する。本溝は東-西に走行し、西側はSD-1104に切られ、東側の延長部分は未調査の為不明である。現状においてその長さは0.70m以上で、幅0.40mである。断面はV字状で、深さは0.56mを測る。底面は凹凸が激しい。堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は黒色系粘質土、中層は暗灰褐色粘質土、下層は暗灰色粘土である。時期は、大和第三-3様式である。

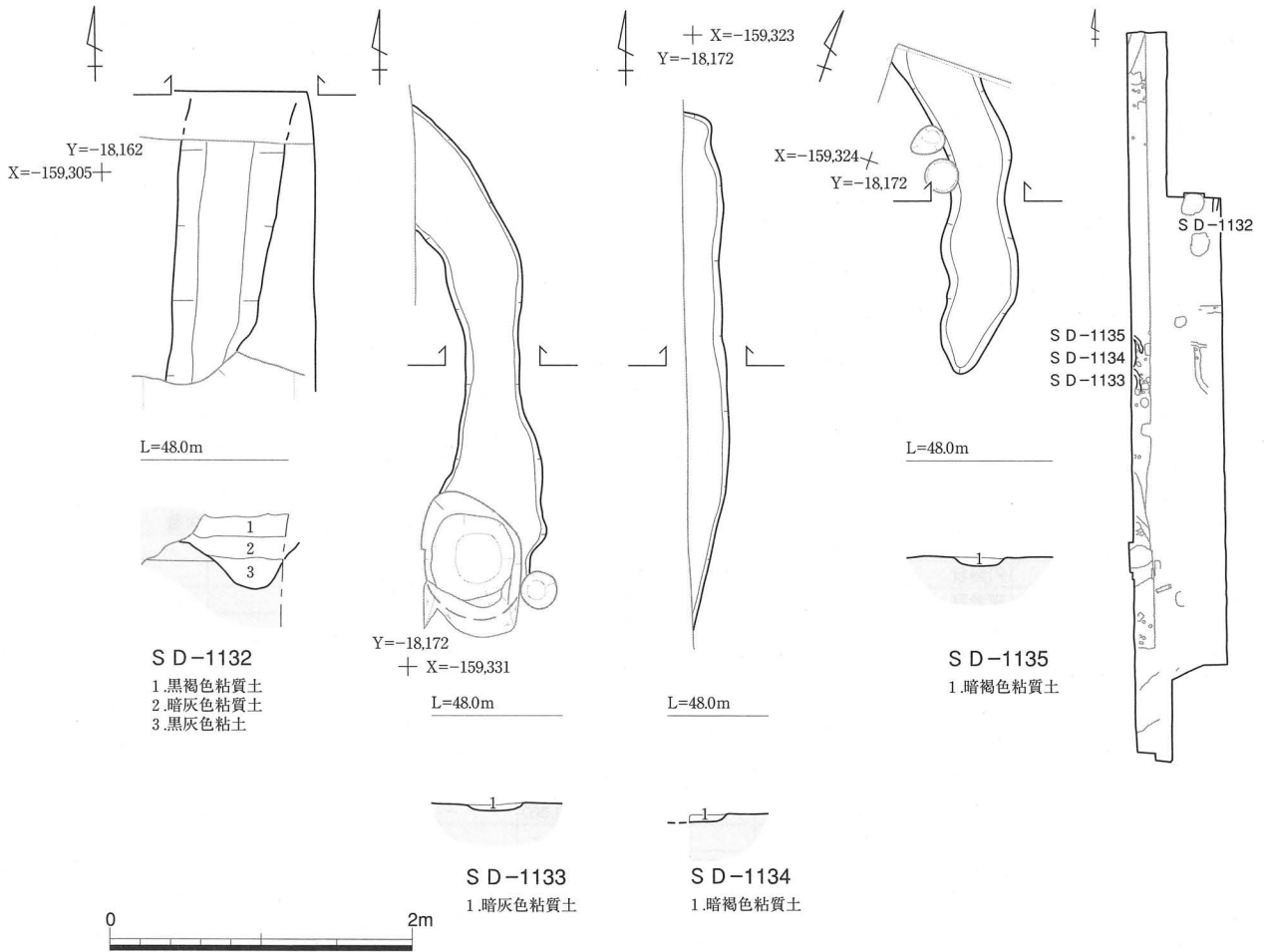
SD-1132 (第130図)

本溝は拡張区の北端で検出した。本溝は南-北に走行し、北側は調査区外へと延び、南側はSK-1136に切られる。規模は幅0.60~0.70mである。断面は逆台形で、深さは0.21~0.48mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：暗灰色粘質土、第3層：黒灰色粘土である。堆積土の上部は乱れが激しく、土器は大和第三~VI様式が混じった状態で出土する。ただし、SK-1136に切られることから、大和第四様式以前に掘削されたと考えられる。

第II章 南地区の調査



第129図 弥生時代中期中葉の遺構 (8) (S = 1/50)



第130図 弥生時代中期中葉の遺構（9）（S = 1/50）

SD-1133（第130図）

本溝は、道路改良における水路部分での深掘りで検出した。本溝は北北西-南に走行し、北側は西調査区外へと延び、南端は弥生時代後期のSK-1128に切られている。現状においてその長さは約2.8m、幅0.36~0.60mである。断面は皿状で、深さは0.01~0.07mを測る。堆積土は暗灰色粘質土の単層である。

SD-1134（第130図、写真図版124）

本溝は、道路改良における水路部分での深掘りで検出した。本溝は南-北に走行するが、西半を西排水溝に切れ、全形が不明である。現状においてその長さは約3.5m、幅0.26m以上である。断面は皿状で、深さは0.02~0.06mを測る。堆積土は暗褐色粘質土の単層である。

SD-1135（第130図、写真図版124）

本溝は、道路改良における水路部分での深掘りで検出した。本溝は北西-南東に走行するが、南端部は収束し、北側は西調査区外へと湾曲する。現状においてその長さは約2.2m、幅0.36~0.50mである。断面は皿状で、深さは0.08mを測る。堆積土は暗褐色粘質土の単層である。前述のSD-1133・1134は近接し、規模・堆積土がよく似ている。また、本溝とSD-1133は並行するような位置関係にある。竪穴住居跡などに伴う遺構であろうか。

第29表 第Ⅷ層上面柱穴一覧表

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1201	不整形	浅い皿状	黒灰色粘質土	0.76	0.51	0.08	47.32	Ⅳ		
Pit-1202	楕円形	逆円錐状	黒灰色粘質土	0.34	0.28	0.28	47.09	Ⅲ-3?		
Pit-1203	楕円形	逆台形	暗灰色粘土	0.28	0.20	0.12	47.28	中期?		
Pit-1204	円形	逆台形	暗灰色粘土	0.25	-	0.17	47.27	-		
Pit-1205	円形	逆台形	暗灰色粘土	0.20	-	0.20	47.23	-		
Pit-1206	楕円形	-	暗灰色粘土	0.23	0.20	-	-	-		
Pit-1207										SK-1128に変更 欠番
Pit-1208	楕円形	皿状	暗灰色粘土	0.72	0.54	0.17	47.24	中期?		
Pit-1209	楕円形	逆台形	暗灰色粘土	0.30	0.24	0.16	47.22	-		
Pit-1210	楕円形	皿状	暗灰色粘土	0.28	0.23	0.11	47.25	-		
Pit-1211	不整形	円筒状	黒灰色粘質土	0.34	0.28	0.26	47.10	-		
Pit-1212	円形	逆台形	暗灰色粘土	0.23	-	0.19	47.17	-		
Pit-1213	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	0.24	0.18	0.09	47.28	-		
Pit-1214	円形?	皿状	暗灰色粘土	0.43	-	0.12	47.15	Ⅲ-4		
Pit-1215										欠番
Pit-1216	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.30	0.23	0.23	47.20	中期?		
Pit-1217	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.46	0.42	0.56	46.80	中期?	柱根	
Pit-1218	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.20	-	0.12	47.22	-		
Pit-1219	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	0.22	0.18	0.05	47.28	-		
Pit-1220	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	0.26	0.24	0.05	47.28	-		
Pit-1221	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.30	0.20	0.18	47.16	中期?		
Pit-1222	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.35	0.30	0.15	47.10	中期?		
Pit-1223	円形	皿状	黒色粘質土	0.26	-	0.05	47.17	中期?		
Pit-1224	円形	円筒状	暗灰色粘土	0.40	-	0.40	47.00	-	礎板?	
Pit-1225	-	-	暗灰褐色粘質土	-	-	-	-	Ⅳ?	柱根	排水溝
Pit-1226	-	円錐状	灰黒色粘質土	0.90	-	(0.56)	-	後期?	柱根	排水溝
Pit-1227	-	-	黒色粘質土	-	-	-	-	後期?	柱根	排水溝
Pit-1228	円形?	円筒状	暗灰色粘土	0.34	-	0.41	47.31	後期		
Pit-1229										欠番
Pit-1230										欠番
Pit-1231	不整形	逆台形	黒灰色粘質土	1.10	-	0.36	47.13	-		
Pit-1232	楕円形	-	黒灰色粘質土	0.58	0.47	-	-	-		
Pit-1233	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	0.52	※0.34	0.11	47.39	-		
Pit-1234 ~1250										欠番
Pit-1251	楕円形	浅い皿状	黒灰色粘質土	0.48	0.32	0.08	47.33	Ⅱ?		
Pit-1252	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.44	0.36	0.22	47.18	-		
Pit-1253	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.34	-	0.45	46.97	-		
Pit-1254	不整形円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.45	0.42	0.38	47.05	中期?		
Pit-1255	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.38	0.35	0.24	47.20	-		
Pit-1256	楕円形	逆円錐状	黒灰色粘質土	0.58	0.44	0.64	46.56	-	柱根	
Pit-1257	円形?	円筒状	黒灰色粘質土	0.20	-	0.54	47.06	後期?	焼土塊	

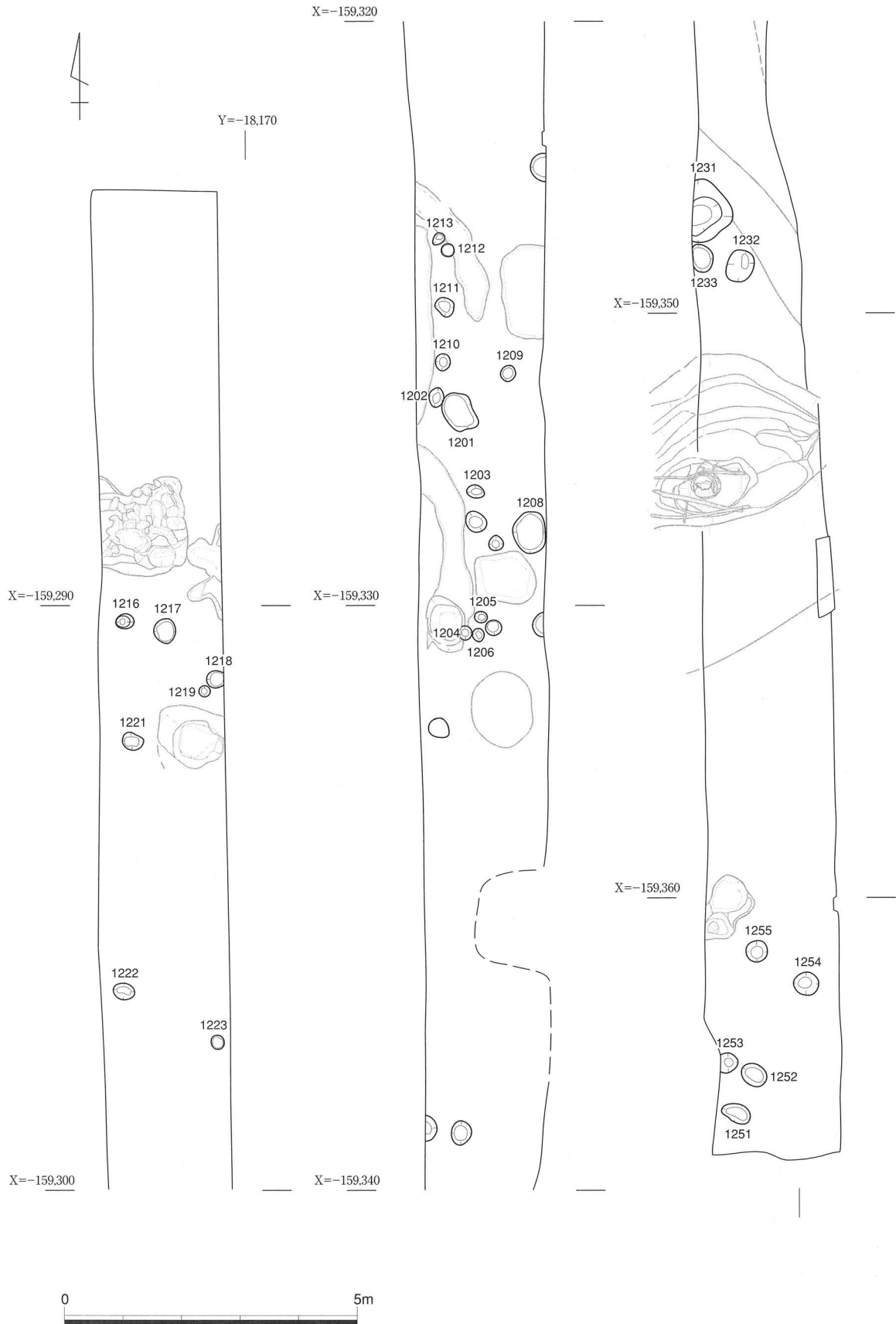
※は復原値、()は残存値

第Ⅷ層上面の柱穴

Pit-1201~1228・1231~1238・1251~1257 (第131図、写真図版124、第29表)

弥生時代中期中葉遺構検出面となる第Ⅷ層上面において、40基前後の柱穴を検出した。これら柱穴は、いずれも弥生時代中期中葉のものというわけではなく、鉄分の沈着が激しい弥生時代中期後葉遺構検出面では検出ができなかったものも含んでいると考えられ、弥生時代中期中葉~古墳時代初頭の時間幅で捉えておくべきものである。

西に隣接する第33次調査区を比較した場合、本調査区においては著しく柱穴が少ない。これは、本調査区が弥生時代中期後葉以降の区画溝域にあたり、居住遺構の分布範囲外であったことが要因として考えられる。



第131図 第Ⅷ層上面の柱穴 (S = 1/100)

(3) 弥生時代中期後葉の遺構 (第117図、写真図版110)

今回の調査の主目的が、この弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構にあった。しかし、検出面としては、弥生時代後期後葉の遺構と同一面である。微高地上では、ほとんど遺物包含層が上部になく、重機掘削の後、すぐに遺構検出が可能な部分もあった。ただし、遺物包含層から遺構面にかけて鉄分の沈着が激しく、また弥生時代中期後葉から弥生時代後期後葉までの遺構が複雑に切り合うことから、遺構の検出は困難を極めた。

土坑

SK-1102 (第132図、写真図版125)

本坑は調査区中央の東際で検出した。平面は楕円形を呈し、現状では長軸2.20m以上、短軸1.80mであるが一回り大きかったと考えられる。断面は上面の開いた円筒状であるが、底面南側は崩壊により大きく抉れている。深さは1.86mを測る。底面は標高45.80mにあって灰色砂に達する。

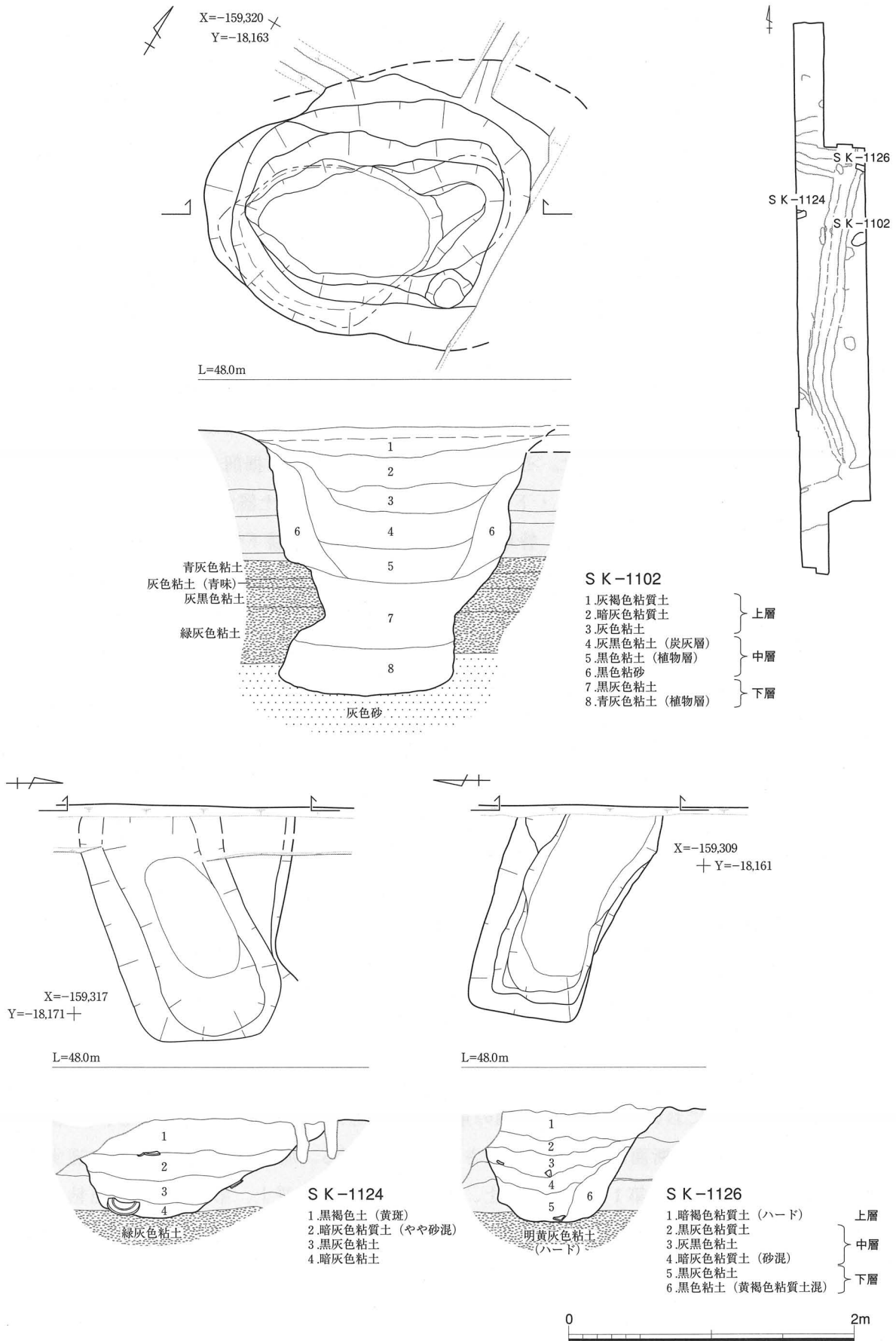
堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は灰色系粘質土、中層は暗灰色系粘土で炭灰混じり、下層は上位が黒色粘砂で下位が青灰色粘土(植物層)である。下層上位から中層下位にかけて、大和第Ⅳ様式の土器とともに、棒材が出土した。機能は、底面の灰色砂から湧水があり、井戸と考えられる。本坑の特徴として、楕円の長軸方向である北東側には、底面から0.5mほど上にステップとでも呼ぶべき緩傾斜面をもつ。これが掘削に伴うものか、水汲みのための構造なのかは不明である。

SK-1124 (第132図、写真図版126)

本坑は調査区中央の西端で検出した。本来の検出面と考えられる第Ⅶ層：黒褐色粘質土には鉄分による黄斑が強く、遺構検出面を一面下げて確認した。また、その西側は調査区外へと延びるが、底面の西への立ち上がりが認められることから、溝状になるのではなく土坑として収束するものと判断した。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.70m以上、短軸1.00m以上である。断面は逆台形で、深さは0.55mを測る。底面は、ベースの緑灰色粘土に達する。堆積土は4層からなり、第1層：黒褐色土(黄斑)、第2層：暗灰色粘質土(やや砂混)、第3層：黒灰色粘土、第4層：暗灰色粘土である。時期は、大和第Ⅳ-1様式である。機能は不明である。

SK-1126 (第132図、写真図版126)

本坑は、拡張区の東端で検出した。東半は調査区外へと延びており、全形は不明である。東壁断面の観察によれば、本坑の北肩は北に並行するSK-1136に切られる。ただし、この点については上層における鉄分の沈着が激しく、切り合いの判断は確実とはいえず、上層が同時埋没であった可能性も否定できない。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.56m以上、短軸0.90mである。断面は逆台形で、深さは0.78mを測る。底面は、ベースの暗黄灰色粘質土に達する。堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は暗褐色粘質土(ハード)、中層は灰黒色系粘質土、下層は黒灰色粘土である。下層では、南側の底面から立ち上がりにかけて、黒色粘土(黄褐色砂質土混)が堆積する。時期は、大和第Ⅳ-1様式である。



第132図 弥生時代中期後葉の遺構 (1) (S = 1/40)

SK-1133 (第133図)

本坑は拡張区の北側で検出した。SD-1129と切り合うが、その前後関係については不明である。平面は不整形を呈し、長軸0.88m、短軸0.78mである。断面は半円状で、深さは0.24mを測る。堆積土は黒灰色粘土である。下層からは大和第Ⅳ-2様式、上層では大和第Ⅴ様式の土器が出土した。

SK-1136 (第133図、写真図版126)

本坑は拡張区の東端で検出した。その東半は調査区外へと延びており、全形は不明である。SK-1126の北肩を切る。平面は楕円形を呈すると考えられ、長軸1.60m以上、短軸1.78mである。断面は逆台形で、深さは0.93mを測る。底面は、ベースの青灰色シルトに達する。

堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、中層は暗灰色系粘質土、下層は暗灰色粘土(炭混)である。下層においては、より古い堆積と考えられる黒色粘質土が底面の両立ち上がりに残存していた。その堆積状況は、あたかも再掘削を受けた溝のようでもある。上層からは大和第Ⅴ様式、中・下層からは大和第Ⅳ様式の土器が出土している。特に、中層において土器が集中した。なお、特筆すべき遺物として、中層下位から送風管片が出土している。

本坑は、先述のSK-1126と南北に並列し、同時開口していた可能性が考えられる。さらに、両者は調査区外の東側へと延びることや、その断面や堆積がSD-1101B・1104Bに類似することから、東-西の溝の可能性も考えられる。

SK-1140 (第133図、写真図版127)

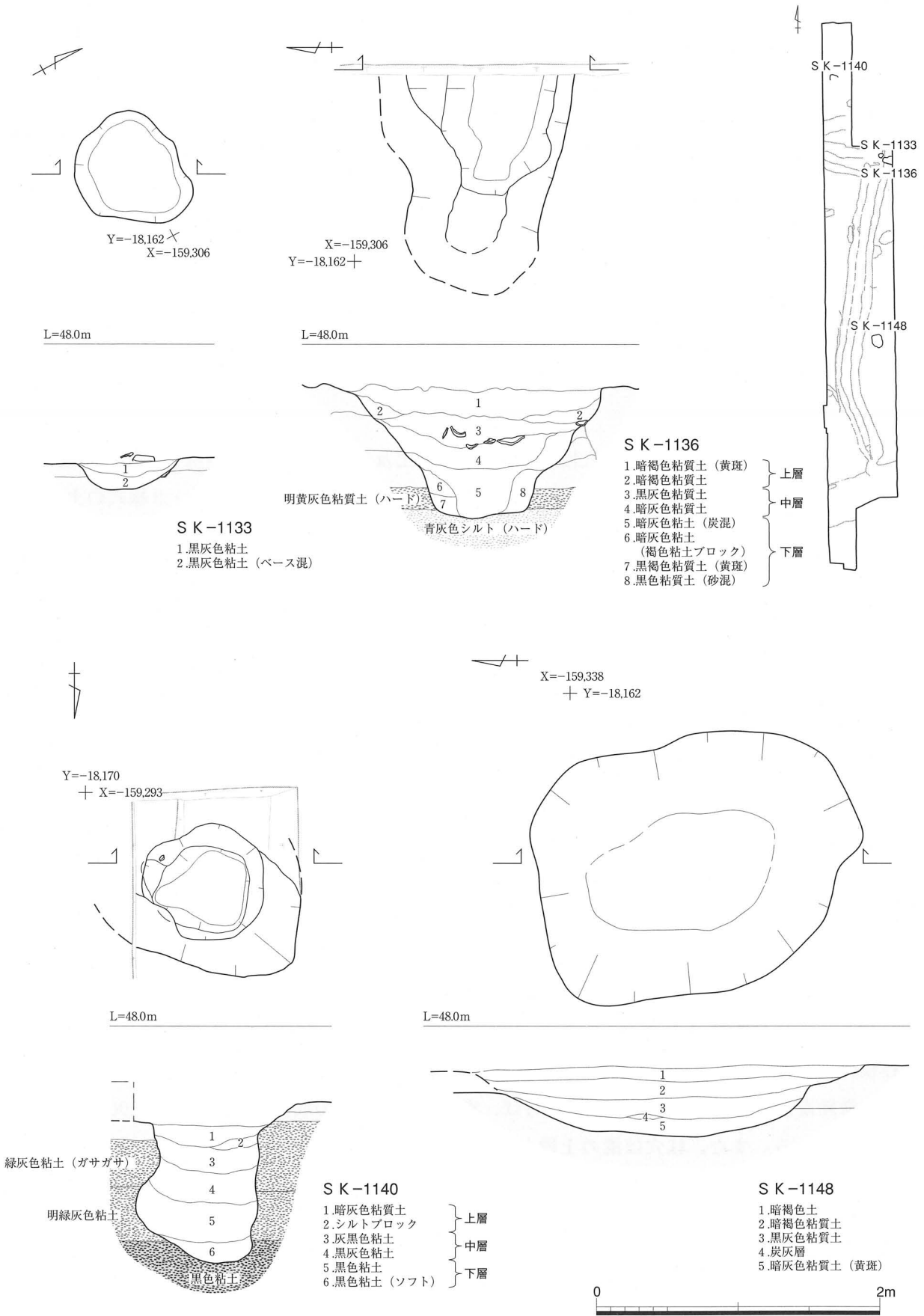
本坑は調査区北側で検出した。本来の検出面となる弥生時代中期後葉の遺構検出面では検出できず、道路改良における水路部分での弥生時代中期中葉遺構検出面への掘り下げで確認した。平面は不整形を呈し、長軸1.28m以上、短軸1.10m以上である。断面は上面の開いた円筒状で、東側の中位が大きく膨らむが、これは機能時の崩壊によるものであろう。深さは1.12mを測る。底面は標高46.35mで、ベースの黒色粘土に達する。

堆積土は、上・中・下の大きく3層に分かれ、上層は暗灰色粘質土、中層は灰色系粘土、下層は黒色粘土である。南東肩で杭を検出しているが、本坑に伴うものかは不明である。時期は、大和第Ⅳ-1様式である。機能は井戸と考えられる。

SK-1148 (第133図)

本坑は調査区中央において、SD-1104の東側で検出した。平面は不整形を呈し、長軸2.40m、短軸1.83mである。断面は逆台形で、深さは0.43mを測る。底面は黄灰色粘質土に達する。

堆積土は4層からなり、第1層：暗褐色土、第2層：暗褐色粘質土、第3層：黒灰色粘質土、第4層：暗灰色粘質土(黄斑)である。第3層と第4層の間には、炭灰を挟む。時期は、大和第Ⅳ-2様式である。機能は不明である。竪穴住居跡の灰穴炉の可能性も想定できるが、やや大きい。



第133図 弥生時代中期後葉の遺構 (2) (S = 1/40)

溝

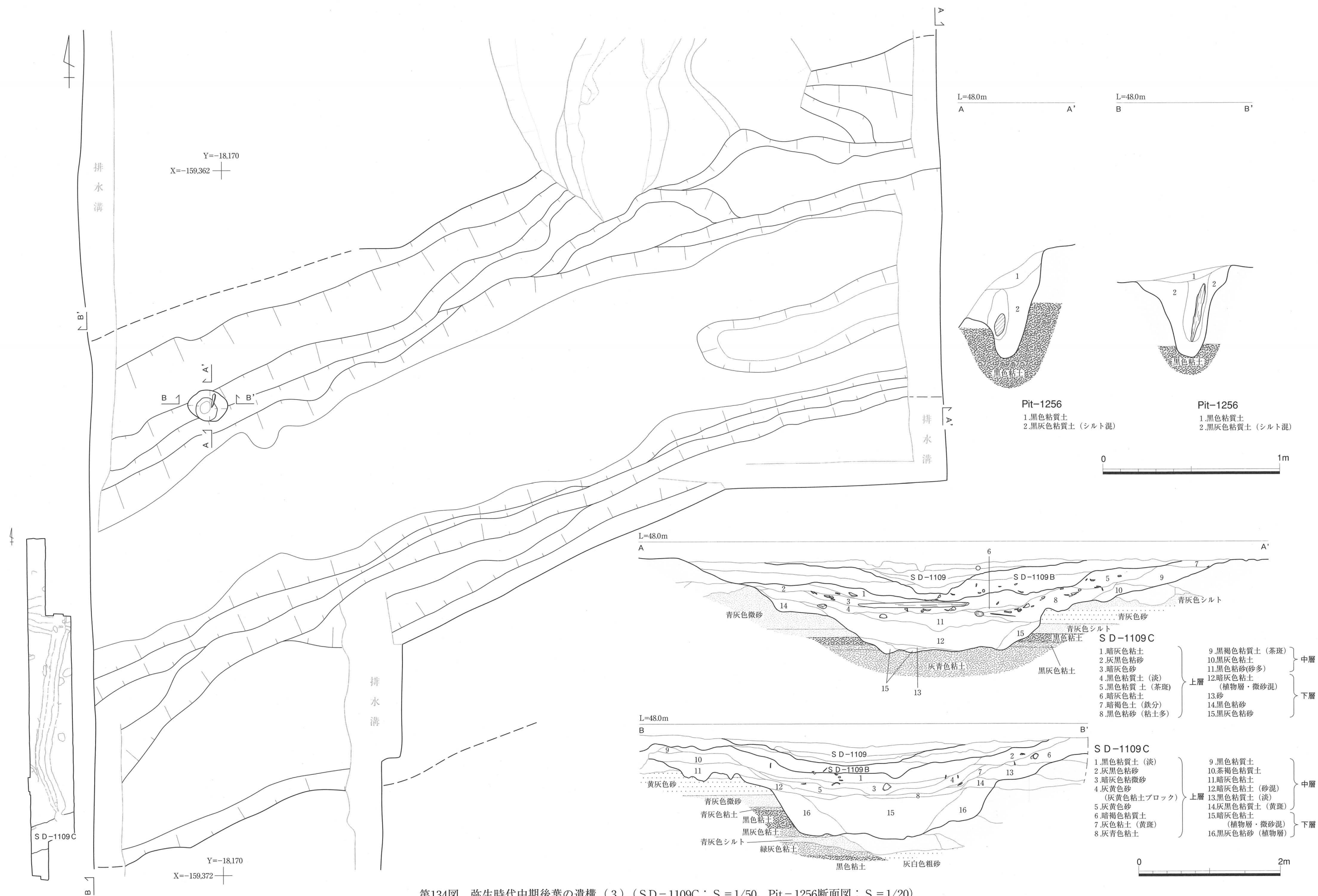
SD-1109C (第134・135図、写真図版128・129)

本溝は調査区南側で検出した。弥生時代後期後葉のSD-1109Bの先行溝であり、堆積土中央はこの再掘削によって削平を受けている。また、弥生時代前期の河跡SR-1201を切っている。本溝は東北東-西南西に走行し、幅7.20mである。断面は、なだらかに開いた上段と急角度に落ち込んだ下段からなる二段の逆台形で、深さは1.20~1.40mを測る。底面標高は東側も西側も46.40mであり、以後の上層溝であるSD-1109・1109Bの底面が東から西に向かって緩く傾斜するのに対し、明確な傾きはない。本溝の北肩には、SD-1101B・1104Bが合流して取り付いている。その取り付け部は、本溝の上段と下段の屈曲点レベルに対応しており、ここにテラスが形成される。合流部は一段落ちくぼむが、これはSD-1101B・1104Bからの流水によるものであろう。

堆積土は大きく2層に分かれ、上層は黒色系粘質土及び粘砂、下層は暗灰色粘土(植物層)である。上層の黒色粘質土及び粘砂は、大和第V様式とともに大和第VI-1・2様式の土器を含む。上層と下層の境からは、大和第V様式の土器とともに多量の木製品が出土した。木製品には、平鋤(W1005・1006)や泥除(W1016)などの木製農具未成品や焼けた建築部材(W1047・1050・1051)が含まれる。下層の暗灰色粘土(植物層)からは、大和第V様式とともに大和第IV様式の土器が出土している。下層は大和第V様式以降の堆積であるが、壁断面ではこの植物層に切られたかのように底面の両肩部に堆積する黒灰色粘砂が観察でき、この堆積が大和第IV様式に遡る可能性は高い。しかし、調査時においては両者を識別せず、下層一括として掘り下げている。このことから、本溝については、完掘状態からの弥生時代中期後葉平面図1枚しか作成していないが、弥生時代後期初頭における最低1回の再掘削が想定される。また、上層と下層との境も、再掘削と判断すべきかもしれない。

なお、本溝の北肩で、Pit-1256を検出している。その位置は、平面的には調査区西際で、同様にSD-1109C内に掘り込まれたSD-1136に南接する。断面では、SD-1109Cの上段と下段の屈曲点からやや下段で掘り込まれている。平面は楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.44mである。断面は逆円錐状で、深さは0.64mを測る。堆積土は2層からなり、上層は黒色粘質土、下層は黒灰色粘質土と青灰色シルトの互層である。柱穴内には、柱根が残存した。柱根の底面標高は46.67mである。本柱穴を本溝に伴うものとする根拠はない。しかし、柱穴が本溝埋没後に掘り込まれたとするならば、堆積土上面からの底面までの深さは1.00mを超えることとなる。また、柱穴は溝の上段と下段の屈曲点付近に掘り込まれている。このことから柱穴は、溝開口時に位置を意識して掘り込まれた本溝の関連施設と考えることができる。

本溝は、西隣接地である第33次調査区で検出したSD-109に繋がり、東側では第3次調査区のSD-02との連結が予想される。弥生集落の南側をめぐることから、環濠になると考えられる。本溝より内側に同時期の大溝は認められず、弥生時代中期後葉~後期にかけて居住域に最もちかい環濠となろう。

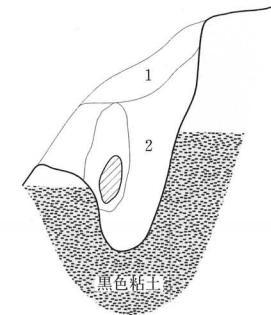


排水溝

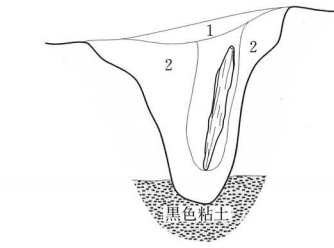
Y=-18.170
X=-159.362

L=48.0m
A A'

L=48.0m
B B'



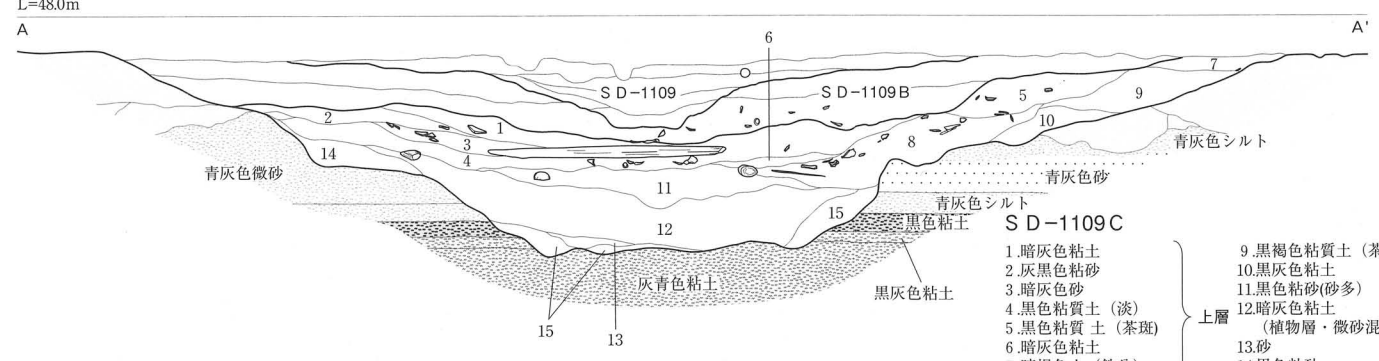
Pit-1256
1. 黒色粘質土
2. 黒灰色粘質土 (シルト混)



Pit-1256
1. 黒色粘質土
2. 黒灰色粘質土 (シルト混)

0 1m

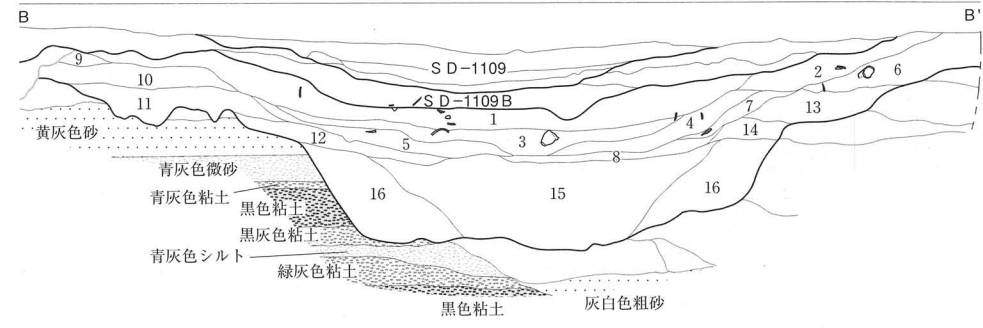
L=48.0m
A A'



SD-1109C
1. 暗灰色粘土
2. 灰黒色粘砂
3. 暗灰色砂
4. 黒色粘質土 (淡)
5. 黒色粘質土 (茶斑)
6. 暗灰色粘土
7. 暗褐色土 (鉄分)
8. 黒色粘砂 (粘土多)
9. 黒褐色粘質土 (茶斑)
10. 灰黒色粘土
11. 黒色粘砂 (砂多)
12. 暗灰色粘土
13. 砂
14. 黒色粘砂
15. 灰黒色粘砂

上層 (植物層・微砂混)
中層
下層

L=48.0m
B B'



SD-1109C
1. 黒色粘質土 (淡)
2. 灰黒色粘砂
3. 暗灰色粘微砂
4. 黄灰色砂
5. 灰黄色砂
6. 暗褐色粘質土
7. 灰粘土 (黄斑)
8. 灰青色粘土
9. 黒色粘質土
10. 茶褐色粘質土
11. 暗灰色粘土
12. 暗灰色粘土 (砂混)
13. 黒色粘質土 (淡)
14. 灰黒色粘質土 (黄斑)
15. 暗灰色粘土
16. 灰黒色粘砂 (植物層)

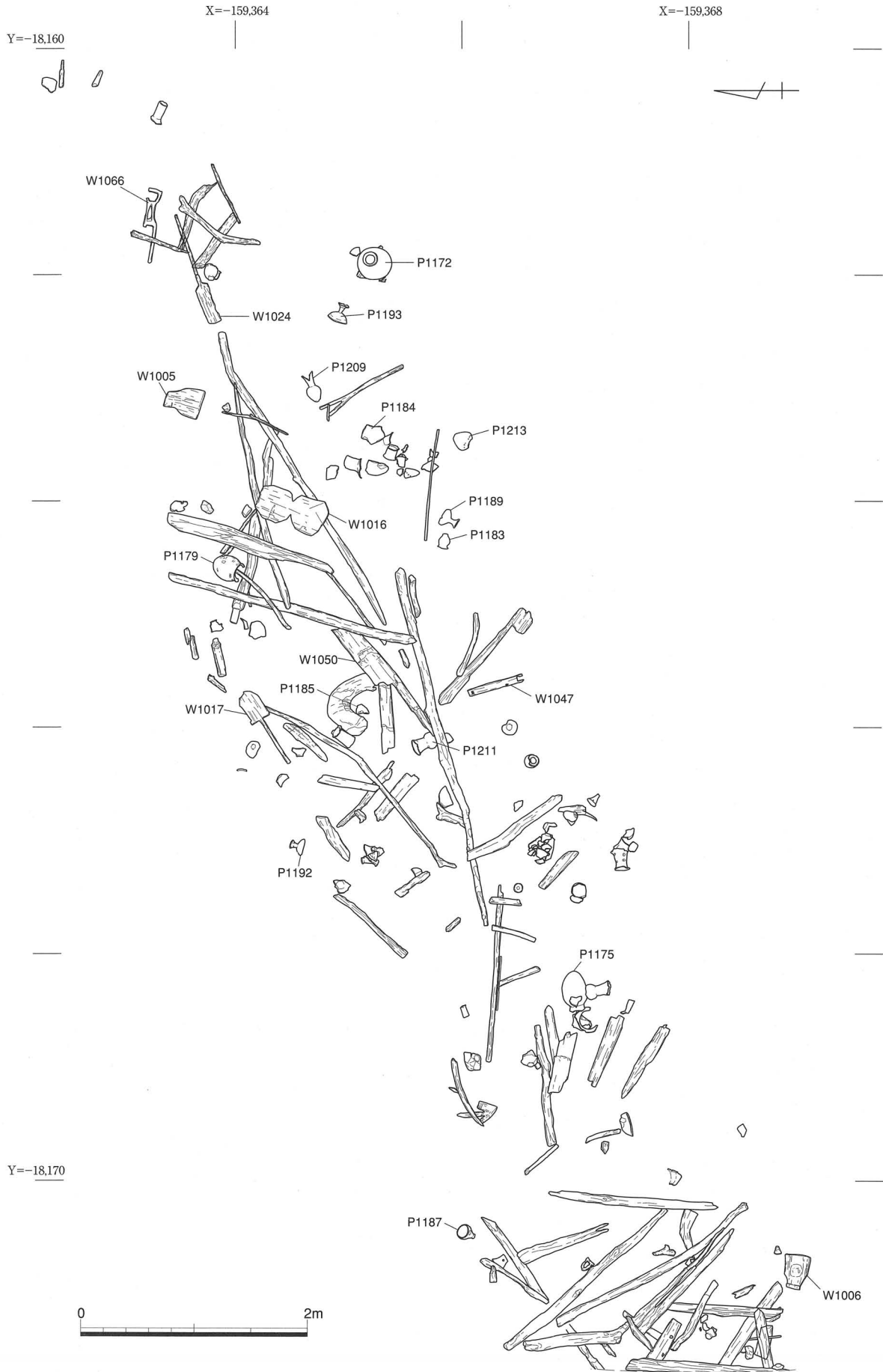
上層 (灰黄色粘土ブロック)
中層
下層 (植物層・微砂混)

0 2m

SD-1109C

Y=-18.170
X=-159.372

第134図 弥生時代中期後葉の遺構 (3) (SD-1109C : S = 1/50, Pit-1256断面図 : S = 1/20)



第135図 S D - 1109C 第6層出土状況図 (S = 1/50)

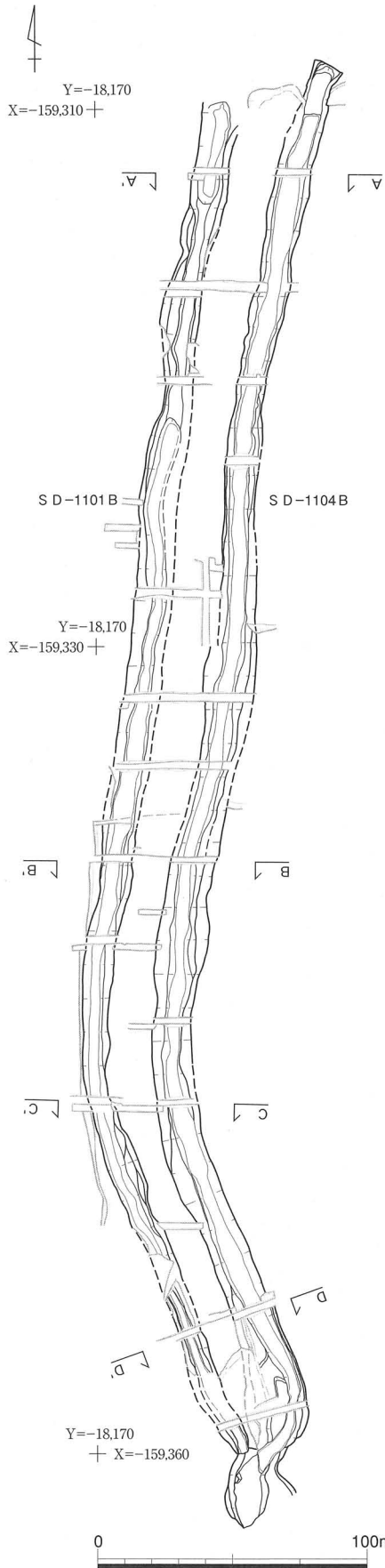
S D-1101 B・1104 B（第136図、写真図版130～133）

環濠 S D-1109 の北肩から拡張区までの直線距離約 55m に亘って、南-北の溝を 2 条並行して検出した。西側のものを S D-1101 B、東側のものを S D-1104 B とする。両者は 1.00～1.50m ほどの幅をもって並行し、西側に向かって外湾している。その南端は、環濠である S D-1109 の手前で合流し、S D-1109 の北肩に連結する。北端は、ともに X = -159,310m 付近において収束する。また、幾度も再掘削がおこなわれているようであり、両溝の間には何本も弥生時代後期の小溝が走っている。

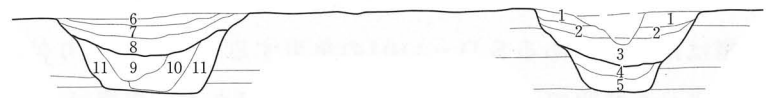
S D-1101 B は幅 1.00～1.20m である。断面は逆台形で、深さ 0.40～0.60m を測る。本溝は西側に向かって外湾し、S D-1109 の手前で S D-1104 B と連結する。その合流部は S D-1101 B の底面標高から一段深くなっている。S D-1101 B と合流部に先後関係があるかは、土層の堆積状況からは確認できなかった。また、本溝の底面標高は、南北どちらか一方に傾斜するというものではなく 47.00m を前後している。堆積土の色調や土質は、溝の検出延長が長い地点によって異なり一定しない。ただし、大きくは上・中・下の 3 層に分けることも可能で、上層の暗褐色系粘質土、中層の暗灰色系粘質土、下層の黒灰色系粘土である。本溝は、S D-1101 や S D-1102 の再掘削を受けるが、南側は再掘削のないまま自然埋没している。上層から下層まで大和第 V 様式の土器が出土する。このうち、下層は大和第 IV 様式の土器を含み、上層は大和第 VI-3 様式の土器を含む。このことから、大和第 IV 様式に掘削され、大和第 V 様式の溝浚えを経て、大和第 VI-3 様式には埋没していたと考えられる。

S D-1104 B は幅 1.00～1.40m である。ただし、本溝は S D-1104 の再掘削を受け、本来の溝幅より広がっている可能性もある。断面は逆台形で、深さ 0.60～0.88m を測る。S D-1104 の再掘削は上面で止まっており、深さは影響を受けていない。並行する S D-1101 B とは同様な規模ながら、本溝が幅、深さともに若干大きい可能性がある。本溝は西側に向かって外湾し、S D-1109 の手前で急激にまた西側へと屈曲する。この屈曲部に S D-1101 B が取り付き、そこでさらに南に折れて S D-1109 に連結する。堆積土は、溝の検出延長が長い地点によって異なり一定せず、また上面は再掘削溝によって削平を受けている。中層から下層が残存し、大きくは中層が灰色系粘土、下層が灰色系粘土（ベースブロック）である。下層からは大和第 V 様式の土器とともに、大和第 IV 様式の土器が出土する。S D-1101 B と同様、大和第 IV 様式に掘削され大和第 V 様式の溝浚えが想定される。

両溝ともに、下層から大和第 V 様式とともに大和第 IV 様式の土器が出土する状況は、その南端で連結する環濠 S D-1109 の状況に類似する。おそらく、両溝と環濠の掘削時期は同じであろう。また、S D-1101 B と S D-1104 B は、ともに北端の収束部は同じであり、南端部は 1104 B を屈曲させて 1101 B と合流させており、環濠掘削時に両者もまた計画性をもって並行に掘削されたものと考えられる。また、両溝の北端収束部と対応するように、同時期の東西溝 S D-1122・1125 もその西側で収束する。こうした S D-1101 B・1104 B の性格として、本調査区の東側にあると考えられる微高地中央の西側を区画していた可能性が高い。

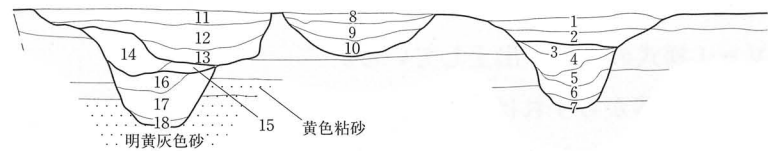


L=48.0m
A A'



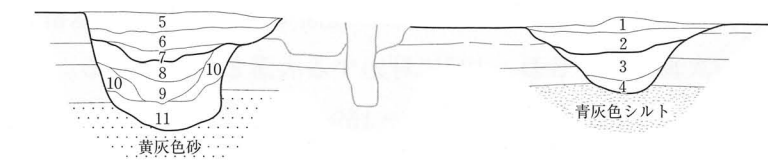
- | | | |
|---|--|---|
| <p>SD-1104B</p> <ul style="list-style-type: none"> 9. 黒灰色粘土 (砂混) 10. 黒灰色粘土 11. 黒灰色粘土 (黄灰色粘質土ブロック) <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> | <p>SD-1104</p> <ul style="list-style-type: none"> 6. 黒褐色土 7. 黒褐色粘質土 8. 暗灰褐色粘質土 <p style="text-align: right;">} 上層
} 下層</p> | <p>SD-1102</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色土 2. 黒褐色粘質土 3. 暗灰褐色粘質土 <p>SD-1101B</p> <ul style="list-style-type: none"> 4. 暗灰色粘質土 5. 黒灰色粘土 <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> |
|---|--|---|

L=48.0m
B B'



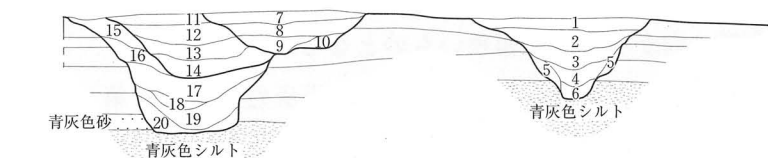
- | | | | |
|---|--|--|---|
| <p>SD-1104</p> <ul style="list-style-type: none"> 14. 灰褐色粘質土 15. 灰色砂 <p style="text-align: right;">} 下層</p> <p>SD-1104B</p> <ul style="list-style-type: none"> 16. 暗灰色粘土 (灰褐色粘質土混) 17. 暗灰色粘土 18. 黒灰色粘土 <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> | <p>SD-1102</p> <ul style="list-style-type: none"> 11. 暗褐色土 12. 黒褐色粘質土 13. 黒灰色粘質土 | <p>SD-1102B</p> <ul style="list-style-type: none"> 8. 暗褐色土 9. 暗褐色粘質土 10. 黒色粘質土 | <p>SD-1101</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色土 2. 暗褐色粘質土 <p>SD-1101B</p> <ul style="list-style-type: none"> 3. 灰色粘土 4. 灰褐色粘質土 5. 暗灰色粘土 6. 黒灰色粘土 (砂混) 7. 黒灰色粘土 <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> |
|---|--|--|---|

L=48.0m
C C'

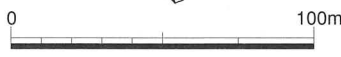


- | | | |
|---|--|--|
| <p>SD-1104B</p> <ul style="list-style-type: none"> 8. 黒灰色粘質土 (黄斑) 9. 暗灰色粘土 10. 暗灰色粘土 (黄灰色砂混) 11. 暗灰色粘土 (青灰色シルト混) <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> | <p>SD-1102</p> <ul style="list-style-type: none"> 5. 黒褐色土 (黄斑) 6. 黒褐色粘質土 7. 黒灰色粘質土 | <p>SD-1101</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色土 2. 黒褐色土 <p>SD-1101B</p> <ul style="list-style-type: none"> 3. 暗灰色粘土 4. 暗灰色粘土 (青灰色シルト混) <p style="text-align: right;">} 中層
} 下層</p> |
|---|--|--|

L=48.0m
D D'



- | | | |
|--|--|---|
| <p>SD-1104B</p> <ul style="list-style-type: none"> 15. 黒色粘質土 (砂混) 16. 黒色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック) 17. 暗灰色粘土 18. 明黄色砂 19. 灰黒色粘土 20. 黒色粘土 <p style="text-align: right;">} 上層
} 中層
} 下層</p> | <p>SD-1102B</p> <ul style="list-style-type: none"> 7. 黒褐色土 8. 黒褐色粘質土 9. 黒色粘質土 10. 黒色粘質土 (砂混) <p>SD-1104</p> <ul style="list-style-type: none"> 11. 暗褐色土 (黄斑) 12. 黒褐色粘質土 13. 暗灰黄色粘質土 14. 黒灰色粘質土 <p style="text-align: right;">} 上層
} 下層</p> | <p>SD-1101B</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土 (黄斑) 2. 黒褐色粘質土 3. 暗灰黄色粘質土 4. 暗灰色粘土 5. 暗灰色粘土 (青灰色シルト混) 6. 黒灰色粘土 <p style="text-align: right;">} 上層
} 中層
} 下層</p> |
|--|--|---|



第136図 弥生時代中期後葉の遺構 (4) (平面図: S = 1/250、断面図: S = 1/50)

SD-1122（第137図、写真図版134・135）

本溝は調査区北側の南寄りで見出した。本溝は東-西に走行し、西側は調査区外へと延び、東側は南北溝であるSD-1101の集束する北端部に取り付くように延びるが、その収束部付近が浅く不鮮明であり両者の関係は不明である。規模は幅1.00~1.40mで、東側へ向かって細くなる。断面は、東側は浅く皿状であるが西側は二段となる逆台形で、そこで深さは0.30~0.40mを測る。

堆積土は、深い西側では4層からなり、第1層：灰黒色粘質土、第2層：暗灰色粘質土、第3層：灰黒色粘質土、第4層：暗灰色粘土（やや青味）である。第1層からは、大和第V-1様式の土器とともに、銅釧片（M5413）が出土した。下層からは、大和第IV様式とともに第V-1様式の土器が出土している。

出土土器からすれば、本溝は弥生時代後期初頭に位置づけるべきであろう。しかし、本溝に並行し近接する同規模のSD-1125からは、大和第IV-1様式の土器が出土している。本溝とSD-1125の関係は、南北区画溝のSD-1101BとSD-1104Bの関係に似ている。また、SD-1101B・1104Bの北端付近に、SD-1122・1125の東端も近接している。このことから、弥生時代中期後葉の南北区画溝としてのSD-1101B・1104Bに対し、東西区画溝となるSD-1122・1125を想定した。

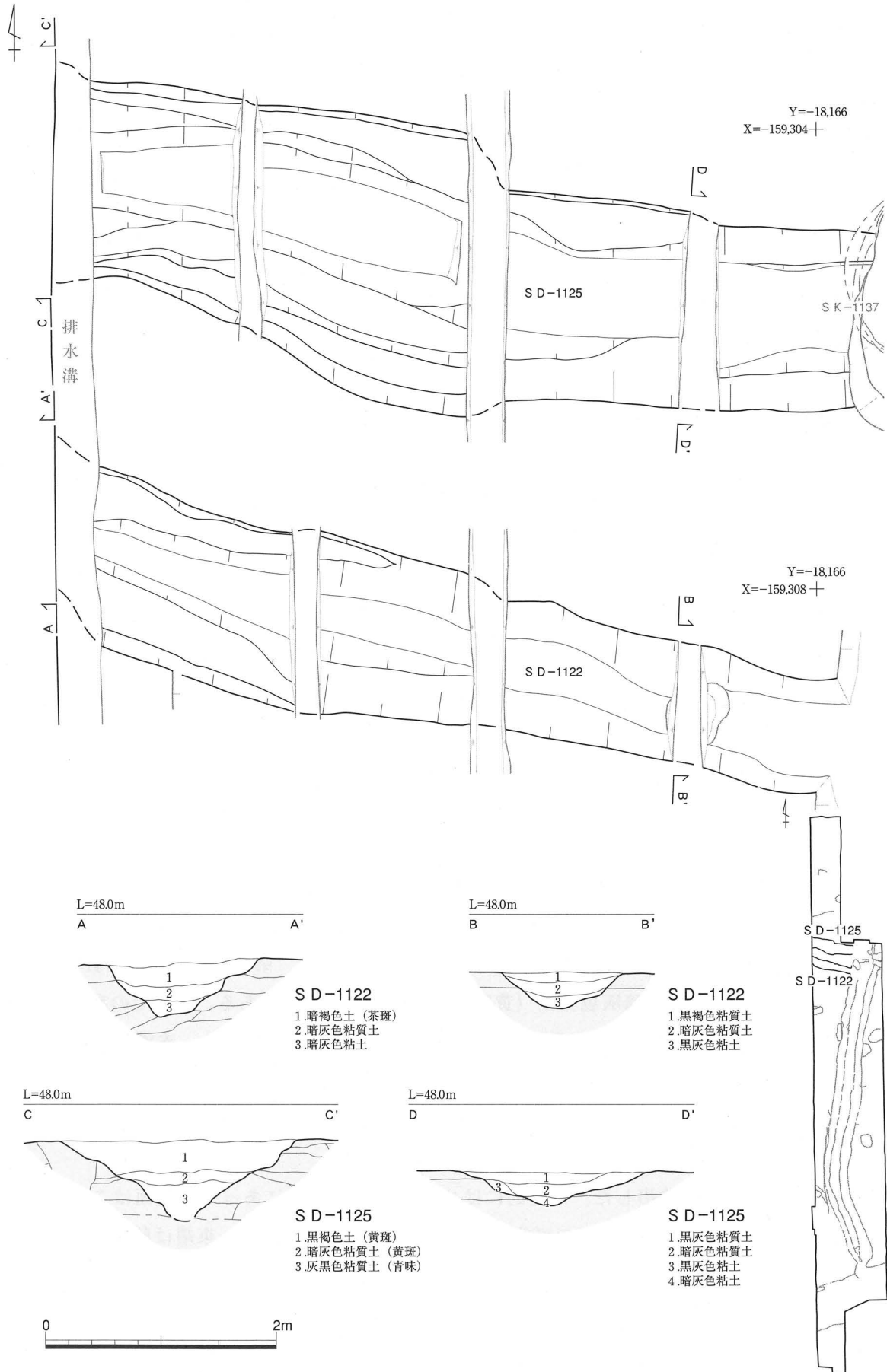
なお、調査区西壁の断面によれば、SD-1122の下層においては $X = -159,307\text{m}$ から $X = -159,310\text{m}$ までの約3.0mの範囲で灰黒色粘土を堆積土とする落ち込みがある。これは、第33次調査区のSD-127に対応する大溝と考えられる。第33次調査によれば、時期は大和第II様式である。地形は、 $X = -159,320\text{m}$ 付近から北側に向かって徐々に落ち込んでおり、この大溝が弥生時代中期前葉において微高地北端部を画していた可能性がある。

SD-1125（第137図、写真図版134・135）

本溝は調査区北側の南寄りで見出した。本溝は東-西に走行し、西側は調査区外へと延び、東側はSK-1137との切り合いによって、これを識別できず不明である。南側に隣接するSD-1122とは、1.20~2.00mの幅をもって並行している。本溝は幅1.60~2.40mである。断面は逆台形であるが、西壁ではV字状に切れ込んでおり、そこで深さは0.70mを測る。本溝は東側に向かって浅く幅狭いものとなる。

堆積土は3層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：暗灰色粘質土、第3層：灰黒色粘質土（青味）である。第3層からは、鹿と魚を描いた絵画土器（P5010-1）が出土した。本溝の出土土器は、第1・2層で大和第IV様式から大和第V様式まで混在するが、第3層は大和第IV-1様式の単独である。後者が当初の掘削、前者が再掘削の時期を示すと考えられる。

本溝は、先述のSD-1122との関係から、南北区画溝のSD-1101B・1104Bに対する東西区画溝を想定した。本溝とSD-1122は、大和第IV様式に掘削され大和第V様式に再掘削を受けるまでは、SD-1101B・1104Bと同様の変遷を辿っている。しかし、本溝とSD-1122の上層土器は大和第V様式であり、それ以後の再掘削は受けなかったようである。



第137図 弥生時代中期後葉の遺構 (5) (S = 1/50)

S D - 1123 (第138図)

本溝は調査区中央の北寄りで検出した。本溝は両端が収束するもので、南-北に長軸をもった楕円形を呈する。南半部が拡がっている。規模は、長さ3.00m、幅0.70~1.00mである。断面は逆台形で、深さは0.34mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：暗灰色粘土（炭灰混）、第3層：黒灰色粘質土である。上層での乱れが激しく、出土土器は大和第Ⅳ~Ⅵ-3様式が混在している。

S D - 1126 (第138図)

本溝は拡張区で検出した。本溝は東-西に走行するが、東端は収束し、西側はS K - 1135に切れ不明である。規模は、現長1.80m、幅0.32~0.40mである。断面は皿状で、深さは0.25mを測る。堆積土は暗灰色粘土の単層である。上層での乱れが激しく、弥生時代中期中葉から弥生時代後期後葉までの土器が混在している。

S D - 1128 (第138図)

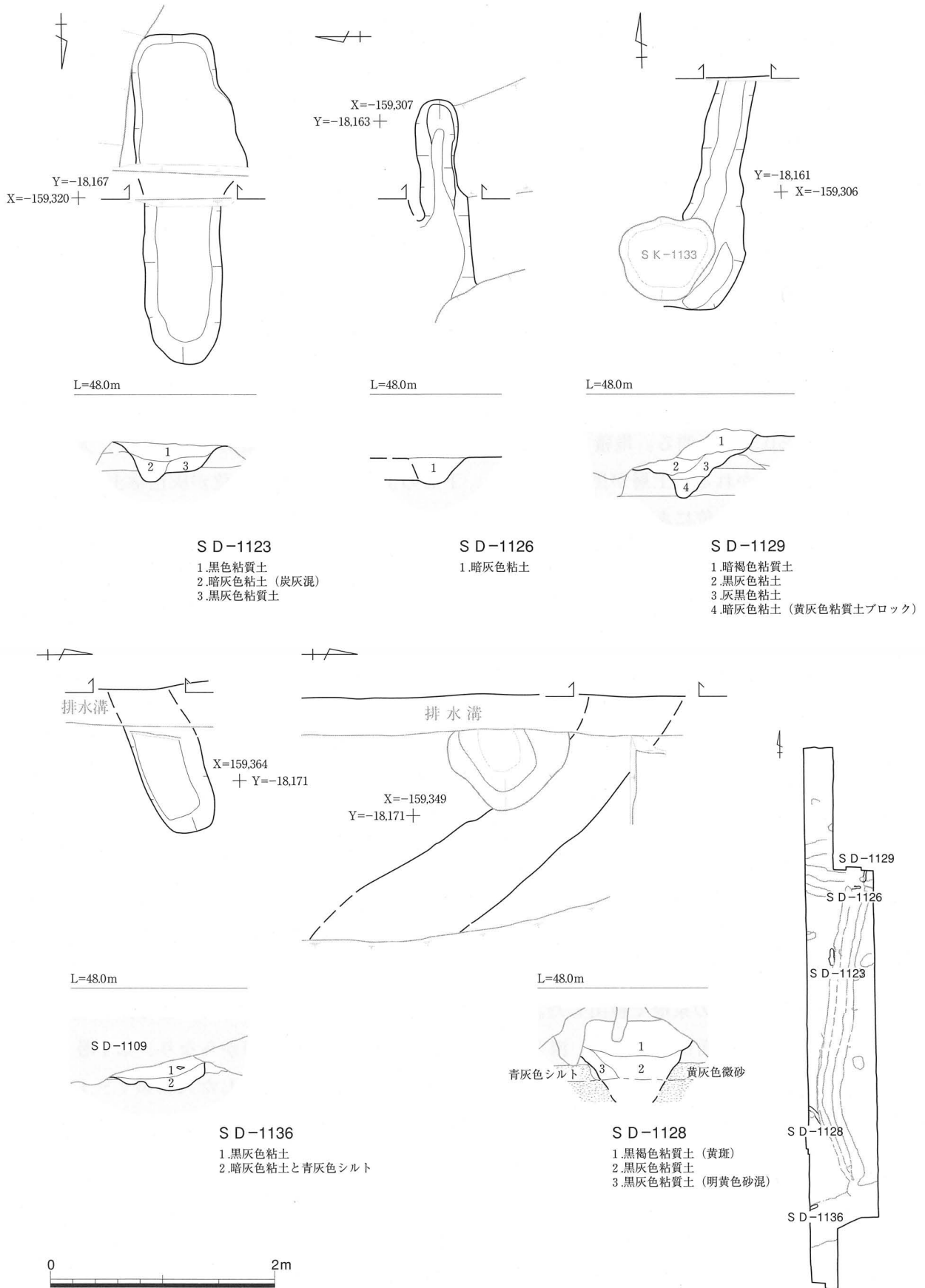
本溝は調査区中央の西側、道路改良工事部分において弥生時代中期中葉遺構検出面まで下げて確認しているが、実際の検出面は弥生時代中期後葉~後期の遺構検出面である。本溝は北西-南東に走行し、東側はS D - 1101 B・1104 Bと切り合うため不明であるが、西側は第33次調査区のS D - 1115に連結する。規模は、本調査区での検出長は3.00mであるが、第33次調査区ともあわせるならば、最大長約12.0mにも及ぶ。幅は、現検出面で0.60~0.80mであるが、本来の検出面からであれば1.0mほどになるものと考えられる。断面は逆台形と考えられるが、底面まで検出しておらず深さは0.60m以上を測る。堆積土は2層まで確認しており、第1層：黒褐色粘質土、第2層：黒灰色粘質土である。第2層において、半完形の無文大形鉢を含む土器群を検出している。時期は、大和第Ⅳ様式である。

S D - 1129 (第138図、写真図版136)

本溝は拡張区の北端で検出した。本溝は南-北に走行し、北側は調査区外へと延び、南側はS K - 1133との切り合いがあつて不明である。規模は、幅0.34~0.50mである。断面はV字状で、深さは北壁において0.60mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：暗褐色粘質土、第2層：灰黒色粘土、第3層：暗灰色粘土（黄灰色粘質土ブロック）である。上層での乱れが激しく、弥生時代中期中葉から弥生時代後期後葉までの土器が混在している。本溝の南端部については、遺構の錯綜もあつて不明瞭となるがそのまま浅くなつており、オーバーフローした水をS D - 1104 BやS D - 1122へと排水していた可能性も考えられよう。

S D - 1136 (第138図)

本溝は調査区南側で検出した。位置的にはS D - 1109の北肩にあつて、上面はこれに切られていると解釈したが、同時開口の可能性もある。本溝は幅0.60mで、東端は収束するが西側は調査区外へと延びる。断面は皿状で、深さは0.32mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒灰色粘土、第2層：暗灰色粘土（青灰色シルト混）である。大和第Ⅳ様式の土器が出土した。



第138図 弥生時代中期後葉の遺構 (6) (S = 1/50)

(4) 弥生時代後期初頭の遺構 (第117図、写真図版110)

本調査区では、弥生時代後期初頭の土器が多量に出土している。しかし、本時期単独の遺構は、あまり顕著でない。単独の遺構としては、土坑4基、溝1条である。この他、環濠S D - 1109、区画溝S D - 1101B・1104Bなどは、弥生時代中期後葉の掘削に始まり、弥生時代後期初頭には幾度かの溝浚えをおこなっているようである。

土坑

S K - 1106 (第139図、写真図版136)

本坑は調査区中央の東側で検出した。上面には黒褐色粘質土の落ち込みが広がるが、これが本坑の上面堆積であるのか、別遺構となるのかは判然としない。この落ち込みを南北に分断するX = -159,323アゼから南半部を掘り下げ、本坑の掘形下部を検出した。本坑は下部平面が隅丸方形を呈し、長軸0.50m以上、短軸0.68m以上である。断面は逆台形で、深さは落ち込みの検出面から0.54mを測る。堆積土は、落ち込みの堆積である黒褐色粘質土を除くと、大きく上・下2層に分かれる。上層が黒灰色粘質土、下層の上位が炭灰層、下位が灰色粘土である。このうち、下層の上位にある炭灰層は、東肩に潜っていくような状況が看取できる。また、上層からは大和第V様式の土器が出土し、下層は遺物が少ないが弥生時代中期中葉の土器が主体である。これらのことから、落ち込みから上層までと下層を切り離し、異なる遺構と見なすことも可能である。

S K - 1127 (第139図)

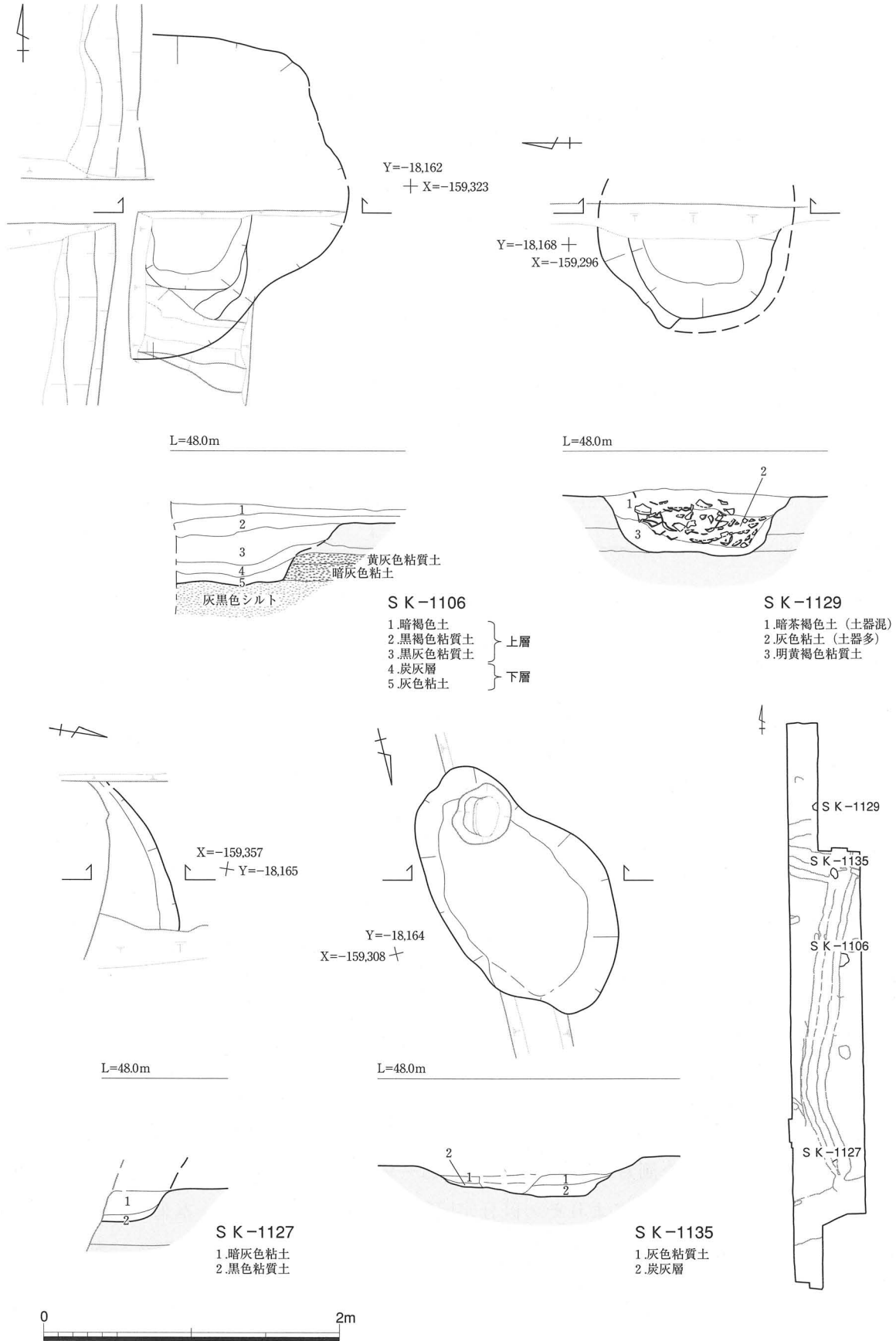
本坑は調査区南半において、S D - 1101BとS D - 1104Bの合流部付近で検出した。合流部という複雑な位置にあったため、その切り合いを確認することなく掘り下げてしまっている。また、南側を古墳時代初頭のS K - 1125に切られるため、その全形は不明である。長軸は1.10m以上である。断面は逆台形で、深さは0.20mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：暗灰色粘土、第2層：黒色粘質土である。大和第V様式の土器がまとまって出土した。大和第IV様式からS D - 1101B・1104Bが機能していたことを考えるならば、大和第V様式における土坑の切り込みというよりは、合流部上面の浅い落ち込みである可能性が高い。

S K - 1129 (第139図、写真図版137)

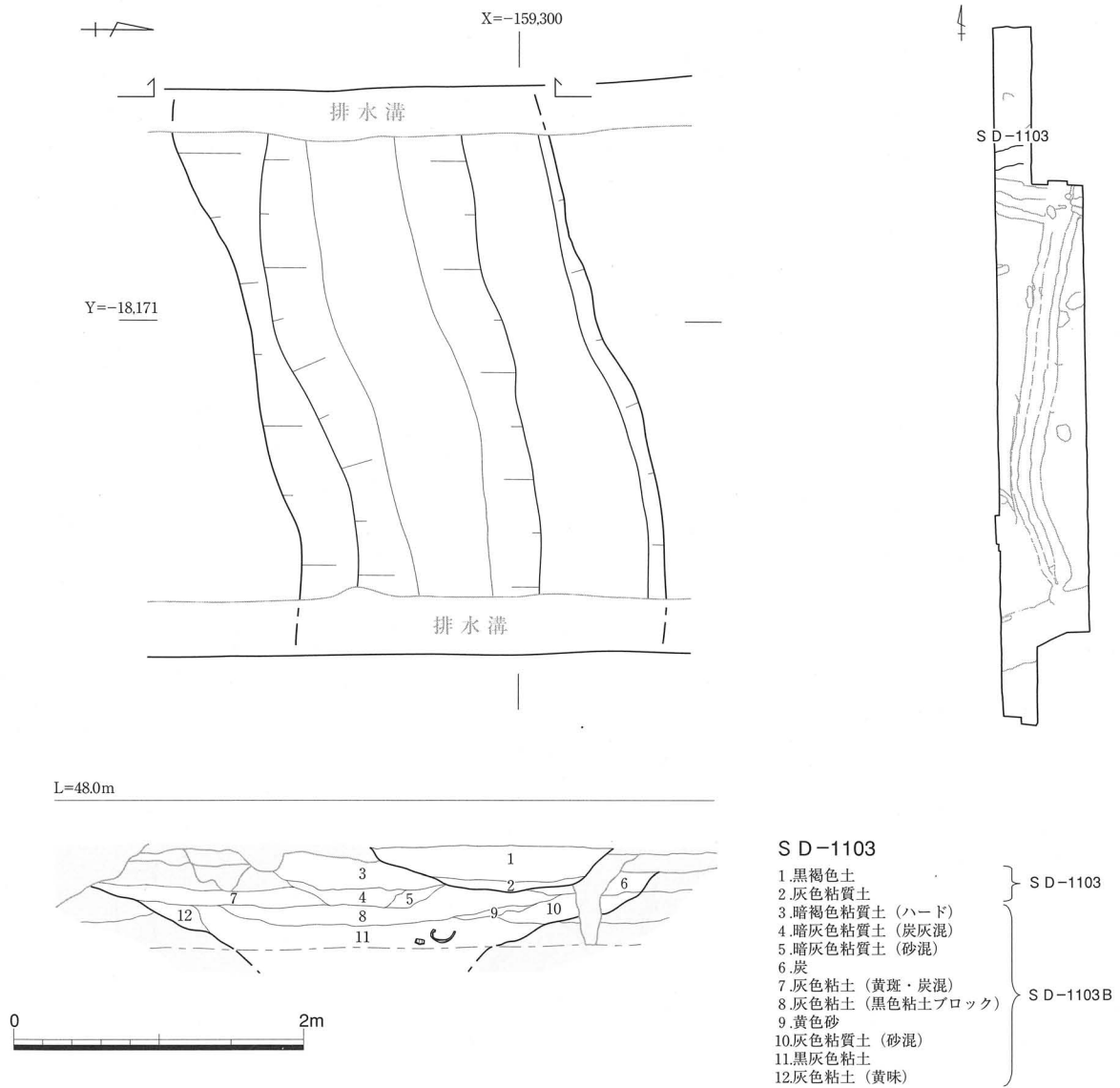
本坑は調査区北側の東端で検出した。その東半は調査区外にある。平面は不整形円形を呈し、径1.28mである。断面は逆台形で、深さは0.42mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：暗茶褐色土、第2層：明黄褐色粘質土である。第1層の下位からは、被熱した大和第V - 1様式の土器片が多量に出土した。本坑の機能は、2次的な被熱による破損土器の廃棄坑と考えられる。

S K - 1135 (第139図、写真図版136)

本坑は拡張区で検出した。平面は不整形円形を呈し、長軸1.88m、短軸1.12mである。断面は逆台形で、深さは0.28mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：灰色粘質土、第3層：炭灰層である。時期は、大和第V様式である。



第139図 弥生時代後期初頭の遺構 (1) (S = 1/40)

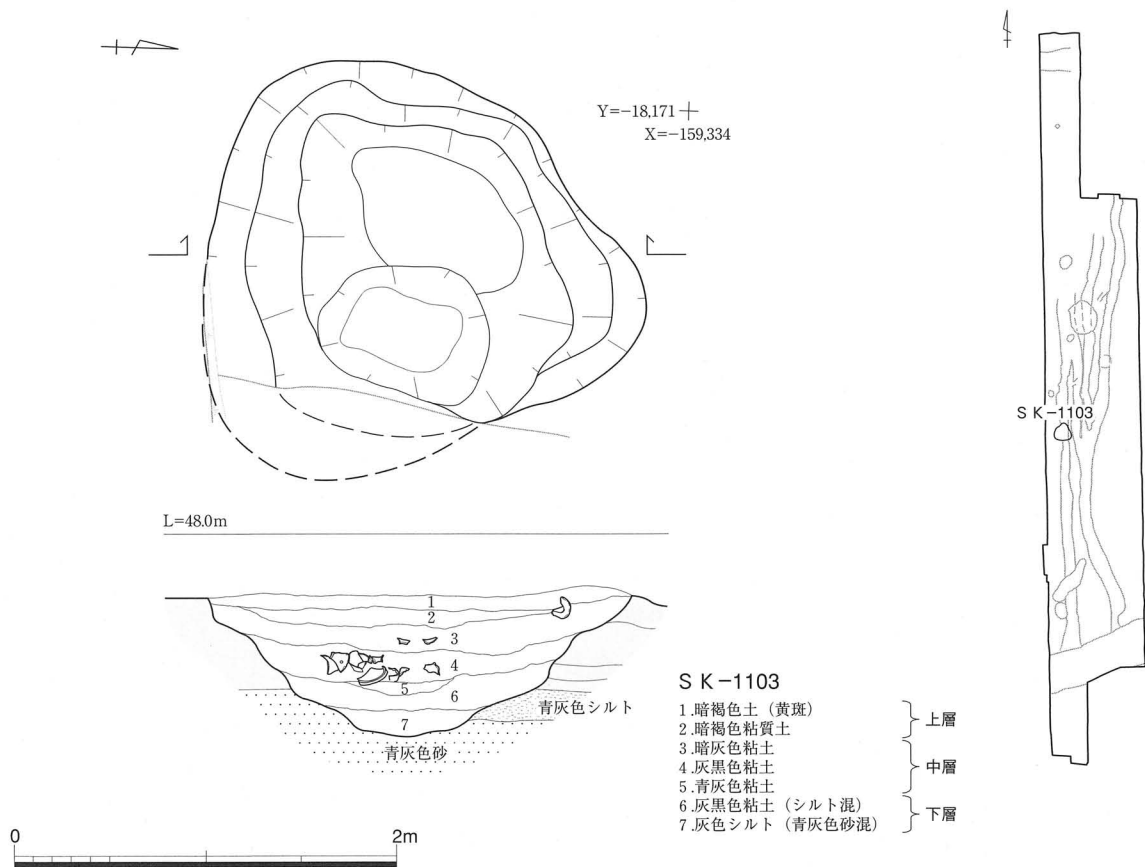


第140図 弥生時代後期初頭の遺構 (2) (S = 1/50)

溝

S D-1103 (第140図、写真図版138)

本溝は調査区北側において検出した。先行する弥生時代中期中葉のS D-1103Bの上面を、再掘削している。本溝は東北東-西南西に走行し、幅は2.30~2.50mである。断面は浅い逆台形で、深さ0.32~0.46mを測る。このうち、北肩は一段のテラスをつけて検出したが、これはベースと堆積土が鉄分の沈着によりその区分が困難であったためであり、本来の形態ではないと考えている。堆積土は2層からなり、第1層：黒褐色土、第2層：灰色粘質土である。上層下位から下層にかけて、多量の大和第V-1様式の土器が出土した。本溝は、その位置と走行方向に若干のずれがあるが、第33次調査区のS D-103に繋がると考えられる。



第141図 弥生時代後期前葉の遺構 (1) (S=1/40)

(5) 弥生時代後期前葉の遺構 (第118図)

本調査区においては、弥生時代後期前葉の遺構は極めて少ない。土坑1基と新たに掘り直された区画溝2条である。ただし、検出した1基の土坑SK-1103は井戸であり、西隣接地の第33次調査区では弥生時代後期前葉の井戸を数基検出している。本調査区において遺構が少ないのは、区画溝にほとんど重なったという、位置的な要因によるものであろう。

土坑

SK-1103 (第141図、写真図版139)

本坑は調査区の中央、SD-1101の西肩に接して検出した。検出面における鉄分の沈着が激しく、SD-1101堆積土との区別がつかず、その上面をSD-1101として掘り下げているが、おそらくSK-1103が切っていたものと考えられる。平面は不整形円形を呈し、径2.3m前後と考えられる。断面は逆台形で、深さ0.74mを測る。底面は、青灰色砂に達する。堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は、褐色系粘質土で鉄分の沈着が激しい。中層は、灰色系粘土である。下層は灰黒色粘土で、シルトや砂が混じる。中層から、大和第VI-2様式の土器がまとまって出土した。機能は、底面の青灰色砂からは湧水があり、やや浅いようであるが井戸と考えられる。

溝

SD-1101・1104 (第136・142図、写真図版140・141)

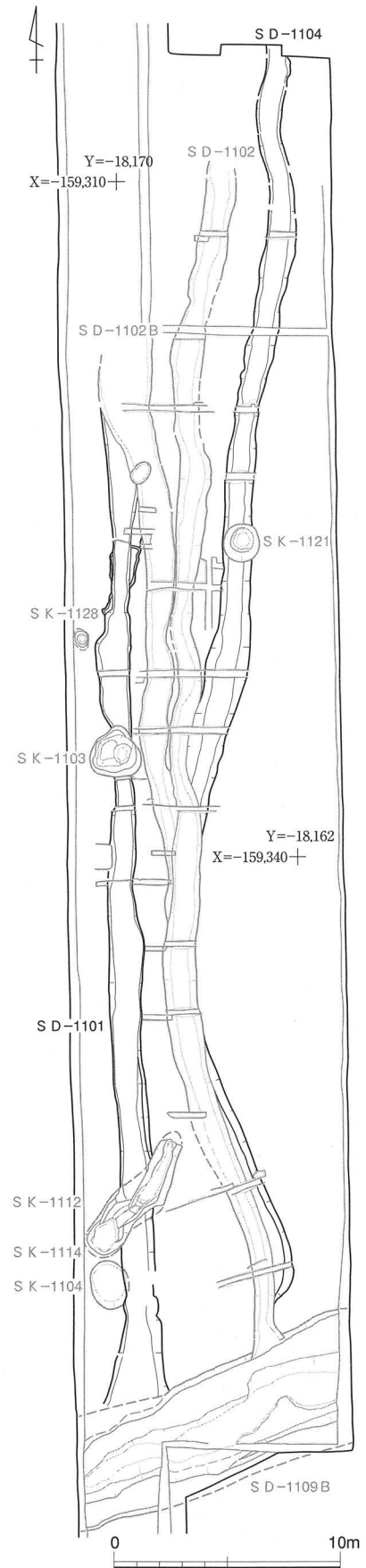
両溝は、先行溝であるSD-1101B・1104Bを再掘削、付け替えたものである。先行溝と対応させ、西側のものをSD-1101、東側のものをSD-1104とする。先行溝と同様に両溝は並行するが、SD-1101の南側は付け替えられており、両者が合流することはない。

SD-1101は、ほぼ南-北に走行する。北端部を再掘削溝SD-1102Bに切られる。先行溝であるSD-1101Bとの関係は、 $X = -159,340\text{m}$ から $X = -159,350\text{m}$ までの約10.0mを再掘削したのみで他は新たに付け替えている。溝幅は1.00~1.40mである。断面は皿状で、深さは0.10~0.20mを測る。堆積土は2層からなるが、検出延長が長く地点によって異なる。大和第Ⅵ-3様式の土器を含むが、同時期の土坑であるSK-1103・1112に切られており、この段階には機能を停止していたと考えられる。

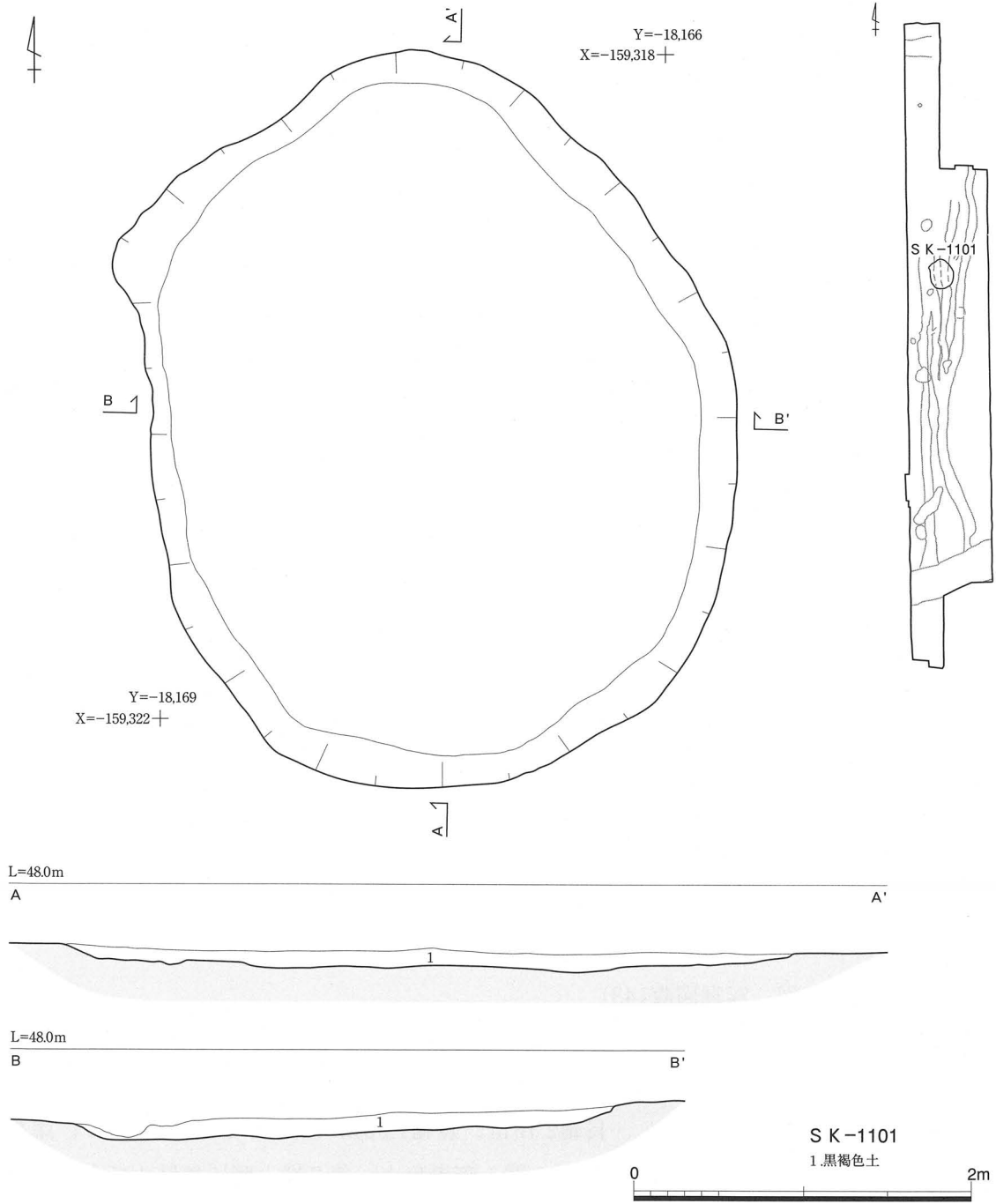
SD-1104は、先行溝SD-1104Bに沿った再掘削溝であるが、 $X = -159,340$ 付近から南側はさらにSD-1102の再掘削を受け堆積土が削平されている。溝幅は1.00~1.40mである。断面は逆台形で、深さは0.30~0.50mである。堆積土は検出延長が長く地点によって異なっているが、上層の暗・黒褐色系粘質土と下層の暗灰色系粘質土である。土器は、大和第Ⅵ-2様式と第Ⅵ-3様式が混じるが、完形品は大和第Ⅵ-2様式である。また、大和第Ⅵ-3様式の井戸SK-1121に切られており、この段階には機能を停止していたと考えられる。碧玉製管玉(A5029)1点、ガラス製管玉?(A5012)1点、銅鐸形土製品(D5008)1点が出土している。

(6) 弥生時代後期後葉の遺構 (第118図)

弥生時代後期後葉の遺構は、井戸などの深いものはともかく、後世の削平を受けていることもあり、浅く不明瞭なものが多い。また、その検出面自体が部分的に弥生時代後期後葉の土器を包含していることもあり、遺構の検出は困難なものであった。



第142図 弥生時代後期前葉の遺構(2)
(S=1/300)

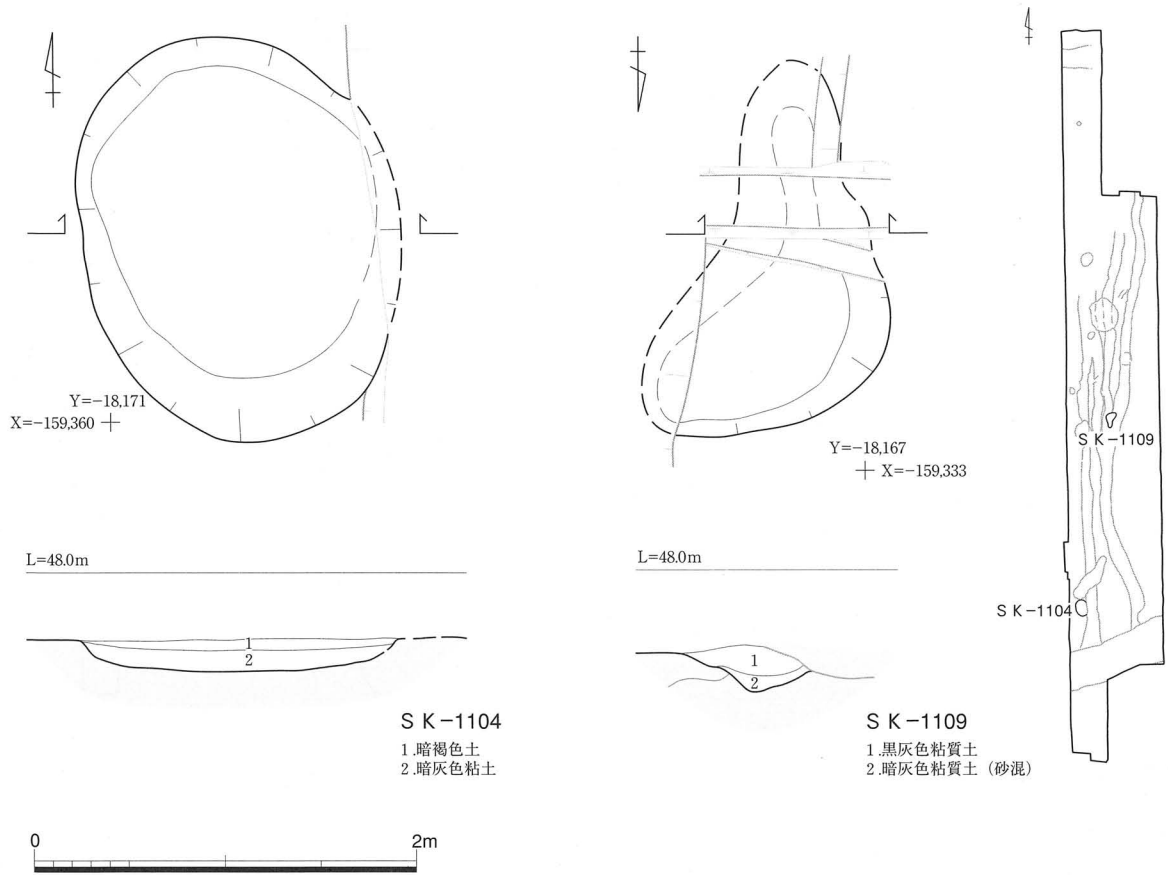


第143図 弥生時代後期後葉の遺構 (1) (S = 1/40)

土坑

SK-1101 (第143図、写真図版142)

本坑は調査区中央のやや北寄りで検出した。その検出面において、遺構輪郭を把握することはできず、集積した土器群によって推測している。平面は不整円形を呈し、長軸4.44m、短軸3.48mである。断面は皿状で、深さは0.20mを測る。堆積土は、黒褐色土の単層である。半・完形を含む土器片が集積していた。時期は、大和第VI-4様式である。



第144図 弥生時代後期後葉の遺構（2）（S = 1/40）

SK-1104（第144図、写真図版143）

本坑は調査区南側の西端で検出した。SD-1101の西肩に接しており、おそらく本坑がその肩を切るものと考えられるが、検出面における鉄分の沈着が激しく、堆積土による判断はできなかった。平面は楕円形を呈し、長軸2.16m、短軸1.66mである。断面は皿状で、深さは0.16mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：暗褐色土、第2層：暗灰色粘土である。時期は、大和第VI-4様式である。機能は不明である。

SK-1109（第144図、写真図版143）

本坑は調査区中央、SD-1102とSD-1104の間で検出した。土層断面の観察からSK-1109は、SD-1104の西肩を切り、SD-1102に西肩を切られていたものと考えられる。検出時には、SK-1109の輪郭を把握できず、先にSD-1104を掘削してしまいその東肩を失った。また、西側についても上面では検出できず、SD-1102としてある程度まで掘り下げて認識した。平面は不整形を呈し、復原長軸2.10m、復原短軸1.00mと考えられる。断面は逆台形で、深さは0.11mを測る。底面は、明黄灰色砂質土に達する。堆積土は2層からなり、第

1層：黒灰色粘質土、第2層：暗灰色粘質土（砂混）である。大和第Ⅵ-3様式の土器が出土した。本坑は、土坑というよりはむしろ、SD-1104への排水小溝である可能性が高い。

SK-1112・1114（第145図、写真図版144・145）

SK-1112とSK-1114は調査区南側の西際で検出した。SK-1112の北端部が、SD-1101を切り込む。SK-1112とSK-1114を併記して記述するのは、その平面形態から異なる2つの遺構が切り合ったと考えられる一方で、その検出状況からは一連のものである可能性も否定できないことによる。

SK-1112の平面は北側に向かってやや弧を描く長楕円形を呈し、長さ4.00m以上、幅1.60m以上である。断面は逆台形で、深さは0.96mを測る。底面のベースは、河川堆積の境にあたり、西側が灰色砂、東側が緑灰色微砂である。堆積土は大きく上・下の2層に分かれ、上層は暗灰色系粘土、下層は植物層を挟んで上位に黒色粘土と下位に暗灰色粘土である。下層上位の黒色粘土中からは、半・完形の大和第Ⅵ-3様式土器が出土した。

SK-1114の平面は不整円形を呈し、直径約1.6mである。断面は上面の開いた円筒状であるが、底面南側は大きく抉れている。深さは0.94mを測る。底面は、ベースの青灰色シルトに達する。堆積土は大きく上・下の2層に分かれ、上層は暗灰色系粘土、下層は上位が黒色粘砂で下位が黒色粘土である。上位の黒色粘砂中からは、半・完形の大和第Ⅵ-3様式土器が出土した。

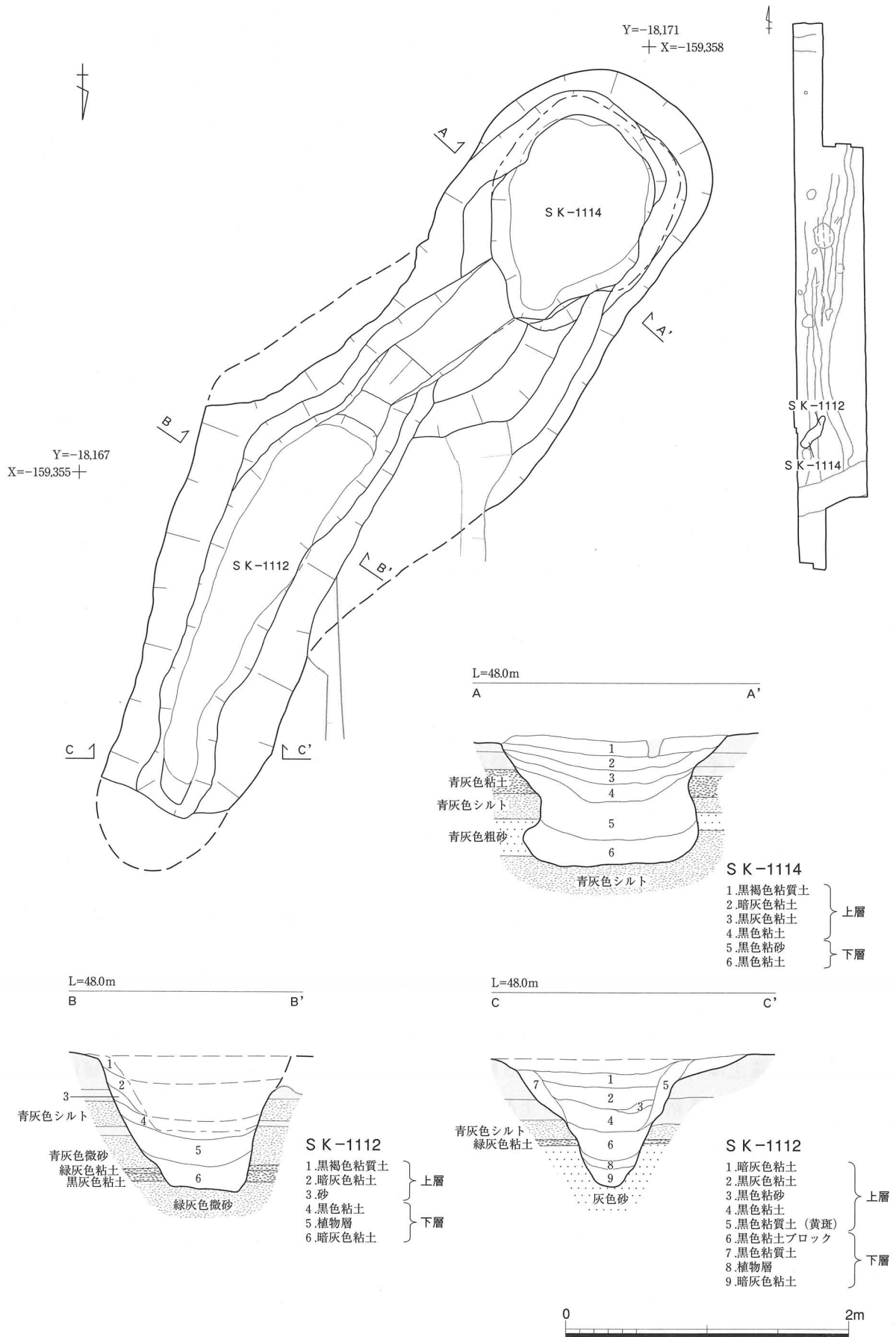
SK-1112からSK-1114への連結部は、平面的にはその幅を徐々に変じながら無理なく連結しているようにみえる。また、底面の高低差においても、SK-1112の底面からわずかに連結部が高まり、それからSK-1114の最深部に向かって落ち込むような状態で違和感はない。また、その上面検出において両者の堆積土の明瞭な境を見いだすことはできなかった。これは土層堆積状況の観察においても、上層からの堆積は同一である。また、下層上位の半・完形土器に、遺構間での途切れは認められなかった。少なくともある段階に両者は同時開口していたとみるべきであろう。なお、SK-1114の最上面から、銅釧片が出土している。

SK-1115（第146図、写真図版146）

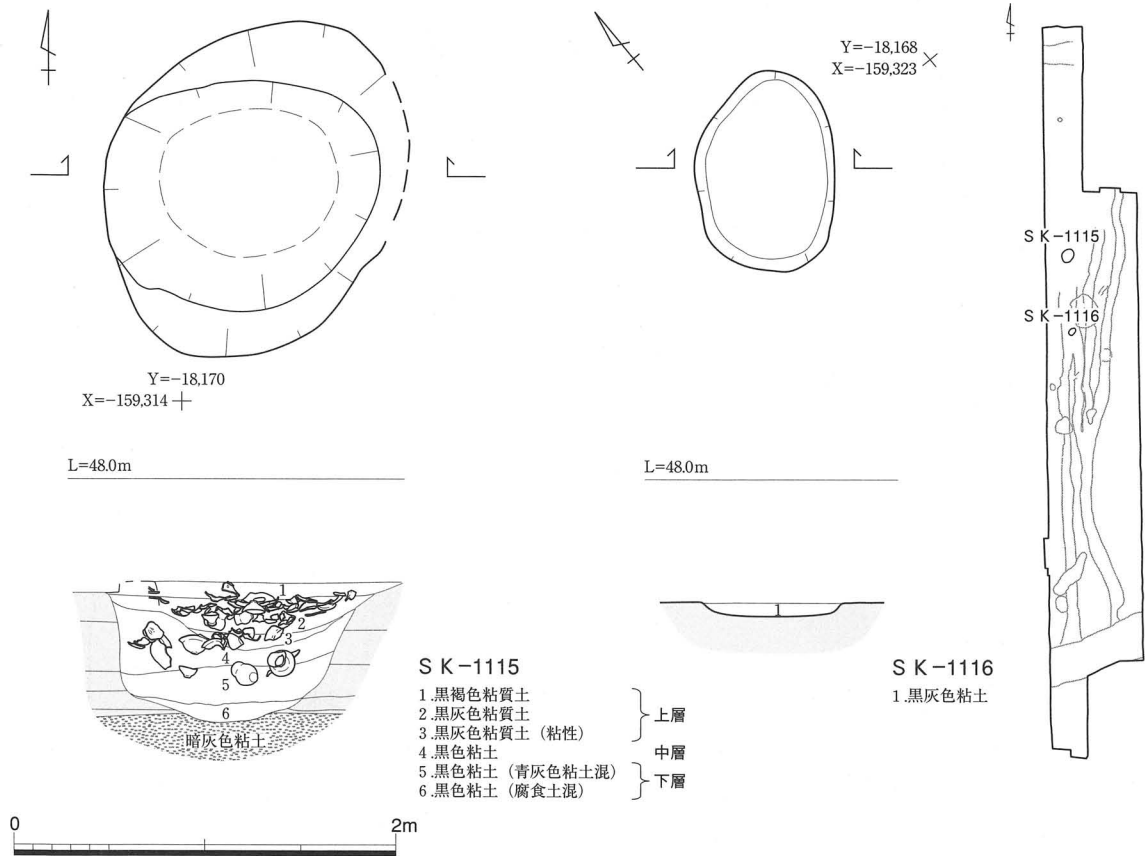
本坑は調査区中央でも北側に寄った、古墳時代初頭のSD-1106の北側で検出した。平面は不整円形を呈し、長軸1.90m、短軸1.50mである。断面は寸詰まりの円筒状で、深さは0.74mを測る。堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は黒色系粘質土で、中層は黒色系粘土、下層は黒色系粘土のブロック土混じりである。上層から中層にかけて大和第Ⅵ-4様式の土器片が多量に出土した。機能は不明である。

SK-1116（第146図、写真図版143）

本坑は調査区中央で、SD-1102Bの底面において検出した。SD-1102Bを掘り下げてから認識したため、その切り合い関係は不明である。平面は楕円形を呈し、長軸1.06m、短軸0.74mである。断面は皿状で、深さは0.09mを測る。堆積土は黒灰色粘土の単層である。時期は大和第Ⅵ-4様式の土器が出土しているが、混入の可能性もある。



第145図 弥生時代後期後葉の遺構(3) (S=1/40)



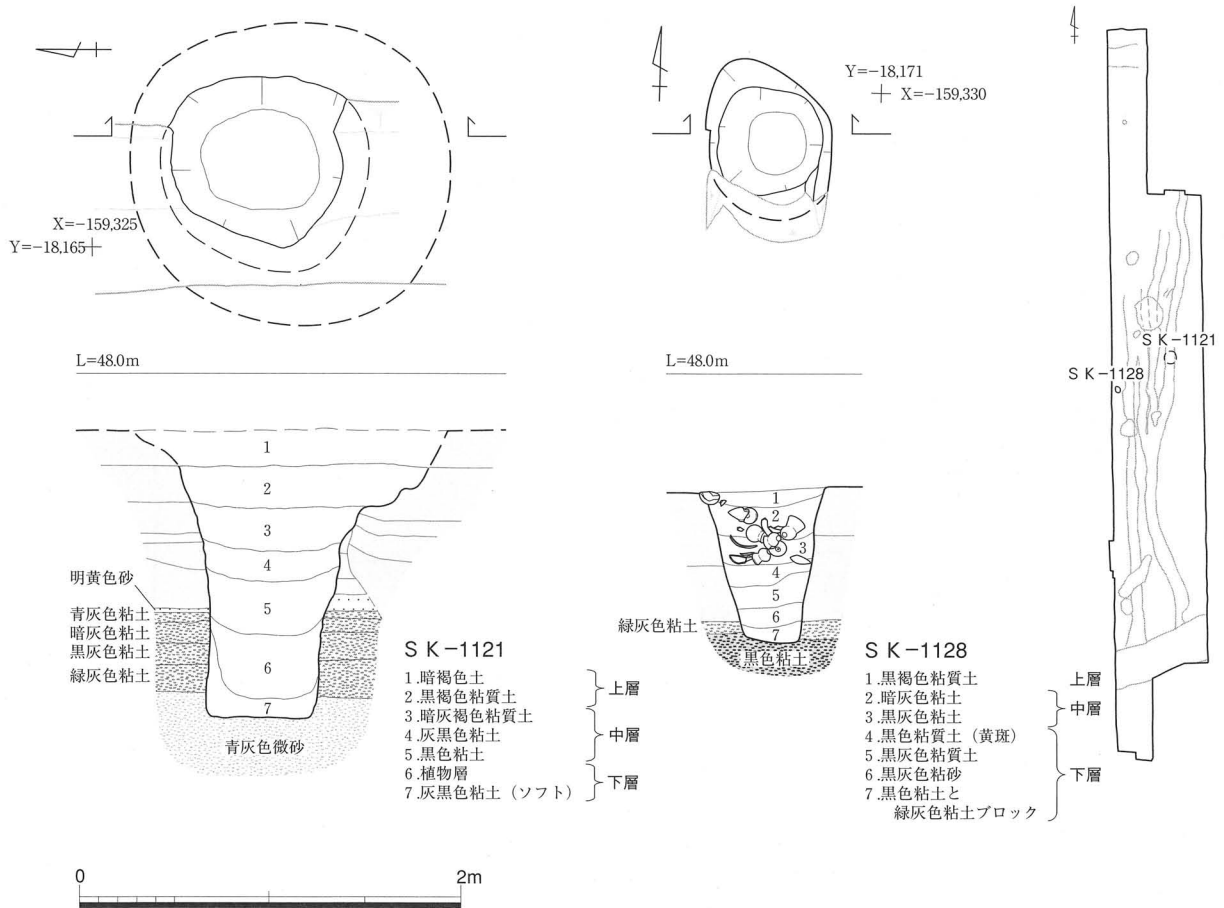
第146図 弥生時代後期後葉の遺構 (4) (S=1/40)

SK-1121 (第147図、写真図版147)

本坑は調査区中央の東側で検出した。弥生時代後期前葉のSD-1104を切る。SD-1104として上面を掘り下げたため、平面は不明であるがほぼ円形を呈すると考えられ、復原径1.64mである。断面は上面の開いた円筒状で、復原の深さは1.50mを測る。底面は、ベースの青灰色微砂に達する。堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は褐色系粘質土、中層は黒色系粘土、下層は黒色系粘土の植物層である。中層から、頸部を打ち欠いた大和第VI-3様式の直口壺が出土している。本坑の機能としては、底面の青灰色微砂は湧水があることから、井戸と考えられる。

SK-1128 (第147図、写真図版147)

本坑は調査区中央の西側で検出した。上層遺構面で検出できず、水路工事のために下層遺構面まで掘り下げた際に、そこで認識した。このため、本坑上層の0.2mほどは、掘りすぎてしまい肩を失っている。これから記述する規模の数値は、下層遺構面の検出状態を示している。平面は不整形円形を呈し、復原長軸1.80m、短軸1.30mである。断面は円筒状で、深さは0.82mを測る。底面は、ベースの黒色粘土に達する。堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は黒褐色粘質土で、中層は黒色系粘土、下層は黒色系粘土のブロック土混じりである。中層から大和第VI-3様式の土器片が多量に出土した。本坑の機能は井戸である。



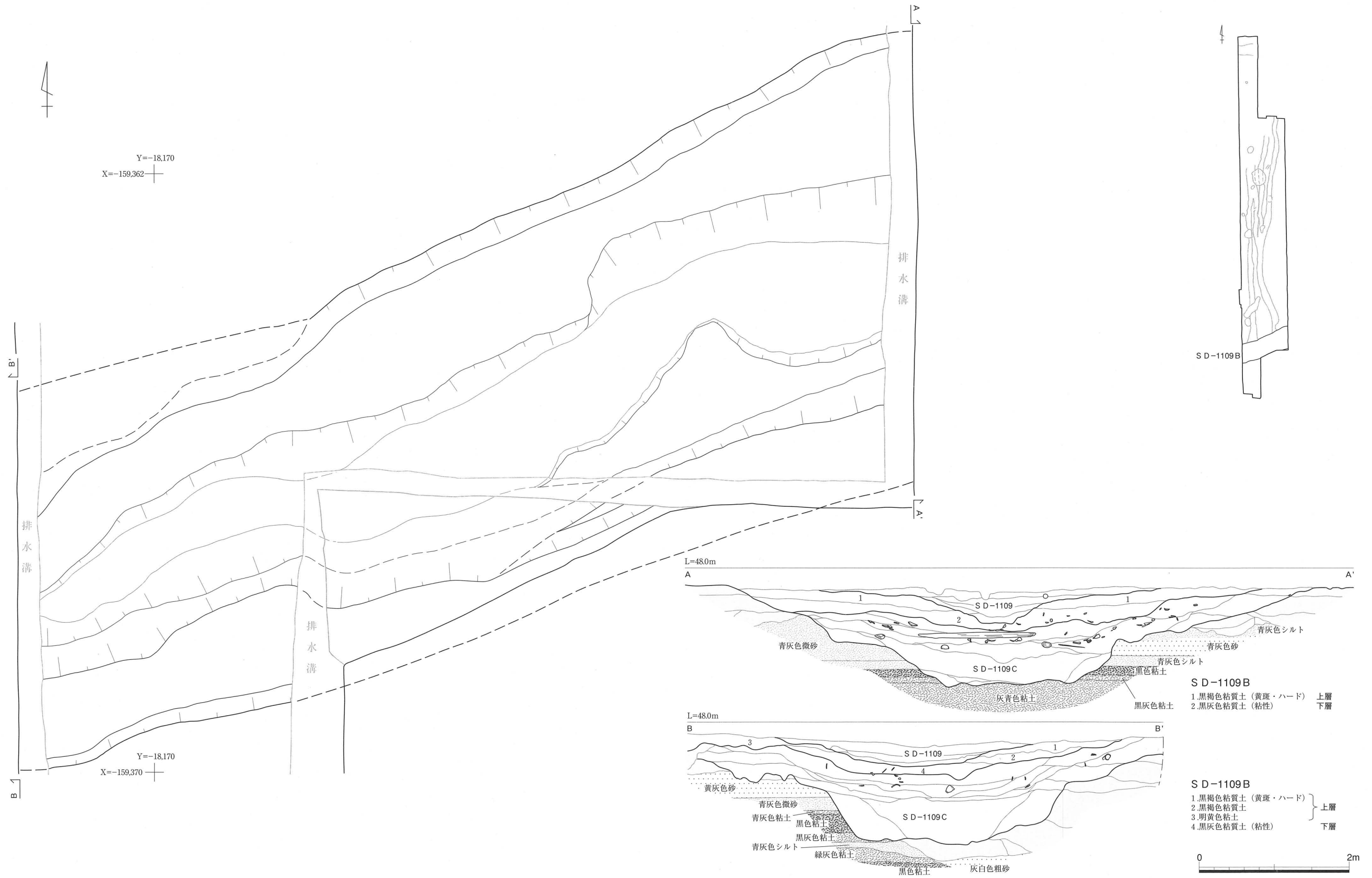
第147図 弥生時代後期後葉の遺構 (5) (S = 1/40)

溝

SD-1109B (第148図、写真図版148~150)

本溝は調査区南側で検出した。SD-1109に沿って、その堆積土の上面から掘り込まれる。本溝は東北東-西南西に走行し、その両端は調査区外に延びている。溝幅は、壁断面の観察から約5.0mに復原することができる。断面は、皿状を呈し、深さは0.40~0.52mである。底面標高は、東壁が47.15m、西壁が47.30mで、東から西に向かって傾斜する。

堆積土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色粘土(黄斑・ハード)、下層は黒灰色粘質土である。下層からは、完形から小片までおびただしい量の和次第VI-3・4様式の土器が出土した(こうした状況は、西接する第33次調査区の同一溝SD-109でも同様である)。特に、北肩に沿っては、堆積土よりも土器片の方が多いような状態であった。おそらくは、集落内部である北肩からの投棄に伴うものであろう。中央部分の土器片が少ないのは、再掘削を受けたことによるものと考えられる。本溝は、和次第VI-3様式に再掘削された環濠と想定される。ただし、断面形態は皿状で両肩は緩やかなものであるから、先行環濠を浚えた程度であろう。なお、鳥形土器(P5217)が出土している。



SD-1109B

SD-1109B
 1. 黒褐色粘質土 (黄斑・ハード) 上層
 2. 黒灰色粘質土 (粘性) 下層

SD-1109B
 1. 黒褐色粘質土 (黄斑・ハード)
 2. 黒褐色粘質土
 3. 明黄色粘土
 4. 黒灰色粘質土 (粘性)



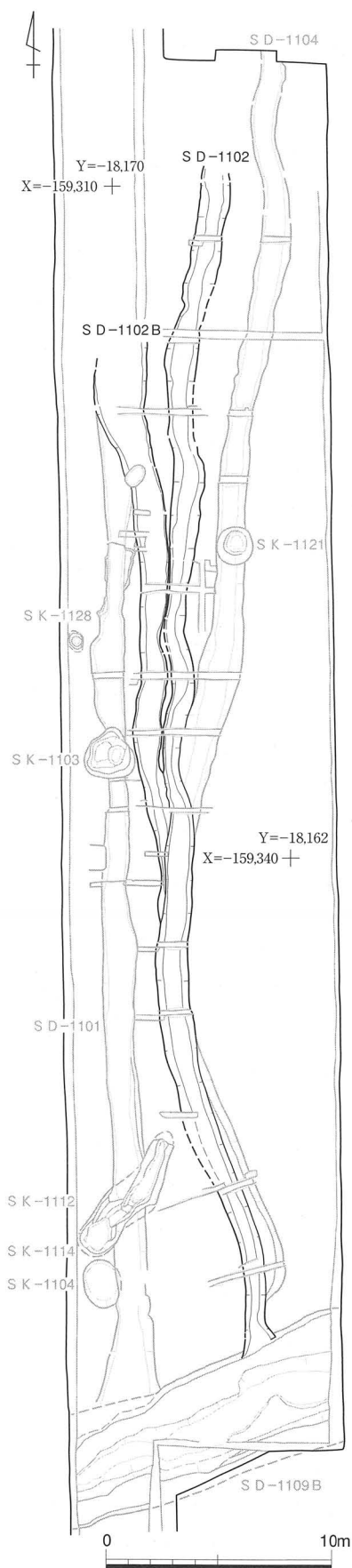
第148図 弥生時代後期後葉の遺構 (6) (S = 1/50)

SD-1102B・1102 (第136・149図、写真図版151)

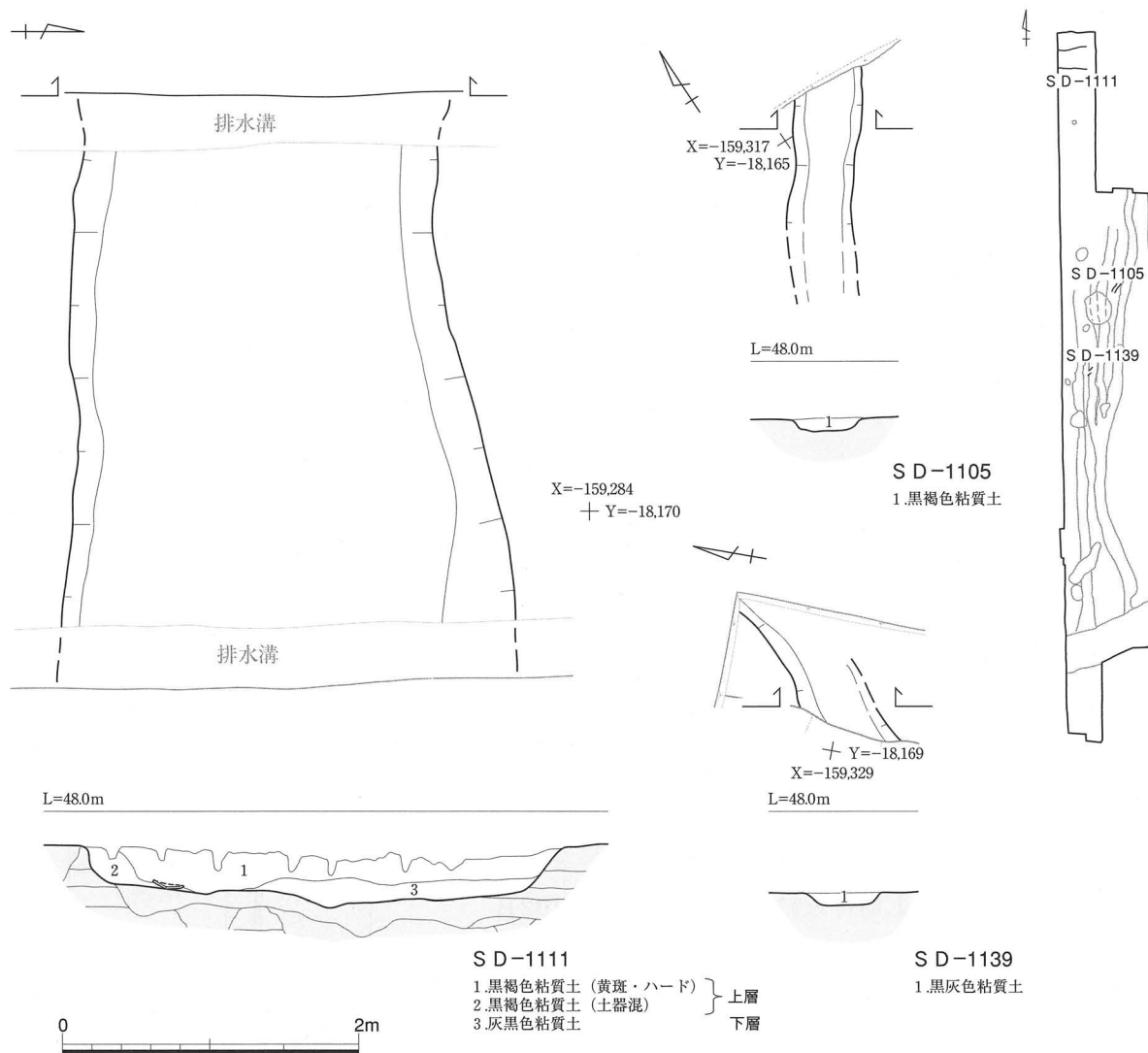
SD-1102B・1102はSD-1101BとSD-1104Bを再掘削し連結させている。その切り合い関係によって、SD-1102BからSD-1102への順を想定するが、両溝ともに出土土器は大和第VI-3様式であり、さほど型式差は認められない。また、本溝に先行すると想定したSD-1101やSD-1104についても、出土土器から部分的に同時開口していた可能性が想定される。ただし、浅いSD-1101はほとんど機能していなかったと考えられる。

SD-1102Bは、北側でSD-1101に合流するが、その先端については古墳時代初頭のSD-1106に切られ不明である。南側は、SD-1101Bの上面を再掘削するが $X = -159,335\text{m}$ 付近において東側に逸脱し、SD-1104へと $X = -159,340\text{m}$ 付近で合流する。しかし、同じく $X = -159,340\text{m}$ 付近においてより新しく掘削されたSD-1102が合流するため、これより南は不明である。SD-1102BとSD-1102の関係については、SD-1101Bの上面付近において、SD-1102Bの東肩をSD-1102が切っていることを確認している。なお、SD-1102Bの堆積土上面には、弥生時代後期後葉のSK-1116が掘り込まれている。本溝の幅は、 $1.00\sim 1.44\text{m}$ である。断面は逆台形形で、深さは $0.24\sim 0.38\text{m}$ を測る。堆積土は2～3層からなり、第1層：暗褐色土、第2層：暗褐色粘質土、第3層：黒色粘質土である。銅鏃(M5406・5410)2点が出土している。

SD-1102は、北側ではSD-1101Bの上面を再掘削するが、 $X = -159,330\text{m}$ 付近から東側へと付け替えられ、 $X = -159,340\text{m}$ 付近においてSD-1104に合流する。この際、SD-1102はSD-1102Bを切る。本溝の幅は、 1.40m である。断面は逆台形形で、深さは $0.20\sim 0.30\text{m}$ を測る。堆積土は2～4層からなり、第1層：暗褐色粘質土、第2層：黒褐色土、第3層：黒灰色粘質土、第4層：黒色粘質土である。ガラス製極小玉(A5010・5011)2点が出土している。



第149図 弥生時代後期後葉の遺構(7)(S=1/300)



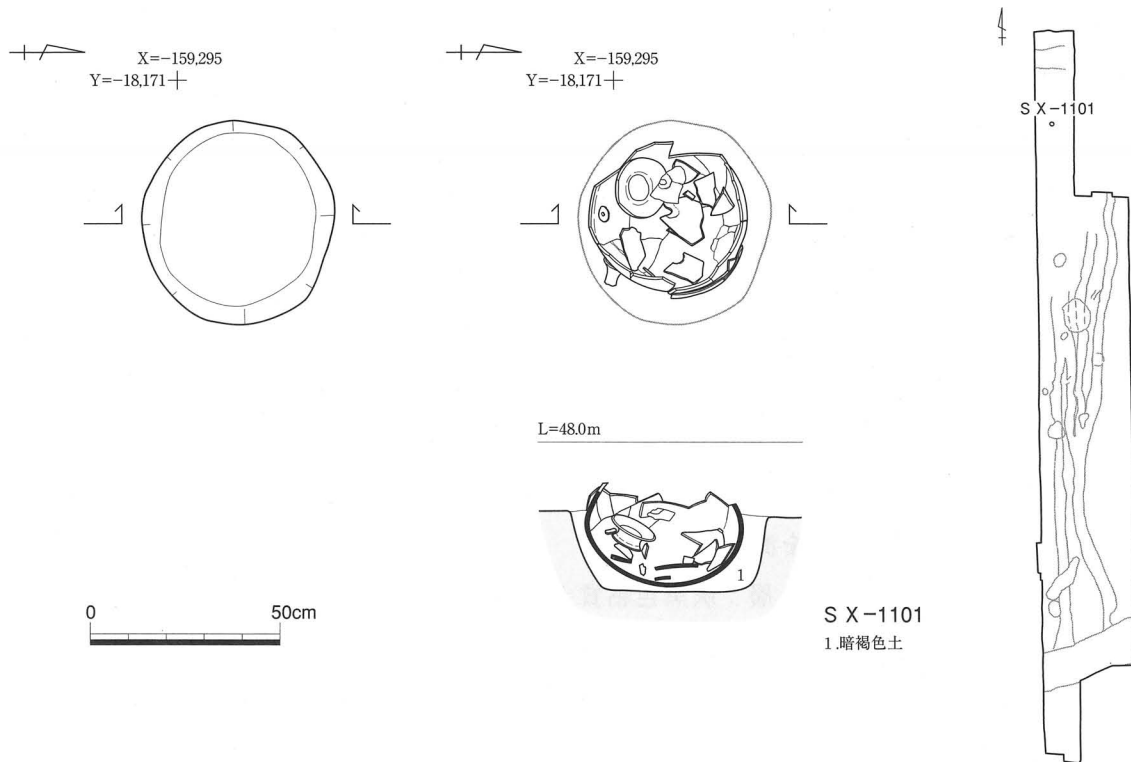
第150図 弥生時代後期後葉の遺構 (8) (S = 1/50)

S D-1105 (第150図)

本溝は調査区中央の北寄り、S D-1102とS D-1104の間に挟まれて検出した。本溝は北東-南西に走行するが、その両端については不明瞭である。S D-1102とS D-1104を繋いでいたのであろうか。規模は、確認し得た長さが1.20m、幅は0.46mである。断面は皿状で、深さは0.08~0.13mを測る。堆積土は黒褐色粘質土の単層である。上面から大和第VI-3様式の土器が並んで出土した。

S D-1111 (第150図)

本溝は調査区北端で検出した。本溝はほぼ東-西に走行し、西側は第33次調査区のS D-1111に繋がる。規模は、本調査区での長さは4.0mであるが、第33次までを含めると約8.0m、幅は2.60~3.20mである。断面は逆台形形で、深さは0.40mである。堆積土は上・下2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は灰黒色粘質土である。時期は、大和第VI-3様式である。



第151図 弥生時代後期後葉の遺構（9）（S = 1/20）

S D - 1139（第150図）

本溝は調査区中央で、S D - 1102とS D - 1104の間に挟まれて検出した。本溝は北東 - 南西に走行するが、その両端は不明瞭で、S D - 1102とS D - 1104を繋いでいた可能性もある。規模は、確認し得た長さが0.50m、幅は0.50mである。断面は皿状で、深さは0.08~0.11mを測る。堆積土は黒灰色粘質土の単層である。時期は、大和第VI - 3様式である。

その他

S X - 1101（第151図、写真図版152）

本遺構は調査区北側で検出した。土坑内に、口頸部を打ち欠いた大和第VI - 3様式の大型壺を据えている。平面は円形を呈し、径0.54mである。断面は方形で、検出面からの深さは0.27mを測る。ただし、検出時において壺胴部上半は、割れてその内部に落ち込んでおり、壺を復原すると本来の土坑の深さは0.50mを超えるものと考えられる。大型壺は、口頸部を打ち欠き、胴部下半を穿孔している。底部を下に正位置の状態です坑内に据えられている。大型壺下半と土坑底面との隙間には、高坏脚部を咬ませており、据え付け位置の安定を計ったと考えられる。また、大型壺と土坑の上部の隙間には、高坏坏部が口縁部を下にして滑り込んでおり、本来は打ち欠いた頸部を覆っていたのであろう。大型壺の内部には、頸部のみの中型広口壺が、口縁部側を逆さにして置かれていた。これらの状況より、本遺構は土器棺墓と考えられる。

(7) 古墳時代初頭の遺構 (第118図)

本調査区で検出した古墳時代初頭の遺構は、土坑2基、溝2条である。このうち、SK-1125は確実な井戸であり、周辺での居住が想定される。溝は、SD-1109が弥生時代中期後葉からの集落南端部を画してきた環濠の再掘削溝であり、SD-1106は地形が北側へ傾斜するその落ち際に掘削されている。SD-1109とSD-1106は、微高地の南北両端を画していたと考えられる。この両溝に挟まれた部分が、古墳時代初頭の居住域だったのであろう。

土坑

SK-1123 (第152図、写真図版153)

本坑は調査区の中央でも北側に寄った、古墳時代初頭のSD-1106の北側で検出した。検出面での土層の濁りから北半部を掘り上げたが、これは下層土坑SK-1134の堆積土であり、北肩を掘削してしまう結果となった。平面は楕円形を呈し、長軸2.20m、短軸1.38mである。断面は皿状で、深さは0.36mを測る。

堆積土は3層からなり、第1層：灰黒色粘質土、第2層：暗灰褐色粘質土、第3層：暗灰色粘土である。このうち、布留0式土器が出土したのは第1層のみであり、第2・3層については下層土坑の堆積となる可能性もある。本坑の性格としては、人為的な土坑というよりはくぼ地に堆積した落ち込みのようなものと考えられる。

SK-1125 (第152図、写真図版153)

本坑は調査区の南側で検出した。位置的には、SD-1109の北側でSD-1101とSD-1104の合流部を切る。合流部には弥生時代後期初頭のSK-1127もあり、その検出にあたっては上層をかなり掘り下げた段階において認識している。平面は楕円形を呈し、復原長軸1.66m、復原短軸1.20mである。断面は円筒状で、復原の深さは1.50mを測る。底面は標高46.12mで、ベースの灰色粘土(植物混)に達し、湧水がある。

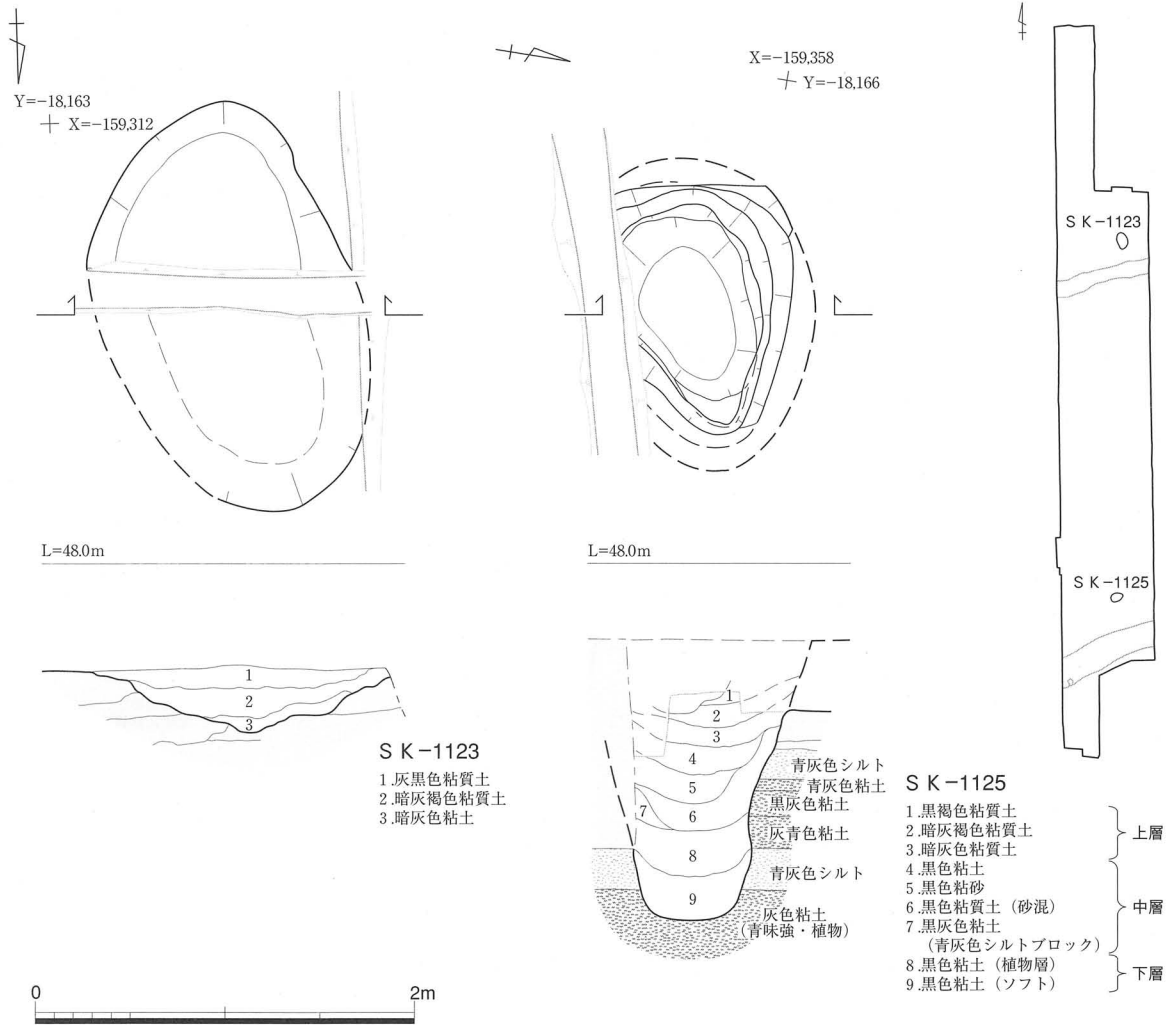
堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれる。このうち、上層については、その大半を掘り下げてから本坑を認識しているため情報は少ないが、焼土塊を含んでいた。中層は、黒色系の粘質土・粘砂であるが、周囲の崩落によるベース層を含んでいる。下層は黒色系粘土である。下層から、布留0式の甕片が出土した。本坑の機能は井戸と考えられる。

溝

SD-1109 (第154図、写真図版153・154)

本溝は調査区南側で検出した。弥生時代後期後葉のSD-1109Bに沿って、その堆積土の上面から掘り込まれている。本溝は東北東-西南西に走行し、その両端は調査区外に延びている。溝幅は、検出面において1.20mであるが、これは本来の遺構検出面を0.1mほど削り過ぎたことによるもので、壁断面の観察からは3.60mに復原することができる。断面は、東壁側で皿状、西壁側で逆台形となり、深さは0.30~0.40mである。底面標高は、東壁が47.42m、西壁が47.25mで、東から西に向かって傾斜する。

堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は黒褐色粘土(茶斑)、中層は灰色粘土、



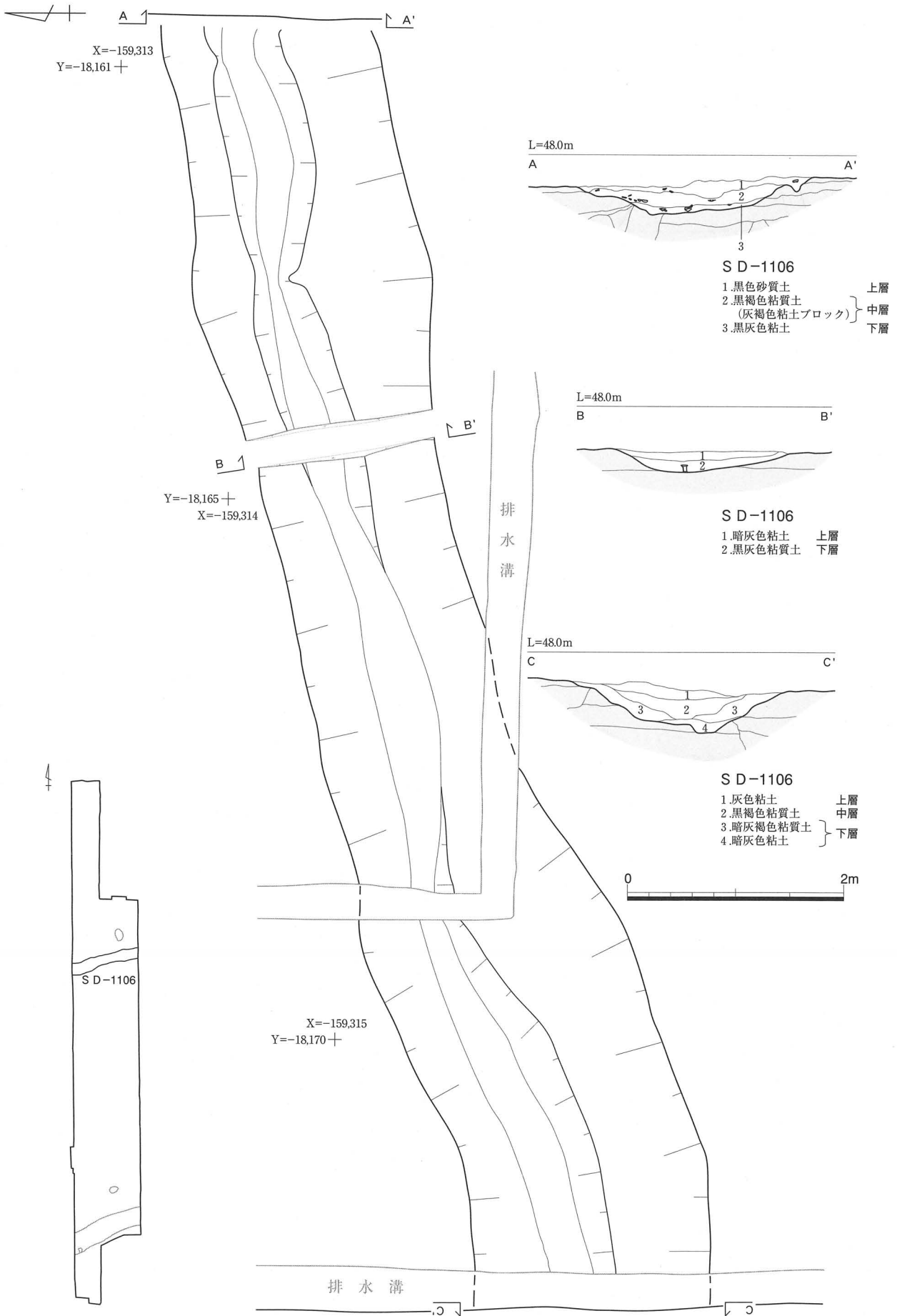
第152図 古墳時代初頭の遺構 (1) (S = 1/40)

下層は東側が黒色砂、西側が灰黒色粘土である。また、西側の最上層には褐灰色粘質土が堆積するが、これはSD-1106の上層に堆積した暗灰色粘質土と同じもので、古墳時代の堆積層であろう。下層からは、多数の弥生時代後期後葉土器に混じって布留0式土器が出土する。特筆すべき遺物として、北肩から出土した銅鐸形土製品 (D5007) がある。本溝は、集落南側を画した環濠を、古墳時代初頭に再掘削したものであろう。

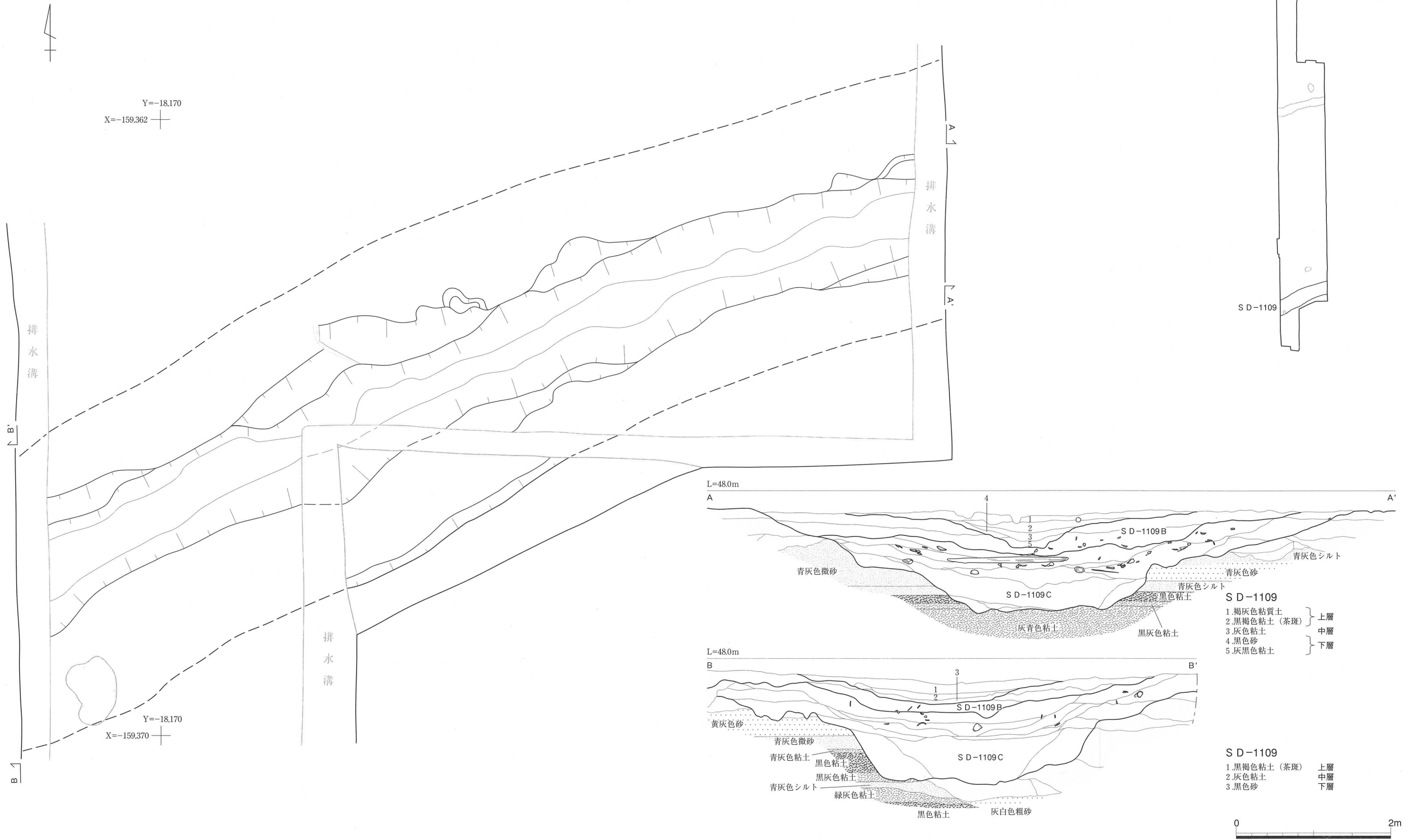
SD-1106 (第153図、写真図版154)

本溝は調査区中央の北側で検出した。本溝は東北東-西南西に走行し、その両端は調査区外に延びている。規模は、幅1.60~2.20mである。断面は逆台形で、深さ0.31~0.46mを測る。底面標高は、東壁が47.45m、西壁が47.26mで、東から西に向かって傾斜する。

堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は暗灰色粘土、中層は黒灰色系粘質土、下層は黒色系粘土である。上層からは、布留0式土器が多量に出土した。この上層の暗灰色粘土は、SD-1109の上層 (古墳時代初頭) にも同様に堆積しており、本調査区周辺では、古墳時代の堆積土を示すものと考えられる。



第153図 古墳時代初頭の遺構 (2) (S = 1/50)



第154図 古墳時代初頭の遺構 (3) (S = 1/50)

5. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後葉から弥生時代後期初頭にかけて南地区微高地の西側を区画したと考えられる2条の並行する溝を検出したことは特筆される。両溝は、ほぼ同時期に掘削されたと考えられる環濠のSD-1109に連結しており、そこに計画的な配置が想定される。唐古・鍵弥生集落の内部構造・変遷を考えていくうえで、重要な情報を得た。

地形

本調査区の南端を、南西から北東にかけて弥生時代前期の河跡であるSR-1201が斜行していることが明らかとなった。SR-1201以外に無遺物の砂層も本調査区の南側で確認しており、遺物を含んだSR-1201が最終堆積になると考えられる。本調査区の微高地は、このSR-1201によって形成された自然堤防の北側のものである。この微高地は狭く、X=-159,320m付近では北側へと落ち込んでおり、SR-1201に沿った50mほどの高まりであったと想定される。

遺構

弥生時代前期～中期前葉 唐古・鍵遺跡は、これまで弥生時代前期には南・北・西の3地区に居住域が分かれていたと想定されている。北・西地区からは古い前期弥生土器が出土し、これらの地には比較的古くから集落が形成され始めたことが判明していた。これに対し、古い前期弥生土器が出土しない南地区は、弥生時代中期初頭からの形成が始まったのではないかと考えられてきた。今回の調査によって、弥生時代前期の南地区では中央をSR-1201が流れていたと判明した。SR-1201の埋没は弥生時代前期後葉であり、微妙な差で弥生時代中期初頭の環濠であるSD-1110の掘削が始まる。従来想定通り、南地区の集落形成は弥生時代中期初頭に始まるのであろう。

弥生時代中期中葉 弥生時代中期中葉の状況については、データが少なく不明な点が多い。ただし、第33次調査において、弥生時代中期中葉の環濠と考えられたSD-1108は、本調査区において収束しているようである。弥生時代中期初頭に掘削された環濠SD-1110は、弥生時代中期前葉で埋没している。とすれば、南地区には弥生時代中期中葉に環濠がなく、外部に開かれた場所があったということになる。この点については、調査区のさらに南外側をめぐる環濠を想定するか、やはり南側の入り口として環濠が切れていたかを検討する必要がある。今後の検討課題である。

特筆される遺構は、集水施設SK-1130と井戸SK-1137である。SK-1130は、木製臼と大型「芝形甕」、大型受口短頸壺を組み合わせていた。SK-1137は、深さが検出面から約3.0mあり、唐古・鍵遺跡で検出されてきた井戸のなかで最も深いもののひとつといえよう。その上層下部で検出された粉層は厚さ0.80mを測るが、これは土圧で圧縮されているのであるから、その量たるやかなりのものとなる。これと同様な粉層をもった井戸が、西隣の第33次調査区で検出されたSK-111である。SK-111の粉層上面には、木製戈が廃棄されていた。

両井戸とも規模がほぼ同じで、時期的にも弥生時代中期中葉と同じである。両者ともムラの共同井戸であり、埋没後には祭祀遺物の廃棄坑として使用されていたのであろう。

弥生時代中期後葉～後期初頭 本調査区あるいは南地区の状況が一変するのは、弥生時代中期後葉である。環濠SD-1109Cと区画溝SD-1101B・1104Bが計画的に掘削されることに始まる。SD-1101B・1104Bは弥生時代中期後葉以降も再掘削を繰り返し、弥生時代後期後葉まで継続している。このSD-1101B・1104Bは、その東側にあると考えられる良好な微高地を囲んでいたようである。微高地には南地区の中枢部があったと考えられ、この2条の溝SD-1101B・1104Bが西縁辺部との境であった可能性は高い。西縁辺部にあたる第33次調査区では、たくさんの遺構が検出され集住度の高さを示している。区画溝の東側にある微高地は遺構が希薄であり、集住度の高い縁辺部とは一線を画しているのであろう。また、南地区では弥生時代中期後葉～後期初頭には青銅器生産をおこなっているが、その場所は今回の調査区の北東側にあたる。微高地の一段下がった北側にあつて、2条の大溝で区画されている。したがって、弥生時代中期後葉～後期初頭の南地区は、中枢となる微高地を取り囲んで、北側には青銅器鑄造工房、西側には一般居住域という、内部構造の分化が想定されるのである。

弥生時代後期前葉 本調査区において、この時期の遺構は少ない。しかし、西隣接地の第33次調査では、数基の井戸を検出しており付近に生活痕が認められないわけではない。区画溝は、前段階と同様SD-1101・1104の2条並走するが、SD-1101が直線的に付け替えられSD-1104とは合流しない。

弥生時代後期後葉 不明瞭な土坑や溝も多いが、SK-1115・1121・1128は確実な井戸である。これらは、埋没した区画溝SD-1101・1104の堆積土を切って掘り込まれる。この段階には区画溝はSD-1102の1条となっており、ほとんど機能を停止していたと考えられる。環濠SD-1109Bには、多量の土器が廃棄されている。また、調査区北側では、土器棺墓と考えられるSX-1101を検出している。

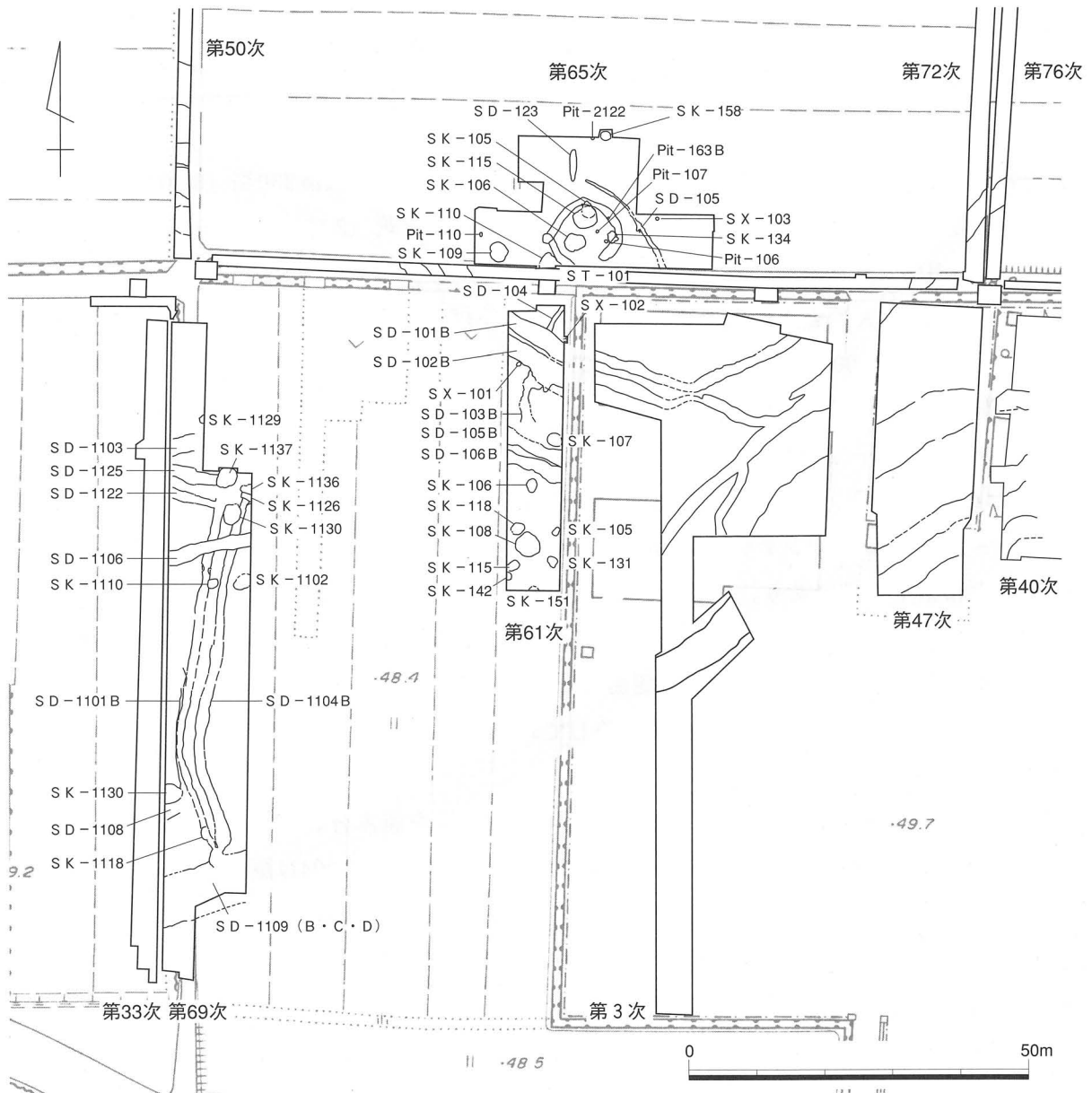
古墳時代初頭 井戸SK-1125とともに、居住域となる微高地の南北両端を画したと考えられるSD-1106・1109を検出している。SD-1109は、弥生時代中期後葉からの環濠を再掘削している。集落の南端とする意識は、古墳時代初頭まで継続するのであろうか。

第5節 南地区の出土遺物

1. 土器

(1) 第61次調査

第61次調査区では調査終了時において、遺物コンテナ（巾340×奥540×高150^{mm}）総数は約500箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は377箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、2割5分減である。また、調査面積約333^mであるから、1^mあたり1.13箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ377箱の内訳は、遺物包含層・中



第155図 南地区の主要遺構 (S=1/1,000)

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1001 図版307-1	水差形 土器	61次	SK-142	第4層	器高 13.2 口径 5.7 胴径 14.0	(外) 胴部は下半を縦位ミガキ、その後胴部中央 下位に横位ミガキ。頸部に櫛描き簾状文(12 本/1.1cm)3帯。胴部は3方に櫛描きによる縦 型流水文を配し、余白に方画文を充填。 (内) 胴部下半は横位ハケ。	底部磨減 完形品	Ⅲ-2
P1002 図版307-2	高坏	61次	SD-104	第2-b層	器高 19.3 口径 23.5 底径 14.2	(外) 口縁部に凹線文2条と脚裾部に凹線3条。 透孔4。 (内) 坏部磨減、脚上部しぼり痕、脚裾部横位ケ ズリ。	完形品(一部欠)	Ⅳ-2
P1003 図版307-3	台付鉢	61次	SX-101	第1層	口径 22.8 底径 12.5	(外) 口縁部凹線文4条、鉢部下半ケズリ後、粗い ミガキ。脚裾部に凹線文3条。透孔5。 (内) 鉢部上半横位ミガキ、下半縦位ミガキ。脚部 ナデ。	鉢部は土器棺蓋の 可能性	Ⅳ-1
P1004 図版307-4	短頸壺	61次	SX-101	第1層	胴径 30.0 底径 8.2	(外) 頸部縦位ハケ。頸胴部界に列点文。胴部上 半は左上がりタタキ後、縦位ハケ。胴下半以 下は縦位ケズリ。 (内) ナデ。	土器棺 最大胴部付近に後刻の 上向三叉の記号文 完形品(口縁部欠)	Ⅳ-1
P1005 図版307-5	広口壺	61次	SX-102	第4層	胴径 31.3 底径 6.7	(外) 胴部上半に櫛描き直線文(9本/1.1cm)を配 した後、直線文と波状文を交互に3回施文。 その後、胴部下半を縦位ミガキ、最大胴部の み横位ミガキ。 (内) 胴部上半は右上がりハケ。下半は縦位ハケ。	最大胴部よりやや下に 径0.3cmの穿孔 P1005(蓋)は土器棺 P1006と合せ口になる 頸部を打ち欠く	Ⅲ-4
P1006 図版307-6	甕	61次	SX-102	第1層	器高 33.7 口径 23.3 胴径 29.0 底径 7.5	(外) 口縁部上方に突出する。胴部上半縦位ハケ、 胴部下半ハケ後、縦位ケズリ。底部裏面ナデ。 (内) 胴部上半ナデ、指頭圧。胴部中央よりやや 下に爪痕集中。	土器棺蓋P1005と合せ 口となる 半完形品	Ⅳ-1

世素掘小溝91箱(24.1%)、弥生時代土坑33箱(8.8%)、弥生時代溝230箱(61.0%)、柱穴群13箱(3.4%)、弥生時代土器棺墓2箱(0.5%)、落ち込み8箱(2.1%)である。

SK-142出土土器(第156図、写真図版307)

SK-142は、大半を調査区西排水溝として掘り下げてしまっているが、底面ちかくにおいて水差形土器(P1001)が出土した。P1001は、算盤玉形の胴部に、短く直立した口頸部をもつ。胴部には、櫛描きで工字となる流水文を3単位施し、隙間には楕円文を配している。その特徴から大和第Ⅲ-2様式に位置づけられる。

SD-104出土土器(第156図、写真図版307)

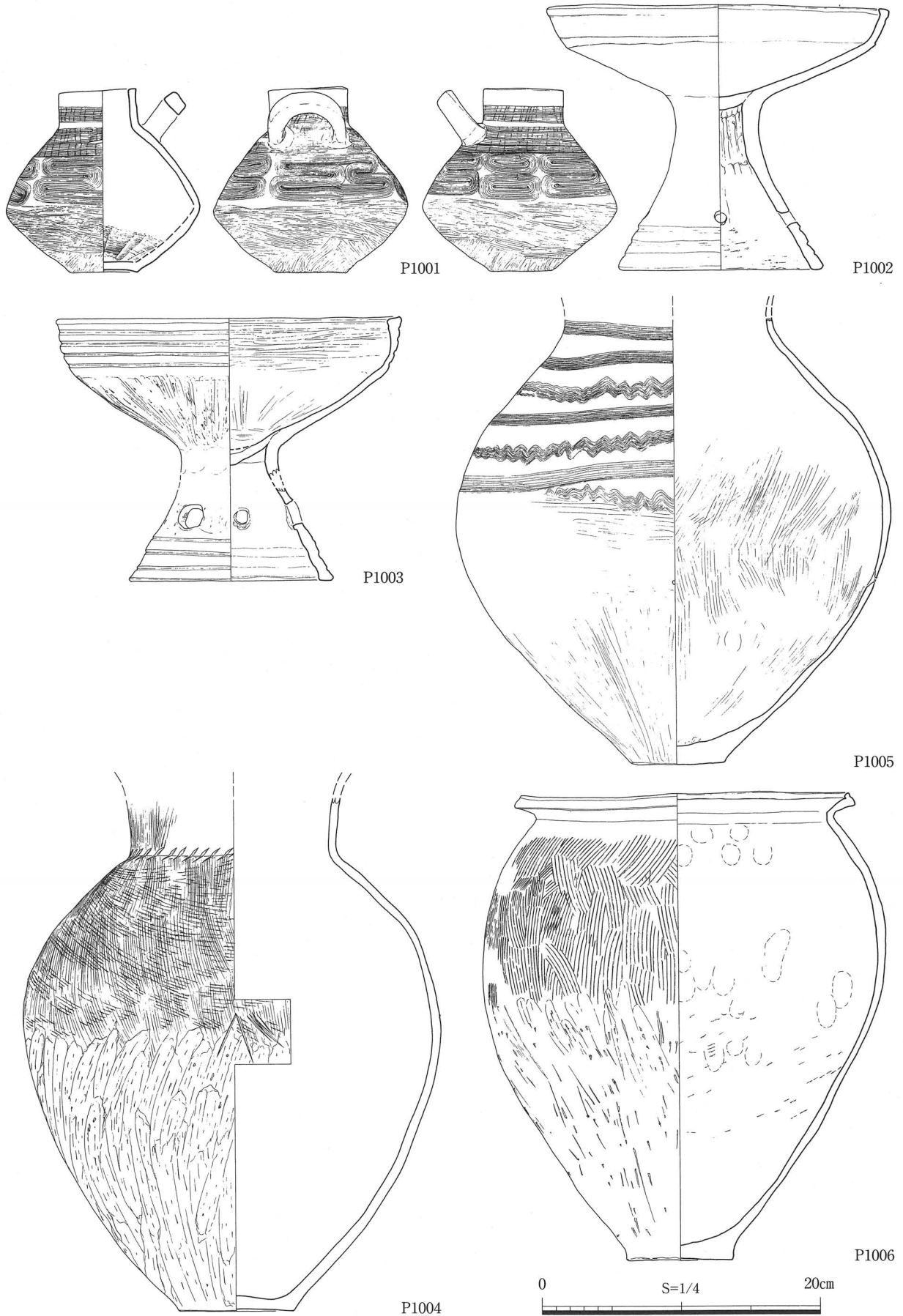
SD-104からは、コンテナ2箱(0.5%)の土器が出土している。本溝から出土する土器の多くは大和第Ⅴ様式であり、その中には送風管片や広片口鉢片(P5202)が含まれている。しかし、最初の堆積層となる肩部の流れ込みからは、大和第Ⅳ-2様式の特徴をもつ高坏(P1002)が出土している。P1002は、屈曲した坏部にハの字に開く脚部をもつ。口縁部と屈曲部に一条ずつ、脚裾部に3条の凹線文を施している。

SX-101出土土器(第156図、写真図版307)

SX-101は、台付鉢(P1003)と短頸壺(P1004)を組み合わせた土器棺墓である。P1003は口縁部に凹線文4条、脚裾部に3条の凹線文を施す。P1004は胴部上半に左上がりのタタキを施した後に縦位ハケ、胴部下半は縦位ケズリを施す。頸部には刺突文がめぐる。その特徴から大和第Ⅳ-1様式に位置づけられる。

SX-102出土土器(第156図、写真図版307)

SX-102は、広口壺(P1005)と甕(P1006)を組み合わせた土器棺墓である。P1005は胴部上半に直線文と波状文を交互に施す。その特徴から大和第Ⅲ-4様式に位置づけられる。

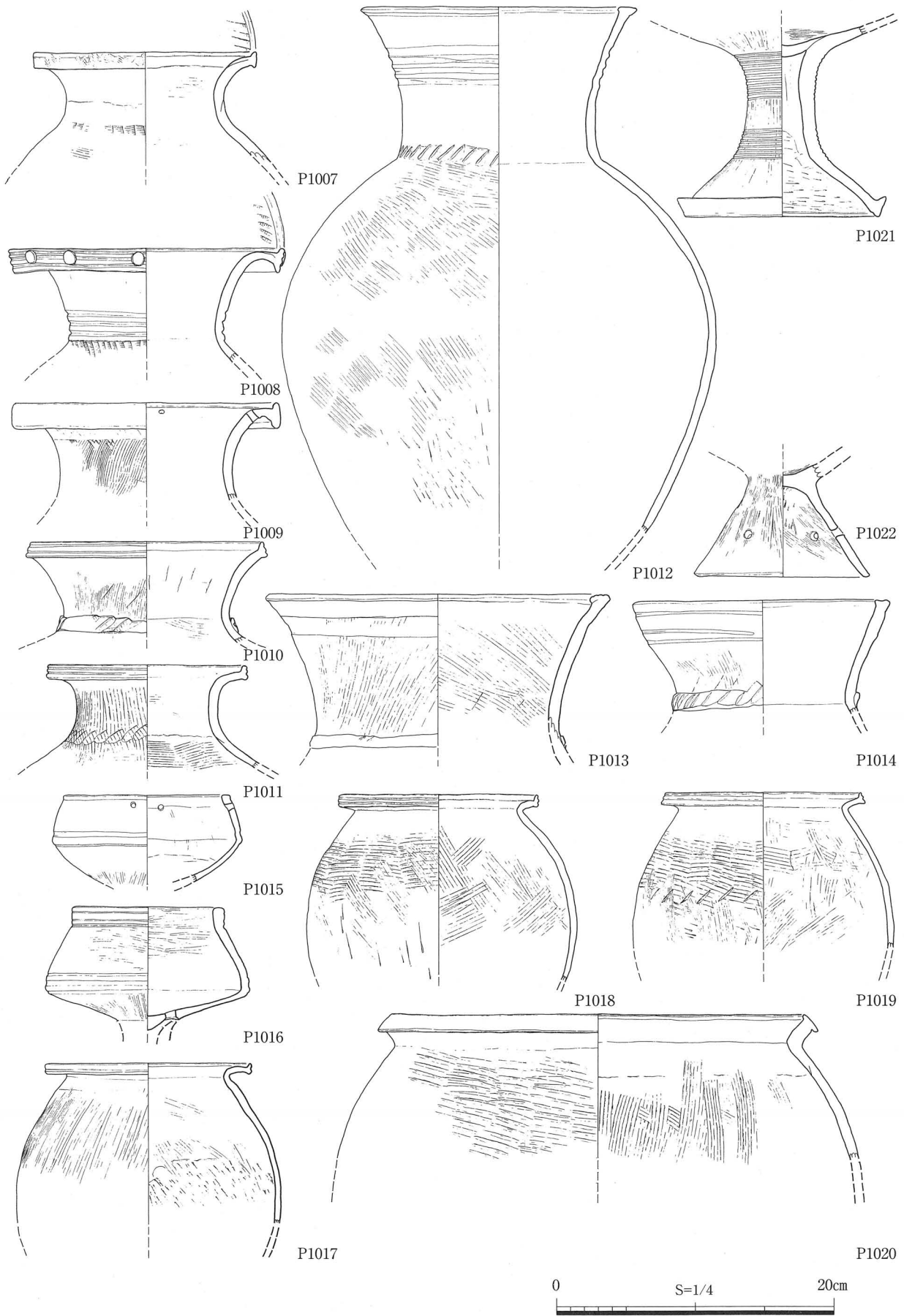


第156図 南地区出土土器（1）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1007	広口壺	61次	SD-102B	第5層	口径 15.8	(外)口縁端部に櫛描き波状文。頸部から胴部にかけて櫛描き簾状文。 (内)口縁部に刺突文。頸部は横位ミガキ。	SD-101B第5層と接合	Ⅳ-2
P1008	広口壺	61次	SD-101B	第4層	口径 19.3	(外)口縁端部に凹線文3条と円形浮文。頸部下端に凹線文3条、その直下より櫛描き簾状文。 (内)口縁部に刺突文。		Ⅳ-2
P1009	広口壺	61次	SD-101B	第5層	口径 18.8	(外)口縁部ヨコナデ。頸部縦位ハケ、口縁部に2孔一対の紐孔をもつ。 (内)ナデ。		Ⅳ-2
P1010	広口壺	61次	SD-101B	第5(下)層	口径 16.6	(外)口縁端部に凹線文2条。頸胴部界に刺突文をもつ貼付凸帯。頸部は縦位ハケ。 (内)口縁部強いヨコナデ。頸部は横位ハケ後ナデ。		Ⅳ-2
P1011	広口壺	61次	SD-101B	第4層	口径 13.8	(外)口縁端部に凹線文2条。頸部縦位ハケ。頸胴部界に刺突文。胴部縦位ハケ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部横位ハケ。		Ⅳ-2
P1012	短頸壺	61次	SD-101B	第4-b層	口径 17.5 胴径 31.4	(外)口縁部ヨコナデ。頸部中央より上に凹線文4条。頸胴部界に刺突文。胴部上半は左上がりタタキ。下半はタタキ後縦位ケズリ。 (内)口頸部ヨコナデ。胴部ナデ。		Ⅳ-2
P1013	短頸壺	61次	SD-102B	第5層	口径 21.9	(外)口縁部ヨコナデ。下段をより強くナデて凹線文状にする。頸部右上がりハケ。頸胴部界に貼付凸帯。 (内)口縁端部に凹線文3状。頸部左上がりハケ。		Ⅳ-2
P1014	短頸壺	61次	SD-102B	第5(下)層	口径 16.4	(外)口縁部に凹線文3条。頸部縦位ハケ後ナデ。頸胴部界に刺突文を有する貼付凸帯。 (内)ヨコナデ。		Ⅳ-2
P1015	無頸壺	61次	SD-101B	第5層	口径 10.9 胴径 13.7	(外)口縁部ヨコナデ。胴屈曲部に凹線文2条。胴部ハケ後ナデ。口縁直下に2孔一対の紐孔。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部縦位ハケ後ナデ。		Ⅳ-2
P1016	台付鉢	61次	SD-101B	第4-b層	口径 9.3 胴径 14.8	(外)口縁部に凹線文3条。胴部横位ミガキ。胴部屈曲部にも凹線文3条。胴部下半縦位ミガキ。 (内)鉢部上半部横位ミガキ。下半部ナデ。	脚台部欠損後、鉢底部に径0.8cmの穿孔	Ⅳ-2
P1017	甕	61次	SD-102B	第5(下)層	口径 14.4 胴径 19.1	(外)口縁部強いヨコナデにより凹線状のくぼみとなる。胴部上半右上がりハケ、下半ナデ。口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケ後ナデ、下半左上がりケズリ。 (内)左上がりケズリ。	口縁部内外面と胴部に煤付着	Ⅳ-2
P1018	甕	61次	SD-102B	第5(下)層	口径 14.0 胴径 19.6	(外)口縁部凹線文2条。口縁部ヨコナデにより上方に突出する。胴部上半は横位タタキ後左上がりハケ、下半縦位ケズリ。 (内)胴部は左上がりハケ後右上がりハケ。	全体に煤付着	Ⅳ-2
P1019	甕	61次	SD-102B	第5層	口径 13.9 胴径 18.9	(外)口縁部凹線文2条。口縁部ヨコナデにより上方に突出する。胴部上半横位タタキ。最大胴部より上に刺突文。下半は縦位ハケ。 (内)胴部上半横位ハケ後縦位ハケ。以下右上がりハケ。		Ⅳ-2
P1020	甕	61次	SD-101B	第5層	口径 29.5	(外)口縁部ヨコナデにより上方に突出する。胴部左上がりタタキ。 (内)胴部縦位ハケ。		Ⅳ-2
P1021	高坏	61次	SD-101B	第5層	底径 13.5	(外)坏下部縦位ミガキ。脚上部に11条、下部に8条のヘラ描き直線文、縦位ミガキ。裾端部はヨコナデ。 (内)坏下部横位ミガキ。脚上部しぼり痕。脚裾部は右方向の横位ケズリ。		Ⅳ-2
P1022	高坏	61次	SD-102B	第5層	底径 11.9	(外)裾部ヨコナデ。他縦位ハケ。6方向の透孔。 (内)坏下部横位ミガキ。脚上部ケズリ後左上がりハケ。裾部ヨコナデ。		Ⅳ-2

SD-101B・102B出土土器 (第157~160図、写真図版308・309)

SD-101B・102Bから121箱(32.1%)の土器が出土している。第61次調査区出土土器の1/3が両溝に集中するのである。また、両溝は、それら多量の出土土器とともに青銅器鑄造関連遺物が出土しており、その年代決定についても重要な役割をもつ。なお、肩を接してほぼ同規模の両溝は、出土土器に接合関係をもつものがあり、2条1対で機能していたと考えられる。よって、遺構間の区別なく一括して報告をおこなう。また、両溝からは、上層から下層まで大

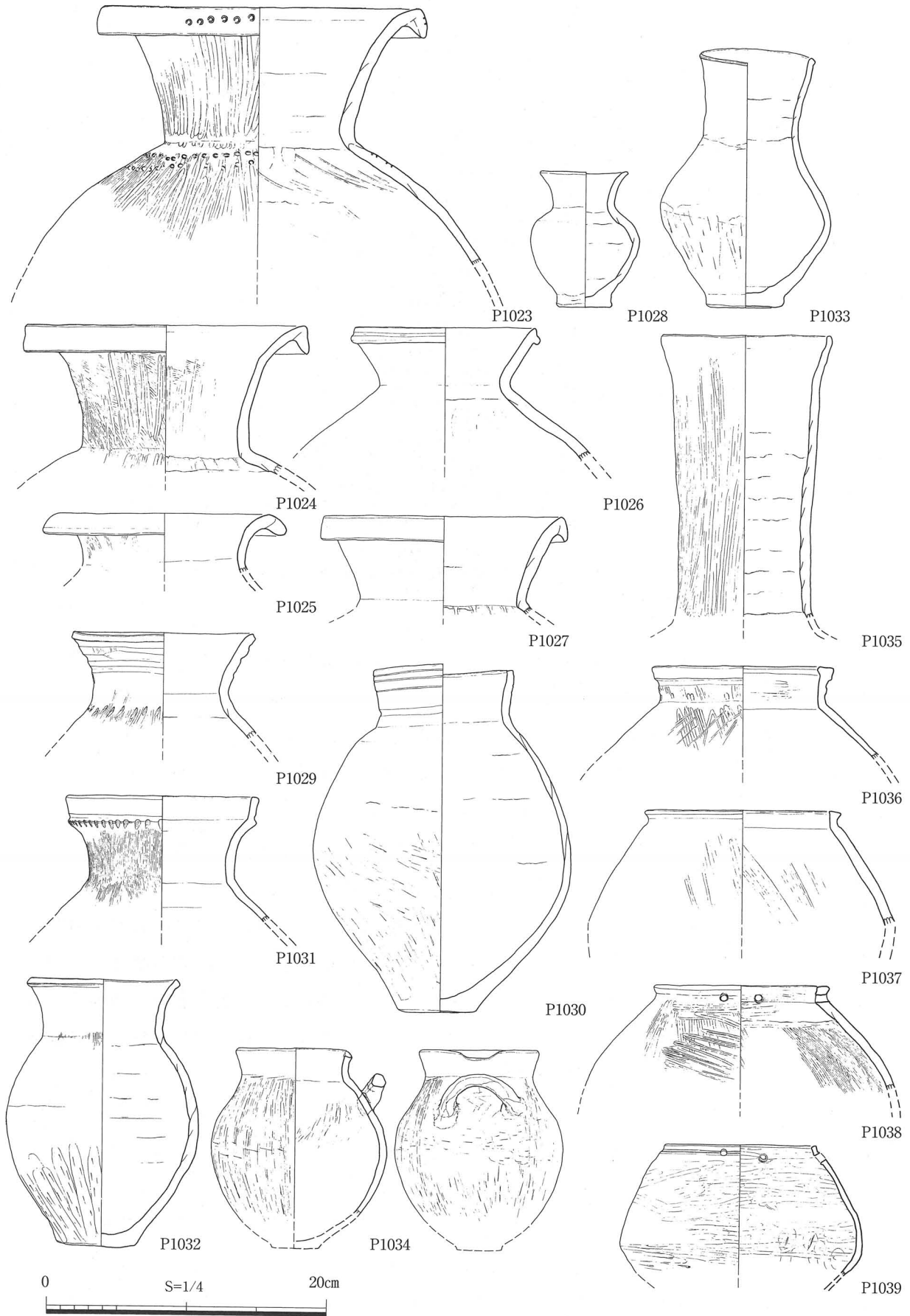


第157図 南地区出土土器（2）

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1023 図版308-1	広口壺	61次	SD-102B	sec 第8層	口径 22.6	(外) 口縁部ヨコナデ。頸胸部は縦位ミガキ。竹管文を口縁端部の一部に一帶と頸胸部界に2帯。 (内) 口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胸部上半左上がりハケ後ナデ。		V-1
P1024	広口壺	61次	SD-102B	第4層	口径 19.6	(外) 口縁部ヨコナデ。頸部は左上がりハケ後粗い縦位ミガキ。胸部ミガキ。 (内) 口縁部ヨコナデ。頸部は左上がりハケ後縦位ミガキ。胸部ナデ。		V-1
P1025	広口壺	61次	SD-102B	第5層	口径 14.8	(外) 口縁部ヨコナデ。頸部縦位ハケ後ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。		V-1
P1026	広口壺	61次	SD-102B	第5層	口径 12.8	(外) 口縁部ヨコナデ。口縁端部に凹線文1条。頸部ヨコナデ。胸部ナデ。 (内) ナデ。磨滅の為調整は不明瞭。		V-1
P1027	広口壺	61次	SD-102B	第4層	口径 16.8	(外) 口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。		V-1
P1028	広口壺	61次	SD-102B	第5層	器高 9.8 口径 5.9 胸径 7.8 底径 3.6	(外) 口縁部ヨコナデ。胸部ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胸部ナデ。	完形品	V-1
P1029 図版308-2	短頸壺	61次	SD-102B	第5(下)層	口径 12.7	(外) 口縁部に凹線文3条。頸部ヨコナデ。頸胸部界に刻目。 (内) 口縁部にヨコナデ。以下ナデ。		V-1
P1030 図版308-3	短頸壺	61次	SD-102B	第4層	器高 25.0 口径 9.2 胸径 18.5 底径 5.5	(外) 口縁部に凹線文3条。胸部上半ハケ後ナデ。胸部下半は左上がりケズリ。頸胸部界付近に凹線状のくぼみ。 (内) ナデ。	胸部上半にネズミの爪痕 完形品(一部欠)	V-1
P1031	短頸壺	61次	SD-101B	第5層	口径 12.8	(外) 口縁部ヨコナデ。口縁部の屈曲部に刺突文。頸部縦位ハケ。 (内) 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。		V-1
P1032	短頸壺	61次	SD-102B	第4層	器高 19.6 口径 10.2 胸径 14.0 底径 5.4	(外) 口縁部ヨコナデ。胸部上半を縦位ハケ後ナデ、下半は縦位ケズリ。底部裏面ケズる。 (内) ナデ。	胸部中央に煤付着 完形品(一部欠)	V-1
P1033 図版308-4	長頸壺	61次	SD-101B	第4層	器高 18.8 口径 7.9 胸径 12.3 底径 4.6	(外) 頸胸部はナデ。頸胸部界にハケ。胸部下半は縦位ケズリ。 (内) ナデ。	完形品(一部欠)	V-1
P1034	水差形土器	61次	SD-101B	第4層	口径 7.5 胸径 12.8	(外) 胸部は縦位ケズリ。最大胸部付近のみ横位ケズリ。ケズリ後は縦位ミガキ。 (内) 胸部上半は縦位ハケ後ナデ。		V-1
P1035	長頸壺	61次	SD-102B	第4層	口径 11.5	(外) 口縁部ヨコナデ。以下縦位ミガキ。 (内) 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。		V-1
P1036	無頸壺	61次	SD-101B	第4層	口径 10.7	(外) 口縁部直下は強いヨコナデによりくぼむ。口縁部直下は縦位ミガキ後ナデ。胸部は縦位ミガキ後右上がりミガキ。 (内) 頸部横位ミガキ。胸部は磨滅。		V-1
P1037	無頸壺	61次	SD-101B	第4層	口径 12.3	(外) 口縁部強いヨコナデにより凹線文状となる。胸部縦位ミガキ。 (内) 口縁部から胸部上半はヨコナデ。以下は左上がりハケ。		V-1
P1038	無頸壺	61次	SD-101B	第5層	口径 10.8	(外) 胸部上半は縦位ハケ後、疎らな横位ミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内) 口縁部を横位ミガキ。胸部は縦位ハケ。		V-1
P1039 図版308-5	無頸壺	61次	SD-101B	第5層	口径 10.0	(外) 口縁部強いヨコナデにより凹線文状となる。胸部上半は横位ミガキ、下半ケズリ後横位ミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内) 胸部を横位ミガキ。胸部屈曲部よりやや上をヨコナデ。		V-1

和第IV様式と大和第V様式の土器が混在して出土する。これは、再掘削によるため、本来は大和第IV様式の単純層があったものと考えている。

大和第IV様式として、壺9個体、台付鉢1個体、甕4個体、高坏2個体を図化した。P1010・1011は広口壺であるが、口縁端部上方への突出が著しく頸部に刺突文をもつなど、有段口縁壺の退化形態とも考えられる。P1015・1016は無頸壺で、口縁部と胸屈曲部に凹線文を施す。胸屈曲部における凹線文の集中は、大和第IV様式の様式標徴とみて良からう。P1017～



第158図 南地区出土土器 (3)

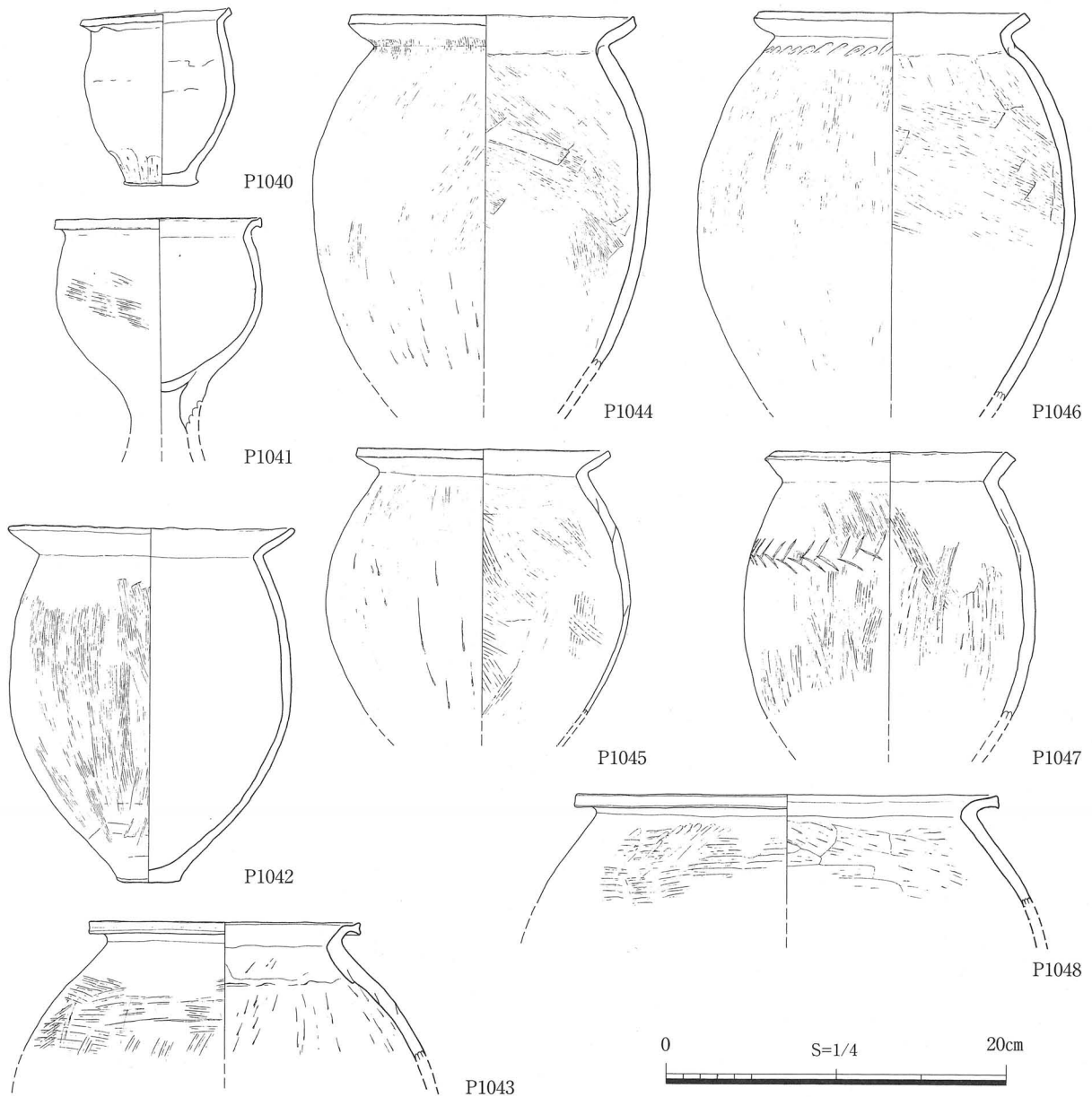
遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1040	甕	61次	SD-102B	第5層	器高 10.1 口径 8.5 胴径 8.8 底径 4.0	(外)ナデ。底部付近を縦位ケズリ。 (内)ナデ。	完形品	V-1
P1041 図版308-6	台付甕	61次	SD-101B	第4層	口径 12.0 胴径 12.2	(外)胴部は左上がりタタキ。 (内)胴部はナデ。	胴部上半は煤付着、下半 は被熱の為赤変する 完形品(脚部欠)	V-1
P1042	甕	61次	SD-102B	第4層	器高 21.0 口径 16.5 胴径 16.6 底径 3.6	(外)口縁部と胴部上端部をヨコナデ。以下縦位 ハケ。底部裏面ケズリ。 (内)胴・底部はナデ。		V-1
P1043	甕	61次	SD-102B	第5層	口径 15.5	(外)胴部上半は横位タタキ後縦位タタキ、その後 軽いケズリ。胴部上端をヨコナデ。 (内)胴部縦位ケズリ。		V-1
P1044	甕	61次	SD-101B	第5層	口径 16.5 胴径 19.9	(外)口縁端部強いヨコナデにより上方に突出す る。口縁部屈曲部に縦位ハケ。胴部上半は 左上がりハケ。最大胴部付近を縦位ハケ。 下半は縦位ケズリ。 (内)胴部左上がりハケ。		V-1
P1045	甕	61次	SD-102B	第5(下)層	口径 14.7 胴径 18.0	(外)胴部上半は密な縦位ハケ。下半はケズリ。 口縁部はヨコナデ。 (内)胴部上半横位や左上がりのハケ。下半は縦 位ハケ。		V-1
P1046	甕	61次	SD-102B	第5層	口径 15.6 胴径 22.3	(外)口縁端部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。 胴部上半は縦位ハケ、下半も縦位ハケ。頸 部にヘラ状工具による刺突文。 (内)胴部下半はナデ。上半は左上がりハケ。	外面全体に煤付着	V-1
P1047	甕	61次	SD-101B	第5層	口径 13.6 胴径 17.2	(外)胴部上半は左上がりハケと、羽状の刺突文 を配す。下半は強い縦位ハケ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部上半は左上がりハケ。 胴部下半を縦位ケズリ。	外面上半部に煤が厚く 付着	V-1
P1048	甕	61次	SD-101B	第5(下)層	口径 24.6	(外)胴部は横位タタキ後、部分的にヘラ押さえ。 (内)胴部は左上がりケズリ。		V-1

1020は甕で、中型のP1017～1019はヨコナデによって口縁端部を上方に突出させ、拡張した端面に凹線文を施している。P1021は高坏脚部で、締まった柱状部にハの字に開いた裾部をもつ。柱状部の上端と下端には、ヘラ描き直線文を施す。大和第Ⅳ様式の典型的な脚部といえる。

大和第Ⅴ様式として、壺17個体、甕9個体、高坏6個体、台付鉢4個体、鉢4個体、器台2個体、結合形土器1個体を図化した。P1023～1028は広口壺で、P1023～1025・1027は大和第Ⅴ様式に特徴的な垂下する口縁部をもつ。P1029～1032は短頸壺で、P1030・1032のような長胴に短い頸部がつく。P1029の頸胴部界に施された刺突文は、前様式の名残である。P1033・1035は長頸壺で、大和第Ⅴ様式に出現する器種である。P1035のように長大な頸部をもつものと、P1033のように頸部がさほど長大化しないものがある。P1033の胴部は、ゆるやかな稜をもった張りがあり、本様式の特徴である。P1036～1039は無頸壺で、基本的にはミガキ調整のみの無文である。P1034は水差形土器で、胴部に前様式までの算盤玉形の張りではなく、口縁部も短い。本器形の最終形態である。

P1040～1048は甕で、ケズリ技法を用いながらも厚い器壁や四角く収められた口縁端部など、大和第Ⅴ様式の特徴をもつ。胴部外面調整には、P1041・1043・1048のように胴部上半にタタキを残すものや、P1042・1044～1047のように縦位ハケを施したもの、それ以外に縦位ミガキや縦位ケズリ未調整などがある。P1046のような、頸部の刺突文も大和第Ⅴ様式の特徴である。

P1049～1054は高坏で、P1049～1051は小型で椀形の坏部をもつもの、P1052・1053は皿形の坏部に直立して短い口縁部が立ち上がるものである。P1052・1053の口縁端部は面をも



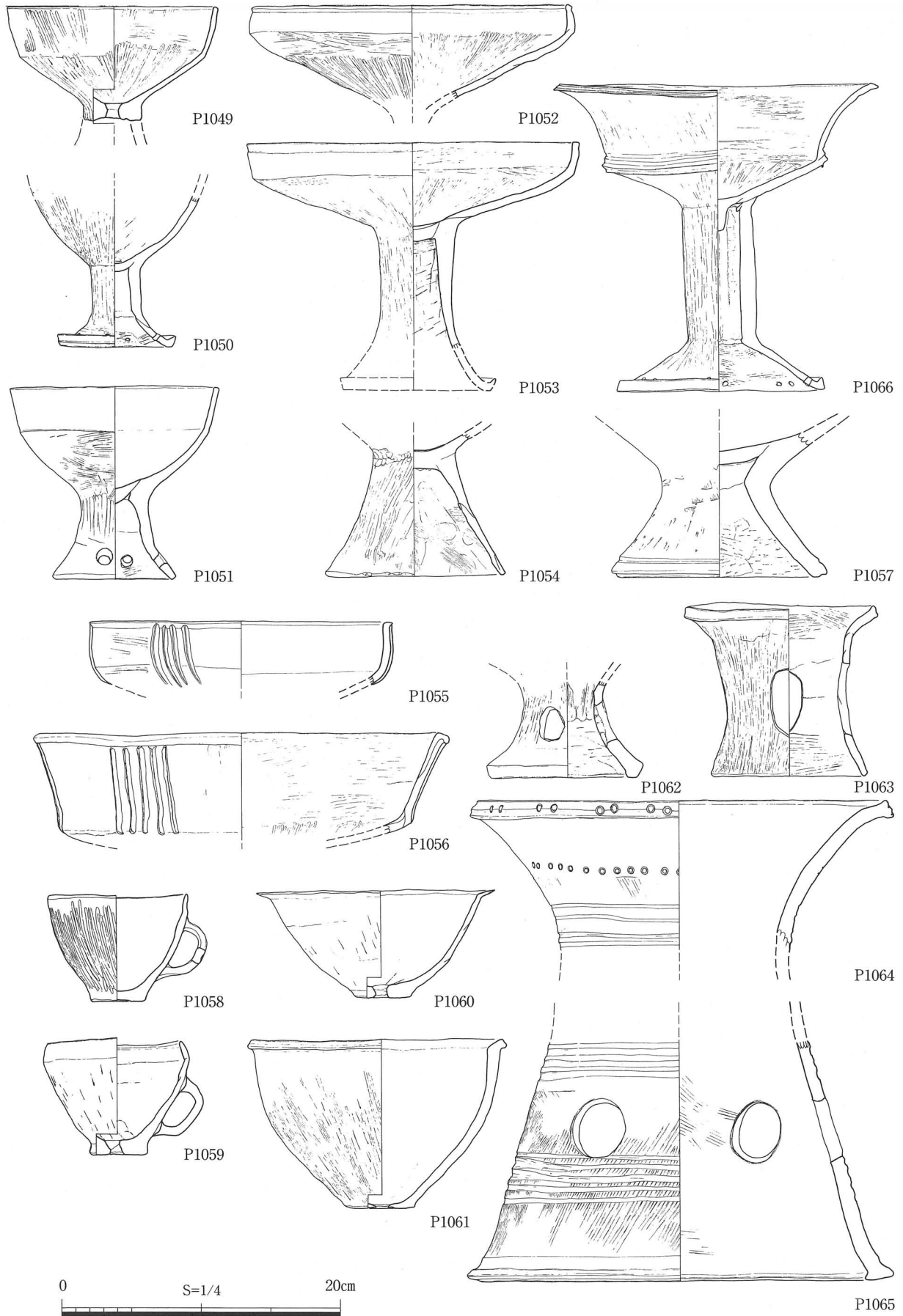
第159図 南地区出土土器（4）

って外方に突出する。P1050の短い柱状部に、ハの字に開く裾と上方に突出した端部及びそこに施された小円孔は、大和第V様式に特徴的な脚部である。また、P1054のように坏部からハの字に開いた脚部もある。

この他、無文で屈曲した鉢上半部に棒状浮文を施した台付鉢（P1055・1056）やコーヒークップ形をした小型の把手付鉢（P1058・1059）は、大和第V様式の典型的な器種である。また、器台（P1063）の体部中央に大きく施された長楕円形の透孔も、大和第V様式の特徴である。

第Ⅱ章 南地区の調査

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1049	高坏	61次	SD-101B	第5層	口径 14.6	(外) 坏部は縦位ミガキ。 (内) 坏部上半は縦位ミガキ後、横位ミガキ。坏部下半へ縦位ミガキ。	脚部を打ち欠き、坏部底面中央を穿孔	V-1
P1050 図版308-7	高坏	61次	SD-102B	第5層	底径 7.9	(外) 坏部と脚部は縦位ミガキ。裾端部ヨコナデ。裾端部ちかくには4方向に2孔一対の透孔。 (内) 坏部は縦位ハケ。脚部ナデ。裾部を右方向の横位ケズリ。	奈良盆地東南部産? 半完形品	V-1
P1051	高坏	61次	SD-101B	第4層	器高 14.0 口径 14.2 底径 8.5	(外) 坏部上半ヨコナデ、下半ケズリ後横位ハケ。脚部縦位ミガキ、裾部ナデ。脚部裾の透孔は、4方向に2孔一対のものと1孔一対のものが配される。 (内) 坏部内面ヨコナデ。脚部上半ナデ。裾部はハケ後ナデ。		V-1
P1052	高坏	61次	SD-101B	第4層	口径 22.3	(外) 口縁端部ヨコナデにより凹線文状となる。坏部上半はヨコナデ、下半は縦位ミガキ後屈曲部付近を横位ミガキ。 (内) 坏部上半はヨコナデ。下半は縦位ミガキ。		V-1
P1053	高坏	61次	SD-102B	第5層	口径 23.0	(外) 口縁部はヨコナデにより凹線文状にくぼむ。坏部下半は縦位ミガキ後、屈曲部付近を横位ミガキ。脚部は縦位ミガキ。 (内) 坏部上半は横位ミガキ。下半は縦位ミガキ。脚部は右回りの横位ケズリ。		V-1
P1054	高坏	61次	SD-101B	第5層	底径 12.2	(外) 脚部は右上がりミガキ。裾部はナデ。 (内) 坏部はナデ。脚部の上部はナデ、以下左上がりハケ。		V-1
P1055	台付鉢	61次	SD-101B	第5層	口径 20.6	(外) 鉢部上半は横位ミガキ、下半はケズリ後ナデ。4本で1単位の棒状浮文を6ヶ所(復原)に配す。 (内) ヨコナデ。		V-1
P1056	台付鉢	61次	SD-102B	第5層	口径 28.4	(外) 鉢部はミガキか?5本で1単位の棒状浮文を6ヶ所(復原)に配す。 (内) 鉢部上半は横位ミガキ、下半は縦位ミガキ。		V-1
P1057	台付鉢	61次	SD-102B	第4-b層	底径 13.4	(外) 脚部上端から鉢部は左上がりハケ。下半は縦位ケズリ。裾と裾端部に凹線文1条。 (内) 脚部上半はナデ。下半は右方向の横位ケズリ。		V-1
P1058 図版309-2	把手付鉢	61次	SD-101B	第5層	器高 7.8 口径 9.8 底径 3.7	(外) 胴部は縦位ミガキ。 (内) 胴部はナデ。	完形品	V-1
P1059 図版309-3	把手付有孔鉢	61次	SD-102B	第5-d層	器高 8.5 口径 9.5 底径 3.8	(外) 胴部を縦位ケズリ後口縁部のみヨコナデ。底部裏面もケズリ。 (内) ナデ。	完形品(把手欠)	V-1
P1060	有孔鉢	61次	SD-101B	第5層	器高 7.8 口径 16.0 底径 3.9	(外) 胴部上半はナデ。下半は縦位ケズリ。 (内) ハケ後ナデ。		V-1
P1061	有孔鉢	61次	SD-101B	第2層	器高 12.2 口径 17.8 底径 4.6	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。口縁端部にヨコナデによる凹線文状のくぼみ。 (内) 胴部は縦位ハケ後ナデ。		V-1
P1062 図版309-4	台付鉢	61次	SD-102B	第5層	底径 10.8	(外) 脚部は縦位ミガキと、裾端部をヨコナデ。3方向に楕円形の透孔。 (内) 脚部上半をナデ、裾部はケズリ。	脚部として完形品	V-1
P1063 図版309-5	器台	61次	SD-102B	第5層	器高 12.6 口径 13.5 底径 10.8	(外) 口縁部はヨコナデ。体部は縦位ミガキ。4方向に長楕円形の透孔。 (内) 口縁部及び裾部は横位ミガキ。他はナデ。	完形品	V-1
P1064	器台	61次	SD-101B	第5層	口径 29.4	(外) 口縁端部に2個一対の竹管文と、体部上方に竹管文を配す。その下に4条の凹線文。体部上半は左上がりハケ。 (内) 口縁部はヨコナデ。体部はナデ。		V-1
P1065	器台	61次	SD-102B	第5層	底径 28.8	(外) 体部は右上がりハケ。裾部はヨコナデによりくぼむ。透孔をはさんで下に5条、上に4条以上の凹線文帯。円形の透孔は6方向(復原)。 (内) 裾部はヨコナデ、体部はハケ後ナデ。		V-1
P1066 図版309-1	結合形土器	61次	SD-101B	第4層	器高 22.6 口径 22.4 底径 14.8	(外) 口縁端部に凹線文2条。坏部屈曲部に凹線文3条。坏部上半は左上がりハケ、下半は縦位ハケ。脚部は縦位ミガキ。脚部裾の8方向に2孔一対の透孔。 (内) 坏部上半は横位ミガキ、下半は縦位ミガキ。脚柱部は右回りの横位ケズリ。裾部は横位ハケ。	半完形品	V-1



第160図 南地区出土土器（5）

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1067	広口壺	61次	SK-107	第4(下)層	器高 28.0 口径 15.7 胴径 28.0 底径 5.2	(外) 胴下半部は縦位ミガキ。胴部上端は縦位ハケ後縦位ミガキ。頸部はハケ後横位ミガキ。 (内) 胴部はナデ。頸部はハケ後縦位ミガキ。口縁部はヨコナデ。	胴部上端にヘラによる「U」字の記号文 口縁部内側と胴部の一部に煤付着 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1068	広口壺	61次	SK-107	第5層	器高 23.6 口径 11.3 胴径 23.0	(外) 頸部ナデにより少しくぼむ。胴部は縦位ミガキ。 (内) 口頸部は横位ミガキ。胴部上半はナデ、下半は左上がりハケ。底部はナデ。	底部は著しく磨滅 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1069	広口 長頸壺	61次	SK-107	第4(下)層	口径 15.5	(外) 頸部は縦位ハケ。口縁部はヨコナデ。 (内) 頸部は横位ハケ。口縁部はヨコナデ。		Ⅵ-3
P1070 図版309-6	甕	61次	SK-107	第4(下)層	器高 13.2 口径 11.6 胴径 11.9 底径 3.6	(外) 口縁端部は板状工具によるナデ。口縁部ヨコナデにより上方へ突出する。胴部は右上がりタタキ後最大胴部に縦位ハケ。 (内) 胴部ナデ。	胴部に煤付着 底部は被熱の為赤変 完形品	Ⅵ-3
P1071	甕	61次	SK-107	第5層	口径 13.4 胴径 14.0	(外) 胴部は右上がりタタキ。 (内) 胴部上半ナデ、下半は横位ケズリ後ナデ。		Ⅵ-3
P1072	甕	61次	SK-107	第4(下)層	器高 19.0 口径 15.2 胴径 17.7 底径 4.5	(外) 胴部は下から右上がりタタキ、横位タタキ、右上がりタタキ。底部はナデ。 (内) 胴部下半は左上がりハケ後ナデ。胴部上半は左上がりハケ。口縁部は強いヨコナデ。	外面煤付着 底部底面被熱の為赤変 口縁部内面に糊圧痕	Ⅵ-3
P1073	甕	61次	SK-107	第4(下)層	器高 23.1 口径 17.9 胴径 20.0 底径 4.5	(外) 胴部は右上がりタタキ後、左上がりハケ。 (内) 胴部上半は横位ハケ。下半は左上がりハケ。	胴部上半の一部に煤付着	Ⅵ-3
P1074	高坏	61次	SK-107	第5層	口径 19.8	(外) 坏部ハケ後縦位ミガキ。 (内) 坏部縦位ミガキ。	下半に煤付着	Ⅵ-3
P1075	高坏	61次	SK-107	第5層	底径 13.4	(外) 脚部ハケ後裾部とともに縦位ミガキ。透孔は3方向。 (内) ハケ後ナデ。	内外面に煤付着	Ⅵ-3
P1076 図版309-7	鉢	61次	SK-107	第4層	器高 7.2 口径 14.0 底径 4.0	(外) 口縁部ヨコナデ。胴部は右上がりタタキ。 (内) ナデ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1077 図版309-8	鉢	61次	SK-107	第4(下)層	器高 8.0 口径 15.3 底径 4.4	(外) 胴部は左上がりハケ。底部はナデ。口縁部はヨコナデ後左上がりハケ。 (内) 胴部は縦位ハケ。口縁部は左上がりハケ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1078 図版309-9	有孔鉢	61次	SK-107	第4(下)層	器高 7.5 口径 14.2 底径 4.2	(外) 胴部ハケ後ナデ。底部ナデ。口縁部ヨコナデ。 (内) 胴部は左上がりハケ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1079	有孔鉢	61次	SK-107	第4層	器高 8.6 口径 12.3 底径 4.0	(外) 底部ハケ後ナデ。胴部ナデ。 (内) 底部は左上がりハケ。口縁部横位ハケ。	形状がやや楕円形	Ⅵ-3

SK-107出土土器 (第161図、写真図版309)

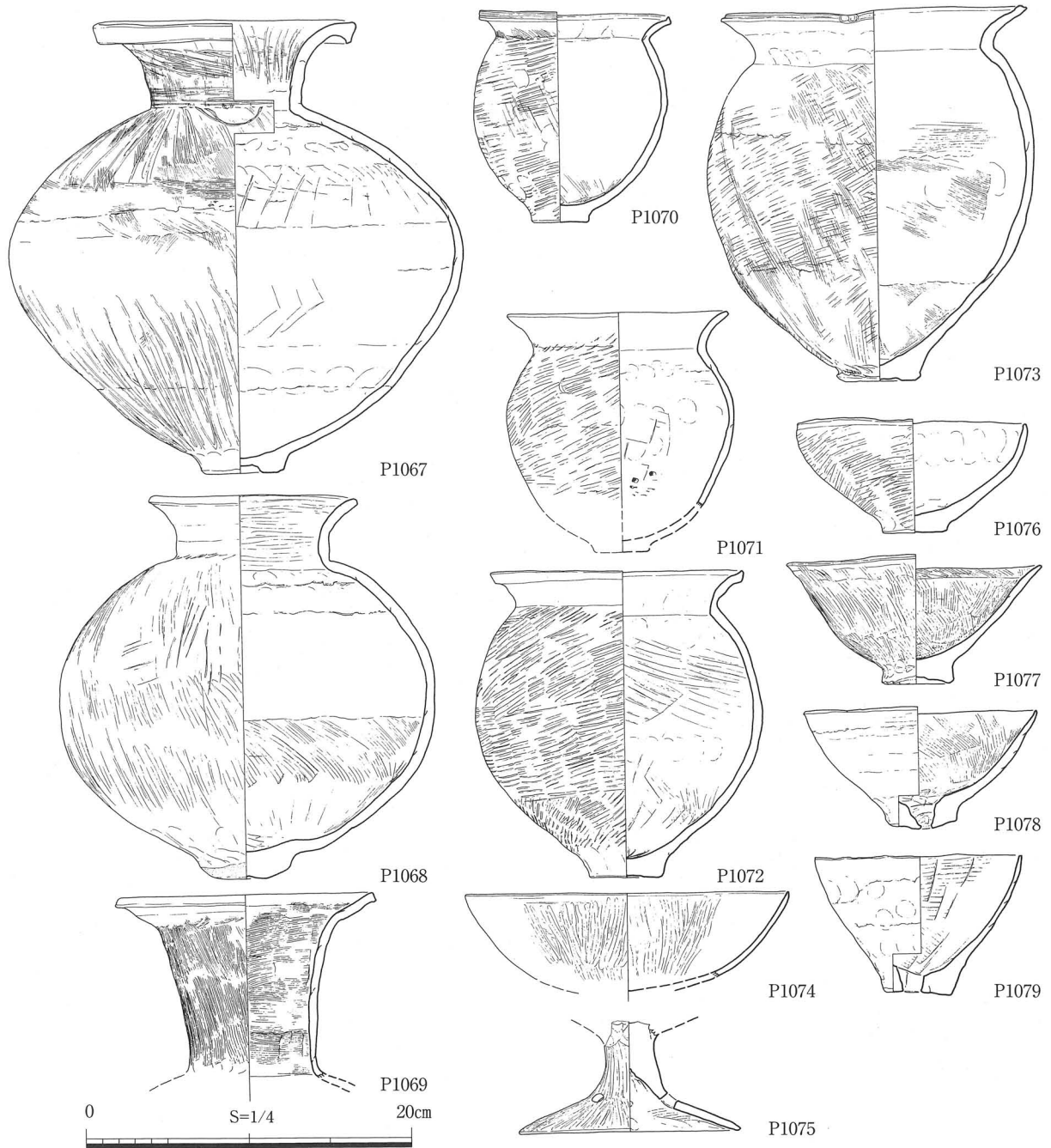
SK-107からは、コンテナ6箱(1.6%)の土器が出土している。とりわけ中層からは、大和Ⅵ-3様式の特徴をもつ半・完形品が多数出土している。その構成に長頸壺が欠くという特徴がある。このうち、壺3個体、甕4個体、高坏2個体、鉢4個体、合計13個体を図化した。

P1067・1068は広口壺で、P1067は口縁部下端を肥厚させ面をもつ。P1069は長頸壺のように頸部は長い、口縁部は開いた広口長頸壺である。口縁端部はヨコナデによって面をもつ。これらは、いずれも口縁端部の処理が丁寧である。

P1070~1073の甕は、全体的に胴部の球体化が進んでおり、新しい傾向が認められる。しかし、P1070・1072・1073のようにヨコナデによって口縁端部の上端を突出させしっかりとした面を作るものがあり、古い要素も合わせもっている。

P1074・1075は高坏であるが、P1075の脚部は柱状部が中実となり裾が開き、透孔は3方など新しい要素をもつ。

P1076~1079は小型鉢で、椀形と外反口縁がある。また、P1078・1079は有孔である。P1076は厚手でしっかりとした作りである。P1078の口縁端部には丁寧なヨコナデが施されている。



第161図 南地区出土土器（6）

第61次調査区からは377箱の出土土器があり、このうち本報告において図化し得たものはわずかに過ぎない。報告分が本調査区全体の傾向を示すものでないことは明らかである。

本調査区の出土土器において大和第Ⅰ様式は顕著ではなく、遺構資料としてある程度のまとまりをもつのは大和第Ⅱ-1様式からである。大和第Ⅱ-1様式以降は、遺物包含層中の庄内期まで出土土器に途切れはない。ただし、遺構的にも同様であるが、大和第Ⅵ様式前葉の出土土器が少ないように思われる。この点については、以降の本調査区周辺における方形周溝墓形成との関連も想定され、検討を要する。

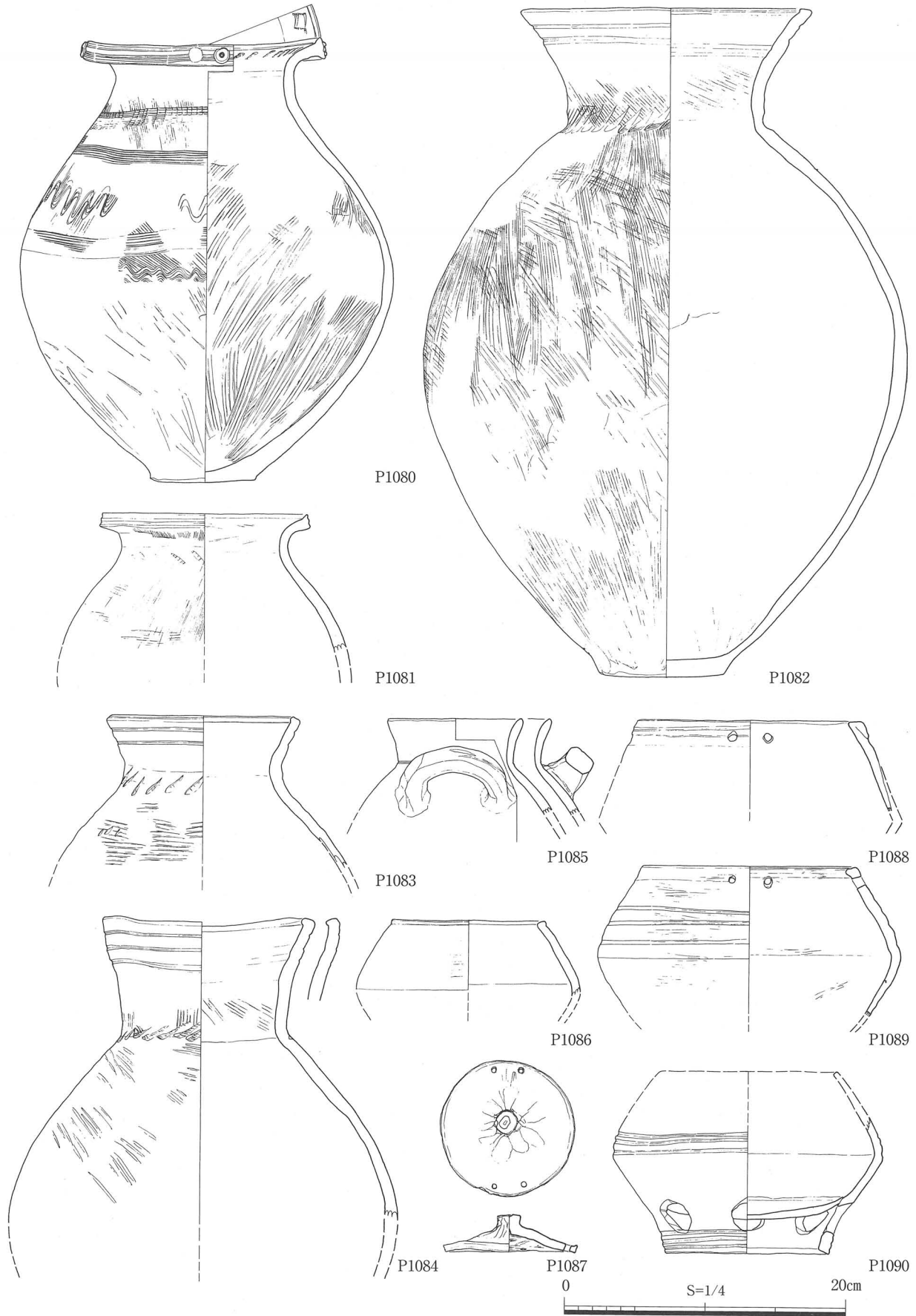
遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1080 図版310-1	広口壺	65次	SD-123	第1層	器高 31.6 口径 16.3 胴径 26.6 底径 7.5	(外) 胴部下半は左上がりケズリ後左上がりミガキ。胴部上端より楕円描き(9本/1.6cm)の簾状文、直線文と波状文を2段施文。口縁端部に凹線文3条と2個一對の円形浮文を4方向に配置。 (内) 底部縦位ハケ。最大胴部付近右上がりハケ、上半はナデ。口縁部に刺突文。	被熱 半完形品	Ⅳ-2
P1081	広口壺	65次	SD-123	第1層	口径 14.4	(外) 胴部下半横位タタキ後右上がりハケ。頸胴部界に刺突文。頸部は縦位ハケ。口縁端部は凹線文2条と上方に突出する。 (内) 胴部ナデ。頸部横位ハケ。		Ⅳ-2
P1082 図版310-2	短頸壺	65次	SD-123	第1層	器高 48.0 口径 19.0 胴径 34.4 底径 8.8	(外) 胴部下半から底部は縦位ケズリ後縦位ハケ。胴部上半は左上がりタタキ後縦位ハケ。頸胴部界に刺突文。頸部は左上がりハケ。口縁に凹線文2条。 (内) 胴部ナデ。頸部左上がりハケ。頸部中央、強いヨコナデによりくぼむ。	被熱 半完形品	Ⅳ-2
P1083	短頸壺	65次	SD-123	第1層	口径 12.7	(外) 胴部横位タタキ。口縁部に2条の凹線文。頸胴部界に刺突文。 (内) 頸胴部剥離が著しく調整は不明。口縁部はヨコナデ。		Ⅳ-2
P1084 被熱土器- PP5514	短頸壺	65次	SD-123	第1層	口径 13.1 胴径 27.6	(外) 胴部左上がりタタキ。頸部は縦位ハケ。頸胴部界に刺突文。口縁部に3条の凹線文。 (内) 胴部ナデ。頸部左上がりハケ。	被熱	Ⅳ-2
P1085 被熱土器- PP5515	把手 付壺	65次	SD-123	第1層	口径 9.2	(外) 頸胴部界にヘラ描直線文1条。他不明。 (内) 被熱の為調整は不明。	被熱	Ⅳ-2
P1086 被熱土器- PP5517	台付 無頸壺	65次	SD-123	第1層	口径 10.7 胴径 15.9	(外) 横位ミガキか?被熱の為調整は不明。 (内) ナデ。	被熱	Ⅳ-2
P1087 図版310-3	蓋	65次	SD-123	第1層	器高 2.6 つまみ径 1.6 裾径 8.9	(外) つまみ部ナデ。体部はミガキ。裾部に2孔一對の紐孔。裾部はヨコナデ。 (内) 体部は横位ハケ。	被熱 完形品	Ⅳ-2
P1088 被熱土器- PP5518	無頸壺	65次	SD-123	第1層	口径 14.0	(外) 口縁端部に凹線文1条。口縁部に2孔一對の紐孔。 (内) 被熱の為調整は不明。	被熱	Ⅳ-2
P1089	無頸壺	65次	SD-123	第1層	口径 13.6 胴径 21.6	(外) 胴部横位ミガキ。凹線文は胴部屈曲部に3条、口縁部に1条。口縁部に2孔一對の紐孔。 (内) ミガキ。	やや被熱	Ⅳ-2
P1090 被熱土器- PP5519	台付 無頸壺	65次	SD-123	第1層	胴径 18.0 底径 11.4	(外) 胴部屈曲部と裾部に凹線文3条。脚台部に8方向の透孔。 (内) 被熱の為調整は不明。	被熱	Ⅳ-2

(2) 第65次調査

第65次調査区では調査終了時において、遺物コンテナ(巾340×奥540×高150^{mm})総数は約400箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は273箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、3割2分減である。また、調査面積545^mであるから、1^mあたり0.50箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ273箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝121箱(44.3%)、弥生時代土坑55箱(20.1%)、弥生時代溝73箱(26.7%)、弥生時代竪穴住居跡5箱(1.9%)、柱穴群16箱(5.8%)、弥生時代土器棺墓3箱(1.1%)である。

SD-123出土土器(第162・163図、写真図版310)

SD-123は、第65次調査区の北拡Ⅱで検出した南北溝である。本溝は、炉跡状遺構と考えられるSX-104に近接し、土製鋳型外枠(銅鐸)や広片口鉢及び多量の被熱土器を含むことから青銅器鑄造に関連することも想定されている。コンテナ3箱(1.1%)の土器が出土している。本溝の出土土器は、大和第Ⅳ-2様式の器種構成といえるが、器形や文様において新出要素が認められ、その最終末として位置づけられよう。

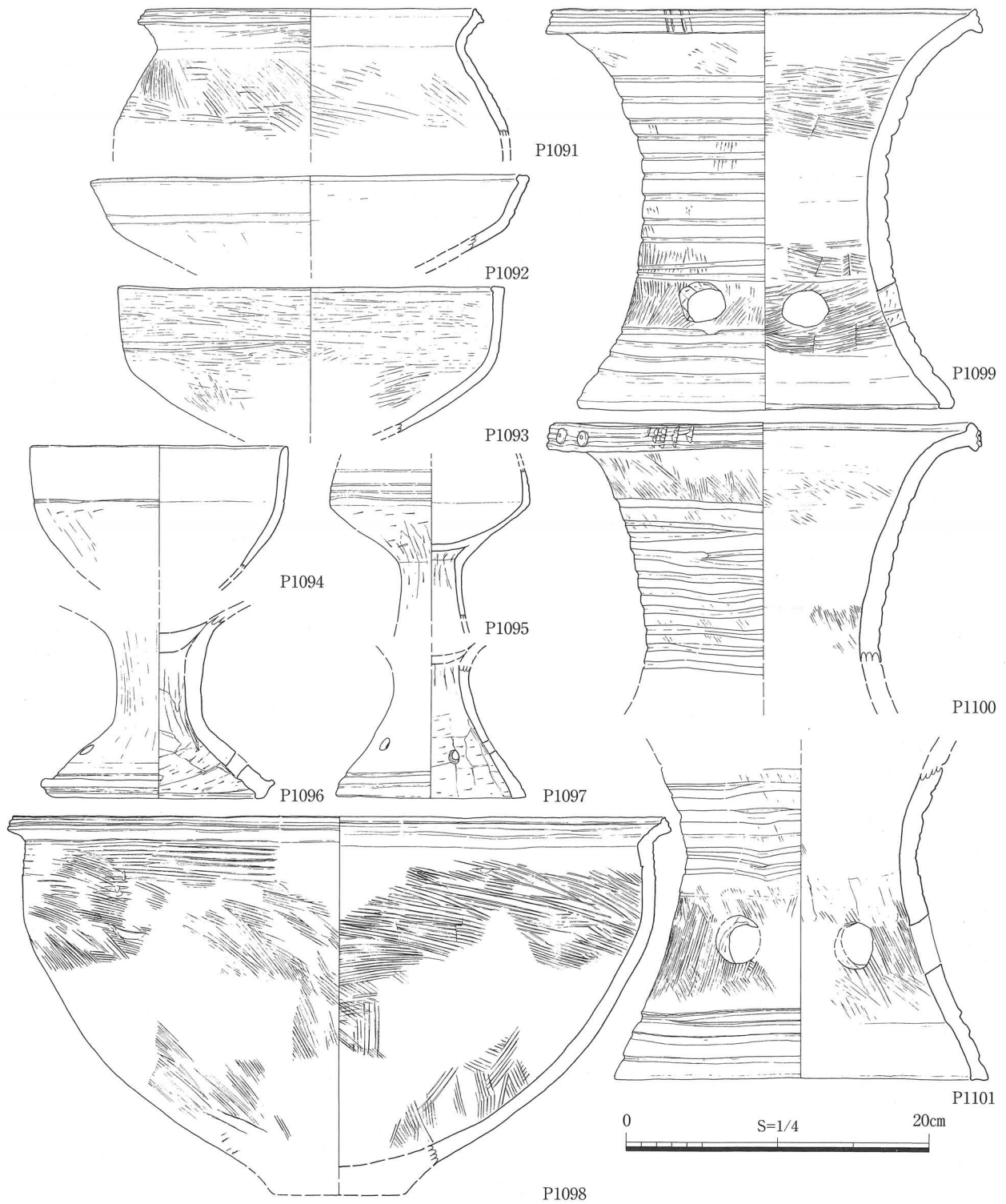


第162図 南地区出土土器（7）

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1091	甕	65次	SD-123	第1層	口径 21.6	(外) 口縁部ヨコナデにより上方へ突出する。胴部横位タタキ。胴位上端左上がりハケ。口縁端部に2条の凹線文。 (内) 胴部左上がりハケ。	被熱	IV-2
P1092 被熱土器- PP5520	高坏	65次	SD-123	第1層	口径 27.6	(外) 坏部下半は縦位ミガキ、口縁屈曲部に2条の凹線文。上半は不明。 (内) 坏部上半は横位ミガキ、下半は不明。	被熱顕著	IV-2
P1093	台付鉢	65次	SD-123	第1層	口径 23.8	(外) 鉢部屈曲部に凹線文が2条。鉢部下半は縦位ケズリ後左上がりケズリ。その後粗い縦位ミガキ。鉢部上半は横位ミガキ。 (内) 鉢部下半は右上がりのミガキ。上半は横位ミガキ。		IV-2
P1094	台付鉢	65次	SD-123	第1層	口径 16.6	(外) 鉢部屈曲部に凹線文が1条。鉢部下半は横位ケズリ。他は磨滅のため不明。 (内) 磨滅のため不明。		IV-2
P1095	台付鉢	65次	SD-123	第1層	胴径 13.0	(外) 胴部屈曲部に凹線文4条。胴部下半横位ケズリ。脚部縦位ケズリ。 (内) 胴部ナデ。脚部しぼり痕。	被熱	IV-2
P1096 図版310-4	台付鉢	65次	SD-123	第1層	底径 12.7	(外) 裾端部と裾部に凹線文1条。脚部は縦位ミガキ。4方向の透孔。 (内) 脚部柱状部はナデ。裾部は右方向のケズリ。		IV-2
P1097 図版310-5	台付鉢	65次	SD-123	第1層	底径 10.5	(外) 脚部はナデ。裾部に凹線文2条。5方向の透孔は、2孔と3孔が近接する。 (内) 脚部下半は左方向の横位ケズリ。上半はしぼり痕とナデ。		IV-2
P1098 被熱土器- PP5522	鉢	65次	SD-123	第1層	口径 43.0	(外) 口縁部は上方へ突出する。胴部左上がりハケ。胴部上端部は横位タタキ。口縁端部は凹線文2条。 (内) 胴部下半左上がりハケ後縦位右上がりハケ。胴部上半は左上がりハケ。口縁部横位ハケ。	被熱	IV-2
P1099 図版310-6	器台	65次	SD-123	第1層	器高 26.2 口径 28.0 胴径 16.2 底径 24.5	(外) 体部下半縦位ハケ後右上がりハケ。体部上半縦位ハケ。口縁部左上がりハケ後ナデ。口縁端部に凹線文2条と、それに直交する直線4条を付す。凹線文は裾部に4条、復原6方向の透孔をはさんで体部に11条。 (内) 裾部はヨコナデ。体部下半は横位ハケ、中央は強いナデ、上半は横位ハケ。口縁部ヨコナデ。	被熱	IV-2
P1100 図版310-7	器台	65次	SD-123	第1層	口径 27.4 胴径 15.3	(外) 体部は左上がりハケ。口縁端部に凹線文3条と竹管文を有する円形浮文2個と刺突文を交互に5方向に配置。体部凹線文は10条以上。 (内) 口縁部は左上がりハケ後粗いミガキ。体部上半はハケ後ナデ。下半は左上がりハケ。	被熱	IV-2
P1101 図版310-8	器台	65次	SD-123	第1層	胴径 15.2 底径 24.6	(外) 体部を左上がりハケ、下半部にはその後に右上がりハケ。凹線文は裾部に3条。復原6方向の透孔をはさんで下からへら描直線文5条、凹線文2条、へら描直線文を配す。 (内) 裾部は左上がりハケ後ヨコナデ。体部左上がりハケ。体部中央に横方向の強いナデ。上半ナデ。		IV-2

P 1081の広口壺は、大和第Ⅲ様式に出現した無文広口壺の系譜を引くと考えられるが、頸部の立ち上がりは不明瞭で口縁端部の上方への突出は甘く、器壁も厚いことからふい印象を受ける。P 1083の短頸壺は頸部が短く、胴部から口縁部が開いた形態となる。これは、大和第Ⅴ様式の短頸壺に類似しており、その移行を示す器形といえよう。P 1091は甕で、タタキを施すも器壁は厚く、ふい印象を受ける。P 1093・1094は台付鉢の鉢部と考えられるが、屈曲が甘くなり鉢部が深くなっている。P 1099～1101は器台で、体部屈曲の弛緩、脚裾部の内湾から外反への移行、凹線の間隔が広がり断面が凸帯状からカマボコ状になる。これらは、大和第Ⅴ様式への移行を示す新しい要素である。

なお、被熱土器として遺物番号の重複する個体については、本文表に示している。



第163図 南地区出土土器（8）

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1102 図版311-1	台付鉢	65次	SD-105	第3層	器高 22.2 口径 28.2 底径 17.2	(外) 脚部縦位ミガキ。鉢部下半は左上がりミガキ、屈曲部を横位ミガキ。口縁端部に刺突文。鉢部上半に櫛描き靡状文2帯とその間に櫛描き直線文1帯(11本/1.5cm)。 (内) 脚裾部ハケ後ナデ。鉢部下半縦位ミガキ、鉢部上半横位ミガキ。	半完形品	Ⅲ-2
P1103 図版311-2	高坏	65次	SX-103	第1層	口径 19.0	(外) 屈曲部に凹線文2条。口縁部は磨滅。坏部下半はケズリ後横位ミガキ。 (内) ミガキ。	土器棺蓋に転用 脚部打欠	Ⅳ-1
P1104 図版311-3	壺	65次	SX-103	第1層	胴径 31.6 底径 8.8	(外) 底部ナデ。胴部下半ケズリ後縦位ミガキ。胴部中央をハケ後ミガキ、上半は横位ハケ後縦位ミガキ。 (内) 底部ナデ。胴部下半は左上がりハケ後縦位ハケ、上半は左上がりハケ。	土器棺本体 半完形品	Ⅳ-1
P1105	広口壺	65次	SK-105	第3-b層 アゼsec	口径 10.8 胴径 16.2	(外) 胴部下半は横位ミガキ、上半は縦位ハケ。頸部左上がりハケ。口縁端部に円形浮文。頸部屈曲部に櫛描き直線文(5本/0.7cm)1帯。以下櫛描き波状文3帯と波状文帯間に円形浮文。 (内) 胴部はナデ。頸部はハケ後ナデ。		V-2
P1106	短頸壺	65次	SK-105	第4層	器高 24.6 口径 8.8 胴径 16.3 底径 5.3	(外) 底部裏面ケズリ後ナデ。胴部下半縦位ケズリ。胴部上半右上がりハケ後横位ミガキ。頸部縦位ハケ。凹線文は口縁部に3条と頸部屈曲部に3条。胴部上半に刺突文1帯とそれに直交する頸部に向かう刺突文1帯を付す。 (内) 胴部下半はハケ後ナデ。上半は右上がりハケ。頸部はヨコナデ。	口縁部にヘラによる 記号文	V-2
P1107 図版314-1	短頸壺	65次	SK-115	第5層	器高 23.5 口径 9.5 胴径 14.4 底径 4.8	(外) 胴部は縦位ケズリ後縦位ミガキ。口頸部はケズリ後縦位ミガキ。 (内) 胴部はナデ。口頸部左上がりハケ。	口縁部は片口 完形品(一部欠)	V-2
P1108	高坏	65次	SK-105	第3層	器高 10.9 口径 12.4 底径 8.0	(外) 脚部裾は強いヨコナデによりくぼみをもつ。脚部縦位ミガキ。坏部下半縦位ケズリ後横位ケズリ。上半は横位ミガキ。凹線文は口縁部に2条、脚部上端に暗文風の直線文3条。透孔は2孔一対を3方向に配す。 (内) 脚部は左方向のケズリ。坏部は縦位ミガキ。		V-2
P1109 図版314-2	高坏	65次	SK-105	第1層	器高 17.0 口径 25.9 底径 14.0	(外) 坏部・脚部とも縦位ミガキ。透孔は3方向。 (内) 脚部下半ナデ、上半はしぼり痕。坏部下半縦位ミガキ、屈曲部を横位ミガキ、上半は縦位ミガキ。	半完形品	Ⅵ-2

SD-105出土土器 (第164図、写真図版311)

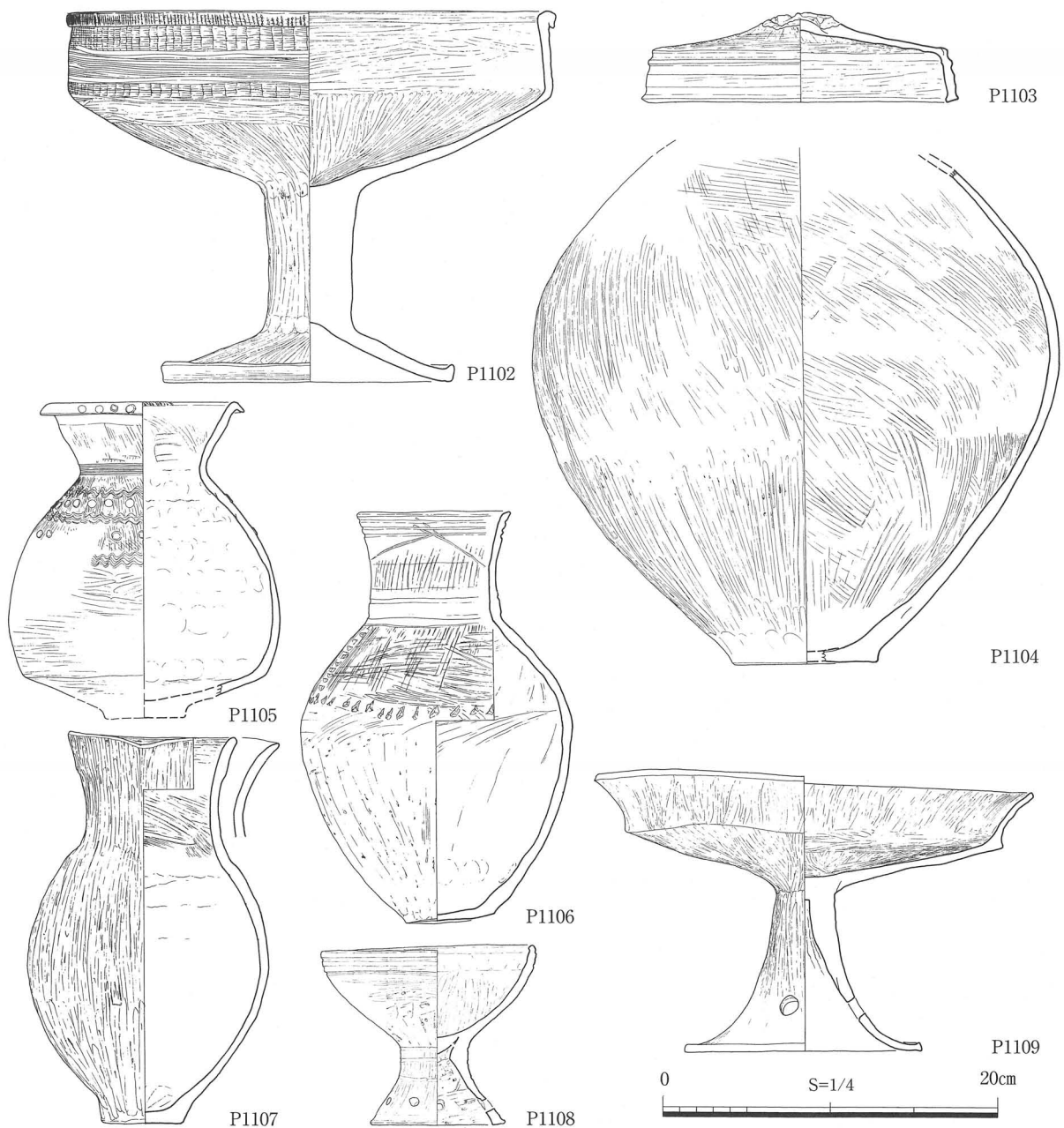
SD-105は、第65次調査区の本区中央で検出した竪穴住居跡のSB-101の北西から東に沿っており、その垂木先及び周囲からの雨水を集めた排水溝であったと考えられる。コンテナ4箱(1.5%)の土器が出土している。ほとんどが小片のなかにあって、台付鉢(P1102)が、全形を復原しうるものであった。P1102の中実の柱状部及び口縁部端面の刺突文より、大和第Ⅲ-2様式に位置づけうる。

SX-103出土土器 (第164図、写真図版311)

SX-103は、高坏坏部(P1103)を蓋に、短頸壺(P1104)を身にした土器棺墓である。P1103は口縁端部をヨコナデによって内外に突出させ面をもつ。屈曲部には2条の凹線文を施している。その特徴から、大和第Ⅳ-1様式に位置づけられる。

SK-115出土土器 (第164図、写真図版314)

SK-115は、炉跡状遺構に南接した井戸である。コンテナ1箱(0.4%)の土器が出土し、土製鋳型外枠や高坏形土製品も伴出している。下層では、短頸壺(P1107)とともにト骨、土製鋳型外枠(銅鐸)片が出土している。P1107は片口をもち、外面は縦位ケズリの後に縦



第164図 南地区出土土器（9）

位ミガキを施している。大和第V様式に位置づけられる。

SK-105出土土器（第164図、写真図版314）

SK-105は、先述のSK-115を切った井戸である。コンテナ8箱（3.0%）の土器が出土している。最上層に土器が集中するが、ここからはP1109の高坏が出土している。P1109は、外反する口縁部をもち、脚裾部も緩やかに広がっている。その特徴は、大和第VI-2様式に位置づけられる。最上層以外から出土したP1105・1106・1108はいずれも、大和第V様式の特徴をもつ。

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1110	広口壺	65次	Pit-2122	第1層	口径 17.4	(外) 頸部縦位ハケ後部分的にヨコナデ。口縁端部に凹線文2条。 (内) ナデ。		IV-1
P1111 図版311-4	甕	65次	Pit-2122	第1層	口径 14.6 胴径 19.6	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後縦位ハケ、上半は左上がりタタキ後左上がりハケ。胴部上端はタタキ後縦位ハケとヨコナデ。口縁端部に凹線文2条。 (内) 胴部下半ナデ。上半左上がりハケ後ナデ。	胎土に灰白色粘土が混じる	IV-1
P1112 図版311-5	甕	65次	Pit-2122	第1層	口径 23.6 胴径 30.3	(外) 胴部下半はケズリ後縦位ミガキ、上半は右上がりタタキ後縦位ハケ。胴部上端は横位タタキ後縦位ハケ。口縁端部には凹線文2条。 (内) 胴部下半は縦位ハケ後ナデ、上半は右上がりハケ後ナデ。	胴部上半に部分的に煤付着	IV-1
P1113 図版311-6	無頸壺	65次	Pit-106	第1層	口径 14.4 胴径 28.2	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後縦位ミガキ。胴部最大付近ケズリ後横位ミガキ。口縁端部には凹線文3条。以下櫛描き簾状文(14本/2.3cm)4帯と櫛描き波状文1帯。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内) ナデ。	内面上半部に炭化物の付着	IV-1
P1114	有孔鉢	65次	Pit-110	第1層	器高 11.3 口径 16.9 底径 3.7	(外) 胴部下半は縦位ケズリ、上半を左上がりハケ後ナデ。口縁部はヨコナデ。 (内) 底部指頭圧痕。胴部はハケ後ナデ。		V-2
P1115 図版311-7	鉢	65次	Pit-163B		器高 7.0 口径 13.1 底径 3.9	(外) 底部裏面に植物繊維圧痕。底部ハケ後ナデ。胴部ナデ。 (内) 胴部ナデ。		VI-2
P1116	高坏	65次	Pit-107	第1層	器高 11.3 口径 17.3 底径 12.2	(外) 裾部ナデ。脚部と坏部は縦位ミガキ。裾部付近に6方向の透孔。 (内) 裾部横位ハケ後ナデ。脚部はナデ。坏部は縦位ミガキ。	全体に歪む半完形品	VI-3
P1117	高坏	65次	Pit-107	第1層	底径 11.0	(外) 脚部は縦位ハケ後縦位ミガキ。5方向の透孔。 (内) 脚部はナデ。上部に弱いしぼり痕。		VI-3
P1118	高坏	65次	Pit-107	第1層	底径 12.6	(外) 裾部ヨコナデ後に粗い右上がりミガキ。脚部縦位ハケ後縦位ミガキ。4方向の透孔。 (内) ナデ。上部にしぼり痕。		VI-3
P1119	高坏	65次	Pit-107	第1層		(外) 脚部は縦位ハケ。透孔残存2。 (内) 脚部下半は左上がりハケ、上半にしぼり痕。		VI-3

Pit-2122出土土器 (第165図、写真図版311)

Pit-2122は北堀Ⅱの北壁で検出し、広口壺(P1110)、甕(P1111・1112)がまとめられ重なった状態で出土している。大和第IV-1様式である。

Pit-106出土土器 (第165図、写真図版311)

Pit-106は本区中央で検出し、その上層からは無頸壺(P1113)の胴部半截片の上に大型甕胴部片と高坏脚部が載せられて出土している。P1113は、原体幅2.3cmの櫛描き文がめぐらされている。櫛描き文の原体幅の広さが、大和第IV-1様式の特徴を示している。

Pit-110出土土器 (第165図)

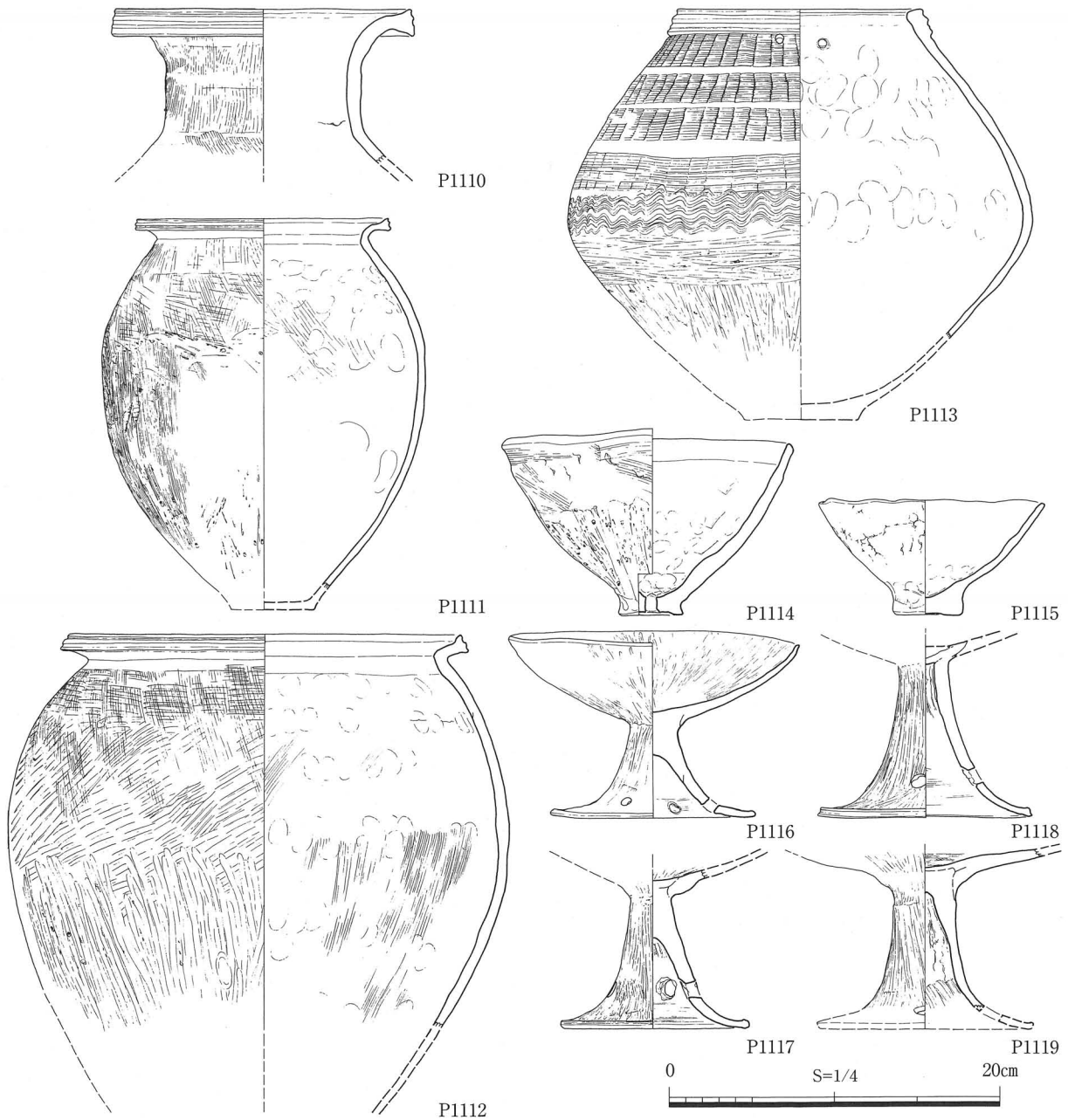
Pit-110は本区東端で検出し、大和第V様式の有孔鉢(P1114)が出土している。

Pit-163B出土土器 (第165図、写真図版311)

Pit-163Bは方形周溝墓であるST-101の墳丘北東辺裾から検出している。すなわち、方形周溝墓の築造時期を想定する上で重要な遺構といえる。鉢(P1115)が出土している。大和第VI様式後葉であるが特徴が無く、時期を限定するには至らない。

Pit-107出土土器 (第165図)

Pit-107は方形周溝墓であるST-101の墳丘部分から検出している。Pit-163Bとともに、方形周溝墓の築造時期を想定する上で重要な遺構といえる。1個体の半完形高坏(P1116)



第165図 南地区出土土器 (10)

とともに脚部3個体 (P1117~1119) が出土した。P1118には円板充填技法が認められ、大和
第VI-3様式でも古い様相をもつ。

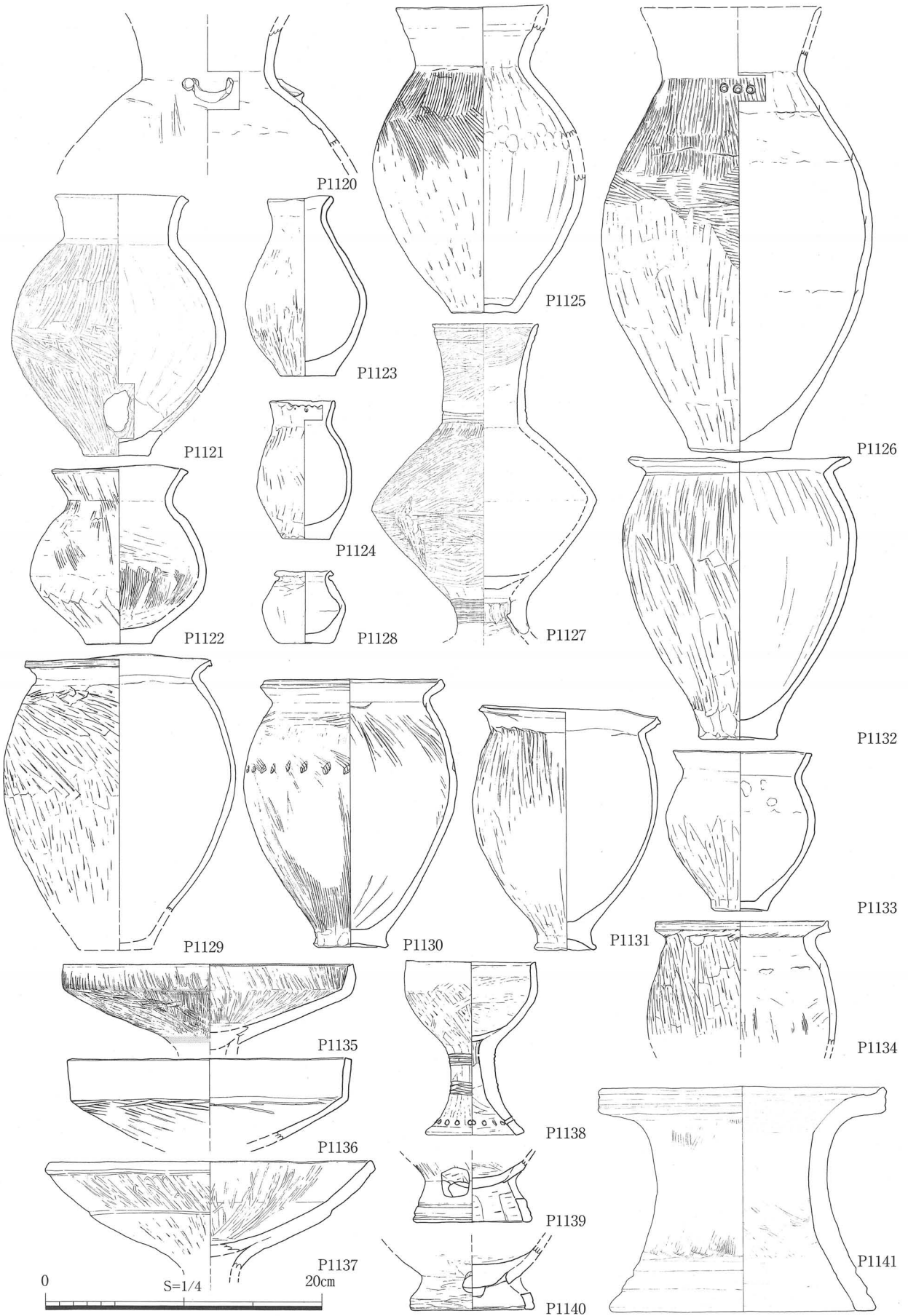
SK-134出土土器 (第166図、写真図版312・313)

SK-134は本区中央で検出した井戸で、コンテナ6箱 (2.2%) の土器が出土している。出
土土器は上層と下層に分かれるが、いずれも大和第V様式の特徴を示し時期差はない。また、
最下層からはト骨とともに、胴部下半を穿孔した短頸壺 (P1121) が出土した。

P1139・1140は台付無頸壺の脚部と考えられるが、大和第IV様式に典型とされたこの器種の
最終形態に位置づけられよう。

第二章 南地区の調査

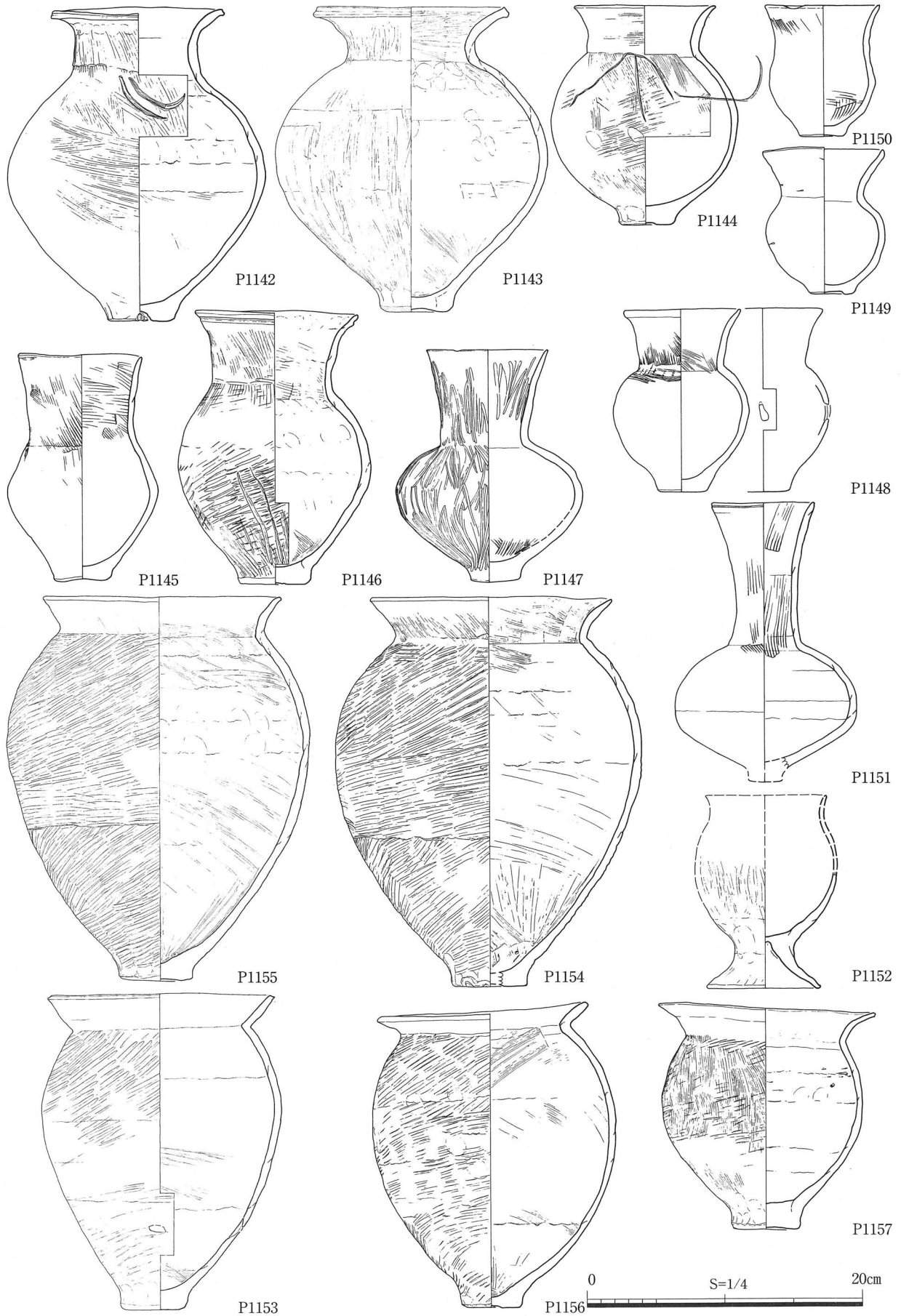
遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1120	広口壺?	65次	SK-134	第2層	-	(外) 胴部ハケ、頸部ヨコナデ。 (内) 胴部ナデ、頸部ヨコナデ。	胴部上端に、「U」字形と円形の浮文による記号文	V
P1121 図版312-1	短頸壺	65次	SK-134	第7層	器高 19.2 口径 8.7 胴径 15.6 底径 4.6	(外) 胴部下半は左上がりハケ。胴部最大径付近ケズリ後横位ハケ、上半は縦位ハケ。口頸部はヨコナデ。 (内) 胴部は左上がりハケ。口頸部はヨコナデ。	底部付近に穿孔 完形品	V
P1122 図版312-2	広口壺	65次	SK-134	第5(下)層	器高 13.0 口径 9.0 胴径 12.7 底径 4.7	(外) 胴部下半をケズリ、上半は縦位ハケ後ナデ。頸部左上がりハケ後ヨコナデ。 (内) 胴部下半は縦位ハケ、上半は左上がりハケ。口頸部ヨコナデ。	完形品	V
P1123 図版312-3	壺	65次	SK-134	第3層	器高 13.2 口径 4.5 胴径 8.8 底径 4.0	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後粗い縦位ミガキ。胴部上半、口頸部はナデ。 (内) ナデ。	完形品	V
P1124 図版312-4	壺	65次	SK-134	第5(下)層	器高 10.1 口径 4.5 胴径 6.8 底径 3.5	(外) 胴部下半は縦位ケズリ、上半は縦位ケズリ後ナデ。口頸部ヨコナデ。 (内) 胴部は丁寧なナデ。口頸部ヨコナデ。	完形品	V
P1125	短頸壺	65次	SK-134	第2層	器高 22.3 口径 10.8 胴径 15.4 底径 4.7	(外) 胴部下半を縦位ケズリ、上半は縦位ハケ、胴部最大径付近はケズリ後左上がりハケ。口頸部ナデ。 (内) 胴部は縦位ケズリ。口頸部はナデ。	外面全面に煤付着	V
P1126 図版312-5	短頸壺	65次	SK-134	第2層	口径 19.7 底径 7.4	(外) 胴部最大径付近に横位ハケを施した後胴部下半を縦位ケズリ。上半を縦位ハケ。頸部はナデ。 (内) 胴部下半を縦位ケズリ後上半を左上がりケズリ後ナデ消す。胴部上端と頸部はナデ。	胴部上端に、竹管文3つを並列させた記号文 完形品(口縁部欠)	V
P1127 図版312-6	台付 細頸壺	65次	SK-134	第5(下)層	口径 7.8 胴径 16.8	(外) 胴部下半は横位ミガキ。胴部屈曲部の下方を横位ケズリ。胴部上半は縦位ハケ後右上がりミガキ。口頸部は横位ミガキ。脚部上端に櫛描き直線文(4本/0.8cm)2帯。凹線文は口縁部と頸部屈曲部に2条。 (内) 胴部下半ハケ、上半はナデ。頸部ナデ。口縁部横位ミガキ。脚部ケズリ。	最大胴部付近2ヶ所に粘土によるヒビ割れの補修痕 半完形品	V
P1128	壺	65次	SK-134	第5(下)層	器高 5.3 口径 3.8 胴径 6.0 底径 3.9	(外) 縦位ミガキ。 (内) ナデ。	完形品	V
P1129 図版313-1	甕	65次	SK-134	第3層	口径 13.1 胴径 16.8	(外) 口縁端部はヨコナデ、口縁部ヨコナデ。胴部上半は左上がりケズリ、下半を縦位ケズリ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	外面全体に煤付着 半完形品	V
P1130 図版313-2	甕	65次	SK-134	第5(下)層	器高 19.5 口径 12.7 胴径 15.5 底径 5.0	(外) 胴部下半はケズリ後縦位ハケ、上半は横位タタキ後縦位ハケ。最大胴部付近に刺突文を施す。 (内) 胴部下半はナデ、上半は左上がりハケ。口縁部ヨコナデ。	底部側面に赤色顔料?の付着	V
P1131 図版313-3	甕	65次	SK-134	第2層	器高 17.8 口径 12.6 胴径 13.4 底径 4.1	(外) 底部はナデ。胴部は下から上への縦位ケズリ。口縁部は端部が凹線状にくぼむヨコナデ。 (内) 胴部はナデ。口縁部は横位ハケ後ヨコナデにより上方に突出する。	外面全体に煤付着 完形品(一部欠)	V
P1132	甕	65次	SK-134	第3層	器高 20.5 口径 15.8 胴径 17.0 底径 5.3	(外) 底部ナデ。胴部は縦位ケズリ。口縁部ヨコナデ。 (内) 胴部ナデ。口縁部ヨコナデ。	外面全体に煤付着	V
P1133	甕	65次	SK-134	第5(下)層	器高 11.7 口径 9.1 胴径 10.8 底径 3.8	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後ナデ、上半はナデ。口縁部ヨコナデ。 (内) 胴部内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	外面全体、底部裏面にも煤付着 内面底部付近に炭化物付着	V
P1134	甕	65次	SK-134	第2層	口径 12.3 胴径 13.7	(外) 胴部上半は縦位ケズリ。口縁部は端部が凹線状にくぼむヨコナデ。 (内) 胴部上半を粗い縦位ケズリ。胴部上端は横位ケズリ後ナデ。口縁部はヨコナデ。	外面全体に煤付着 内面所々に炭化物付着	V
P1135	高坏	65次	SK-134	第5(下)層	口径 20.9	(外) 坏部上半縦位ミガキ。下半は密で細い縦位ミガキ。 (内) 坏部上半は疎らな縦位ミガキ、下半も縦位ミガキ。		V
P1136	高坏	65次	SK-134	第5(下)層	口径 19.7	(外) 坏部上半はヨコナデ。下半は粗い左上がりハケ。 (内) 坏部上半はヨコナデ。下半はナデ。	坏部上半外面のみに煤付着	V
P1137	高坏	65次	SK-134	第2層	口径 23.1	(外) 坏部上半は疎らな縦位ミガキ。下半は上から下への縦位ケズリ後粗いミガキ。 (内) 粗い縦位ミガキ。		V
P1138 図版313-4	高坏	65次	SK-134	第5(下)層	器高 12.5 口径 9.1 底径 6.5	(外) 脚部縦位ミガキ。坏部はケズリ後左上がりミガキ。口縁部ヨコナデ。脚部に残存16の透孔あり。脚部にへら描直線文3条を2帯付す。 (内) 裾部ヨコナデ。脚部はケズリ後ナデ。坏部ヨコナデ後、粗いミガキ。	完形品(一部欠)	V
P1139	台付 無頸壺	65次	SK-134	第2層	底径 8.3	(外) 脚部屈曲部に2条の凹線文。胴部縦位ミガキ。3方向の透孔。 (内) 脚部左方向への横位ケズリ。胴部ミガキ。		V
P1140	台付 無頸壺	65次	SK-134	第2層	底径 8.8	(外) 脚部・胴部ケズリ後横位ミガキ。4方向の透孔。 (内) 脚部ナデ。胴部横位ミガキ。		V
P1141 図版313-5	器台	65次	SK-134	第2層	器高 16.4 口径 20.5 胴径 12.4 底径 19.0	(外) 体部は右上がりハケ。凹線文は裾部に3条、口縁部に2条。 (内) 裾部はヨコナデ。体部は左上がりハケ。口縁部ヨコナデ。	口縁内部屈曲部使用による磨滅 完形品	V



第166図 南地区出土土器 (11)

第Ⅱ章 南地区の調査

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1142 図版314-3	広口壺	65次	SD-101N	第1層	器高 22.9 口径 12.0 胴径 18.7 底径 4.5	(外) 胴部下半左上がりハケ後ナデ。胴部最大径付近は横位ハケ、上半は縦位ハケ。頸部縦位ハケ。口縁部ヨコナデ。 (内) 胴部下半ハケ後ナデ。胴部上半から頸部にかけてナデ。口縁部ヨコナデ。	胴部上端にヘラによる記号文 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1143 図版314-4	広口壺	65次	SD-101E	第1層	器高 22.3 口径 13.5 胴径 15.8 底径 4.5	(外) 胴部は縦位ミガキ。頸部は縦位ハケ後縦位ミガキ。口縁部ヨコナデ。 (内) 胴部下半を左上がりハケ。胴部最大径付近は横位ケズリ後ナデ。頸部は横位ミガキ。	胴部上端付近に赤色塗彩による記号文(不明)あり 底部磨滅する 胴部の一部に煤附着 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1144 図版314-6	広口壺	65次	SD-101N	第1層	器高 16.0 口径 9.8 胴径 13.6 底径 3.6	(外) 胴部下半は左上がりハケ。胴部中央右上がりタタキ、上半は左上がりハケ。口頸部はヨコナデ。 (内) 胴部はナデ。口頸部はヨコナデ。	胴部にヘラによる「U」 字形を主体とする3つの 記号文の組み合わせ 半完形品	Ⅵ-3
P1145 図版315-1	長頸壺	65次	SD-101E	第1層	器高 17.7 口径 8.8 胴径 10.9 底径 3.8	(外) 胴部は器面が磨滅し調整は不明。頸部縦位ハケ。 (内) 胴部ナデ。頸部は横位ハケ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1146 図版315-2	長頸壺	65次	SD-101N	第1層	器高 20.0 口径 11.7 胴径 14.0 底径 4.8	(外) 底部はタタキ後左上がりハケ。胴部下半は右上がりタタキ、上半はタタキ後ナデ。胴部上端はタタキ後縦位ハケ。頸部は縦位ハケ。口縁部に強いヨコナデによるくぼみ。 (内) 底部左上がりハケ。胴部ナデ。頸部は横位ハケ。	胴部下半に茎状工具による記号文 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1147 図版315-3	長頸壺	65次	SD-101E	第1層	器高 17.0 口径 8.7 胴径 13.5 底径 3.6	(外) 頸・胴部は縦位ミガキ。口縁部はヨコナデ。 (内) 底部から胴部は縦位ハケ。頸部はナデ後疎らな縦位ミガキ。	完形品	Ⅵ-3
P1148 図版315-4	長頸壺	65次	SD-101W	第1層	器高 13.4 口径 8.3 胴径 9.9 底径 3.4	(外) 胴部ナデ。胴部上端に櫛描き直線文(3本/0.5cm)と刺突文。頸部は縦位ハケ。 (内) 胴部ナデ。頸部左上がりハケ。	胴部中央に穿孔 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1149 図版315-5	長頸壺	65次	SD-101E	第1層	器高 10.8 口径 8.6 胴径 8.6 底径 3.0	(外) 磨滅の為、調整は不明。 (内) 口頸部ヨコナデ。胴部ナデ。	底部使用による磨滅 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1150 図版315-6	長頸壺	65次	SD-101E	第1層	器高 9.5 口径 8.3 胴径 7.7 底径 3.3	(外) 磨滅の為、調整は不明瞭。胴部はナデ。頸部は左上がりハケ後ナデ。 (内) 胴部ハケ後ナデ。頸部はナデ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1151 図版315-7	細頸壺	65次	SD-101W	第1層	口径 7.1 胴径 13.2	(外) 口縁端部に沈線文1条。頸部はケズリ後縦位ミガキ。 (内) 口頸部縦位ハケ。胴部はナデとハケ。	磨滅顕著 完形品(底部欠)	Ⅵ-3
P1152	台付壺	65次	SD-101E	第1層	胴径 10.3 底径 8.0	(外) 胴部は縦位ミガキ。脚台部はナデ。 (内) 胴部はナデ。		Ⅵ-3
P1153 図版316-1	甕	65次	SD-101W	第1層	器高 23.0 口径 15.5 胴径 17.3 底径 4.1	(外) 口縁部ヨコナデ。胴部上半は右上がりタタキ。胴部下半は横位タタキ後ナデ。底部を横位タタキ後ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部上半はナデ、下半は横位ハケ。底部左上がりハケ。	胴部下方に穿孔 完形品(一部欠)	Ⅵ-3
P1154 図版316-2	甕	65次	SD-101E	第1層	器高 28.3 口径 17.3 胴径 22.2	(外) 口縁部は左上がりハケ後、部分的にナデ。胴部上端は右上がりタタキ。胴部中央を横位タタキ。胴部下半は右上がりタタキ。 (内) 口縁部左上がりハケ。胴部上端は横位ハケ。胴部は強い横位ハケ後ナデ。胴部下半は強い縦位ハケ。	胴部煤附着 完形品(一部欠) P1155と同一作者か	Ⅵ-3
P1155	甕	65次	SD-101E	第1層	器高 28.0 口径 17.0 胴径 22.1 底径 5.4	(外) 口縁部はハケ後ヨコナデ。胴部上端は右上がりタタキ。胴部中央を横位タタキ。胴部下半は右上がりタタキ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部上端は右上がりハケ。胴部中央はハケ後ナデ。胴部下半は縦位ハケ。	胴部中央付近煤附着 P1154と同一作者か	Ⅵ-3
P1156 図版315-8	甕	65次	SD-101E	第1層	器高 22.2 口径 14.6 胴径 17.7 底径 4.4	(外) 口縁部ヨコナデ。胴部タタキ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部はハケ後ナデ。	胴部下半被熱 半完形品	Ⅵ-3
P1157 図版315-9	甕	65次	SD-101N	第1層	器高 16.5 口径 15.5 胴径 14.6 底径 4.8	(外) 口縁部ヨコナデ。胴部上半はタタキ後縦位ハケ、下半はタタキ後ハケ、その後ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ後ナデ、下半はナデ。	半完形品	Ⅵ-3



第167図 南地区出土土器 (12)

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1158 図版316-3	鉢	65次	SD-101W	第1層	器高 8.4 口径 11.7 底径 3.4	(外) ナデ。底部指頭圧痕。 (内) 胴部は左上がりハケ。	完形品	Ⅵ-3
P1159 図版316-4	有孔鉢	65次	SD-101E	第1層	器高 7.1 口径 13.2 底径 4.3	(外) 口縁部ヨコナデ。以下ナデ。 (内) 胴部は左上がりハケ。	全体に磨滅する 完形品	Ⅵ-3
P1160 図版316-5	有孔鉢	65次	SD-101E	第1層	器高 7.9 口径 11.9 底径 3.5	(外) 口縁部は右上がりタタキ。胴部は横位タタキ。底部ナデ。 (内) 口縁部ヨコナデ。胴部は左上がりハケ。	完形品 (一部欠)	Ⅵ-3
P1161 図版316-6	高坏	65次	SD-101E	第1層	器高 11.3 口径 15.5 底径 8.6	(外) 坏部上半はヨコナデ後縦位ミガキ。下半は縦位ミガキ。脚部は縦位ミガキ。4方向の透孔。 (内) 坏部上半はヨコナデ後縦位ミガキ。下半縦位ミガキ。脚部上半はしほり痕。脚裾部はヨコナデ。	完形品 (一部欠)	Ⅵ-3
P1162 図版316-7	高坏	65次	SD-101E	第1層	器高 9.1 口径 14.9 底径 7.7	(外) 坏部上半はヨコナデ。下半はナデ。脚部は縦位ハケで上部のみナデ消す。 (内) 坏部上半ヨコナデ、下半は磨滅の為不明。脚部はナデ。	完形品 (一部欠)	Ⅵ-3
P1163	器台	65次	SD-101E	第1層	口径 20.0	(外) 体部上半は縦位ミガキ、中央は縦位ミガキ。体部下方に4方向の透孔。口縁端部に竹管文を捺した円形浮文。 (内) 体部上半は横位ハケ、下半はナデと横位ハケ。口縁部は横位ミガキ。	半完形品	Ⅵ-3
P1164 図版316-8	器台	65次	SD-101E	第1層	器高 17.5 口径 18.5 底径 16.7	(外) 体部は縦位ミガキ。体部下方に5方向の透孔。口縁部はヨコナデ。 (内) 体部上端を横位ケズリ、下半はナデ。口縁部は横位ミガキ。裾部はヨコナデ。	完形品 (一部欠)	Ⅵ-3
P1165	手焙形土器	65次	SD-101N	第1層	胴径 17.2 底径 4.4	(外) 胴部最大径に刻目を有する貼付凸帯。胴部上半は不明。下半は横位タタキ。覆部の調整は不明。 (内) 底部は横位ハケ。胴部下半はハケ後ナデ、上半はナデ。覆部の調整は不明。	胴部上半から覆部にかけて被熱?	Ⅵ-3

ST-101出土土器 (第167・168図、写真図版314～316)

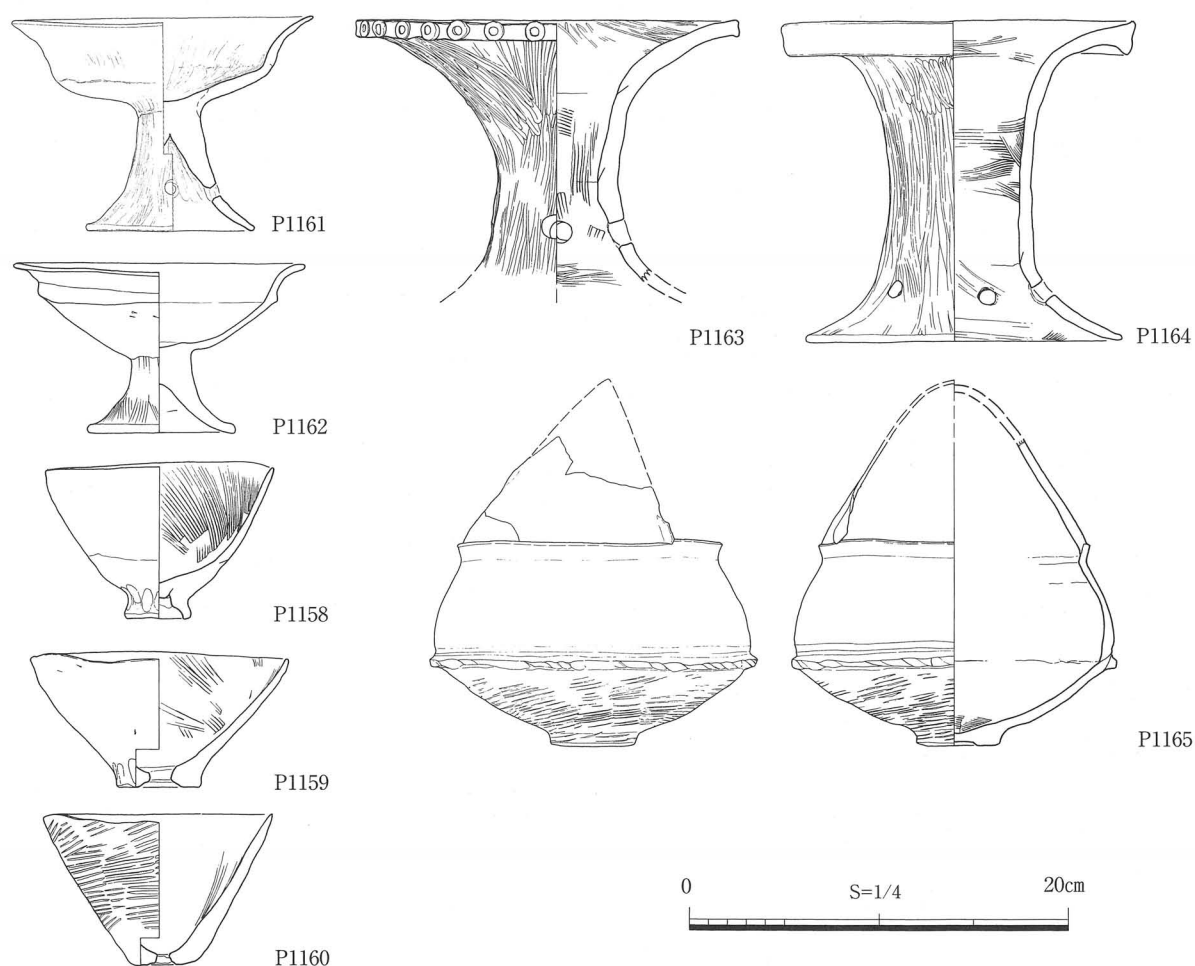
ST-101の周溝からは、コンテナ38箱 (14.1%) の土器が出土している。半・完形品だけでなく多量の破片も含んでいた。このうち、即図化可能な半・完形品24個体について、本報告に掲載した。時期は大和第Ⅵ-3様式に位置づけられるが、新しい傾向がある。

P1142～1144は広口壺で、大和第Ⅵ様式後半には中型壺の主体は長頸壺からこの広口壺へと転ずる。P1143・1144は、肩部に記号文をもつ。P1145～1150は長頸壺で、中型のものもあるが、本報告は小型に偏って掲載している。これらのうち、P1146・1147は頸胴部の屈曲が明瞭で古相を残すが、P1145・1149・1150は頸部に縮まりがなく新相を示す。特に、P1150は頸部も短く、長頸壺の最終形態とでも呼ぶべきものである。

P1153～1157は甕で、このうちP1154・1155は器形・調整・大きさ・色調・胎土が極めて類似しており同一作者の可能性が高い。口縁端部を板ナデするのも共通している。P1153・1156などは、器面のタタキ調整や端部処理の粗雑化が著しい。なお、図化していないが、台付甕も数個体認められる。

P1161・1162は高坏で、皿状の坏部に外反する口縁部をもつが、器高は10cm前後とかなり小型化している。裾の開いた脚部は短脚となり、P1162には透孔もない。

大和第Ⅵ様式の後半に出現した器種として、P1151の細頸壺、P1165の手焙形土器がある。P1165は、覆い部と口縁部の境に耳をもち、手焙としての古い様相を残している。一方、P1160の有孔鉢は、尖底から口縁部へ直線的に開いた器形で、小型鉢の新しい傾向を示している。



第168図 南地区出土土器 (13)

第65次調査区からは273箱の出土土器があり、このうち青銅器鑄造関連遺物が出土した遺構を中心に図化してきた。無論、これだけの情報量にとどまらないことは確かである。図化し得たものですら、およその傾向を示したに過ぎない。また、青銅器鑄造関連遺物が出土する遺構以外からも、良好な土器群を得ている。

本調査区においては、南接する第61次調査区と同様に、第I様式の土器をあまりみることはない。これは、本調査区が谷地形に位置することと関連し、この時期の遺構が少ないものと考えられる。SD-202の下層からは、大和第II-1様式の土器が出土するが、量的には少ない。出土土器量が増加するのは、SD-151が砂層で埋没した大和第III-2様式以降である。とりわけ、大和第IV・V様式の遺構からは51箱(18.6%)の土器が出土している。この時期の大溝があるわけでもなく、出土土器全体の約2割という数値はかなり高いものである。

先述のST-101と同じ弥生時代後期後葉の方形周溝墓であるST-102の周溝からは、9箱(3.3%)の土器が出土している。ST-101周溝と合わせて、弥生時代後期後葉の方形周溝墓からの出土土器は47箱(17.4%)となる。

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1166 図版317-1	有段 口縁壺	69次	SK-1130	第6層	口径 30.7	(外)口縁部はヨコナデ。頸部縦位ハケ。頸胸部 界に貼付凸帯を付し指頭圧痕を加える。 (内)口縁部はヨコナデ。口縁下は左上がりハケ。 以下横位ハケ。	井戸枠に転用 完形品	Ⅲ-3
P1167 図版317-3	大型甕	69次	SK-1130	第12層	口径 39.1 胴径 42.9	(外)口縁端部に刺突文がめぐる。胴部上半は左 上がりタタキ後、左下がりハケ、下半は左上 がりミガキ。 (内)口縁部は横位ハケ。胴部は左上がりハケ。	外面に煤付着、内面に 炭化物付着 底部を打ち欠き井戸枠 に転用	Ⅲ-3
P1168 図版317-2	細頸壺	69次	SK-1130	第5(下)層	口径 12.2	(外)櫛描き直線文(9本/1.5cm)を9帯施文。頸胸 部界に簾状文を施す。頸部上半は左上がり ハケ、下半は右上がりハケ。 (内)口縁部はヨコナデ。以下ハケ後ナデ。	口縁部に煤付着 頸部破損面は被熱	Ⅲ-3
P1169 図版317-4	広口壺	69次	SK-1137	第10層	器高 26.9 口径 13.6 胴径 20.9 底径 5.2	(外)口縁部と頸部上半はヨコナデ。以下胴部中 央まで縦位ハケ。胴部下ケズリ後縦位ミ ガキ。底部付近ヨコナデ。 (内)口頸部ヨコナデ。胴部縦位ハケ。底部ハケ 後ナデ。	完形品	Ⅲ-3
P1170 図版317-5	高坏	69次	SK-1137	第7層	器高 11.1 口径 12.9 底径 6.4	(外)口縁部ヨコナデ。坏部は左上がりミガキ。脚 部を縦位ミガキ。裾部はヨコナデ。凹線文は 口縁部に3条と裾部に1条。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は横位ハケ。脚上部 はしぼり痕。以下ケズリ、脚裾部をヨコナデ。	完形品	Ⅲ-3
P1171 図版317-6	高坏	69次	SK-1137	第7層	口径 24.8	(外)口縁部に凹線文4条。坏部はタタキ後ケズ リ、その後左上がりミガキ。脚部は縦位ミ ガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は縦位ミガキ。中央部 のみ横位ミガキを加える。	脚部破断面を丁寧に 研磨する 内外面全面に煤付着 完形品(一部欠)	Ⅲ-3

(3) 第69次調査

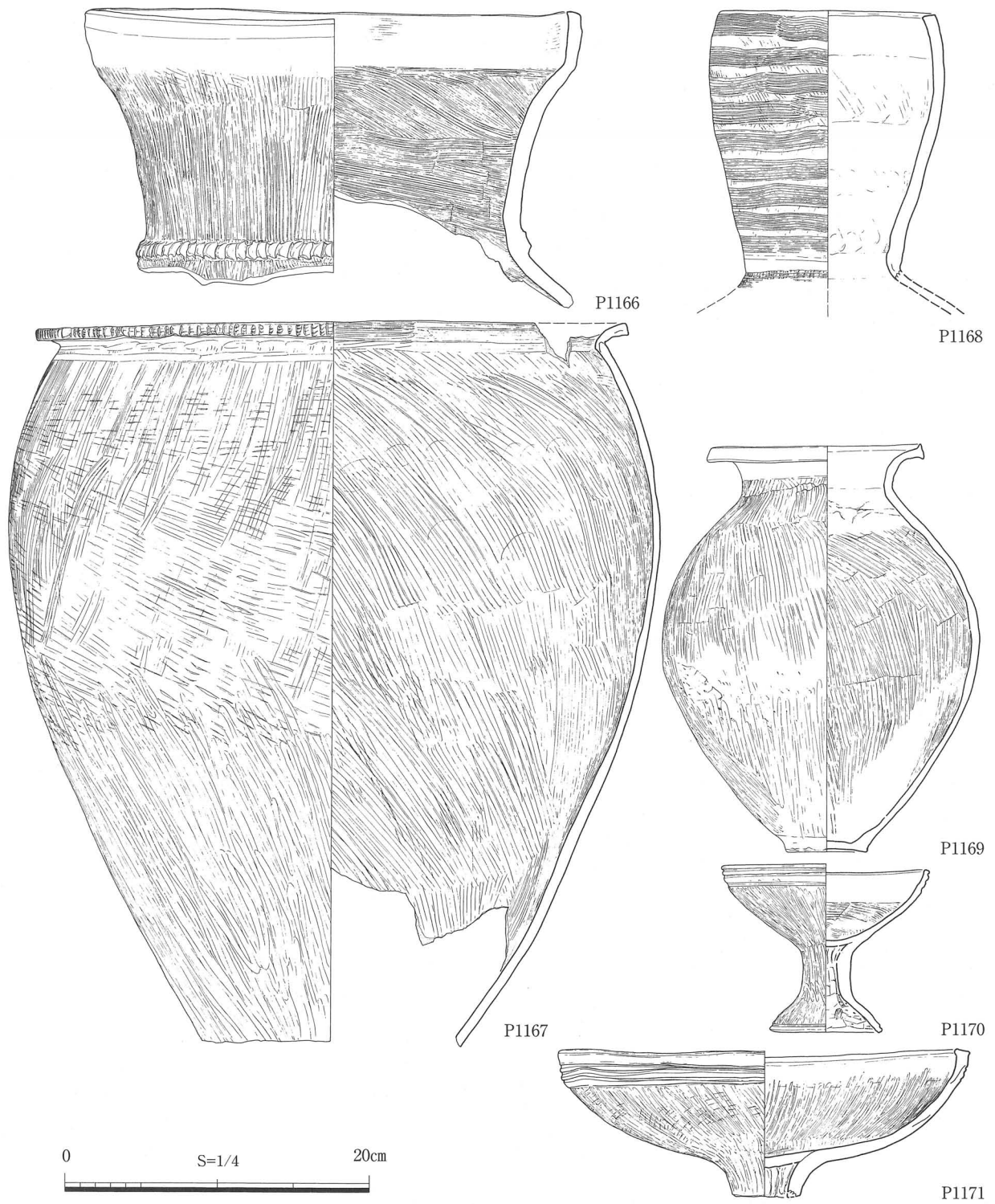
第65次調査区では調査終了時において、遺物コンテナ(巾340×奥540×高150^{mm})総数は約930箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は748箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、2割減である。また、調査面積922^mであるから、1^mあたり0.81箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ748箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝213箱(28.5%)、弥生時代土坑111箱(14.8%)、弥生時代溝420箱(56.1%)、柱穴群2箱(0.3%)、弥生時代土器棺墓1箱(0.1%)、河跡1箱(0.1%)である。

SK-1130出土土器(第169図、写真図版317)

SK-1130からは、コンテナ10箱(1.3%)の土器が出土している。SK-1130は集水施設で、その枠として大型の「芝形甕」(P1167)と有段口縁壺の口縁部(P1166)が使用されていた。本報告では、大和第Ⅲ-3様式の典型であるこれらの器種を図化した。また、SK-1130は集水施設としての機能を停止した後に、その上面に堆積した中層から多量の大和第Ⅲ-3様式の土器が出土している。図化した細頸壺口縁部(P1168)はそのうちのわずか1個体に過ぎない。

SK-1137出土土器(第169図、写真図版317)

SK-1137からは、コンテナ12箱(1.6%)の土器が出土している。とりわけ、上層下位から中層上位にかけては廃棄坑として利用されていたらしく、多量の土器が出土している。しかし、図化し得たのは、下層下位から出土した広口壺(P1169)、中層下位から出土した脚部を切断した高坏(P1171)と小型高坏(P1170)の3個体に過ぎない。いずれも凹線文出現期である大和第Ⅲ-3様式の特徴をもつ。



第169図 南地区出土土器 (14)

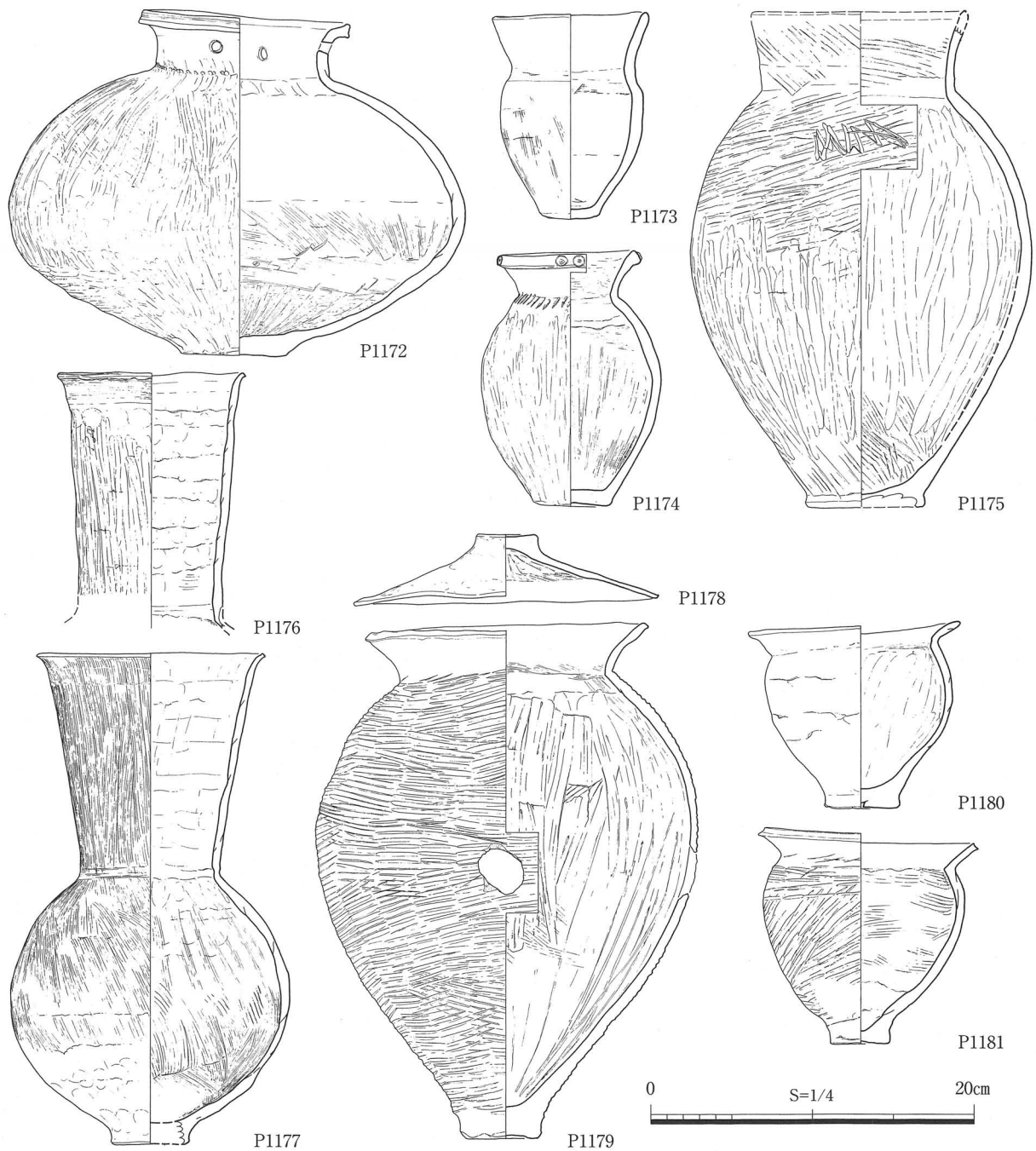
遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1172	無頸壺	69次	SD-1109	第6層	器高 21.5 口径 12.5 胴径 28.3 底径 6.6	(外)口頸部ヨコナデ。体部上半は左上がりハケ後縦位ミガキ。下半は縦位と横位ミガキ。頸部に2個一対の紐孔。 (内)口頸部ヨコナデ。体部上半はナデ、下半ハケ。底部横位ミガキ後縦位ミガキ。	底部裏面の縁辺磨減 完形品	V-2
P1173	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 12.9 口径 9.0 胴径 8.9 底径 2.9	(外)口頸部ヨコナデ。胴部縦位ハケ。 (内)口頸部ヨコナデ。胴部上端横位ハケ。胴部ナデ。	底部不安定で自立しない	VI-1
P1174	短頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 15.9 口径 8.1 胴径 11.1 底径 4.2	(外)口縁部ヨコナデ。口縁端部に2個一対の円形浮文を4方向に配す。頸胴部屈曲部に連続刺突文。胴部は縦位ミガキ。 (内)口頸部は横位ミガキ。胴部ナデ。	完形品(一部欠)	V-2
P1175 図版318-1	短頸壺	69次	SD-1109	第6層	器高 30.9 口径 21.1 底径 7.1	(外)口縁部はヨコナデ。頸部左上がりハケ。胴部上半は右上がりタタキ、下半は縦位ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部を縦位ハケ。底部は左上がりハケ。	胴部上半にヘラ描記号文 胴部に煤付着 完形品(一部欠)	V-2
P1176	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	口径 11.0	(外)口縁部ヨコナデ。以下縦位ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。以下ナデ。		VI-1
P1177	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 30.4 口径 13.7 胴径 17.2 底径 5.0	(外)口縁部ヨコナデ。頸部は縦位ハケ。体部上半を左上がりハケ。底部ナデ。 (内)口縁部ナデ。体部上半はハケ後ナデ。	完形品(一部欠)	VI-1
P1178	甕蓋	69次	SD-1109	第5(下)- d層	器高 4.4 裾径 18.6 摘み部径 3.8	(外)裾部ヨコナデ。体部・摘み部はナデ。 (内)裾部ヨコナデ。体部は右上がりハケと横位ハケ。	内面煤付着	VI-1
P1179 図版318-2	甕	69次	SD-1109	第6層	器高 32.0 口径 16.7 胴径 23.6 底径 4.5	(外)口縁部ヨコナデ。胴部上半は右上がりタタキ、胴部中央を横位タタキ、胴部下半は左上がりタタキ後部分的に右上がりタタキ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部はハケ後、粗いケズリ。	胴部中央に左右一対の 穿孔 外面に煤付着顕著 内面胴部に炭化物付着 完形品	VI-1
P1180	甕	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 11.6 口径 12.1 胴径 11.5 底径 4.0	(外)口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	胴部に煤付着 完形品(一部欠)	VI-1
P1181	甕	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 13.4 口径 12.9 胴径 12.5 底径 3.7	(外)口縁部ヨコナデ。胴部上端は横位タタキ、胴部は右上がりタタキ。底部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部は横位ハケ後ナデ。底部ナデ。	底部付近に煤付着	VI-1

SD-1109C 出土土器 (第170~173図、写真図版318・319)

SD-1109は調査区南端で検出した環濠で、コンテナ144箱(19.3%)の土器が出土している。調査時はSD-1109として上層から下層まで掘り下げたが、本報告においては調査区壁断面の土層線と出土土器から、それぞれ1109C(弥生時代中期後葉~後期前葉)・1109B(弥生時代後期後葉)・1109(古墳時代初頭)に分離して表記している。遺物取り上げ層位の第5(下)~6(下)層は、SD-1109Cに対応する。第6(下)層は大和第IV様式を含んで大和第V様式が主体であるが、第5(下)~6層は大和第V様式と第VI様式が混在する。なお、第5層はSD-1109Bに対応するが、弥生時代後期前葉の土器も含んでいる。

本報告において図化したのはこのうち、SD-1109Cとなる遺物取り上げ層位第5(下)~6(下)層から出土した大和第V~VI-1様式の土器である。また、一部に第5層出土の大和第VI-1様式の土器も含んでいる。第170・171図は、第V~VI-1様式の土器を器種ごとに配置した。第172図は同一作者と考えられるほど類似した広口長頸壺を、第173図は記号文をもつ長頸壺を配置した。

大和第V様式として、壺3個体・鉢2個体・台付鉢1個体・高坏5個体・器台2個体を図化した。P1172は無頸壺で、下膨れとなる胴部の張りが特徴である。P1175は大和第V様式に



第170図 南地区出土土器 (15)

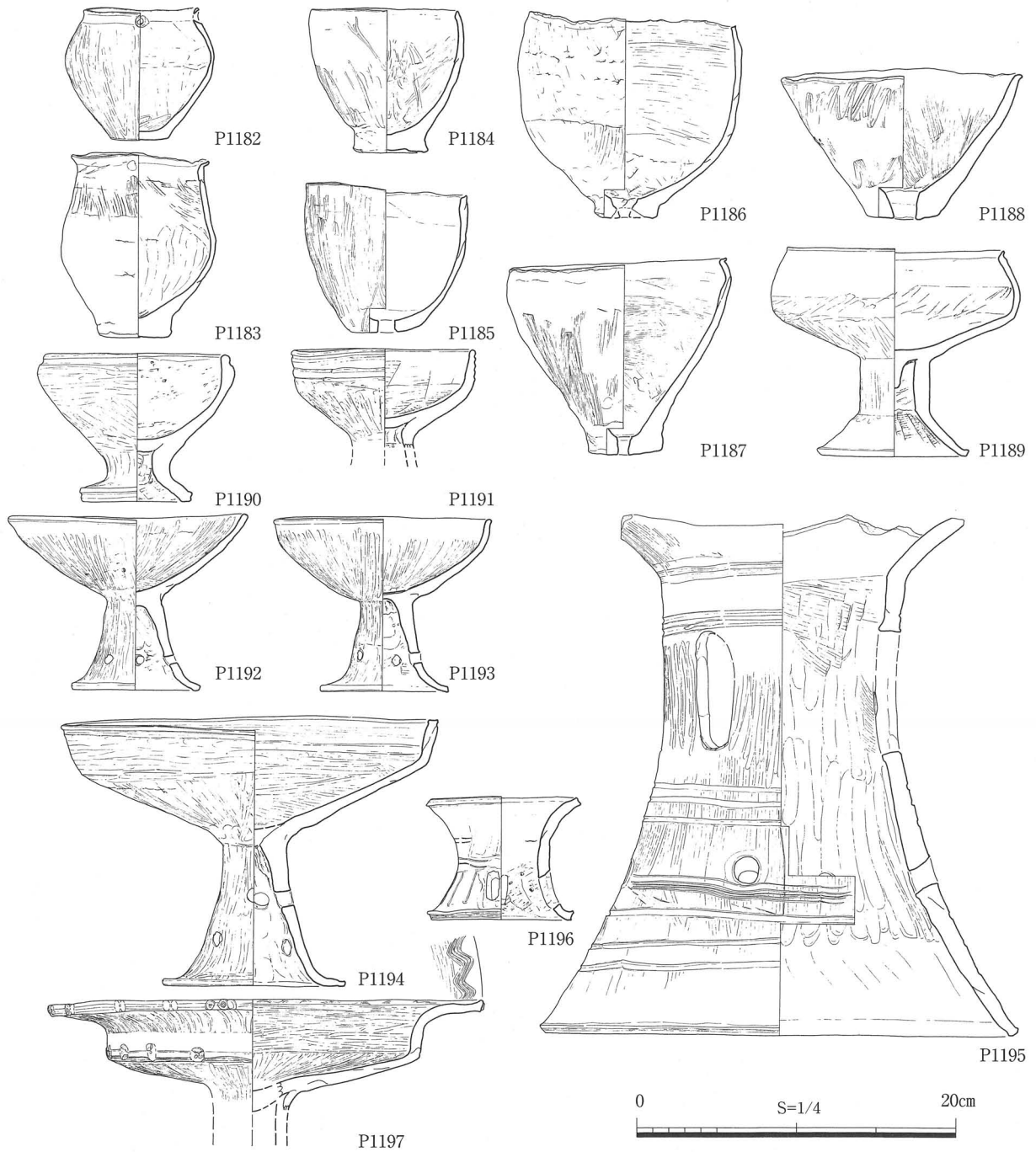
典型的な短頸壺である。

P 1190～1194は高坏であるが、ハの字に開いた脚部が裾でわずかに折れ曲がるのがこの様式の特徴を良く表している。P 1189は台付鉢であるが、柱状の脚部にハの字に開いた裾部も本様式の特徴である。

P 1195・1196は器台で、長楕円形の透孔が本様式の特徴を示している。

第Ⅱ章 南地区の調査

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1182	無頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 8.3 口径 6.7 胴径 9.3 底径 3.5	(外)口縁部ヨコナデ。胴部縦位ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。最大胴部付近を横位ナデ。 他はナデ。底部のみミガキ。	口縁部に左右一對の丁寧な穿孔を付し、紐孔とする 完形品	Ⅵ-1
P1183	鉢	69次	SD-1109	第6層	器高 11.6 口径 8.4 胴径 9.6 底径 4.3	(外)口縁部ヨコナデ。胴部上端は縦位ハケ。胴部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部上端は左上がりハケ。胴部ナデ。	外面全面に煤付着 完形品(一部欠)	Ⅵ-1
P1184	鉢	69次	SD-1109	第6層	器高 9.1 口径 9.0 底径 4.3	(外)口縁部ヨコナデ。胴部を縦位ミガキ。底部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部から底部を縦位ミガキ。	口縁部のみ器表面磨減 完形品	Ⅵ-1
P1185	有孔鉢	69次	SD-1109	第6層	器高 9.5 口径 10.0 底径 4.0	(外)口縁部ヨコナデ。胴部は縦位ミガキ。底部裏面はハケ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部から底部を縦位ミガキ。	底部の孔は偏る 完形品(一部欠)	Ⅵ-1
P1186	有孔鉢	69次	SD-1109	第5層	器高 13.0 口径 12.4 底径 3.9	(外)ミガキか?保存不良のため調整は不明瞭。 (内)胴部上半は横位ハケ。底部左上がりハケ。	完形品(一部欠)	Ⅵ-1
P1187	有孔鉢	69次	SD-1109	第6層	器高 12.5 口径 12.8 底径 4.6	(外)口縁部ヨコナデ。胴部は縦位ハケ。底部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部上端は横位ハケ。下半を縦位ハケ。	完形品(一部欠)	V-2
P1188	有孔鉢	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 9.5 口径 14.2 底径 4.3	(外)胴部はナデ。口縁部付近に板状工具による波状文を施文。 (内)口縁部ヨコナデ。胴部は左上がりハケ。	平面形はやや楕円形 完形品	V-2
P1189	台付鉢	69次	SD-1109	第6層	器高 13.2 口径 13.4 底径 9.0	(外)口縁部ヨコナデ。坏部上半は右上がりミガキ、下半縦位ミガキ。脚柱部縦位ミガキ、裾部ヨコナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部はナデ。脚柱部ナデ、裾部は横位ハケ。	坏部内外面に煤付着 完形品(一部欠)	V-2
P1190	高坏	69次	SD-1109	第6層	器高 9.4 口径 10.4 底径 5.5	(外)口縁部に凹線文1条。坏部上半ケズリ後横位ミガキ、下半左上がりミガキ。脚部縦位ミガキ。脚裾部ヨコナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は横位ケズリ後ナデ。脚部横位ケズリ。	外面煤付着、内面炭化物の付着	V-1
P1191	高坏	69次	SD-1109	第6層	口径 10.7	(外)口縁部に凹線文3条。以下ケズリ後粗い縦位ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は横位ハケ。		V-1
P1192	高坏	69次	SD-1109	第6層	器高 11.2 口径 14.4 底径 7.1	(外)口縁部ヨコナデ。坏部はケズリ後縦位ミガキ。脚部は縦位ミガキ。脚裾部ヨコナデ。透孔は5方向。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は縦位ミガキ、中央部を横位ミガキ。脚部ナデとケズリ。脚裾部はヨコナデ。	坏部外面と脚内面に煤付着 半完形品	V-2
P1193	高坏	69次	SD-1109	第6層	器高 11.1 口径 12.8 底径 7.8	(外)口縁部ヨコナデ。坏部は縦位ミガキ。脚部は縦位ハケ後縦位ミガキ。脚裾部ヨコナデ。透孔は5方向。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部は縦位ミガキ。脚部しぼり痕、ハケ後ナデ。脚裾部ヨコナデ。	完形品(一部欠)	V-2
P1194	高坏	69次	SD-1109	第6層	器高 16.9 口径 22.3 底径 10.5	(外)口縁部ヨコナデ。坏部上半は横位ミガキ。坏部ケズリ後縦位ミガキ。脚部を縦位ミガキ。脚裾部ヨコナデ。透孔は3個一對を2方向。 (内)口縁部ヨコナデ。坏部下半はミガキ。脚部しぼり痕。脚裾部ヨコナデ。	半完形品	V-2
P1195	器台	69次	SD-1109	第6層	底径 30.0	(外)口縁部への屈曲部に櫛描き直線文(5本/1.1cm)。以下凹線文は2条、楕円形の透孔をはさんで3条、円形の透孔をはさんで3条。楕円形の透孔は3方向、円形の透孔は5方向。口縁部の破断面は磨減する。 (内)口縁部磨減。体部は横位ハケ後縦位の強いナデ。脚裾部はナデとヨコナデ。	円形透孔付近に櫛描き直線文とその反対側に櫛描きによる「V」字を付す	V-2
P1196	器台	69次	SD-1109	第6(下)層	器高 7.8 口径 8.8 底径 7.9	(外)口縁部、脚裾部はヨコナデ。体部中央に2条の直線文と、透孔の間に縦線2本を描く。透孔は長楕円形で4方向。 (内)口縁部ヨコナデ。体部ナデ。脚部ケズリ。	口縁部外面に一部煤付着 半完形品	V-2
P1197	結合形土器	69次	SD-1109	第5(下)層	口径 26.7	(外)坏部上半に暗文風の縦位ミガキ。屈曲部をヨコナデ後に凹線文2条。坏部下半はハケ後粗い縦位ミガキ。口縁部には2個一對の、屈曲部には単体の、竹管文を付す円形浮文。 (内)口縁部はヨコナデ後櫛描き波状文(6本/0.9cm)。坏部上半横位ミガキ、下半を縦位ミガキ。	半完形品	Ⅵ-1



第171図 南地区出土土器 (16)

大和第Ⅵ-1様式として、壺4個体・甕蓋1個体・甕3個体・鉢4個体・高坏5個体・結合形土器1個体を図化した。P1176・1177は長頸壺で、口縁部はわずかに開き端部に面をもつ。P1177のように胴部が球体となるのも大和第Ⅵ-1様式の特徴といえよう。

P1179は甕で、胴部上半から底部に向かって細くすぼまった胴部下半、口縁端部の面、深く刻まれた丁寧なタタキなどが大和第Ⅵ-1様式の特徴を示している。

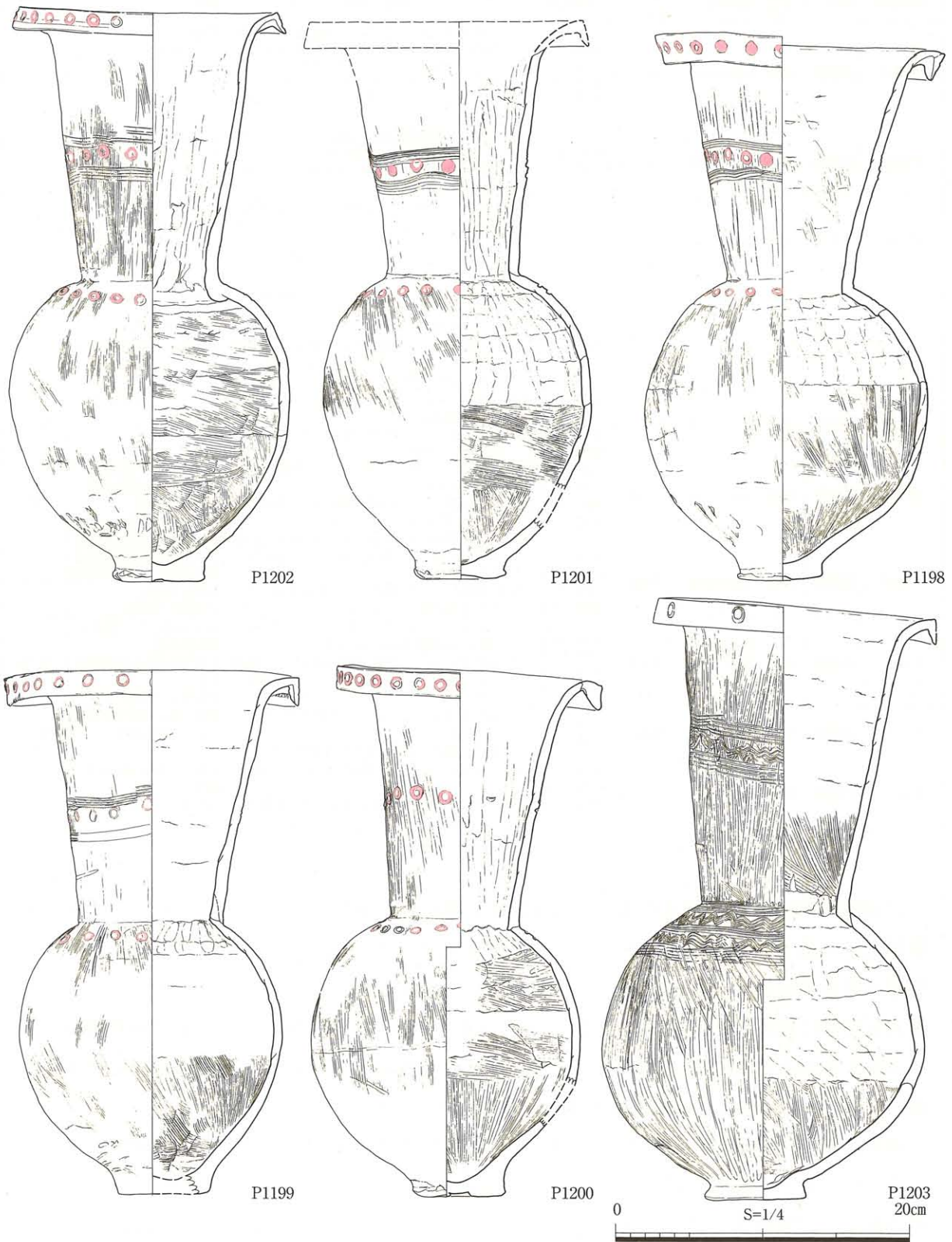
遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1198 図版318-3	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	器高 37.4 口径 19.9 胴径 19.3 底径 5.8	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部縦位ハケ。口縁端部、頸部中央、胴部上端に赤色塗彩の竹管文。頸部竹管文の上下に4条の櫛描き直線文(4本/0.7cm)。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ハケ後ナデ。胴部上端はナデ、指頭圧痕。胴部下半は縦位ハケ。	口縁直下に1ヶ所縦位の赤色塗彩を付す頸胴部界に赤色帯をめぐらす 底部は非常に不安定半完形品	VI-1
P1199 図版318-4	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	器高 35.6 口径 19.2 胴径 17.9	(外)口縁部ヨコナデ。頸部上半は縦位ハケ、下半ミガキ。胴部は縦位ハケ。口縁端部、頸部中央、肩部に赤色塗彩竹管文。頸部竹管文の上下に櫛描き直線文(4本/0.8cm)。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部上半はナデ、下半は左上がりハケ。底部横位ハケ。		VI-1
P1200 図版319-1	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	器高 36.2 口径 15.6 胴径 18.3 底径 5.4	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部は縦位ハケ。口縁端部、頸部中央、胴部上端に赤色塗彩竹管文。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部指押さえ後横位ハケ。底部縦位ハケ。	底部磨減	VI-1
P1201 図版319-2	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	胴径 18.3 底径 5.2	(外)頸部ハケ後ナデ。胴部上端は右下がりハケ、以下ナデ。頸部中央と胴部上端に赤色塗彩の竹管文。頸部の竹管文を施文後その上下に櫛描き直線文(5本/1.0cm)。 (内)頸部縦位ミガキ。胴部上端は指頭圧痕。胴部は横位ハケ。底部縦位ハケ。		VI-1
P1202 図版319-3	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	器高 39.2 口径 17.4 胴径 19.1 底径 5.4	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部縦位ハケ。底部ナデ。口縁端部、頸部中央、胴部上端に赤色塗彩の竹管文。頸部中央の竹管文の上下に櫛描き直線文(5本/1.0cm)。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ナデ、ミガキ。胴部は横位ハケ。底部左上がりハケ。		VI-1
P1203 図版319-4	広口 長頸壺	69次	SD-1109	第5-c層	器高 41.1 口径 18.1 胴径 22.0 底径 6.4	(外)口縁部ヨコナデ。頸部縦位ハケ。胴部上端は右下がりハケ。胴部ミガキ。口縁端部に竹管文。頸部中央に櫛描き波状文(5本/1.1cm)とその上下に直線文。胴部上端に櫛描き直線文3帯とその間に波状文を1帯ずつ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部上半をナデ、下半は左上がりハケ。胴部上半ナデ。胴部下半から底部は縦位ハケ。	反対側の最下段の直線文直下に渦巻文を描くが、ミガキによって消される	VI-1

P 1184～1186は小型鉢で、器形や調整に統一性がなく、大和第Ⅵ様式後葉の小型鉢のように定形化していない。

P 1198～1203の6個体は、器形・文様構成・調整・大きさ・色調・胎土が極めて類似する広口長頸壺である。いずれも、器高が35cmを超えた大型品であり、頸部中位と肩部及び口縁端部に文様帯をもつ。P 1198～1202は竹管文を施すが、そのうちのP 1200を除いて頸部中位の竹管文は上下を櫛描き直線文によって画される。これらの文様構成は極めて画一的であり、破片での個体識別は困難である。

そのなかにおいて、P 1203は竹管文を波状文に置き換えており、肩部は直線文に区切られた波状文2段構成である。口縁端部の竹管文もまばらで文様構成が他とは異なっている。この文様構成の違いは器形とも相関性をもち、P 1203は他より器高が高く胴部も球体である。これを、作者の違いとみるか、同一作者における作風の変移とみるかは難しい。なお、P 1198～1202については、竹管文などに赤色塗彩の痕跡を確認しており、その非常に丁寧な作りと合わせて特殊な土器であったことが想定される。

こうした大型の器形で、長大な頸部をもち、粘土紐貼り足しによる垂下口縁をもつ広口長頸壺は、大和第Ⅵ-1様式に位置づけられる。

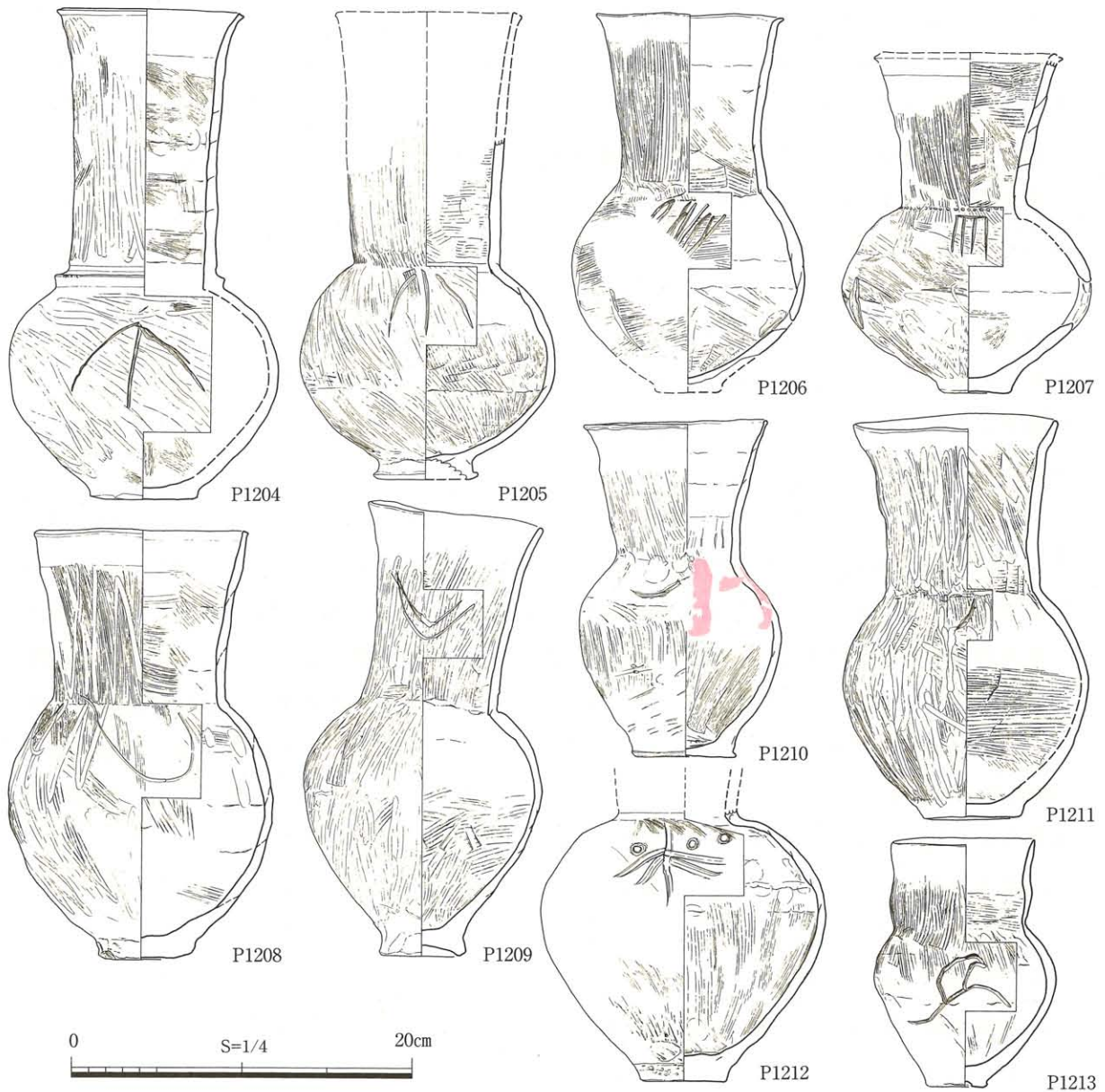


第172図 南地区出土土器 (17)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P1204	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 28.9 口径 10.3 胴径 15.8 底径 5.3	(外)口縁部ヨコナデ。頸部ハケ後縦位ミガキ。頸部屈曲部に貼付凸帯。胴部上端は横位ミガキ、下半を左上がりミガキ。底部ヨコナデ。底部の角を鋭利にそぎ落とす。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部横位ハケ。胴部縦位ハケ。	胴部に上向三叉のヘラによる記号文 完形品	V-2
P1205	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	胴径 15.0 底径 5.5	(外)頸部ハケ後縦位ミガキ。胴部は左上がりミガキ。胴部中央付近に横位のケズリ。 (内)頸部は横位ハケ。胴部上端ナデ、以下を左上がりハケ。	胴部上半に上向三叉状のヘラによる記号文	VI-1
P1206	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	口径 10.7 胴径 13.6	(外)口縁部ヨコナデ。頸部は縦位ハケ。胴部横位ハケ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部上半ナデ、下半は左上がりハケ。底部籠状ハケ。	胴部上半に記号文 胴部下半に穿孔 半完形品(底部剥離)	VI-1
P1207	長頸壺	69次	SD-1109	第5層	胴径 14.7 底径 3.8	(外)口縁部ヨコナデ。頸部縦位ハケ。頸部屈曲部に刺突文。胴部上半横位ハケ、胴部下半はハケ後縦位ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部上半は横位ハケ、下半を縦・横位ハケ。胴部上半ナデ、下半は縦位ハケ。底部横位ハケ。	胴部上半にヘラ描記号文と左45度の位置の胴部に穿孔 完形品(口縁部欠)	V-2
P1208	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 25.3 口径 11.9 胴径 15.5 底径 4.0	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部は縦位ハケ後粗いミガキ。底部をヨコナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部を縦・横位ハケ後ナデ。	胴部上半に「U」字のヘラ描記号文	VI-1
P1209	長頸壺	69次	SD-1109	第6層	器高 26.8 口径 10.0 胴径 14.0 底径 4.5	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部はハケ後縦位ミガキ。底部をナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は縦位ハケ。胴部上半ナデ、下半は右上がりハケ。	頸部中央に二重の「V」字によるヘラ描記号文 外面に煤付着 完形品(一部欠)	V-2
P1210	長頸壺	69次	SD-1109	第5層	器高 20.0 口径 10.4 胴径 11.8 底径 5.8	(外)口縁部ヨコナデ。頸部は左上がりハケ。胴部上端ハケ後ナデ。胴部は縦位ハケ。底部タタキ後ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部上端ナデ、下半は右上がりハケ。	肩部にヘラによる記号文と赤色顔料による記号文 底部付近にも円形の赤色顔料付着あり 完形品(一部欠)	VI-1
P1211	長頸壺	69次	SD-1109	第6層	器高 23.9 口径 11.6 胴径 14.4 底径 5.6	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部は縦位ハケ後縦位ミガキ。底部裏面ハケ後ミガキ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は粗い縦位ハケ。頸部下端を横位ハケ。胴部上半ナデ、下半横位ハケ。底部ナデ。	胴部上端に「ノ」字のヘラ描記号文 記号文を前にして前傾となる 完形品(一部欠)	V-2
P1212	長頸壺	69次	SD-1109	第6層	胴径 16.7 底径 4.7	(外)胴部上端は右下がりハケ。胴部ナデ。底部ケズリ後右下がりハケ。 (内)胴部上端はナデ。胴部下半は縦位ハケ。	胴部上端に竹管文と茎状工具による記号文	VI-1
P1213	長頸壺	69次	SD-1109	第5(下)層	器高 14.6 口径 8.2 胴径 10.7 底径 3.3	(外)口縁部ヨコナデ。頸・胴部は縦位ハケ。底部ナデ。 (内)口縁部ヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部はナデと一部ハケ。	胴部に二股原体による記号文 完形品	VI-1

P1204～1213は、記号文の施された長頸壺を集めた。P1204・1205は、上向きの三叉文を胴部上半に施す。P1206は、右上がりの斜線を胴部上半に施す。P1207は、横線1条の下に縦線4条を加え胴部上半に施す。P1208は、U字文を胴部上半に施す。P1209は、二重のV字文を頸部に施す。P1210・1211は、「ノ」の字文を胴部上半に施す。P1210は赤色顔料による彩文をもつ。P1212は、竹管文と「木」の字文を胴部上半に施す。P1213は、蛇行する横線の上にヒレ状となる沈線文を加え胴部中央に施す。

本溝において多量の土器が出土したのは、本報告ではSD-1109Bとした遺物取り上げ層位第5層である。大和第VI-3～4様式の土器が、溝両肩から足の踏み場もなく出土した。溝中央部は、古墳時代初頭の再掘削によってまばらであったが、本報告でSD-1109とする遺物取り上げ層位第1～4(下)層に布留式よりも多くの大和第VI-3～4様式の土器が含まれることから、両肩と同様な状況であったと推測できる。同一溝である第33次SD-109上層の出土土器は、『田原本町埋蔵文化財調査概要』11の第32図に掲載されている。参照されたい。



第173図 南地区出土土器 (18)

第69次調査では、コンテナ数にして748箱という出土土器量があり、範囲（内容）確認調査11件のうち最多となる。本報告における土坑2基、溝1条からのピックアップによる図化が、本調査出土土器全体の傾向を示すものでないことは、言うまでもない。特に、本調査では、環濠に取り付く区画溝としてSD-1101(B)・1102(B)・1104(B)を検出しており、204箱(27%)もの土器が出土している。本遺跡の南地区中核を囲んだ溝として調査当時から注目を集めていただけに、今回の図面未掲載は慚愧の念に耐えない。主要遺構の出土土器について、傾向だけでも文章化しておく。

本調査区で、最古の土器が出土したのは、弥生時代前期河跡のSR-1201である。SR-1201からは直口の甕（鉢）や大型鉢が出土しており、その特徴から大和第Ⅰ-Ⅰ様式に位置づけられる。本河跡との関係か、本調査区周辺においては縄文時代晩期後半の凸帯文土器や木葉文を施した前期弥生土器片（P5112）などが、包含層や異なる時期の遺構から出土する。しかし、本調査区で、大和第Ⅰ様式の明確な遺構を検出することはできない。

本調査区が居住域としての機能をもつのは、SD-1110の掘削からであろう。本調査区の最南端で検出した大溝のSD-1110は、SD-1109に先行する環濠と考えられる。SD-1110からは、2箱（0.3%）の土器が出土している。このうち、最下層となる黒色粘砂からは大和第Ⅱ-Ⅰ様式の土器片が出土しているが、10数片に過ぎない。上層の下位からは1箱の土器片が出土しているが、ヘラ描き直線文と櫛描き直線文が混在しており、大和第Ⅱ-Ⅱ様式の特徴を示している。また、上層においては大和第Ⅱ-Ⅲ様式の土器も出土するが、これは上面から掘り込まれた土坑に伴うものであろう。

先述したように、本調査区の重要な遺構として、区画溝のSD-1101（B）・1102（B）・1104（B）がある。SD-1101B・1104Bが最初に掘削された区画溝で、51箱（6.8%）の土器が出土している。その中には再掘削溝の大和第Ⅵ様式後半土器が混入するが、大和第Ⅳ～Ⅴ様式の土器が主体である。このうち、残存度が高いのは大和第Ⅴ様式である。また、再掘削溝であるSD-1101・1104からは73箱（9.7%）の土器が出土し大和第Ⅵ-Ⅱ・Ⅲ様式を主体とし、再々掘削溝であるSD-1102B・1102からは80箱（10.6%）の土器が出土し大和第Ⅵ-Ⅲ様式を主体とする。特に、SD-1102・1104の最上層から出土する土器群は、半・完形品を多数含んでおり、環濠であるSD-1109と同様に意図的な廃棄がうかがえる。

区画溝のSD-1101B・1104B、環濠のSD-1109C、これらの掘削は大和第Ⅳ様式におこなわれたと考えられる。本調査区においては、この大和第Ⅳ様式の遺構が集中しており、SK-1102で4箱（0.5%）、SK-1124で1箱（0.1%）、SK-1126で2箱（0.3%）、SK-1133で1箱（0.1%）、SK-1136で2箱（0.3%）、SK-1140で1箱（0.1%）、SK-1148で1箱（0.1%）、SD-1122で6箱（0.8%）、SD-1123で1箱（0.1%）、SD-1125で10箱（1.3%）、SD-1126で1箱（0.1%）、SD-1128・1129で1箱（0.1%）、SD-1136で中袋1と、合計31箱（4.1%）の土器が出土している。その数値は上層に大和第Ⅴ様式の土器を含むため大和第Ⅳ様式として単純な数値ではないが、先のSD-1109やSD-1101B・1104Bの大和第Ⅳ様式も含めれば、本調査区出土土器のうち一定量を占めていることになる。このことは、第65次調査区とも共通する。他地区では希薄な大和第Ⅳ様式が南地区において集中することは、大和第Ⅴ様式盛行の端緒となった可能性がある。

本調査区では、布留0式の遺構も検出している。布留0式の遺構となるSK-1123で2箱（0.3%）、SK-1125で2箱（0.3%）、SD-1106で12箱（1.6%）の土器が出土している。これら出土土器の大半は弥生土器であり、布留0式土器の量はわずかに過ぎない。また、SD-1109でも、多量の弥生時代後期後葉土器に混じって布留0式土器が出土している。

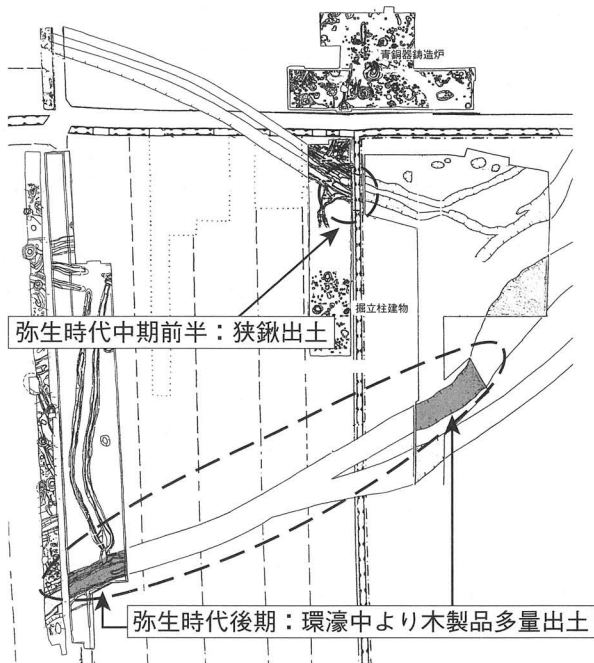
2. 木製品

唐古・鍵遺跡の南地区から出土した木製品は、調査数が多くその面積も広範囲に及ぶこともあり、他地区と比較して資料が豊富である。

今回報告分の南地区の木製品総数は251点で、その内訳を第30表に示した。他地区と比較して農具が豊富で、未成品や狭楾が多くみられる。

特筆すべき遺構として、第69次調査のSD-1109（環濠）から弥生時代後期の木製品がまとまって出土した。このSD-1109は、第3次調査のSD-02とつながり、ここからも多くの木製品が出土している（写真4）ことから、集落南側の環濠内には多量の木製品が貯木され、木製品の製作がおこなわれていたと想定できる。また、第61次調査では南地区を区画する溝SD-151から弥生時代中期前半の狭楾が多く出土しているのが特徴的である。第65次調査は、集落（環濠）内の調査のため、建築部材などの木製品が出土している。

なお、木製品の分類や各部名称については基本的に『木器集成図録』^①を倣うこととする。



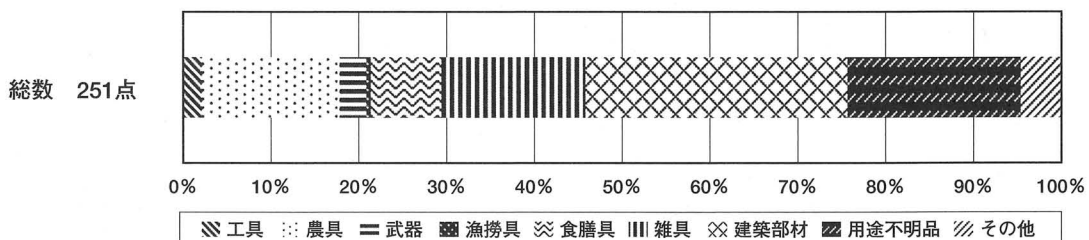
第174図 南地区木製品出土地点図



写真4 環濠出土農具未成品（第3次調査）

第30表 南地区出土木製品の器種組成

総数	工具	農具	武器	漁撈具	食膳具	雑具	建築部材	用途不明品	その他
251	6	39	8	1	20	41	75	49	12



(1) 工具

膝柄斧柄未成品 (W1001) W1001は非常に小形であり、斧柄とするには強度面などで疑問が残り、他の用途の可能性もある。一部樹皮が残存しており未成品と思われる。斧台部は先細りに粗く加工され、柄部は非常に細い形状である。

(2) 農具

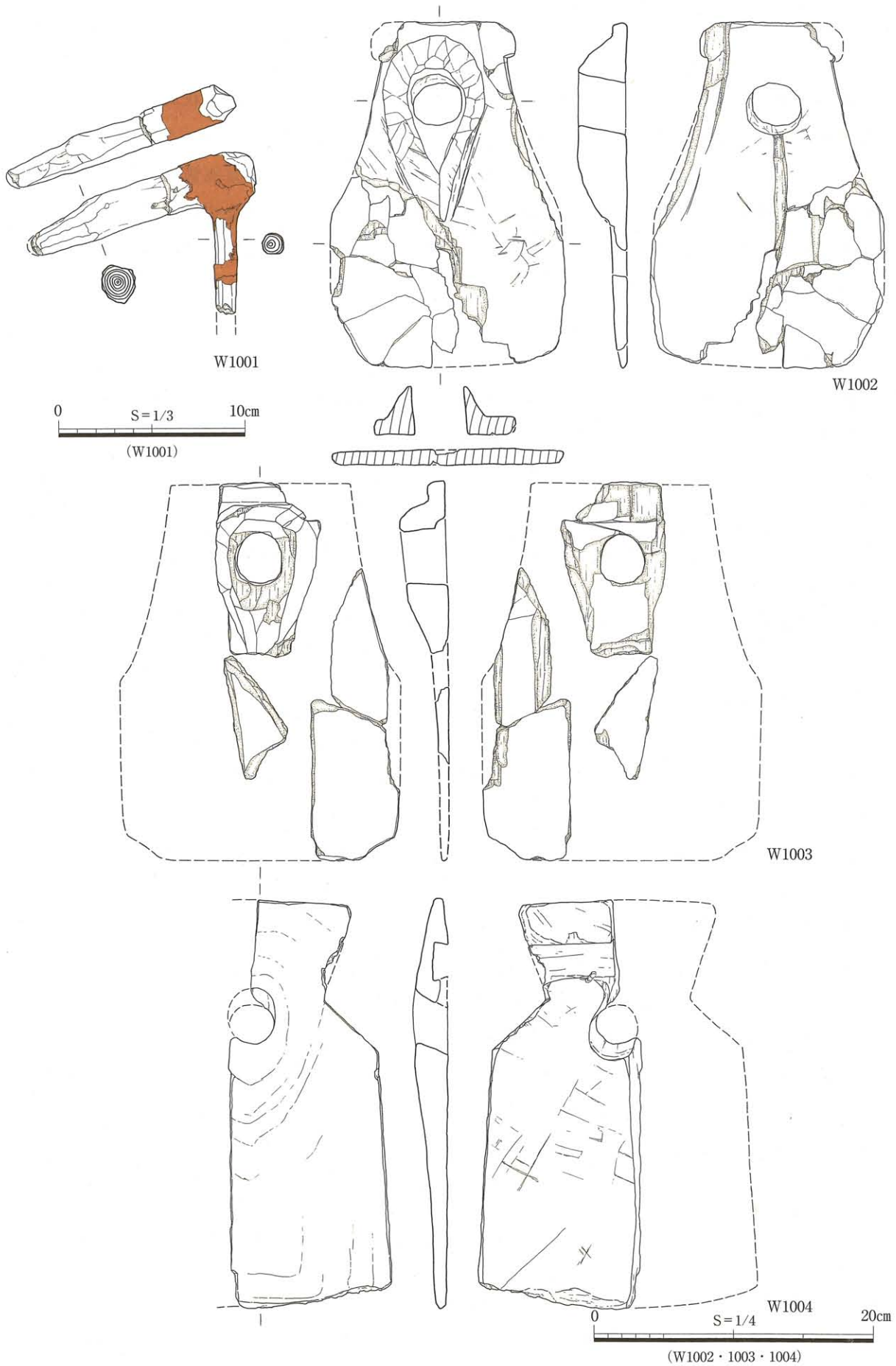
平鋏 (W1002~1012) W1002は平鋏身である。平面形は頭部左右に小さな突出部を設け、柄孔上位で最も身幅が狭くなり、そこから刃部に向かってハの字状に広がる。そして、隆起下端ラインから刃部先端へは、やや幅狭になりながら下位へのび、刃部の両隅は少し丸みを帯びている。隆起部は、明瞭な段差をもつタイプで、上位は丸く、刃部に向かって細くなる形態である。柄孔径は3.6~3.9cmで、前面と後面で径は変わらない。着柄角度は77度である。

W1003は破片であるが全体形がほぼ把握できる平鋏身である。平面形は頭部から身部中位に向かってハの字状に広がり、隆起下端ラインから刃部へは直線的に垂下する形態と思われる。前面の柄孔直上には段がみられ、泥除装着装置の可能性はある。柄孔径は約3.5cmで着柄角度は85度である。

W1004は半完形の平鋏身である。平面形は頭部から柄孔上位に向かって逆ハの字状を呈し、そこから柄孔下位に向かって急激に広がり、刃部へは少し広がりながら垂下する。刃部は中心軸に向かって丸みを帯びる。隆起部は刃部に向かって緩やかに厚みを減ずるタイプで、明瞭な段差はもたない。前面の柄孔上位には、一部欠損しているが泥除装着装置の蟻溝がみられる。刃部、柄孔、蟻溝には使用による磨耗がほとんどみられず、未使用品の可能性がある。柄孔径は3.8cmであり、柄孔角度は69度である。W1015の泥除と共に出土している。(出土状況：第113図・写真図版編 図版108-2)

W1005は平鋏身未成品である。平面形は頭部から中位にかけてハの字状に広がり、そこから刃部に向かって直線的に垂下する。隆起部は、まだ明瞭に作り出されていないが、平面形態や時期などから考えて、明瞭な段差のない刃部に向かって緩やかに厚みを減ずるタイプと考えられる。頭部・刃部側面には分割時の切断痕が認められる。前面・後面ともに鉄製工具によると思われる刃先の鋭い傷が残存している。隆起を作り出す後面は、隆起部から下位に向かって扇状に加工されており、前面は平坦面のため多方向からの加工がみられる。

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1001	膝柄斧柄未成品	61次	SK-118	第7層	全長(8.7)、斧台部長(12.6) 斧台基部径 2.2、柄径 1.2	樹皮残存	ラ	不可	Ⅲ-3
W1002	平鋏	69次	SK-1137	第6(下)層	長 24.7、幅 16.8、厚 1.0 隆起高 3.5、柄孔径 3.6~3.9		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	Ⅲ-3
W1003	平鋏	69次	SK-1137	第6層	長 ※27.1、幅 ※20.0、厚 0.8 隆起高 3.2、柄孔径 約3.5		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	Ⅲ-3
W1004	平鋏	65次	SK-158	第5層	長 29.3、幅 (11.5)、厚 0.9 隆起高 2.7、柄孔径 3.8		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	庄内



第175図 南地区出土木製品(1)

W1006は平鋏身未成品としていたが、報告にあたって再検討したところ泥除未成品になる可能性がある。平面形は、W1005と同様、頭部から中位にかけてハの字状に広がり、そこから刃部に向かって直線的に垂下する形態である。隆起形態は、刃部に向かって緩やかに厚みを減ずるタイプであるが、W1005よりも明瞭な段がみられる。頭部・刃部側面には切断痕が認められる。前面上位には約0.8cmの段差があり、中央には円形の大きなくぼみがある。このくぼみは柄孔をあけるためのものとも考えられるが、平鋏とするなら、製作工程上、穿孔は最終段階であり、刃部・隆起部など他の部位の成形が完成していない段階での穿孔は不可解である。頭部に段差をもつ点など、同遺構から出土したW1005の未成品と比較して異なる部分が多く、泥除未成品の可能性も考えられる。泥除未成品とすると、円形のくぼみは厚みを減ずるための削り込みであり、頭部の段差より上位の突出部は蟻柄になると考えられる。W1005の平鋏未成品と同一の原材から平面形までは同様に成形し、分割後、鋏と泥除へ加工していったと想定でき、この2点はセット関係にあったものとも考えられる。加工痕は後面と上位側面に明瞭に残存しており、加工具幅は約2cmである。(出土状況：写真図版編 図版129-3)

W1007～1011は、刃幅が15～20cm前後の広鋏に比べ、刃幅が10cm前後と狭い狭鋏である。

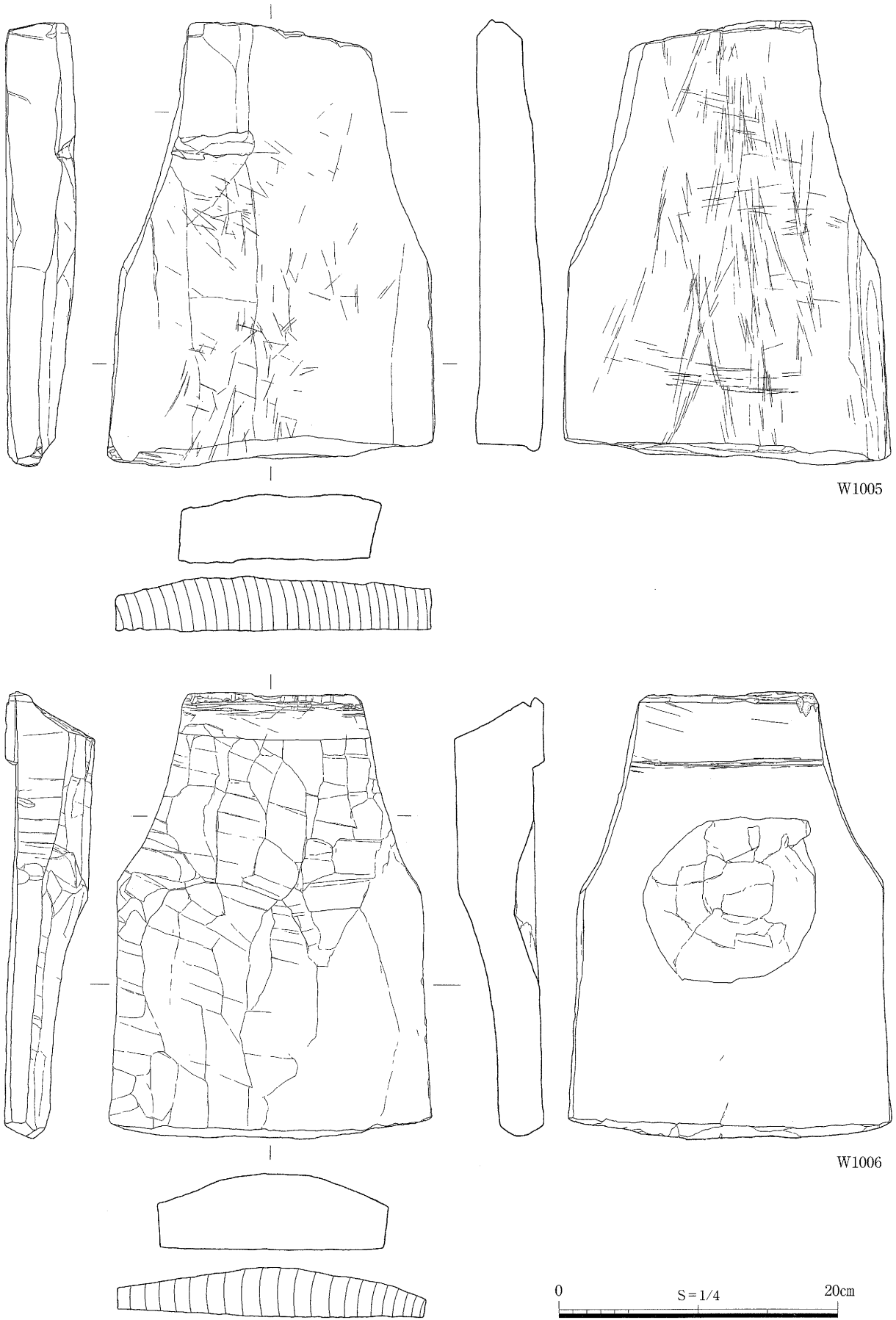
W1007は頭部が一部欠損しているが、柄孔ラインで身幅が一段狭くなり、そこから刃部に向かって緩やかに広がる平面形である。刃部左右端は丸く成形している。隆起は明瞭な段をもつタイプで、刃部に向かって長くのびる。側面観は刃部が隆起面側に少し湾曲している。着柄角度は54度である。

W1008は頭部が丸く、身部から刃部へは直線的に垂下する平面形である。柄孔の脇には孔の痕跡がみられ、広鋏から再加工された可能性がある。隆起は明瞭な段をもつタイプで刃部先端付近までのびている。周囲は一部炭化している。着柄角度は62度である。

W1009は柄付の狭鋏である。平面形は隆起部の上位が頭部をなし、刃部に向かってハの字状に広がる。隆起は明瞭な段をもつタイプで、刃部先端までのびる。刃部は平坦で身部の厚さと変化がなく、先端は磨耗している。隆起上面の一部と鋏身側面の加工は粗雑で、加工面もいびつである。また、隆起を中心軸にした場合、左右対称とならない。これらのことから、広鋏から再加工されたものと考えられる。着柄角度は70度である。

W1010は平面方形にちかい形態の狭鋏である。隆起部は下位が欠損しているが、段をもつ小さな紡錘形のものと考えられる。刃部先端と左右端部は急激に薄くしており、隆起面側に少し湾曲している。断面方形の柄が残存しているが、結合関係は不明で着柄角度が鈍角なのか鋭角なのかはわからない。他の狭鋏と比較して刃幅が少し広く、平面形・柄孔形態が異なる。柄孔は一辺約2.2cmの正方形で、着柄角度は60度(120度)である。

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1005	平鋏未成品	69次	SD-1109C	第6層	長 31.7、幅 23.3、厚 5.0		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2
W1006	平鋏未成品	69次	SD-1109C	第6層	長 32.0、幅 23.2、厚 3.2 隆起高 6.4	泥除未成品の可能性あり。 加工具幅:約2.0cm	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2



第176図 南地区出土木製品（2）

W1011は頭部が平坦で逆三角形を呈する。隆起部は明瞭な段をもたず、刃部に向かって緩やかに厚みを減ずるタイプである。平面形が左右対称でないことから、広鋏から再加工された可能性がある。着柄角度は61度である。(出土状況：写真図版編 図版4-2)

W1012は頭部が平坦で最も幅広く、刃部に向かって徐々に幅を減ずる形態である。刃部は一部欠損するが、側縁の欠損が直線的であることから、中央やや下位から刃先まで直線的に垂下する形態であったと考えられる。これに結合する柄が共伴しており、出土状況から柄の長さは約80cm、鈍角状態での鋏全長は約90cmと推定できる。隆起部は明瞭な段をもたないタイプで、柄孔径を推定復元すると前面(隆起のない面)の方が大きくなり、出土状況からも鈍角に柄が結合されていたと考えられる。着柄角度は120度である。鋏身側辺には刃部から頭部方向への加工痕がみられ、上面の隆起部から刃部方向への加工とは異なる。よって、広鋏から再加工されたものであろう。柄は棒状で、持ち手側の先端のみ残存する。

横鋏 (W1013・1014) 同一遺構から出土している。(出土状況：写真図版編 図版11-3)

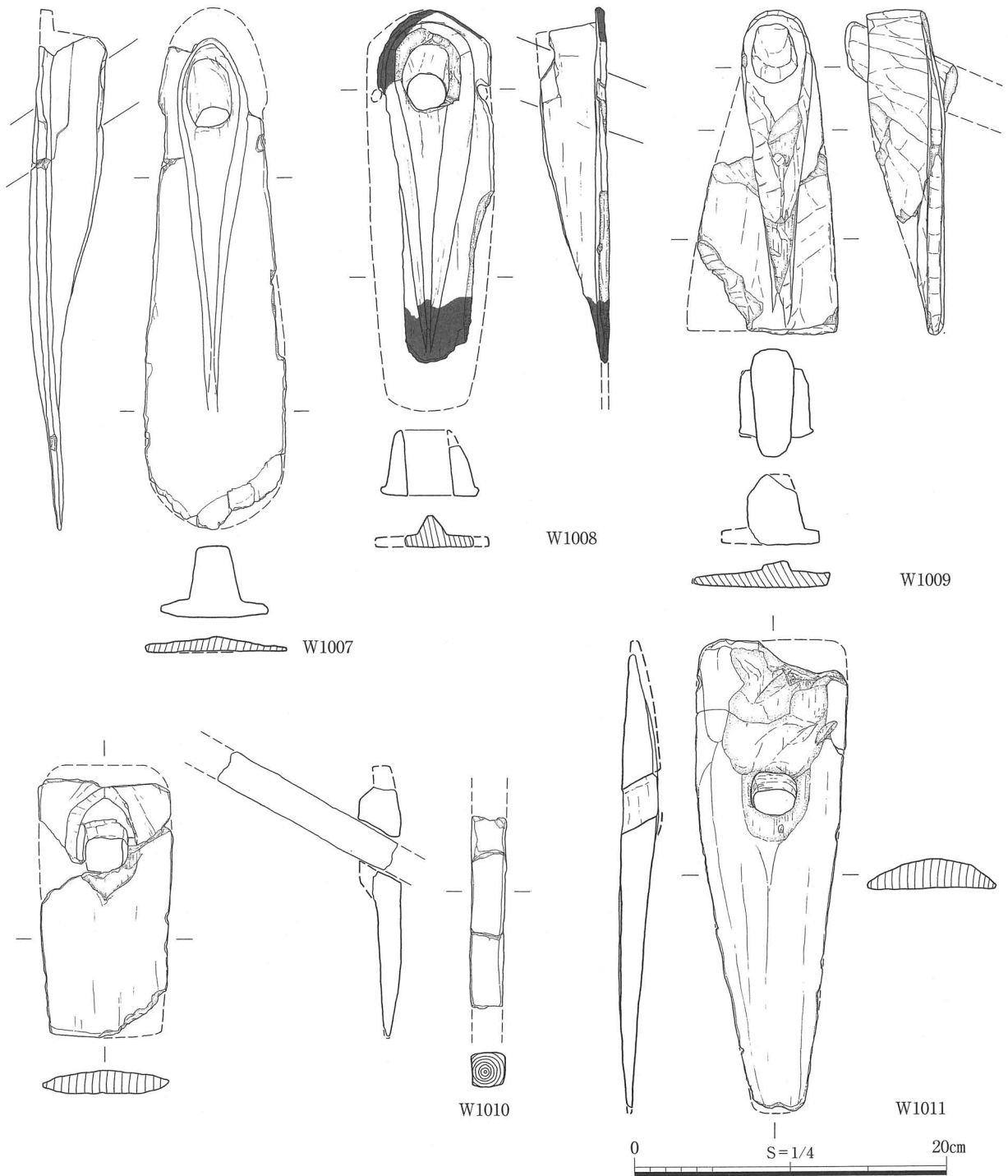
W1013は炭化によって変形が著しいが、上部は水平で刃縁は少し丸みをもつ平面形である。W1014より小型で、刃部が非常に厚いことから、再加工を繰り返した結果、現存の大きさになったと思われる。隆起部は明瞭な段をもたず、柄孔周囲にのみ平坦面が作り出されている。隆起面が前面となる。着柄角度は74度である。

W1014は隅円長方形を呈する横鋏で、両側縁と下縁に向かって刃部を作り出している。隆起部は、柄孔周囲に少し平坦面がある程度であり、明瞭な段をもたない。刃部に向かって緩やかに厚みを減じ、両側縁は、前面の刃縁ちかくで屈曲し刃部を作り出している。下縁の刃部は、後面の刃縁ちかくで屈曲し刃部としている。隆起面が前面となる。着柄角度は110度である。

泥除 (W1015・1016) W1015は破片であるが泥除に復元できた。柄孔が一部残存している。上位の破片には、上端の挟り込みなど再加工と思われる痕跡があり、破損後、部材として利用された可能性がある。下位の破片には、中央に縦長の長方形孔があり、泥除と柄を連結させる機能をもつと考えられている⁽²⁾。W1004の平鋏と共に出土している。

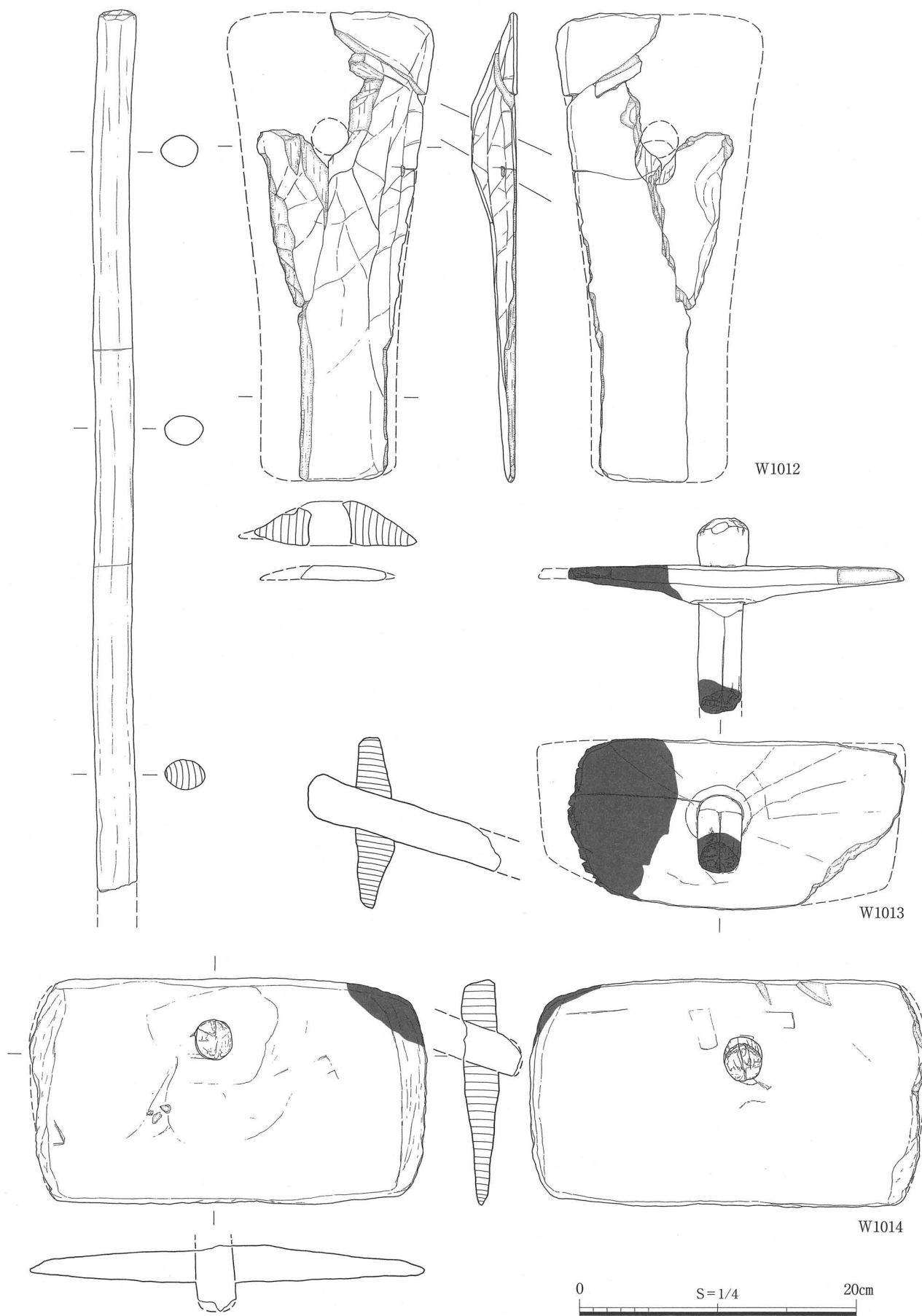
W1016は二連の泥除未成品である。頭部には樹皮が残存している。図右側端には切断痕がみられ、製作当初は三連以上のものであったと想定できる。一個体の側面観は笠形を呈し、中央やや上位が最も隆起する。後面は各周囲に2~3cmの平坦面が残り、そこから中央に向かって削り込みがおこなわれている。保存状態は非常に良好であり、加工具幅は約2.5cmである。(出土状況：写真図版編 図版129-3)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1007	平鋏(狭)	61次	SD-151CN	第7層	長(31.4)、幅 9.1、身厚 0.5 隆起高 4.5、柄孔径 2.8~4.3	再加工の可能性あり	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	II-3
W1008	平鋏(狭)	61次	SD-151CS	第7層	長(22.6)、幅(7.2)、身厚 0.7 隆起高 4.4、柄孔径 3.0	一部炭化。 再加工の可能性あり	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	II-1
W1009	平鋏(狭)	61次	SD-151CS	第7層	身長 20.8、身幅(9.0) 隆起高 5.0、身厚 0.5~1.0 柄長(8.0)、柄径 約2.8	柄付。 広鋏の再加工品	ラ	身:コナラ属ア カガシ亜属 柄:サカキ	II-1
W1010	平鋏(狭)	61次	SD-151BN	第8層	身長(16.6)、身幅 8.5 隆起高 2.8、身厚 約1.5 柄長(12.3)、柄幅厚 2.2	柄付(方形)。 再加工の可能性あり	ラ	身:コナラ属ア カガシ亜属 柄:ヒサカキ属	II-2・3

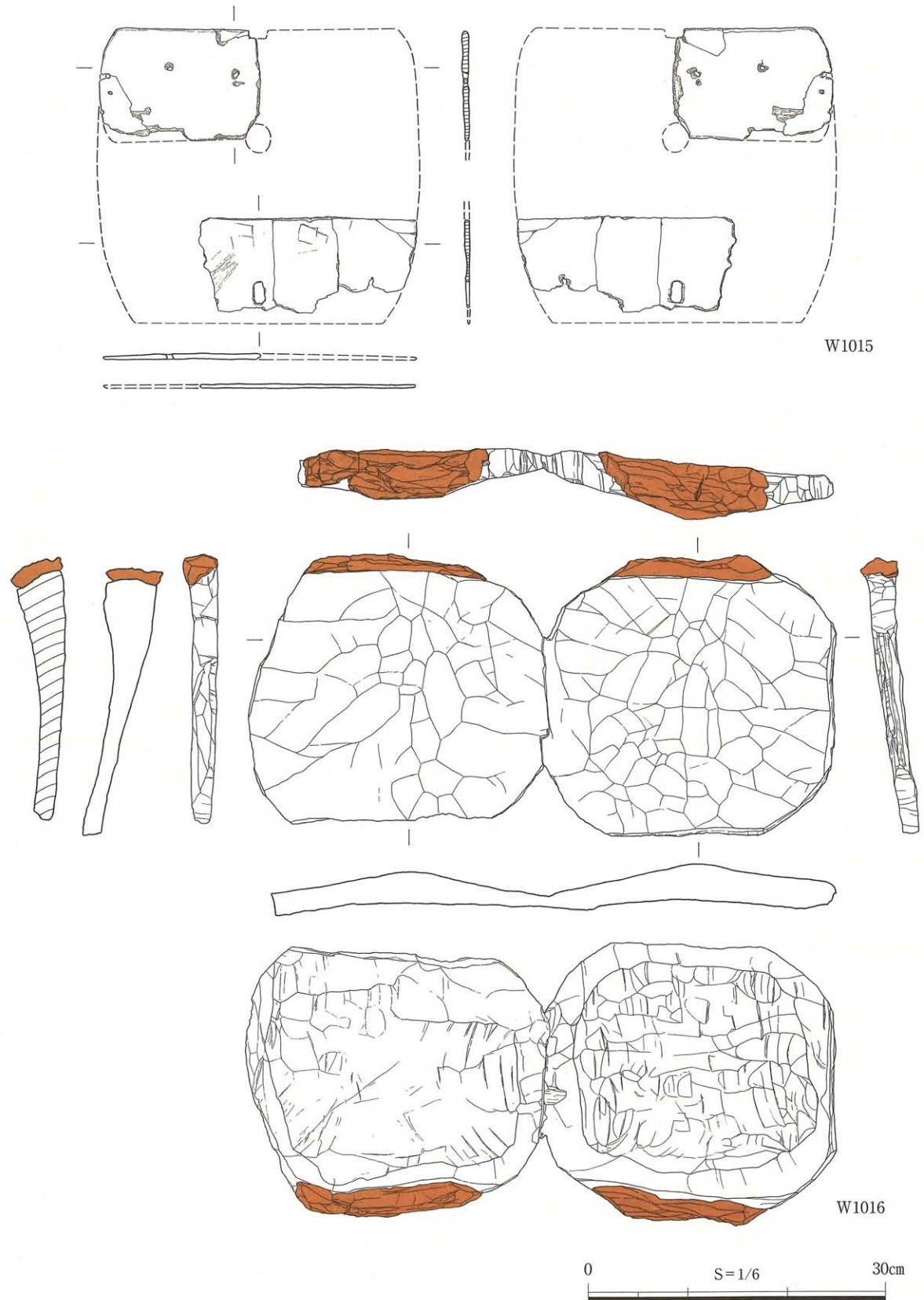


遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1011	平鍬(狭)	61次	SK-152	第2層	長(30.2)、幅(9.8)、厚(2.2) 柄孔径 2.7~2.9	再加工の可能性あり	脂	コナラ属ア カガシ亜属	Ⅱ-3
W1012	平鍬(狭)	61次	SD-151B	第7層	身長 33.8、身幅 ※15.0、身厚 3.3 柄長(63.8)、柄径 2.3~2.9	結合していたと考えられる 柄あり	水	身:コナラ属ア カガシ亜属 柄:コナラ属ア カガシ亜属	Ⅱ-3~ Ⅲ-1
W1013	横鍬	61次	SK-118	第6層	身長 12.4、身幅(24.4)、身厚 2.9 柄長(14.9)、柄径 約3.0	柄付。 一部炭化	ラ	身:コナラ属ア カガシ亜属 柄:サカキ	Ⅲ-3
W1014	横鍬	61次	SK-118	第6層	身長 16.4、身幅(28.8)、身厚 2.6 柄長(4.3)、柄径 2.7	柄付。 一部炭化	ラ	身:コナラ属ア カガシ亜属 柄:カキノキ属	Ⅲ-3

第177図 南地区出土木製品(3)



第178図 南地区出土木製品（4）



遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1015	泥除	65次	SK-158	第5層	長 ※29.5、幅 ※32.2、厚 0.7	再加工の可能性あり	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	庄内
W1016	泥除未成品	69次	SD-1109C	第6層	長 28.2、幅 58.8、厚 1.6~5.6	二連。樹皮残存 加工具幅:2.5cm	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2

第179図 南地区出土木製品 (5)

一木鋤・柄 (W1017~1021) W1017は一木鋤である。平面形は肩部を広く水平に作り、刃部先端に向かって緩やかに狭まる。横断面形は、柄部から下位へ続く後面の身部中央が最も厚く、側縁に向かって徐々に薄くなる逆三角形を呈する。柄部は楕円形を呈する。土中で一度乾燥しているものと思われ、保存状態は不良である。

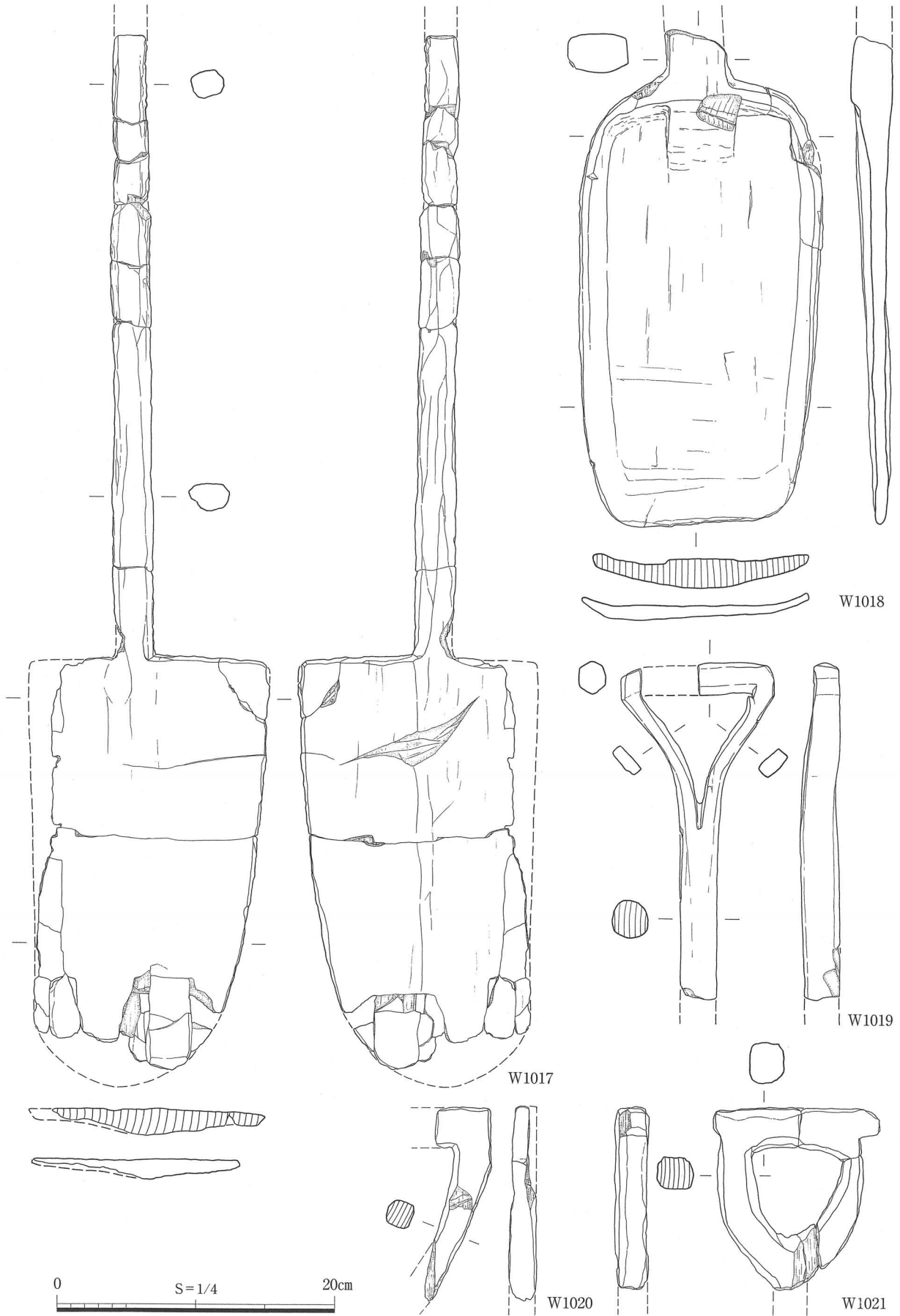
W1018は一木鋤の身部である。肩部は丸みを帯び、刃部先端まで身幅はほとんど変化しない。肩部から身部側縁を身部中央より一段高く作り出している。身部上位中央は柄部から続く厚みを徐々に減じ折れにくい構造としている。柄部断面は少し膨らんだ長方形である。(出土状況：写真図版編 図版5-1)

W1019~1021は一木鋤の柄の把手部分である。3点とも少しの差異はあるが、頭部に逆三角孔を穿って持ち手部分としている。

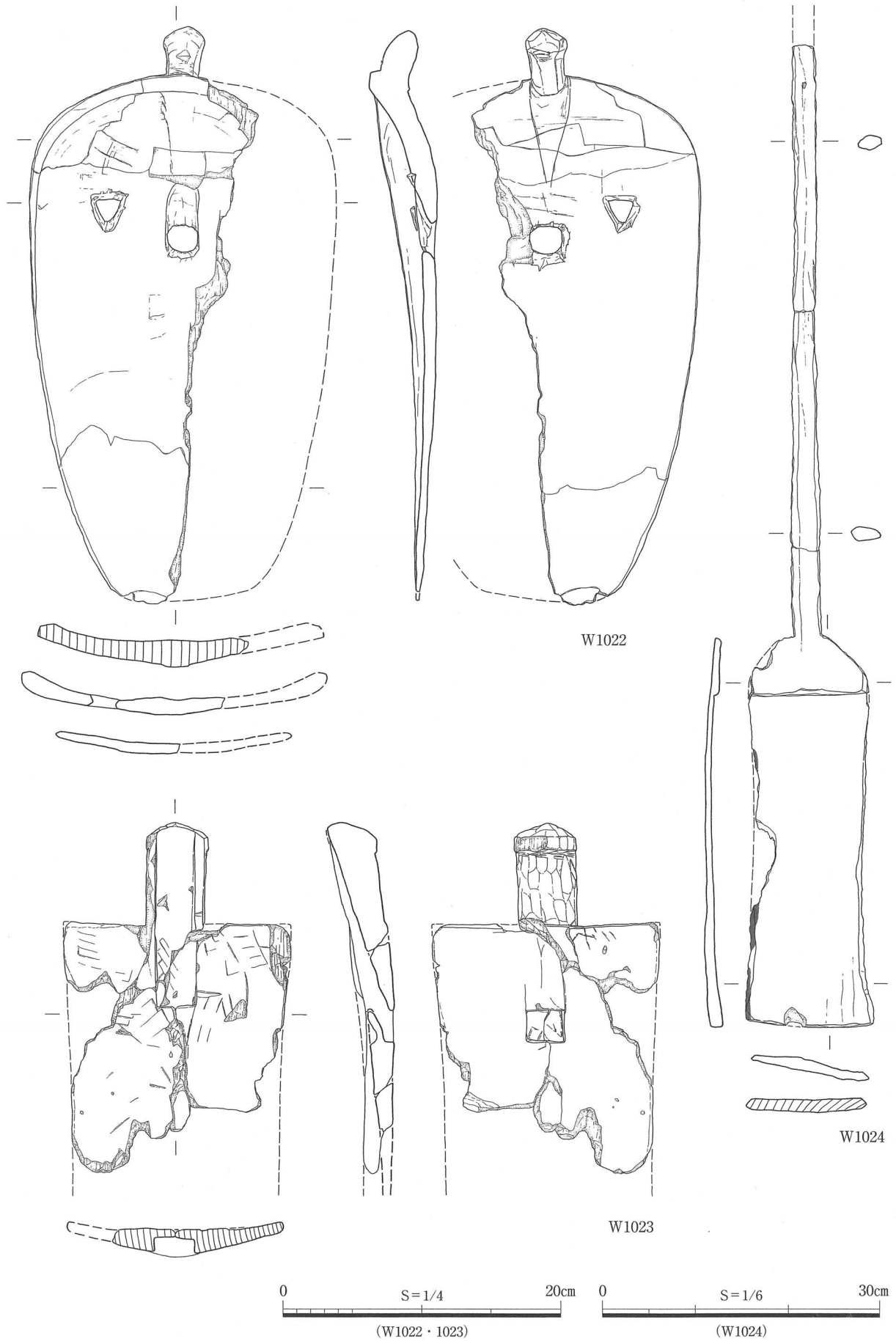
組合せ鋤身 (W1022・1023) W1022は肩部が丸みを帯びる組合せ鋤身である。軸部は身部と比較して非常に小さい。また、身部よりも一段低い位置から作り出され、そこから下方に斜めに突出する。軸部先端は少し膨らみを作り、紐掛け状となる。身部は、丸い肩部が最も幅広く、刃端部に向かって丸みを帯びながら緩やかに幅を減じる平面形で、横断面形は両側縁が最も高く作られ、全体的に丸みを帯びている。身部中央には柄を挿入するための円形の孔が斜めに穿たれている。その柄孔と側縁のほぼ中間で、柄孔より少し上位に逆三角形の孔が穿たれている。片側は欠損しているが同様のものがあつたと思われる。柄と身との結合を補強するための紐通し孔の可能性が考えられる。棒状の一直線の柄が装着されたと仮定した着柄角度は約155度である。しかし、この角度で装着すると、軸部と柄の間に空間ができ軸部の意味をなさないとと思われる。このような組合せ鋤は、唐古・鍵遺跡以外でも類例がなく、軸部の大きさや形状、身部全体形と逆三角形孔などの特徴からも特異なものであるといえる。

W1023は軸部から左右に肩が水平にのび、屈曲して刃縁に至る平面形の組合せ鋤身である。軸部断面形は半円形を呈し、身部上端から少し上方へ角度をつけて作り出され、身部中央の柄孔へつながっている。軸部側縁は柄の装着時にずれないように一段高く作られ、軸部上端の後面には紐掛けのための段差がみられる。身部には軸部から続く溝が中央にのびており、方形の柄孔が斜めに穿たれている。身部横断面形は一木鋤のW1017と同様、後面中央軸ラインが厚くなる逆三角形を呈し、前面中央は少し削り込まれている。保存状態は良好で、軸部には加工痕が明瞭に残存しており、使用の痕跡はみられなかった。着柄角度は161度である。

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1017	一木鋤	69次	SD-1109C	第6層	長(74.2)、身幅(15.5) 身厚1.9、柄幅2.9、柄厚1.9	土中で一度乾燥している	ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2
W1018	一木鋤	61次	SK-153	第2層	長(35.8)、幅17.4 厚0.5~3.0、柄幅4.3		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	II-2
W1019	鋤の柄	61次	SD-151BN	第8(下)層	長(24.1)、幅11.1、厚2.8		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	II-2・3
				第8層					
W1020	鋤の柄	69次	SD-1109C	第5(下)層	長(13.9)、幅(4.0)、厚2.0		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2
W1021	鋤の柄	69次	SD-1109C	第6層	長(13.1)、幅12.0、厚2.5		ラ	コナラ属ア カガシ亜属	V・VI-1・2



第180図 南地区出土木製品（6）



第181図 南地区出土木製品 (7)

用途不明品 (W1024) W1024は平面形が一木鋤と類似しており、鋤状木製品、櫛状木製品、打ち棒などと分類されるものである。今回はこれまでの研究成果から、品名は用途不明品とし農具に含めて報告する。唐古・鍵遺跡ではこれまでの調査で3点の出土例があり、長い棒状の柄部とそこからなだらかに幅を増す丸みを帯びた肩部、肩部から直線的に垂下する長い身部からなる。W1024の身部縦断面形は、上位に段差を作り身部中央が薄く作られ、下端部に向かって緩やかに厚みを増す。側面観は、身部下半が前面側に少し湾曲する。保存状態はあまり良好でなく、土中で一度乾燥したとみられ、土圧による歪みも激しい。後面は一部炭化しているが、身部後面の中央やや下位が荒れており、使用痕の可能性はある。他の類例でも、身部が前面側に湾曲し、後面に擦痕を残すものがみられ、使用状況を復元するうえで重要な痕跡であろうと思われる。おそらく、後面を地面に打ち下ろす、あるいは地面に下ろした状態で左右に振ることによって機能を果たす道具として作られたものであろう。

臼 (W1025) W1025は大型の臼である。芯持ち材を用いたもので、一部土圧によって変形している。口縁部と底部の径が大きく、胴部中央が括れた鼓形で、胴部には透かしによって4本の把手が作り出されている。把手断面形は、上下端付近が三角形で、中央付近は楕円形を呈する。底部には、把手と把手の間に台形の挟り込みが4ヶ所みられる。搗き部は井戸杵に転用されていたため削り抜かれている。臼として使用中に底が抜けたため井戸杵として再利用した可能性も考えられるが、搗き部縦断面形が底面に向かって広がっていることと、一部底面に粗い加工痕（加工具幅約2.5cm）と思われる痕跡がみられることから、最終段階で人為的な行為がなされ現況の形状になったと考えられる。口縁内径は42cmで、深さは42cmである。胴部外面に加工痕が明瞭に残存していて、加工具幅は1.5～2cmで鉄製工具によるものと思われる。（出土状況：写真図版編 図版114-2・115・116-1・117）

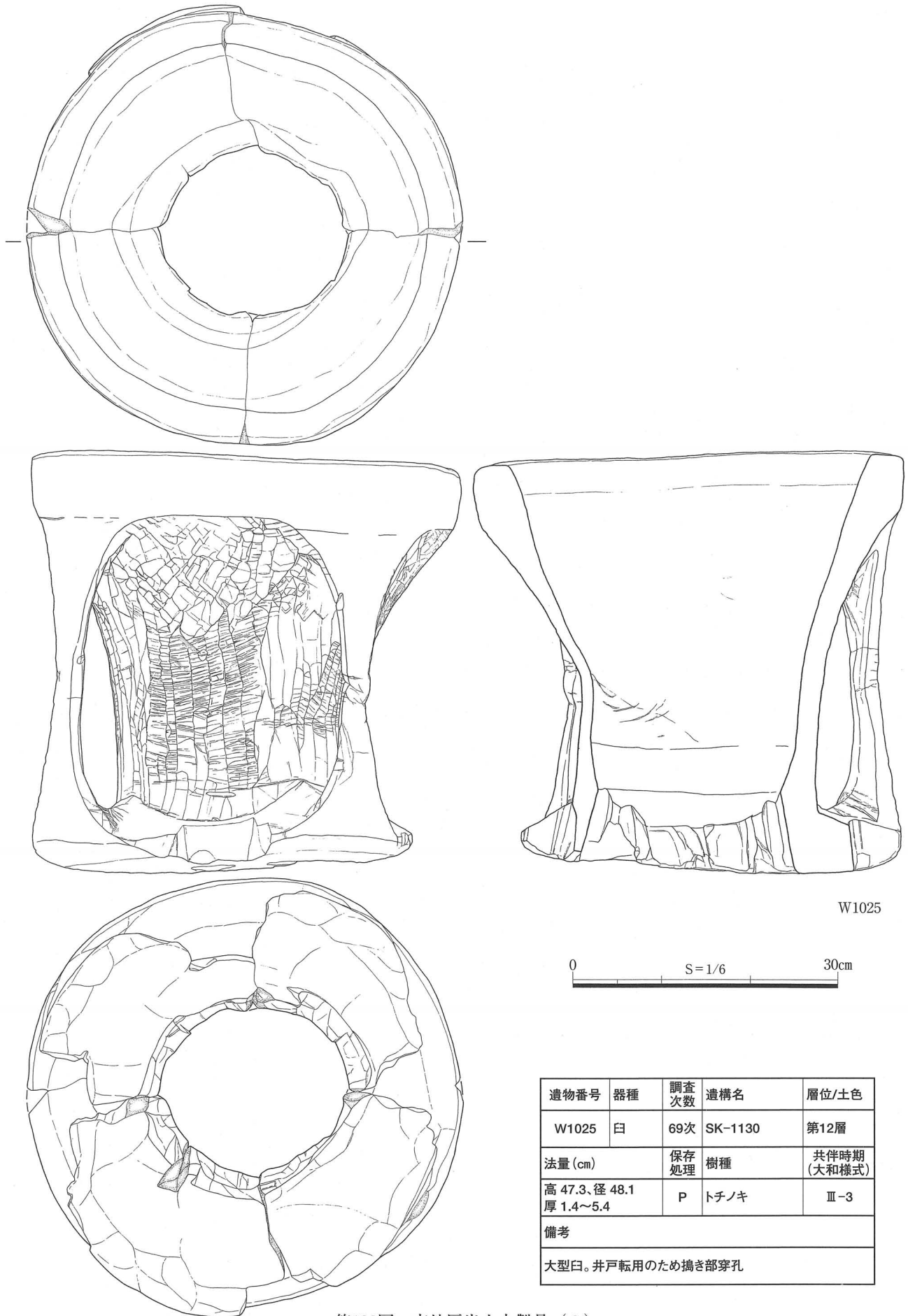
竪杵 (W1026) W1026は割材を利用した竪杵の搗き部から握り部にかけての破片である。

横槌 (W1027・1028) W1027は握り部下端が一段太く作られ、グリップ状となっている。敲打部に使用によるくぼみがみられる。敲打部から握り部にかけては横方向の細かい擦痕がみられ、仕上げ時のミガキ痕と思われる。（出土状況：写真図版編 図版89-1）

W1028は握り部下端がそのままの太さで終わるが、握り部と敲打部の長さの比率はW1026と酷似した形態である。敲打部から握り部下端まで研りによって面取り加工が施されている。

穂摘具 (W1029) W1029はいわゆる木庖丁である。紐掛け孔が一部残存している。背面が水平で側辺は木取りとほぼ水平に作り、刃部に向かって丸みを帯びる平面形で全体形は少し歪んだ半円形と想定できる。上面観は湾曲しておらず平坦である。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1022	組合せ鋤身	61次	SD-151CS	第9層	長 41.4、幅 (16.4)、高 4.9		P	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-1
W1023	組合せ鋤身	69次	SK-1137	第6層	長 (25.1)、身幅 (16.3) 高 (4.8)、軸長 7.4、軸幅 4.4		ラ	コナラ属アカガシ亜属	Ⅲ-3
W1024	用途不明品 (農具の可能性)	69次	SD-1109C	第6層	長 (105.1)、身幅 13.8 身厚 1.4、柄幅 3.2、柄厚 1.6	一部炭化。土中で一度乾燥している	ラ	コナラ属アカガシ亜属	V・VI-1・2



遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色
W1025	臼	69次	SK-1130	第12層
法量 (cm)		保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
高 47.3、径 48.1 厚 1.4~5.4		P	トチノキ	Ⅲ-3
備考				
大型臼。井戸転用のため搗き部穿孔				

第182図 南地区出土木製品 (8)

(3) 武器

木鏃 (W1030) W1030は円錐形で下位に浅い抉りがあることから木鏃とした。割材を利用して、表面には加工面が残存するが、全体的に炭化している。

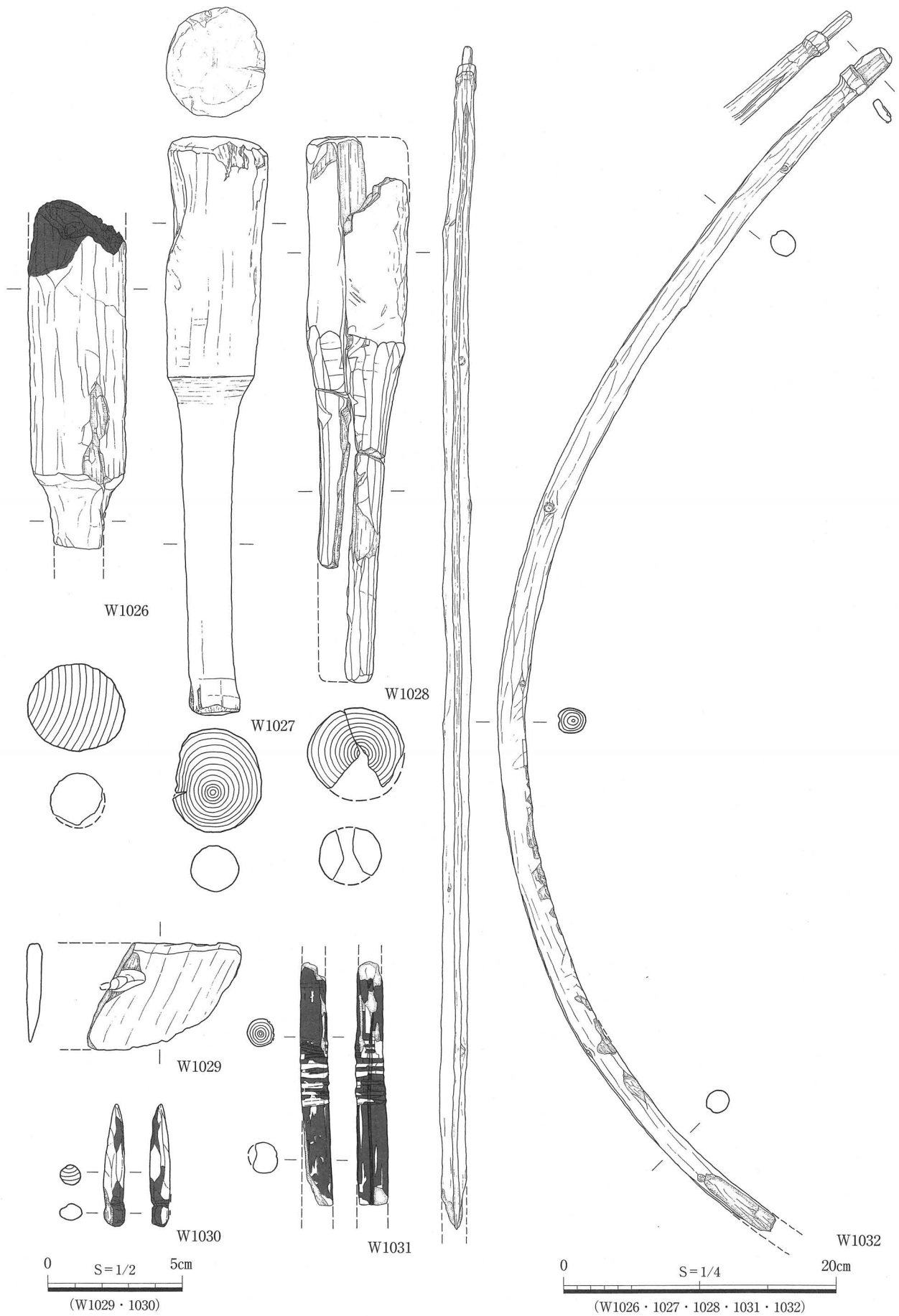
弓 (W1031・1032) W1031は全面に黒色塗彩が施された、いわゆる飾り弓である。全体形は不明だが、中央に細い棒樋が加工されている。残存片の中央付近には幅0.2cmの植物が巻かれ、その上に漆と思われる黒色物を塗布し、弓本体と樹皮を固定させている。

W1032は枝を取り払っただけの丸木弓である。下方の弓幹内側にのみくぼみがあり、使用時の痕跡と想定すると、おそらくこの付近が弓の中央となり、約120cmの長弓に復元できる。弭は、内側面以外に突帯をめぐらし、先端は断面隅円長方形に薄く削られている。外側面中央には棒樋が作られている。

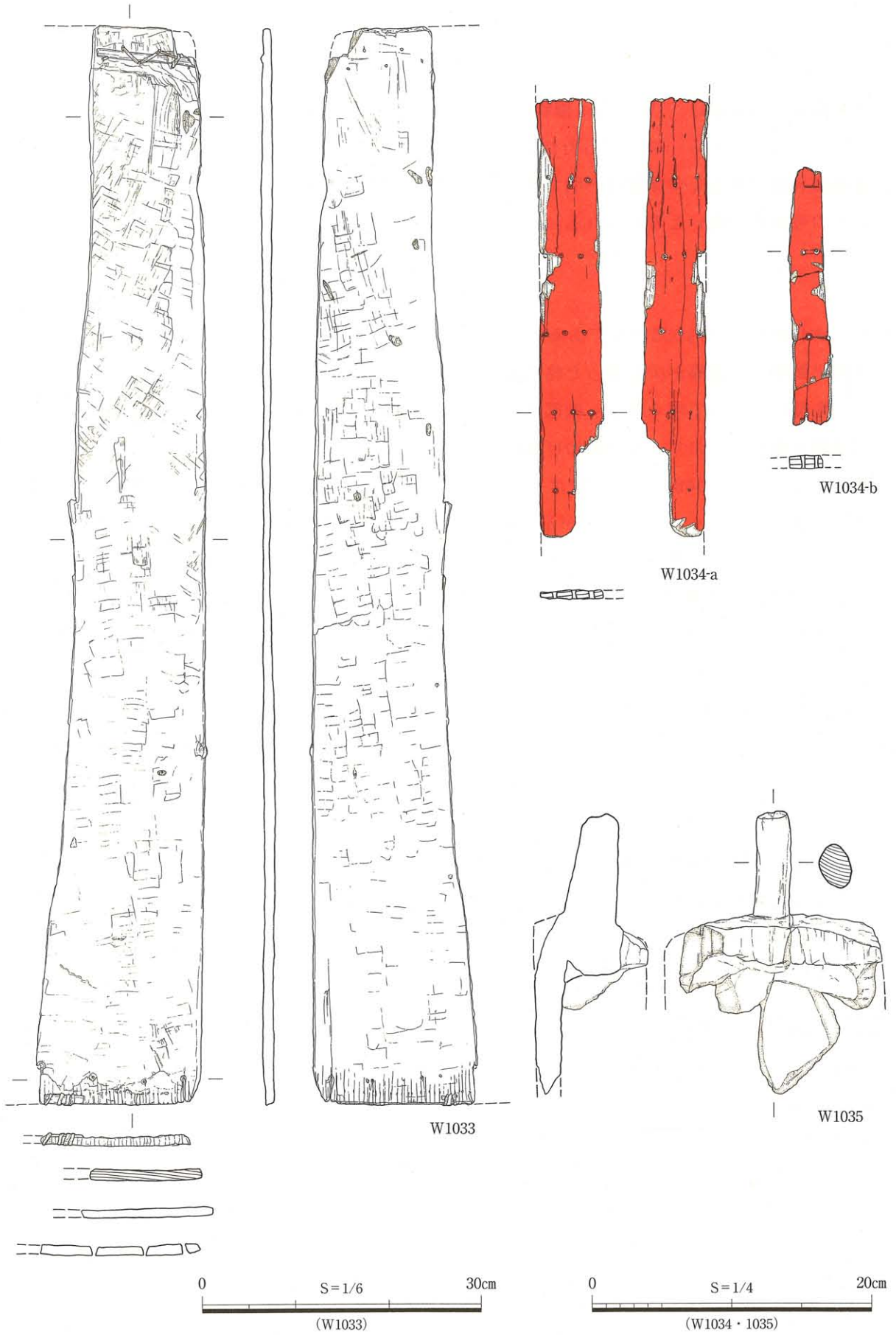
盾 (W1033・1034) W1033は長方形を呈する無彩の盾である。表裏は不明。上下端と一側端が残存するが、片側は木目に沿って縦方向に裂け、1/2以上が欠損していると考えられる。上端部はその隅を欠損するが、下端部は隅を丸く加工している。上端部はその端から約5cm、下端部はその端から約4cmのところから一方の面を削り薄くしている。この薄くした部分に、下端部では縦の切れ込みを多数入れて桜皮を通し、その両面と下端に渡した横棧をコイル巻に綴じる。上端では端から約3cm下がったところに横棧を両面に渡し、横棧の上下の孔から通した桜皮で三角綴じし、盾本体と結合させている。下端の横棧は接地面の補強と考えられる。なお、下端部の切れ込み先端部付近に沿ってほぼ6cmの等間隔で孔が穿たれるが、その性格は不明である。両面ともに加工痕が明瞭に残存しており、木目に沿った縦方向の斫り痕がみられる。加工具幅は約2cmである。(出土状況：写真図版編 図版7-1)

W1034は両面赤彩の盾で、2片は同一個体と思われる。一側端は残存しているがその他は欠損しており、全体形は不明である。木目に対して垂直方向に約5.5cm間隔で小孔列を穿つ。W1034-bでは片面の小孔列間に赤彩が及んでいない部分があり、紐綴じ痕と考えられる。

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1026	竪杵	69次	SD-1110	第3(下)層	長(25.5)、搦部径7.1 握部径(3.6)	搦部先端炭化	ラ	コナラ属 クヌギ節	Ⅱ-1~ Ⅱ-3
W1027	横樋	65次	SK-134	第5(下)層	長42.5、握部径3.5 敲部幅8.0、敲部厚7.3	敲部に使用痕残存	ラ	カナメモチ 属	V-1
W1028	横樋	69次	SK-1137	第6層	長40.1、握部径(4.6) 敲部径(7.6)		ラ	散孔材	Ⅲ-3
			SK-1137	第6層					
W1029	穂摘具	69次	SK-1112	第6層	長3.9、幅(5.6)、厚0.6		ラ	コナラ属 コナラ亜属	Ⅵ-3
W1030	木鏃	65次	SK-105	第4層	長4.5、径0.8	一部炭化	ラ	モミ属	V-1
W1031	弓	69次	SK-1102	第4層	長(17.5)、径約2.2	植物を巻付け後黒漆塗り	水	イヌガヤ	Ⅳ
W1032	弓	65次	SR-151S	第5層	長(86.6)、径2.0		ラ	マキ属?	Ⅲ-1・2
W1033	盾	61次	SD-151BN	第8層	長114.9、幅(17.5)、厚1.2		ア	モミ属	Ⅱ-2・3
W1034-a	盾	69次	SK-1137	第6層	長(31.5)、幅(4.5)、厚0.7		ラ	モミ属	Ⅲ-3
W1034-b	盾	69次	SK-1137	第6層	長(18.5)、幅(2.8)、厚0.9		ラ	モミ属	
W1035	アカ取り	65次	SD-203E	第3層	長(20.2)、幅(14.5)、高8.0 把手部幅2.5、把手部厚2.6~3.7	もみすくいの可能性あり	ラ	トチノキ	Ⅱ-3



第183図 南地区出土木製品 (9)



第184図 南地区出土木製品 (10)

(4) 漁撈具

アカ取り (W1035) W1035は棒状の柄に方形の身をもつ塵取り状を呈するアカ取りである。柄は、身部上面から一段下がった位置に取り付いており、先端に向かって細く作られている。身部は欠損が激しく全体形は不明である。唐古・鍵遺跡の立地や出土遺物などから「もみすくい」の可能性が高いと考えられる。

(5) 食膳具

匙 (W1036) W1036は匙である。身部上端面より一段下がったところから柄が取り付く。身部平面形は、先端が少し尖った楕円形を呈する。身部の柄にちかい付近が最も深く削り込まれ、先端に向かって浅くなる。柄部断面形は、隅円長方形で、身部との角度は鈍角である。身部先端は磨耗しており、使用痕の可能性はある。

高杯 (W1037~1040) W1037は一木式の高杯である。杯部は底面を平坦に作り口縁部に向かって少し丸みをもって立ち上がる。脚部は短く、1.3cm程の脚柱部をもち、その下端からハの字状に広がる。杯部の仕上げは丁寧だが、脚柱部と脚部内面には加工痕を残している。

W1038は一木式高杯である。杯部は底面を残すのみで、丸みを帯びている。脚柱部は加工時に木目に沿って割れたためか楕円形を呈する。裾端面は下位が内側に削り込まれ斜面となる。底面は中央が丸く浅く削り込まれ、加工痕が残存している。

W1039は高杯の破片と思われる。杯部底面付近から脚部上位部分である。脚部内面中央に平坦面があり、脚柱内は空洞であったと考えられ、組合せ高杯の可能性はある。杯部底面は平坦面をもち直線的に立ち上がる。杯部外面には直線文が2帯彫られており、現状ではそれぞれ9条の沈線が確認できる。

W1040は組合せ高杯の脚部である。脚部の高さから、これに脚柱部と杯部の2つの部材が結合して製品となると考えられる。中央には結合部材を挿入する方形の孔が底面まで穿たれている。孔は対面する2面は比較的丁寧に加工され平坦であるが、もう一方の対面する2面は粗雑な加工である。底部内面は削り込まれておらず平坦である。裾端部は面をもつ。

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1036	匙	61次	SD-151BN	第8層	長(12.1)、身幅(4.3)、身高2.0 柄幅2.1 柄厚1.2	身部先端磨耗(使用痕か)	ラ	ヤマグワ	Ⅱ-2
W1037	高杯(一木式)	61次	SD-151CS	第7層	高9.0、口径※15.2、底径6.3 身厚0.4~0.7		ラ	ヤマグワ	Ⅱ-1
W1038	高杯(一木式)	61次	SK-152	第3層	高(5.8)、底径8.0		ラ	ヤマグワ	Ⅱ-3
W1039	高杯(組合せ式か)	61次	SD-151CS	第8層	幅(6.7)、高(5.0)	沈線文様あり	ラ	ケヤキ	Ⅱ-1
W1040	高杯(組合せ式)	61次	SD-151B	第7層	高5.6、底径17.3		ラ	ヤマグワ	Ⅱ-3~ Ⅲ-1
W1041	合子蓋	61次	SK-153	第2層	長辺17.0、短辺13.1、厚0.7		凍	ヤマグワ	Ⅱ-2
W1042	合子	61次	SK-153	第2層	高12.6、器壁厚0.8 口長辺17.4、口短辺13.0		凍	ヤマグワ	Ⅱ-2
W1043	槽	61次	SD-151A	第8層	長(23.8)、幅(12.4)、高3.6 底厚1.7		ラ	ヤマグワ	Ⅱ-2・3

合子 (W1041・1042) W1041とW1042は共伴遺物であり、組み合わさるものと考えられる。

W1041は合子の蓋である。平面形は楕円形に方形の紐孔突起が付く。側面観は山形をなし、内面を削り込んで断面を均一な厚さに仕上げている。また、内面の周囲は端部から約0.8cmの平坦面をもち、置き蓋に分類できる。紐孔突起には3つの孔が貫通しており、中央にはやや大きい孔、その両脇の少し外側に2つの孔があげられている。孔の周囲には一部紐の痕跡があり、中央孔は内側に、両脇の孔は中央孔に向かって特に磨耗している。おそらく3孔をつないで身と結合していたのであろう。(出土状況：写真図版編 図版5-1)

W1042は合子の身である。上面観は土圧によって変形しているが、W1041の蓋と同様に楕円形である。脚は四本で、粗い面取りによって多角柱状に作られている。口縁部の木目方向には口縁端面と同じ高さ的一对の紐孔突起が取り付け、それぞれ一孔があげられている。この孔は、蓋であるW1041の中央孔と合う。内面には底部と底部から2～3cm上の側面に白色の付着物が残存しており、内容物の可能性がある。

槽 (W1043) W1043は浅い小形の槽である。平面方形で、底面から直線的に外方へ立ち上がって口縁に至る。口縁端面は短辺側が少し平坦面をもつ。粗製品と思われる。

(6) 雑具

火鑽臼 (W1044・1045) W1044・1045は細い丸木を利用した火鑽臼である。W1045は保存状態の関係で樹種がわからなかったが、W1044と雰囲気は似ている。このようなつる植物を利用した火鑽臼は類例が少なく特異なものといえる。

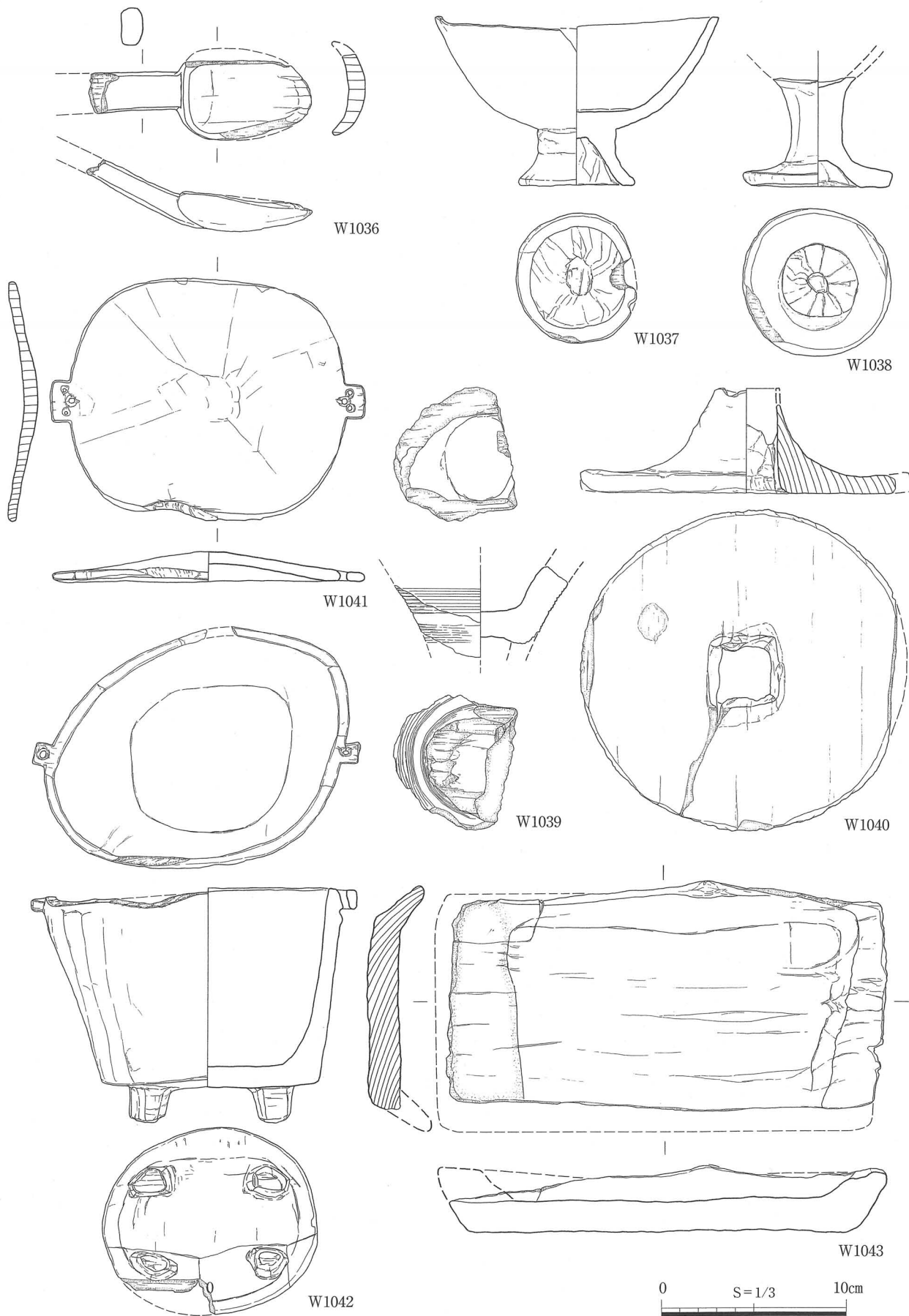
W1044は2ヶ所の火鑽穴が残存し、片方は使用しているが、もう片方は未使用で、火鑽杵を安定させるために一段掘りくぼめた状態である。小口面は切断痕が残存する。

W1045も2ヶ所の火鑽穴が残存し、片方のみ使用している。

部材 (W1046・1047) W1046は方形の組合せ部材である。長辺の一方は破損する。周囲端部から約1.5cmのところには孔が並んでおり、現状で5孔確認できる。短辺の孔間には、表裏ともに幅5mmほどの帯状の変色箇所があり、組合せの痕跡と考えられる。長辺には短辺孔と対応する位置に2ヶ所の削り込みがあり、帯状の変色はこの削り込みまで続いている。

W1047は細長い板状の部材である。方形の孔が3ヶ所穿たれている。上位の孔が最も大きく、その他は小さく粗雑にあげられている。雑具の部材としたが、建築部材の可能性もある。

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1044	火鑽臼	61次	SD-151CN	第7層	長(6.5)、径1.5	火鑽穴2ヶ所残存。内1ヶ所未使用。炭化	水	サルナシ	Ⅱ-3
W1045	火鑽臼	61次	SK-118	第7層	長(4.5)、径1.0	火鑽穴2ヶ所残存。炭化	ラ	不可	Ⅲ-3
W1046	部材(箱材か)	61次	SD-151BS	第9層	長16.4、幅(6.7)、厚1.0	穿孔間に変色部分あり	P	ヒノキ	Ⅱ-2・3
W1047	部材	69次	SD-1109C	第6層	長46.7、幅5.7、厚1.4	一部炭化。 建築部材の可能性あり	ラ	スギ	V・VI-1・2
W1048	柱	65次	Pit-201		長(71.5)、径17.0	芯持ち材	ラ	チドリノキ	弥生前期の可能性
W1049	柱	65次	Pit-202		長(51.0)、径14.7	割材	ラ	カヤ	弥生中期初期・前葉



第185図 南地区出土木製品 (11)

(7) 建築部材

柱 (W1048・1049) W1048は芯持ち材を利用した円柱状の柱である。側面下半と小口面周囲に加工痕残存。(出土状況：写真図版編 図版48-2)

W1049は芯はずしの割材を利用した円柱状の柱である。側面は縦方向に面取り加工されている。小口面は傾斜しており、加工痕が明瞭である。(出土状況：写真図版編 図版48-3)

梯子 (W1050・1051) W1050は半截材を利用し、足掛け側が樹皮側となる木取りである。足掛けは現存で4ヶ所確認でき、その間隔はおよそ35cmである。

W1051は梯子の一部で、半截材を利用している。W1050と同一遺構からの出土であるが、幅が異なるため、別個体と考えられる。足掛けは中央に1ヶ所確認できる。

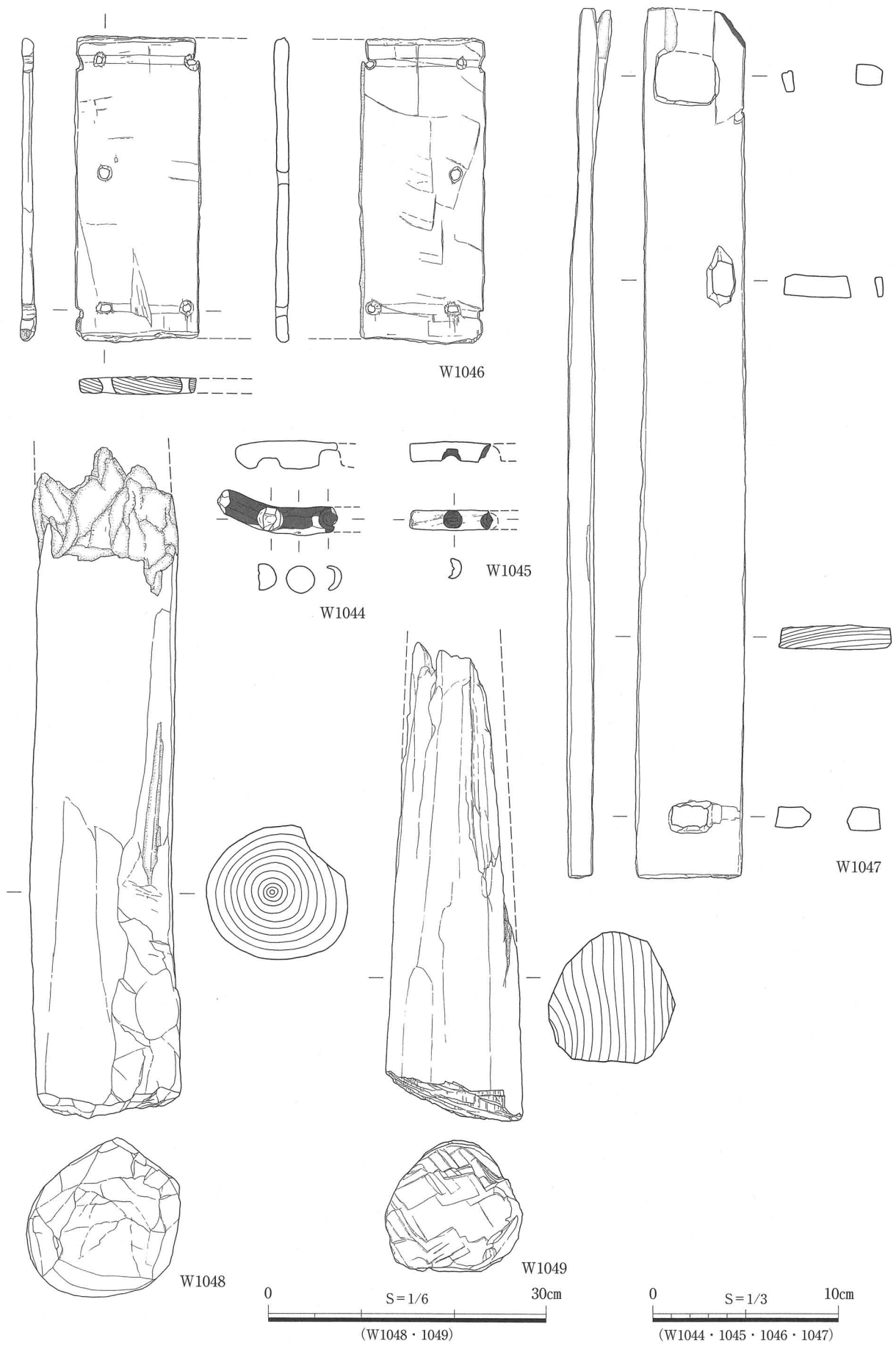
(8) 用途不明品

用途不明品 (W1052~1068) W1052は組合せの用途不明品である。同じ形状のものが2枚重なって出土した。本製品は用途が不明のため、便宜上、笹葉のある方を表とし報告する。本製品は、木製の枠組みとそれを覆う植物質からなる。この上部の植物質は、タケ科植物の外皮を縦に裂いたひご状のものと、単子葉植物の葉である。その構造は、半截材を横2本、縦6本を組んだ長方形の枠組みがベースとなる。この縦の半截材の両端には抉りを入れ、有頭棒とし、紐掛けとしている。また、この縦棒6本に添う形で細棒がある。この細棒は上面の植物質を固定する役目を果たしている。枠組みの上面には、タケひご状のものが横方向に簾状に置かれ、その下面の横棒に巻き付けられていた。さらに、タケひごの上部には直交して笹葉が密に敷かれ、数本のタケひご状のもので固定されている。本製品の用途は不明であるが、行李のような家具、窓枠あるいは屋根などの建築材の可能性が想定される。なお、本製品の製作工程としては、その構造観察から2案がある。1つは、木製の枠を組み上げてから、それにタケひご状のものをのせ、枠組みの細棒に巻き付ける案。1つは、タケひご状のものと細棒を巻き付け、先に簾状のものを作りそれに合わせて枠を組む案である。(出土状況：写真図版編 図版7-1)

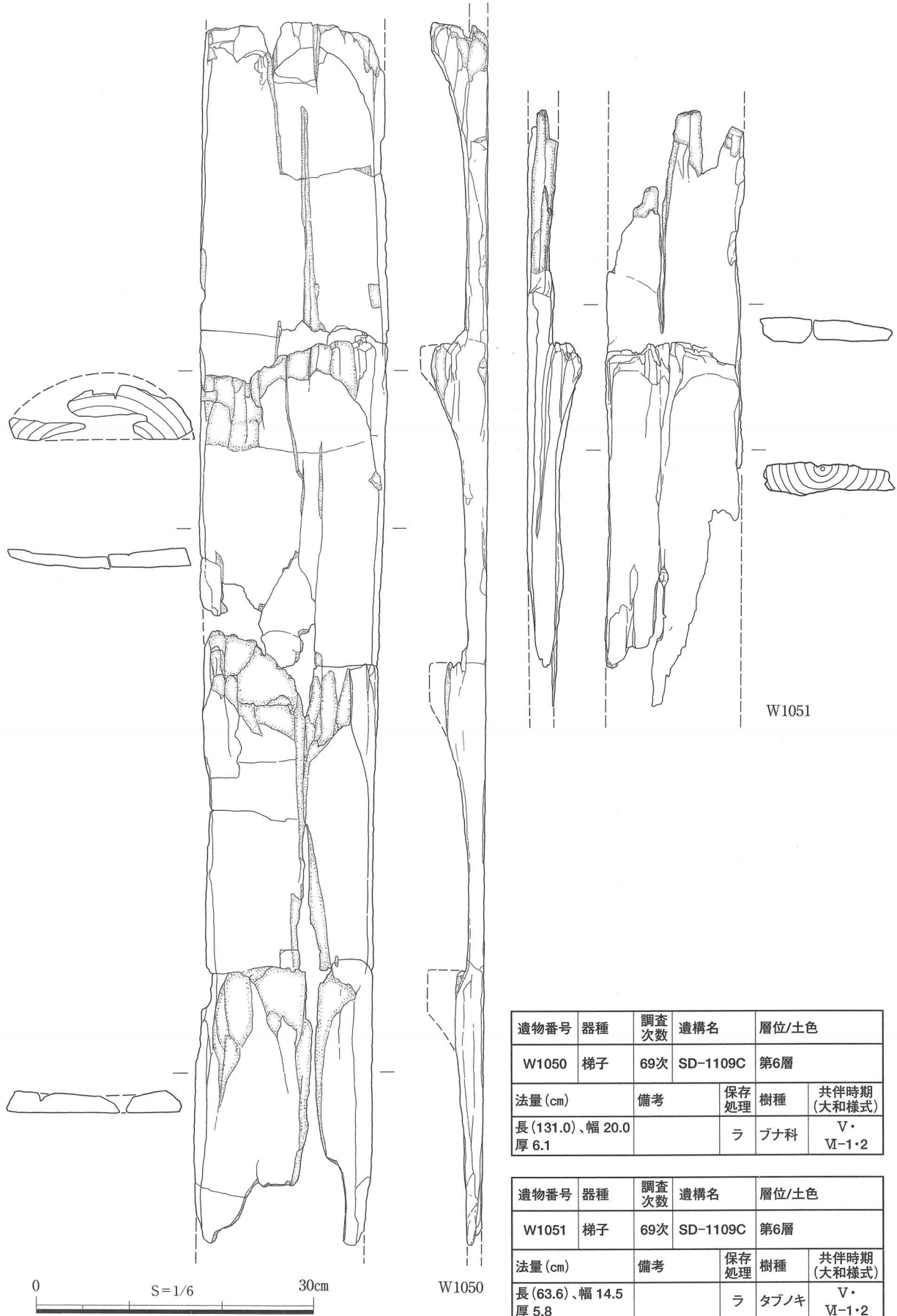
W1053~1056は有頭棒ともいえるもので、W1052の直下から出土した。

W1053・1054は径2.5cm程の丸木を利用し、先端部のみを周囲から抉り込み有頭状に仕上げたものである。先端付近のみを加工し、その他の部分は枝を取り払っただけで樹皮が残存する。この2点は一端を欠損するが、W1055・1056のように両端部に有頭状の抉りが加工されていた可能性も考えられる。

W1055・1056は径1.8cm程の丸木を利用し、両端部を周囲から抉り込み有頭状に仕上げたものである。W1053・1054と同様、有頭部付近以外は樹皮が残存する。この他にも、同一遺構・層位から類似した有頭棒が約20点出土している。これらは径2~3cm程の太いものと径1.5~2cm程の細いものに分類できる。これらを組合せて一つの製品となる可能性があり、W1052の用途不明品と関係するかもしれない。(出土状況：写真図版編 図版7-2)



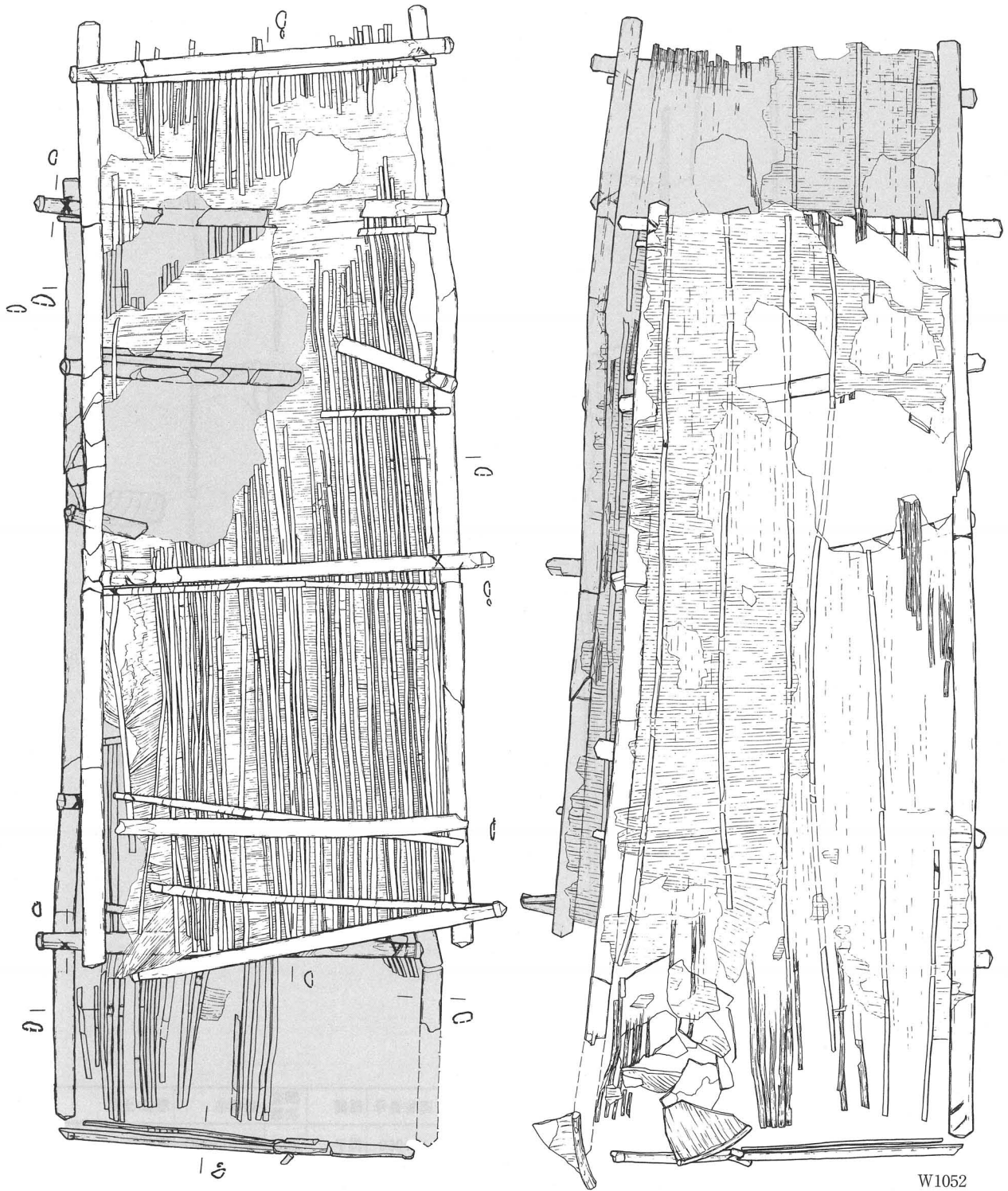
第186図 南地区出土木製品 (12)



遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	
W1050	梯子	69次	SD-1109C	第6層	
法量 (cm)		備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
長 (131.0)、幅 20.0 厚 6.1			ラ	ブナ科	V・ VI-1・2

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	
W1051	梯子	69次	SD-1109C	第6層	
法量 (cm)		備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
長 (63.6)、幅 14.5 厚 5.8			ラ	タブノキ	V・ VI-1・2

第187図 南地区出土木製品 (13)

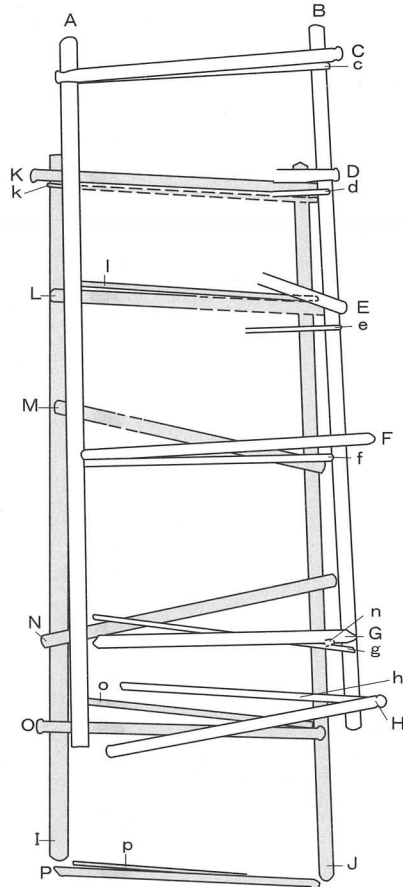


1枚目裏・2枚目表を示す

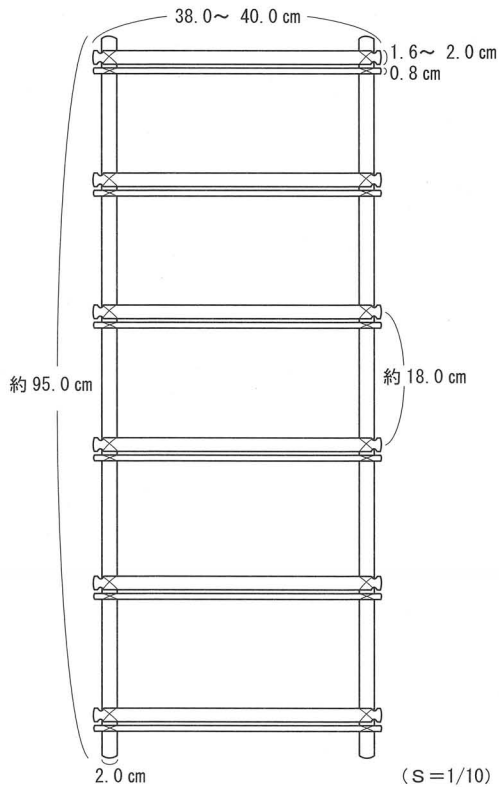
0 S=1/6 30cm

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1052	用途不明品	61次	SD-151BN	第8層	長 93.5、幅 38.5、厚 約1.0	同じ形状のものが2枚重 なった状態	ラ	枠:ムラサキキ ブ属? 植物:タケ亜科?	II-2・3

第188図 南地区出土木製品 (14)



■ 2枚目（下面）の枠材



枠材模式図

(S=1/10)

1枚目（上面）

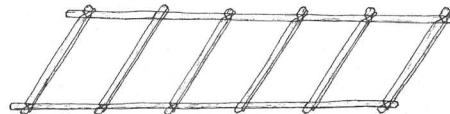
	長 (cm)	幅 (cm)	備考
A	94.6	2.3	両端に切断痕
B	94.2	2.1	両端に切断痕 緊縛痕あり
C	38.4	1.7	両端有頭状に周囲から加工 緊縛痕あり
D	(9.0)	1.8	端部有頭状に周囲から加工
E	(12.4)	1.6	端部有頭状に一方から加工 緊縛痕あり
F	39.3	1.6	両端有頭状に周囲から加工 緊縛痕あり
G	(35.2)	1.8	両端の有頭部分欠損
H	38.1	1.8	両端有頭状に周囲から加工
c	34.4	0.7	
d	(7.9)	0.7	
e	(12.9)	0.7	緊縛痕あり
f	(33.1)	0.7	緊縛痕あり
g	35.1	0.9	緊縛痕あり
h	35.4	0.9	

2枚目（下面）

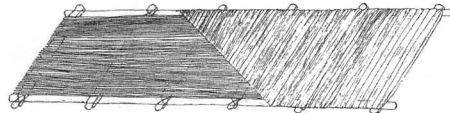
	長 (cm)	幅 (cm)	備考
I	93.9	2.1	両端に切断痕 緊縛痕あり
J	(84.0)	2.2	両端に切断痕 緊縛痕あり
K	38.2	1.8	両端有頭状に周囲から加工
L	※36.8	1.8	両端有頭状に周囲から加工
M	※36.7	1.8	端部有頭状に周囲から加工
N	※40.0	2.0	端部有頭状に加工
O	38.5	2.2	両端有頭状に周囲から加工 緊縛痕あり
P	35.4	※1.4	両端有頭状に周囲から加工
k	※33.4	0.7	
l	※36.0	0.8	
n	(1.8)	0.8	
o	※30.4	0.8	緊縛痕あり
p	(23.4)	※1.0	

各部材の法量

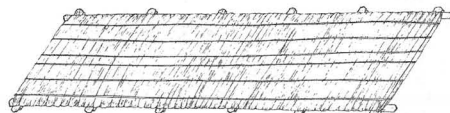
1. 基本形となる木製の枠組み。横棒2本の上に縦棒6本。



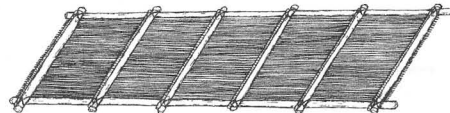
2. 枠組みの上にはタケひご。さらに、その上に植物の葉。



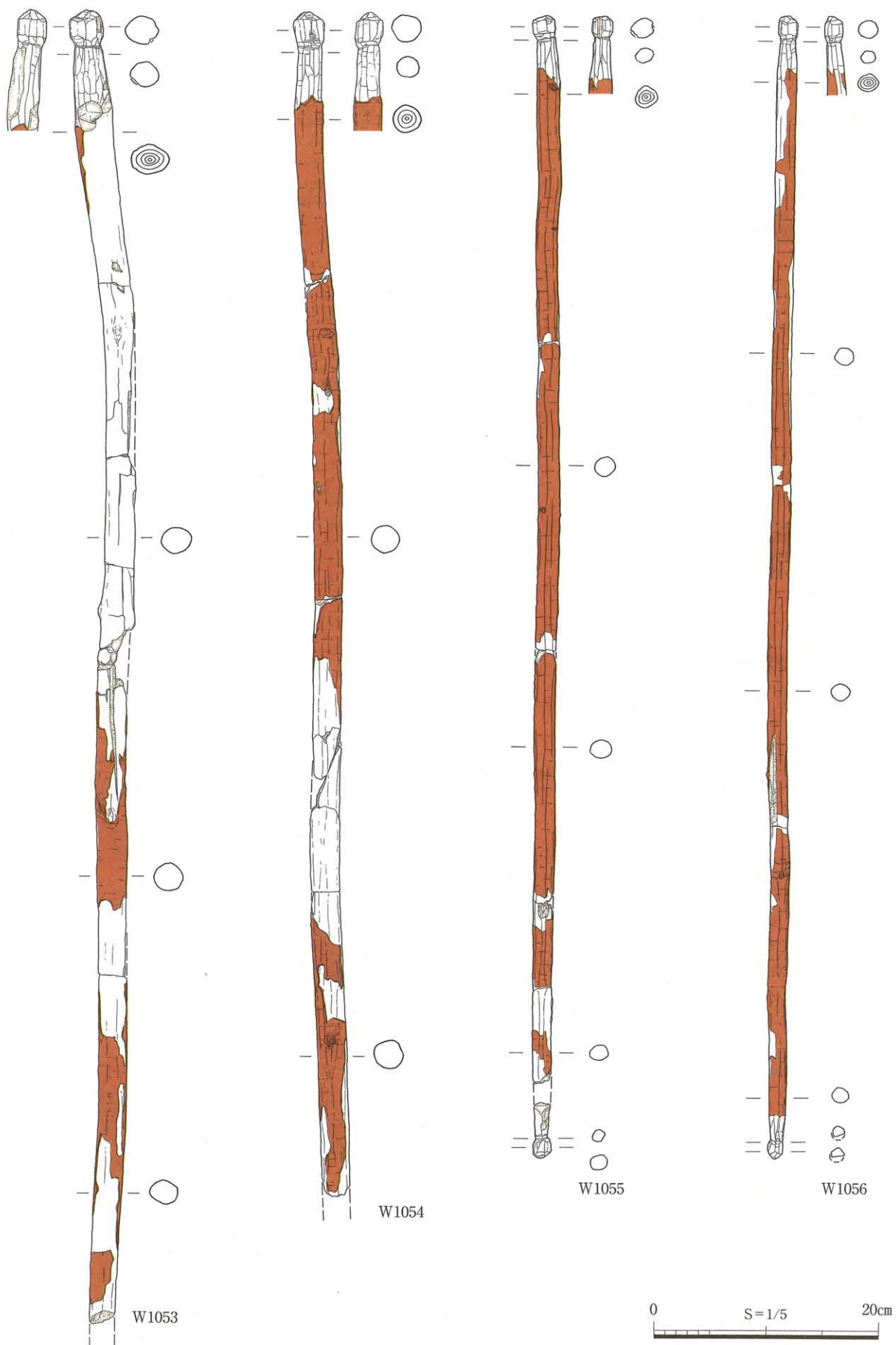
3. 植物の葉を押さえるタケひご。
タケひごと植物の葉は巻き付けられている。



製品裏側。タケひごは細棒に巻き付けられている。



製作工程想定図



第190図 南地区出土木製品 (15)

W1057は細かな加工が施された小形の製品であるが、その機能は不明である。上面観は円形で、側面観は台形を呈する。上面から中を削り抜き、底部も少し削り込んで上げ底状とする。側面には対面方向に一对の円孔と、逆対面に上面から方形の抉り込みが施されている。木取りは底面に横方向に芯が通る横木取りである。機能としては、孔や抉り部分に他の材を通した組合せの部材と考えられるが、使用による痕跡は確認できなかった。保存状態は良好で各所に加工痕がみられる状況であり、未使用品の可能性も考えられる。

W1058は半截材を削り抜いた容器状の用途不明品である。上面観は一辺を欠くが、長方形と思われ、短辺側面は半円形を呈する。底は丸く、容器とすると整地できない。短辺中央には突起部分があり、その内側は一段低く削られる。内底面は平坦に作られ、屈曲して立ち上がる。

W1059は芯持ち材の用途不明品である。隅円三角形を呈し、底面各角には節を折り取った痕跡が残存している。その周囲には加工痕が残存する。上面は中央に折り取り痕が残存し、周囲から中心に向かって粗い加工痕がみられる。

W1060は幹と枝を利用した柄状の木製品である。上端には一段大きく作り出した紐掛け用の突起をもつ。断面円形で、台部に平坦面は作り出さないものと思われる。紐掛け突起の下位に使用による紐圧痕が残存している。台部に他の部材を合わせ、紐結合したものと考えられる。非常に細い材であり、農工具の柄ではないと思われる。

W1061は幅広の溝をもち、そこに植物が付着している用途不明品である。欠損部分が多く全体形の把握は難しいが、その形態から曲柄鋏の反柄とも考えられ、そのように配置した。しかし、出土遺構から曲柄鋏の出現時期と隔たりがあり、欠損部が多く反柄として断定できない状況であるので用途不明品として報告する。曲柄鋏と想定すると、欠損した側面を平坦面とし、そこに曲柄鋏をあてがう。下方にのびる復元線が持ち手の方向である。

唐古・鍵遺跡では、第23次調査で大和第Ⅲ-2様式の曲柄又鋏身が出土しているのみであり、その柄（曲柄）と考えられる資料も、第79次調査で出土した膝柄（W3005）があげられるだけで、曲柄鋏の実態はまだまだ不明であるといえる。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存処理	樹種	共存時期 (大和様式)
W1053	有頭棒	61次	SD-151BN	第8(下)層	長(116.4)、最大幅3.4、径約2.5	樹皮残存	水	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-2・3
W1054	有頭棒	61次	SD-151BN	第8(下)層	長(105.1)、径約2.5	樹皮残存	水	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-2・3
W1055	有頭棒	61次	SD-151BN	第8(下)層	(大)長(94.7)、径1.9 (小)長(5.0)、径1.5 } 長※101.5	樹皮残存	水	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-2・3
W1056	有頭棒	61次	SD-151BN	第8(下)層	長101.5、径1.7	樹皮残存	水	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-2・3
W1057	用途不明品	65次	SK-115	第5層	上面径4.5、下面径5.1、高2.4	加工具幅:約0.5cm	ラ	ニワトコ	V-1
W1058	用途不明品	61次	SD-151CS	第8層	長(11.3)、幅7.8、高5.6		P	ヤブツバキ	Ⅱ-1
W1059	用途不明品	61次	SD-151BN	第7層	長7.1、幅7.6、高5.4	栓状木製品に類似。衣笠か	ラ	カヤ?	Ⅱ-2・3
W1060	用途不明品	69次	SK-1102	第6層	長(9.3)、幅(2.9)	使用痕(紐痕)残存	水	サカキ	Ⅳ
W1061	用途不明品	65次	SD-203E	第3層	長(14.9)、幅(4.9)、厚2.0	薄い植物残存。鋏曲柄(反柄)の可能性あり	ラ	サクラ属	Ⅱ-3
W1062	用途不明品	61次	SD-152	第2層	長23.0、幅2.0厚1.7	W1063・3029と同形	P	カヤ	Ⅲ-1
W1063	用途不明品	69次	SD-1108	第6層	長(24.2)、幅3.0、厚2.0	W1062・3029と同形	ラ	カヤ	Ⅲ-4?